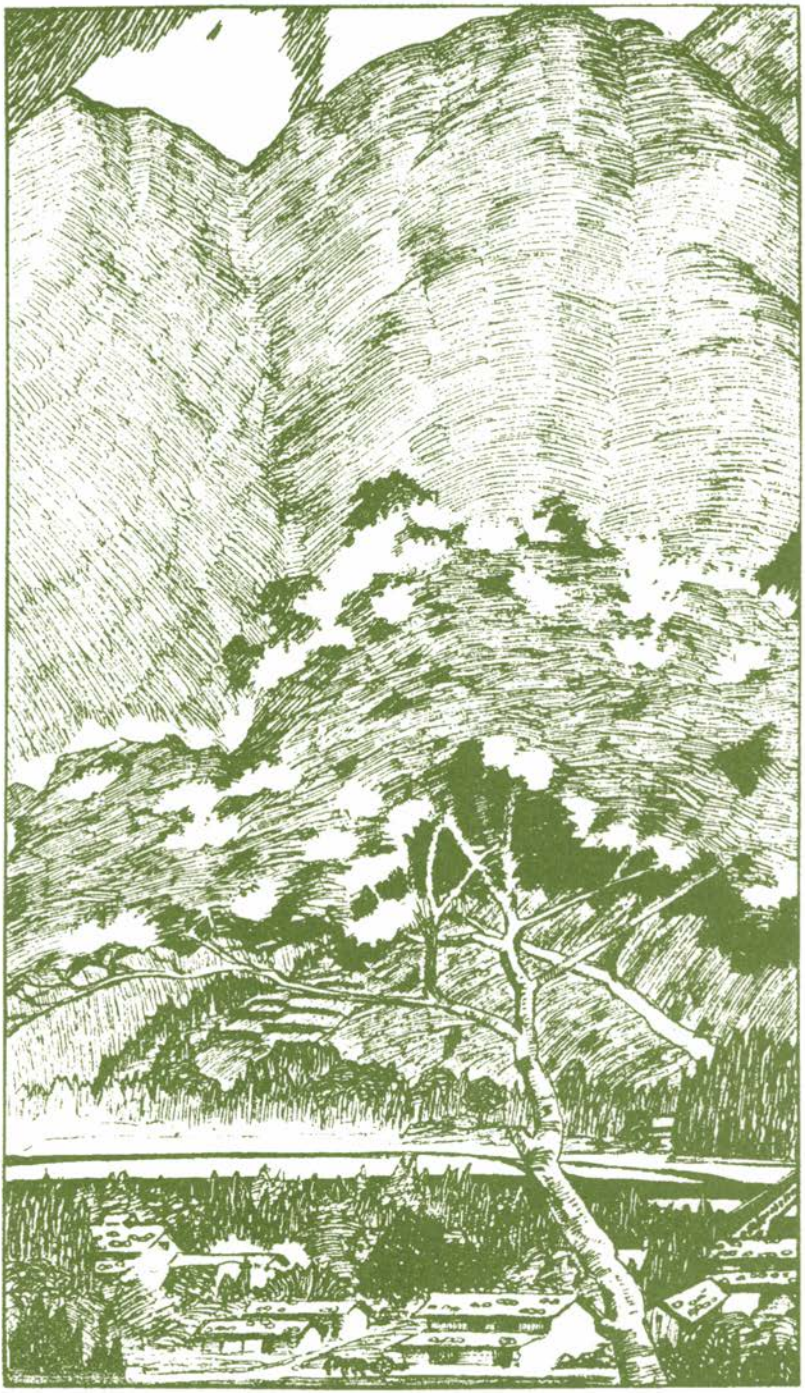
山岳



第九年
第三號

山　　岳

第九年第三號

（登りたい）

立山谿谷の新雪　（石崎光瑤氏撮影）

目次

（大正四年三月十日發行）

表紙……見座と高原川……（亞鉛凸版）……K、S、生氏筆

タイトルページ……「登りたい」……（コロタイプ版）……茨木猪之吉氏筆

卷頭畫……立山谿谷の新雪（コロタイプ版）……石崎光瑤氏撮影

挿畫

暴るゝ前（白馬岳より鑓ヶ岳杓子岳を望む）寫眞銅版……高野鷹藏氏撮影……一一二

日本山岳會關西大會々場……同……上……石崎光瑤氏撮影……一五二

第七回大會々場……同……上……た、た、生撮影……一六〇

双六谷高波橋……同……上……き、だ、氏筆……一八四

地圖

飛驒國双六谷流域概念圖……高野鷹藏作……二三六

本欄

秋晴から初冬へ……野尻抱影……一頁

奈良田のヒロ河内より白峯三山に登る……冠松次郎……一三

野口川の山と谷　小島　榮……三〇
甲信武國境縱斷　小佐野迢々……七八
雙六谷探檢記　中野善太郎……八八
鑓ヶ岳大黑縱走記　吉澤庄作……一〇五
晩秋の立山　石崎光瑤……一二〇

雜錄

○フレッシュフイールド氏の日本山岳旅行記（一）（小島）○高瀨谷の鐵砲流し（十月十二日百瀨愼太郎）○「甲信武國境縱斷」を讀む（木暮理太郎）○山岳のクラ及びチ子の語原に就て（烏水生）○大井川上流の流量（K生）○「飛驒遺棄合府」を讀む（小島）○本號挿圖「立山谿谷の新雪」解說（石崎光瑤）

雜報

○山岳會展覽會○夜の山岳會○各山雪降る○駒ヶ岳道路視察○赤石登山

會報

本會幹事の改選○辻村近藤兩氏遭難に就て會員諸君に謝す○會員辻村近藤兩氏の歐洲アルプスに就ける遭難に就て○會員小林浪三郎氏の卒去○第七回大會の記○第七回大會出品目錄○關西大會の記○會員登山報○三高山岳會の近況○會員諸君に○本誌の發行の遲れたる言ひわけ○新入會員○退會者○寄贈及交換書目

附錄

飛驒双六谷　小島烏水……一七九頁

秋晴から初冬へ

野尻抱影

K　兄

お手紙によつて白峯の追憶を書くお約束は致しました。けれども愈々ペンを取る段となつて僕は良心の苦痛を感ぜずには居られませんでした。今の味も潤ひもない、敷石のやうに平凡な頭では、あれ程魂を寄せて居た白峯を再び憶ふ資格はないのです。あの頃の瑞々しい彈力のあつた感情を今の鈍痺した感情と比べると只情なさ計りが先に立つて來ます。

此の間或る處から歸つて來る電車の中で、甲府で敎へた事のある學生に不圖出會ひました。話は甲州の此の頃に及びました。『白峯にはもう雪が降りましたでせう』、學生は斯う云つて僕の顏を見ました。さう云つたら僕が最も悅ぶだらうと思つたのです。(此の事は能く分つて居ります、度々の經驗ですから。)然し情ない事に僕はもう其の學生の思つて居た僕ではありませんでした。

實際『白峯』の名と僕とが、殆んど相對名辭のやうに人々も思はれ、又自分でも本當にさうであり得た幸福な時代が僕にはありました。其の頃は『白峯』と云ふ名を聞くと此の光澤のない目も輝いた事でしたらう。少くも其名を人に呼ばれたり、又自分で呼んだりする時には、氣まりの惡い樣な感じがしました。人に顏を見られるやうな氣がしました。休暇が濟んで甲府へ歸任する時など、笹子入りから初めて西に霞む彼の大山脈を望むと、胸はわく〳〵して自分が留守であつた間は白峯も其の姿を消して居て、自分の瀛車が其處に現れた其の瞬間に再び湧き出たのだと感じさへしました。

◎秋晴から初冬へ　野尻

『左様なら白根――けれど白根、お前が僕から離れてたゞ一人、此の國に殘つて居ると云ふ事は不思議に思はれるのだよ』――甲州を去る時には斯んな他愛もない文句を然も遣瀨ない正直な心で新聞へ書き殘しても來ました。

『白根』は『白峯』であつてはならぬやうに駄々を捏ねた理由も此の感情からお察し下さいまし。然し此れも今では如何でも能いやうになりました。自然の呼吸と云ふものは膏汗と一緒にすつかり身體から拔け出て了つたのでせう。往來を歩くのに自分の足の一歩々々にも氣兼をして、乘換切符の三つの孔の在り處に視神經を疲らす都會生活が如何して元の儘の美しい情を育んで、少くともそつとして置いて呉れるものですか。

此の月半ばに僕は伊香保へ旅行しました。久し振りで裾野を曳く美しい山々を見ました。信濃の連嶺計りを見て居た吉江君が赤城を見て初めて山の觀念を得たと云はれた言葉も思ひ出しました。其の裾野の大森林で四月の寒氣に凍え死んだ薄倖な友の文學士の事も思ひ出しました。伊香保の温泉宿の三階の欄干から眞北に――日光、足尾、上州白根の西寄りの果に――夕日に輝く眞白な山脈が望まれました。『あれは會津の山で二三日雲で見えないと思ひましたら今朝見るともう雪があんなに降りましたのです』と宿の女は敎へました。僕の胸には久し振りで血が湧きました。會津の山！此の漠然たる名は夫等の山々の一々の名を並べられたより如何樣にか懷しく耳に響いた事でせう。『北にあたりて雪白き山あり、問へば甲斐の白根と答ふ』。兄のお好きな彼の文章の中の人物の感じは正しく今の自分の感じだと思ひました。

翌日萬葉の「いかほう」へ攀ぢ登りました。其の絶頂から僕は思ひがけなく遠い天涯に白峯連嶺の靑く横はつて居るのを發見しました。駒ヶ岳の地獄谷も彼の大きな口を開いて居りました。『あれが白峯だ、甲斐の白峯だ』と僕は其の山影を指し乍ら友に繰り返しました。實は此の言葉に應ずる自分の

感情の響が聞きたかつたのです。然し胸は白金色に冷く澄んで居る山蔭の湖水と同じ有様でした。『會津の山』の雪にまで騒いだ血は、静かに脈管を繞つて居りました。煙草の烟と人蒸れで青く濁つた劇場内の空氣を通して、彼方の棧敷に朧めいて居る人影を自分のOld flameだと指さゝれてゞもした時のやうに。

K兄、僕は斯んな感情では到底白峯其のものゝ事は書く元氣はありません。と云つて又事實だけを書き連ねて行くのは堪へられぬ事です。夫故白峯は成る可くそつとして置いて此の連嶺をいつも西に見て居る甲府平の此の頃の追懷を書いて御免を蒙りたいのです。又、追懷に連れる感情がペンを不純な方向へ走らせる事も自然の事としてお含み置き下さい。

此頃の甲府平の空は濃い、深い、ぢつと見て居ると頭がへんになりさうな藍色です。そして晝の日の白ちやけた影を見る時位を除いては何處と云つて魂を寄せやうもない深みです。擴がりです。あの國では滅多に鳶と云ふ鳥が見られません。夫れに、或る年の正月の事『十五夜以來の降りだ』と世間で云つた雨の日のあつたのを記憶して居ます。さう云ふ事もある程、永い間晴れた日が秋から冬へ續くのです。

去年の十月の半ばでした。甲州へ入つたことがありました。東京では屋の棟も腐る程三四日も降り續いた雨が漸く上つた計りで、まだ降り澁りの雲が低く連なつて居ました。笹子あたりの山中の家も屋根の石は白く乾いて居ましたが、屋根板は黑くわびしく濕つて暗い壁に中弛みに吊られて居る鳶色の粟や黄色い玉蜀黍の房もしつとりと雨を待つて居る樣子でした。其の邊で乘る客は、皆傘を持つて足駄を穿いて、うら寒さうに袖口を合せ乍ら、蠶の話や、昨日から甲府である秋祭が今日も降られて居ることだらうなどと噂をして居りました。夫れが如何でせう、笹子の隧道の西口に近くなると妙に

汽車の中がぽつと明るくなつて來ました。雪明りでも射して居るやうな變な、不安な明るさでした。すると俄に汽車はぱつと銀のやうな日光の中に吐き出されました。切つて放たれたと云ふ方が當つて居るかも知れません。隧道一つ彼方の陰欝とは極端に違つた白い眩い秋の日光を眞正面に打ちかけられたのです。汽車の中は異口同音にどよみました。誰の目も意外さに見張られました。幻の國の光！ちよつとそんな感じがありました。笹子の山々に低く屯して居る何處となく迂散臭い白濁した雲、其の蔭は來し方の暗い國です。そして其の雲から西はどんなに鮮かな深い蒼空が高い穹窿を描いて居た事でせう。爲一つ舞はぬ國の秋晴の空です。

又「勝沼」停車場のあたりから見た甲府盆地の美しさは如何樣でしたらう。赤や、黄や、黄味を帶びた綠を點じた傾斜を四方の山地から集めて、甲府平地はのんびりと眞晝の光に呼吸して居ました。處々に小い森が靜かな影を作り、村の白壁が輝き、笹子入りから川が白く光つて伸びて行き、森蔭に隱れては又現はれて、遠くでは鏡のやうにぴか〳〵光つて沼でゝもあるかと思はれました。近い山々は茜を含んで日に背くところは深い紺でした。白峯連嶺は青い空の果の處々際立つて輝く白雲の下で藍色に蔭つて、洩れ日を受けた處は枯れた赤色の縞や斑點を見せて居りました。「鹽山」の停車場前の穀倉の屋根に眞白に光つて居た五六羽の鳩と夫れをくつきりと浮彫にして居た秋晴の空との對照は今でも鮮かに見えるやうです。

葉も赤く染まつて來た鈴生りの柿の樹、近い山々の紫ばんだ畑土、夫れを縫ふ赤い細路、雜木林の赤いふくらみ、高い青空を映す野川、そして白い街道にはガタ馬車が走り、田舍の男女がぞろ〳〵と續き、行手には蒼く陰る白峯の前に舊天守で打ち上げる花火の後の白い烟がぽツんと高く浮いて居るのが見えました。

甲府に住んで居ると斯う云ふ午後は屹度三四人の友人と長い柳町の通りを南へ下り、白峯の北ヶ岳

の見える太田町公園を歩いて、黄ばんだ淡竹の籔の間から郊外の荒川縁りへ出たものです。そして其の堤防の草の中に蹲つて心ゆく計り高い秋空や周圍の高い山脈の美しさに醉ひました。何れも東京で學んで來た人達でした。そして方々の芝居の新しい外題は中央の人達よりも能く知つて居て、繰返しさう云ふ噂をし乍ら歩いたものでした。微温湯のやうな眞晝の空氣に浸つて居ると足許の川原からは水音が靜かに聞え、時々鶺鴒が鳴いて居ました。彼方の土手を築いて居るトロの音が眠く響いて來ました。北には田圃を隔てゝしんと連つて居る小い市街が見え、二里程向ふの高い山脈が其黄ばんだ膨らみや、紫がゝつた皺を舊天守の石垣の直ぐ後ろから聳えさせて居るとしか思はれぬ程、近々と仰がれるのでした。西北に低く連なる帶那の丘陵の向ふには金ヶ岳から曳いて居る西北裾野の其強い傾斜の線には黒い松林の高低がかつきりとついて居るのに跨つて、八ヶ岳が中腹を黄に濁らせて諏訪口の空へ大きく連つて居ます。夫れを縦に貫いて近い草葉製絲場の煙突が川添ひの竹籔の中から黒く抽け出て、緩い烟を青空へ眞直に立てゝ居ます。此の煙突と八ヶ岳と秋空との調和は幾度も僕等の口に上つたものでした。川の西には金色に近い黄の稻田の、其の基幹にはまだ青が殘つて居るのや、枝先に葉を留めて居る薄紫の桑畑や、素枯れた玉黍畑が遠く擴がり、夫れが朱を點じた森と變つて、人家を點じ乍ら次第に山際の段丘へなぞへに連つて行く中に、急に西山と聳えて頂の白い白峯、地藏、鳳凰の大山脈夫れと駒ヶ岳とが美しいコバルト色でうつとりと醉つて居るやうに柔く、何時もより高い空に仰がれるのです。東南には蛭ヶ岳の卓子嶺を右にして裏富士が鮮かに雪を見せ半腹以上を現して居ります。此れから北にかけた山脈だけが此の時刻にはつきり見えるのです。

此の頃少し風のある日の雲を日記の中から拔いて見ます。

『……紫ばんだ枯葉色の西山の中腹に寄生して居る雲が今ゆつたりと立ち昇る。其の下部は山の凹みに吸はれて直線を曳いて居るが、頂はむしれて淡くなつて居る。そして形が次第に崩れて行くのが

少しも氣付かれぬほど靜かに全體として動いて居る。山の具合で一方の雲の集まりが他方のものより位置が後になつて居ると、神妙に其の蔭を帶びて紫ばんだ、ぼけた色のまゝで昇つて行く。雲の影は山へ紫を曳いて居る。大空の滅法高くを東へ流れる雲も薄い、たゞ强靭だと云ふ感じがする。此れもゆつくりと動いて、山では一緒であつたと思はれる雲が側に並んで居ても互に素知らぬ顏で自分達で一と處に固まつた儘で行く。東には層雲の端の捲れたのが集つて居る。(雲の重いのは西と東の山際だけで、西山のものは亂れた後の狀態を殘し、東のものは收まつた形である)晝の月が空の雲と殆んど同じ色にぼけて懸つて居るのが、ちよつと區別が付かない』。此れが秋の雲の一般なのです。

斯う秋晴の晝、荒川土手に立つてうつとりして居ますと、甲府の市街は其の實在性を失つて、『西遊記』の中であの唐僧の一行が其の時に小手を翳して行手に眺める知らぬ國の古い城市——山懷に溫く眠つて居るロマンティクな人家の連なりでゞもあるやうに思はれて來るのです。其の市街では狡獪な甲州商人が帳場格子で算盤玉を彈き、結ひ立ての髮だけは艶な藝者が晝湯から歸り、活動の赤い樂隊が通り、旅廻りの役者が東鄕帽子の下の生白い顏を晒し乍ら俥の列で練つて歩き、三越の出張販賣と夫れに競ふ市內の老舗の幾軒かの角に赤い旗が飜り、人が群がり、中學校前の濠には踏車を仕掛けて蓮根を拔き、泥に醉つた鮒を掬ひ、汚點のある繭袋を背負つた繭買がのそ〳〵と裏通の家々を覗いて歩いて居るのです。

此れが前にもちよつと書いた秋祭——甲府市制祭(十月十七日)の日だと十分まで玉のやうな好晴です。市街の混雜は夫れは一と通りではありません。曉天に舊天守臺の上で割れ返るやうな音を立てゝ花火の上る頃にはもう田舍の人達がガタ馬車で又草鞋穿きで思ひ〳〵にぞろ〳〵流れ込んで來て居るのです。朝の八時九時となると目貫の通りは長持の底の香の高い、多くは手織の晴着の男女で押し合ふ程です。市の紋章の武田菱を凝りそこねの葡萄色に拔いた提灯や旗が擔並を飾つて、田舍者對手の露店

が角々に連つて居ます。銀屏を後に見事な眞柏の鉢を並べた家や、蓄音機を聞かせて居る商店の前には殊に人が集つて居ます。舊城趾の廣場へ來て見ると、此處は又凄じい人で里神樂や手踊の屋臺の前に眞黑に連なつて居ます。端の人達の目には山幸彦も瀧夜叉も遠くて目鼻も判別出來ない位なのです。役者が目を剝く途端にでも直ぐ頭上の天守其處にも人が鈴生りです――からどかあんと花火が上ると幾千の顏は皆青い高い秋空を見上げて了ふのです。

まあ彼のとてつもない爆聲！まるで此の盆地には花火自身と夫れを幾度にも反響させる四面の山々と計りで他に何も存して居ないやうな思ひ切つて無遠慮な音で破裂するのです。彼の乾いた花火の音と秋晴の山國とは此の上もない調和を示して居りました。晝頃になると市内の安料理屋は動きも取れぬ程の雜沓です。大分待たされて居るらしい男女が幾人も二階から賑かな往來を見下ろして居ます。中學の濠端の樹蔭には太鼓橋へかけて幾群かの人達が竹の皮包を開いて居ます。白粉の處禿げした、砂埃の赤い高島田の「花嫁さん」が老年まで見込んだじみな小紋物に金ぴかの厚板を卷き、白メリンスの扱帶を地面へ垂れて中折の鍔の廣いシャツの手首に釦の三つもある夫と並んで睦じさうに握飯を分け合つて居るのも見られました。天守の上から停車場の構内を見下ろして眞黑に汚れた汽車の出入りを飽かず眺めて居る人達も多いのでした。彼等は斯うやつて年に漸く二三度の樂しい一日を心行くまで樂んで、夜遲く遠い村々へ散つて行くのです。

又、此の頃栃の樹の多い小淵澤、日の春あたりの秋景色は又何とも云はれぬ趣があります。

四五年前の事、矢張り十月半ばに臺ヶ原から白須の松原邊を歩いた事がありました。夫れからは臺ヶ原と云ふ古驛が非常に好きになりました。甲州で風情のある驛は彼處と蛭石を賣る駒飼の宿――汽車の窓から谷間に廣重の畫のやうな勾配の草屋根續きが舊本陣らしい黑光りのする家を角に彎曲して居るのが見られます――とだけだと思つて居ます。日の春から降りて八ヶ岳の裾野を七里岩で直下し

て信州往還へ出ます。そして其の白い街道を、左に駒ヶ岳淺間岳などの一帶を仰ぎ乍ら西へ進むのです。精進の瀑の谷に大きな山椒魚が棲んで居て草苅を馬ごと呑んだと云ふ話も其の邊の人から聞きました。臺ヶ原邊の酌婦が『あたし貴方にゼムしました』と云ふ振つた話もありました。

檐の深い、木組の頑丈な、屋根に石を載せた梅醋色の臺ヶ原の家續きは、自然の暴威に對する隙のない人間の努力をはつきりと感じさせました。『信州街道臺ヶ原宿』の黑い看板と昔の繁盛の俤を止めて居る古風なバルコニーと欄干と硝子窓とは何と云ふ不思議な對照でせう。燐酸肥料から下駄、目覺し時計、安白粉や安香水の瓶まで並べた、大きな萬屋、厚い塀をかつきりと取り廻して火消の纒ひのやうな樣々な格好の庭木を其の上から覗かせて居る寂れた旅籠屋、鐵砲鍛治、白壁の警察署、杉の葉を檐に釣つた大酒屋、――或る倉の前では豆殼を叩いて居る埃が日向に舞つて居ました。或る家々では籬豆や唐黍を乾して居ました。薬商人らしい半洋袴の男が黑光りのする厚い上框に腰掛けて高聲で喋舌つて居ました。温しい女馬が杉丸太を載せて蔭の多い狹い往來を行きました。大鋸を背負つて居る樵夫にも會ひました。石で疊んだ溝には奇麗な水が音を立て流れて居ました。

其の歸り途、再び七里岩を上つて小淵澤へ急ぐ時でした、友の一人が白須で食べた毒簟の中毒でしたか嘔吐きました。然し直きけろりと癒つて芝居氣のある連中は『水滸傳』の毒饅頭を食はす女賊の宿の話などをして行きました。黄昏の山畑の路、栃の鈴生り、蕎麥の仄白き、尾花のうそ寒いそよぎ、冷い赤い夕日蔭、暮れて行く八ヶ岳を正面に見て、小淵澤に近づくと蕎を焚く烟が路傍に靜かに迷つて居ました。風物みな秋の暮と云ふ感がしみ〴〵深かつたのです。

殊にも忘られないのは汽車を待つまで二時間ほど即席お料理の天井の低いぎい〳〵軋む二階に居た時の事です。煤けた釣ランプの下の緑だけ赤い、黑いチャブ臺で夕飯をやりました。冷い生鮭の切身と油計り濃い卵子燒とがさらずも山間の夜氣に冷えた腹を更に冷えさせました。しんとして三人で食

べて居ると後の壁に高い小窓の障子が微かに鳴り出しました。見上げると障子紙にうつすり月の光が映つて居るのです。『月が出たな』と僕が云つて立ち上つて窓を開けると、夢のやうに茫と煙つた月明りに八ヶ岳が淡黑く、しかも大きく目の前に見られました。そして『寒い月だ！』と呟いて居る中にどーつと音がして風が颯し初めました。あの肅殺たる冬の訪れ！未だに僕は彼の夜の事が忘れられません。

何時か手紙に書いた事のある淋しい山影を見るのも此の頃の黄昏です。僕は甲府の北の古城の草原に下駄履きのまゝ足を投げ出して其の末に靑く暮れて行く人家を眺めて居ました。短い草原には櫻の病葉が靜かに散ばり蟲が地の底から來るやうな細い聲で鳴いて居ました。不圖頭を返して北の山續きを見ると黑い和田嶺の肩から茅ヶ岳が胸から上を濃い暗紫色の烏帽子形に現して、澄んだ水淺黃の夕空にくつきりと浮かんで居りました。其のしんとした山影を見詰めて居ると目頭にいつか涙がにじんで來ました。自分が其の日〳〵を漂浪に送つて居る果敢ない旅人でゞもあつて、翌日越えねばならぬ其の山を今斯うして眺めて居るやうな心細い氣持になつたからでした。

或る年の末からの日記を生地のまゝ處々書き拔いて先を端折ります。

十八日、……白根は紺紫、其の空は淡い樺色。七面山の空は一體に火事のやうに燒けて居る。西空が紫をかけて來て藍に變るあたりは江戸紫に似た目も覺めるやうな色彩である。そして東へ傾くに連れて淺黃を濃くして來る。東の山際はほんのりと紫ばむで居る。富士の南の空は水淺黃と樺の美しい融合である。白根の空の雲は紫を含むアイヴォリブラックで夫れも仄かである。紫ばむだ空に漂ふ雲は透明な紫の濃い樺で、半天へ昇るに從ひ此れがなほ濃さを增して來る。東の雲は輪廓も朧ろで其の西に向く面は、淡薔薇色、蔭は薄い暗紫色である。

富士を盟主とする山脈は紺に沈み、白峯に見る紫は含んで居ない。富士の雪は胸から上が仄かな薔

◎秋晴から初冬へ　野尻

薇色に光り、紫黑の山體は淡く輪廓も朧ろである。

白根の雲は黑ずんだ薔薇色と變り、中空から東のものは次第に白ちやけて來た。西空は紫を奪はれて夜の淺黃色が漸次に一帶に浸潤して來た。

十九日。……荒川に月を見る。水車の音、富士は銀灰色に煙る。

廿一日。……木枯し。月さやけし。夜二時、山黑く靈ある如し。

廿四日。……朝霧深し、山際に鈍き色の霧殘り、出水の後の川白く光る。黃なる稻田續き。小春の感湧く。鳳凰の人岩亂雲のひまより洩る。其の下なる松晒れて白骨の如し。城の裏にて囚徒等石を切る。

卅日。……向ふの塀內の桐の葉も全く黃。電燈の光に白壁の面に搔るゝ其の影淋し。小供の聲冴えて聞ゆ。三つ星。

卅一日。……木枯し。

十一月一日。……甲斐の根颪。向ふの家の焚火の烟。

三日。……雨寒。

四日。……雨冷。

五日。……空鈍色、地藏、鳳凰に眞綿の如き雲。人岩の左鈍き銀色のあたりよりは雲縷々として立ち昇る。他は亂雲蓬勃、白根駒ヶ岳は谷に降れる雪の朧銀、蛇の舌の如く雪にかゝる。山の膚は淡し。

六日。……朝先へ門に出し啓君『やあ素敵だ々々』と叫ぶ、靴の紐結びもあえず飛出す。白根は瑪瑙に金を含む。群山黑く參す。富士は鉛色の空に白色魔の如し。

七日。……山雪の壯觀、カラリと晴れし日とは異なり淡曇り。薄日の日にも又此の美しさあり。

八日。……霧、城の石垣の蔦赤し。

十一日。……淡き雲空に瀰漫す、向ふの家にて枯葉を焚く烟往來に擴がる。柿の木は裸はに、葡萄棚の古き竹も反る。

十三日。……深き〳〵青空の一日。

十五日。……鳳凰山の山火事。十日ン夜、――籾を採りし祝ひに今夜中餅を搗き稻こきに此れを持ちて通ふを云ふ。

十六日。……學校の門前に濠より採りし蓮根を賣る。朝愛宕山に遠足す。楢林皆枯る。其の葉の降り埋めし山路を東光寺温泉の方へ下る。曇り日の下にて蓆を布き臼を横へて蕎麥を叩く。善光寺の紅葉。往來に吊柿多し。

廿日。白根に雪降る。滿山白皚々。雨水の溜りし夕、一等星のみ朗かに、十五日の月冴え尾根霜の如し。鳳凰一帶置く淡き上に白峯白く連る。壯觀。富士朦朧。

廿一日、日蔭寒し。白根に雲迷ふ。女馬、大なる炭俵を負ひ頰冠りの男一俵を荷ひて行く。西郡の風なり。

廿五日。……朝空に澄める白根一帶の黛色、有明月。

廿六日。……朝月。霜、材木の上に白し、早くより兵士の歸鄕者多く通る。

廿七日。……風なく、薄日さす、肌寒し。淡き山々の上の淡き金色の雲。

廿八日。……寒し、雲重し。白根見えず。外一帶皆雪降る。處々濃く積りし處いづこより洩るゝ薄日にかやゝ金色を帶ぶ。緩く上る雲の景色得も云はれず。

廿九日。……陰雲重し、雲のほつれより仄めく縱谷の肌の雪か夫れかと覺束なきに薄日あたる。

十二月一日。極月。

六日。……大風、家鳴り。

◎秋晴から初冬へ　野尻

◎秋晴から初冬へ　野尻

七日。好晴、大空凄き計りの深碧、殊に近き〳〵白根の大嶺、銀汁を流せる如く「鳥」も仄かなり。此の鳥今は衆人に示し得べくもなし。幾萬の人々此の山を仰ぐも誰か此の崇嚴の畫を認めんや。此の宙にかゝれる神秘の畫を認め得んや。願はくは晩春も滿山の雪消ゆる事なく此の偉なるものゝ美しきものを長へに衆人の目より奪へ。

八日。……山々霞める如く積翠寺の山の端烟の如きもの漂ふ。白根も遠く〳〵霞み鳳凰の人岩の下白く淡く輝く。畑中の路を古城へ。遊廓跡の堤裏に羽子の音聞ゆ。老媼菜を洗ひ、忰肥を撒く。桑は多く束ねられ、春三寸ほどに延び、百舌の殘せし蛙の田樂差し、梅君頻りに說明す。黍殼は立木のめぐりに結び付けられ、又は鷄小屋の垣となれり。豆殼は軒下に乾されて燃料となるらし。柱に懸けし目白籠、玉蜀黍の種取り。愛宕山の矮木枯れて遠く望めば「善や」(狂人の小使)の頭髮の如し。夕、四日の月金鉤を投ぐ。

十日。……午後大風、蓬勃たる雲、壯觀。

十一日。……近き山々にも降雪あり。

十二日。……雪大に西山に降る。

十三日。……月は七八日頃、大なる遊星。月を掠むる砂の如き雲。

十五日。……雪方々に降る。

十九日。……濛の氷厚し。夜霧に天守の灯靑し。

廿日。……寒月冴えたり。赤石の空に電光閃く。往來に人通り薄し、櫻座前の客引鳥の如き恰好して袖を曳かん計りに尾し來る。人影疎らなる薄暗き小屋。棧敷の戸は半ば開きしまゝ作りつけにて狹き廊下よりの風凍る樣なり、じと〳〵濕りたる寢床大の蒲團に三人かぢかんで見物す。宙乘りの土蜘蛛、見物の頭の上にて引き拔きになる口より吐く息、電燈に白きも寒し。紙の蜘蛛の糸場内の風に吹

かれて思ふやうに擴がらず。皆まで見ず寒月に下駄を鳴らして歸る。白根氷塊の如く輝く。

朝日に赫として眉を燒くやうな山雪の輝き、日と共に吹き募つて行く甲斐ヶ根颪、雲の變幻、殊には落日の空に現ずる雲の焰の海、燦爛たるオリオンの列星、山火事のイルミネーション、冬籠りの山民の生活――まだ〳〵申したい事は澤山ありますが、餘り長くなります、今度は此れだけで失禮致します、左樣なら。

――一三、一〇、三〇――

奈良田のヒロ河内より白峯三山に登る

冠　松　次　郎

多忙と云ふよりも仕事の都合上、どうしても長く他出することの出來ない私は、東京から一番日數がかゝらないで、最も高い大きな山脈へ入らうと思つて、種々考へた揚句、出發から歸宅迄丁度一週間の豫定で、白峰山脈を縱走することに定めた、然し人夫の都合上一日延びて、結局八日ほどかゝつてしまつた。

八月六日、(大正三年) 飯田町を午後十一時の夜行で、翌朝五時三十分甲府へ着き、直に車で鰍澤行の馬車の出る所まで驅けさせて、幸に一番の馬車に乘ることが出來た、青柳で馬車を捨て、人夫を雇ひ、西山峠を越え、午後六時少し前に西山溫泉古湯へ着いた、夜行で睡眠不足のところを、酷熱に直射されて、登り三里半をデッチョウの茶屋へ着く迄の苦しみは、どうしても山でなければ味はれない

ことだと思つた。

西信州の峠路の、森林鬱葱たるに引かへ、樹木の少ゐ草いきれのする、何と云ふ苦しい峠だらう、燒畑や伐採なぞの盛んなこの地方の山谷は、荒廢して見るも氣の毒な樣に思はれた、それでも峠の裏道に入ると、栂や唐松なぞが可なり茂つて、その上に白峰赤石の山脈の一部が、高く連つて、さすがにすが〳〵しい心地がする。旦那はあすこへ登るのだと云はれて、遙かに夕雲の裡に、ぼやけて見える白河内の大岳を仰いだときは、あんな所までも登るのかと自分でも驚いた。

湯宿は崖の側にへばりついて建てられた、古い三層樓で、湯は中々よいけれども、蚤が多く、せゝこましくて、兎ても長く居たゝまれる處ではない。こんな陰鬱な湯宿に閉ぢ込められて居るよりも、早く山に追れて谷川の傍に自由な空氣を吸つて露營をした方が、どんなに愉快だか知れないと思つた。

人夫の都合で一日滯在して、八月九日午前八時、中村宗平、深澤富次郎の二人を伴ひ、温泉宿を後に早川の溪谷に添ふて、だら〳〵登りを、緩る〳〵行く、九時頃奈良田手前のシラ河内を左に見て、寒村奈良田を過ぎ、危ふげなつり橋を渡り、對岸の山道を行くこと半時許りで、廣い早川の河原に小さい製材所を見る、連日の炎天で、灰の樣になつた畑を、心配さうにほじくつてゐる農夫を見たときは、流石に心が平かでなかつた、少し行くと左から目的のヒロ河内が、轟々と音を立てゝ早川に落合つてゐる、流れに添ふて左折すると、道が急に狹くなつて、やがてヒロ河内の深谷に入つた。

早川の谷の廣濶なのに引かへ、兩岸の山々は近く相接して、栂、樅、白檜、唐松、楓等の密林が、谷ぢゆうに蔽ひかぶさり、空もかすかな程、鬱々と茂つてゐる、その中をヒロ河内の清流は、到る處激湍奔流を爲し、時には巨岩の許、愛すべき深淵を滙し、思はざる處に美くしき飛瀑を懸けて、人を驚喜せしめる、一縷の樵路を縫ふて樣々に變化して行く、この谿谷の風趣を愛でゝ、登ること約一時

間餘、とある林の中で木を割る音がする、近づいて見ると、奈良田の人が桐を挽き割つて、下駄の臺を造つて居る、森閑たるこの谿谷に、自然を友として働いてゐる、山人の暢氣な日暮しを、一寸羨しく思つた。

道はタル澤の落合と云ふ幽邃な深潭の、遙か上の棧道を通して行く、急に谷の向ふがぱつと明るくなると、行く手を遮つて、恐ろしく高い、屏風の樣な連嶂が擴がつて見える、赤兀になつたその悠久な山の肌には、二筋三筋の赤いガレ（岩の崩れ）が入りこんで、其間を偃松が、青苔の樣なふつくらとした柔和な色彩をして、べつたりとはびこつて居る、あれが農鳥ですと宗平がその右端の高いのを指した、然しそれは農鳥の最南端のもの丶一角であつた、それから白河内に連なる連嶂は、殆ど遮る物なく手にとる樣に鮮かに見える、時期が遲い爲め雪は全く見ることを得ないが、始めて白峰山脈の連嶂を仰ぎ、美くしくなつかしき偃松の色に魅せられて、暫くは恍然として佇立してゐた、追々谷は荒廢になつて、水が著るしく少なくなると、却つて谷幅の方が擴がつて來た。

先刻から背後の西山の上に、灰碧色の頭を擡げた富士山は、一行の高度の上るにつれて、著しくその姿態を擴大して、もうそろ〳〵一行の背後を脅かし始める、と何だか氣になつて、この巨人を時々振り返つて見ずにはゐられなくなつた、午後零時少し前、名は忘れたが、石の多い廣い河原へ出て、傍の柳の茂みで晝食をすまし、午睡を貪ること約三十分、谷を放れて崩壞した山側を越えて、路は益々登りとなる。

午後三時道傍の狹い平地に、倒壞した小舍のある所へ出た、この小舍は數年前奈良田の衆が、側（がわ）をこしらへに入つた處で、今は全く訪ふ人もない、こゝ迄は道がどうやら付いてゐるが、これから先は殆ど道と云ふ程のものはない、少時登つて又谷に入る、岩を越え、林を分け、流れを溯つたりして、午後五時十分今夜の夜營地のダイモン澤の落合へ着いた、白河内岳の下から出るダイモン澤と農鳥山の

下から流れる大ヨモギ澤との落合で、露營地の直ぐ北は農鳥山の支峰荒川岳に劃られ、西は白峯の尾根農鳥山と白河内岳を連ねる線が、略同じ高度に屏風立に立て廻され、丁度すり鉢の底の様な處だ、一間程前に溢れて流れる谷川の水は、清冽無比、こゝに小舍でも出來れば、先づ申分のない好露營地である。

こゝから富士は見えない、けれども大分高くなつてゐるから、西山一體は眼下に見える、どん〳〵焚火をして、湯を沸し、疊の代りにする爲め、栂の小枝を澤山に卸し、流木を處々にあさつて、山の様に薪材を集めて、そろ〳〵夕飯の支度をしてゐると、冷い風がぢきりに谷を渡つて、四方の林がさわつき始めた、仰ぐと何時の間にかよく晴れてゐた、白峯連嶂の上に夕立雲が集つて、ポツ〳〵細引の様な奴が落ちて來た、あわてゝ荷物を整理し、油紙を出して天幕を張る頃には、非常に勢を增して、話し聲も聞えない程すさまじく谿谷を叩き始めたが、幸に約三十分程で全く歇んでしまつた。

日は既に白峰連嶂の後に隱れて、雨後の谿谷の寒氣身に迫り、倉皇として防寒具を纏ひ、焚火を圍んで夕飯を了つた、先刻の夕立雲が西山の上あたりで一杯に擴がつて、稻妻が光り時々雷鳴がする、それが止んで黑雲の行衛が見えなくなると、天地が急に靜寂になつて、谿谷の夜はすばらしい星月夜となつた。

十日午前四時四十分に眼をさますと、案内は起きて焚火の周圍に縮こまつてゐる、食事をすまして、辨當を拵へたりしてゐると、七時近くになつてしまつた、午前七時二十分出發、ダイモン澤を溯る、水が少いから徒渉の要もなく、谷の中の石を踏んで遲々として又昨日の日課を繰り返す、九時十五分、もうこれから先には水がないと云はれて、水筒へ一杯入れ、したゝか咽喉を濕した、宗平が十日程前に通つた時には、もう農鳥山の鳥には雪が殆んどなかつたから、今度は間の岳迄は到底水を得られぬと云ふ、然し今迄始終谷川に添つて、水が豐富だつたから、別段意にも留めなかつた、こゝから谷を

離れて、長大なガレの上を白河内岳に向ふ。

急峻なのに崩壞せる大小の岩石が、無性に崩れ落ちるので、可なり危險だから、前後に氣を配つて雁行して行く、幾度か休んで、漸く夜營地から尾根に達する半ば以上の處まで登つた頃、今迄遙かに、高く見えてゐた、黑木に蔽はれた農鳥の荒川岳が、著るしく低下して、その向ふに翠木白頭の地藏鳳凰を始めとして、觀音、藥師、御室、夜叉神の一脈が顯はれて、もう早川の谷には我れと高さを競ふ山はなくなつた、遙か向ふに秩父山塊の翠岱が、煙霞の中にとろけさうに見える、富士は益々高く聳えて、裾野の湖水まで明瞭になつて來た。

碧空一點の雲なき穩かな山日和で、何處ともなく囀る山鶯の聲が、森閑たる谿谷をゆるがせて、遙か下にさゝやく谷川の音が、如何にも浮世放れのした遠隔(レモート)な感じを起させる、ガレの兩側には矮小な白樺の密林が幾星霜の風雪に虐げられ、逆茂木の樣に倒生して、ひしゞと山頸を埋めてゐる、すぐそこに偃松が見えだしたが、辿り着く迄の距離のあるのに驚いた、巨岩の凸出して居る處を右に一回轉すると、ガレを放れて急峻な岩山へ登る、偃松をつかんで匍匐ふやうにして、幾度か辷りながら約半時間餘登ると、急に白峯脊梁の一部へ出た、午前十一時二十分、こゝは白河内の裾で右方に額を壓して、崩岩磊々たる南農鳥の大岳が高く聳え、左手には白河内岳、大籠山の連嶺が稍平坦に續いて見える。

今迄鼻のつかえてゐる樣な西方の大障壁がとれて、急に眼界が浩濶になると、無數の山脈が茫々たる空間に展回し始めた、アゝなつかしき大井川や天龍川、そしてその向ふに長嘯せる、木曾駒連嶺の非凡の山容は、只其溪澗を埋める殘雪と、崩壞せる花崗岩とを見ても、優に登山家をして心醉せしむるに足る、まして朝暾に映じ夕照を負ふて變幻する、その神秘な山色岳影は、白峯登山者をして忘れ難い印象を與へる、午前十一時半國境の甲州寄の斜面で晝食を終り、零時少し過る頃、例のワリグリ

石を重ねてある樣な、山稜を農鳥の南峰に向ふ。

先刻まで白河內速嶺の右肩を壓してゐた大山塊が、直ぐ大井川の谷を挾んで聳立してゐる、これが鹽見岳だなと思つた、何と云ふ雄渾な心地のよい山だらう、あくまでも力ある其赤兀の山頂は、幾つかの凸點が集まつて、丁度巨人の拳を固めたやうに見える、八合目邊から上は美くしい偃松が到る處の山頸を彩つて、幾筋か入り込んでゐるガレの間の尾根〳〵には、豐饒な針葉樹林を以て、一面に鎧はれてゐる、三峯川に向つてゐる頂上の直下には、大きな、かきむしられたやうなガレが見えて、其下方は急峻削るが如く、如何にもこの方面の登攀の困難を思はせる、東南に蝙蝠岳が遙か下つて大井川に派せられて、鹽見岳から奥仙丈へ續く尾根が、著しく低く且長い、この近隣に大岳が少いので、この山がどうしても大井川東俣の王樣のやうに見える、田代川の關門を扼して、これ程の豪岩な大山岳が無かつたなら、假令西南に赤石、惡澤の雄峯があつたと云へ、この山脈の壯觀を、傷つけることが少くないと思つた。

農鳥の一峰を越えると、又一峯が更に高く大きな頭顱を擡げてゐる、つみ重なつた岩の梯子を登つて、漸く絕頂間近へ辿り着き、丁度鳥形殘雪の出る處へ來た、雪は全く溶けてしまつて、その跡が案外廣いなだらかな草原の樣になつてゐる、せめて一塊の雪でも得て、假令一と時でもひからび付いた咽喉を醫やしたいと、近所を搜し廻つたが、もう到る處から〳〵して、水氣さえもない位だ。

午後一時三十分、三角點のある處に着き、暫く休む、北望すると、今迄この峯に隱れてゐた白峰の主脈が續々挺聳し始めた、大井川と野呂川の谷を埋める程、馬鹿氣て尨大な間の岳、その右後に瘦骨稜々として、尖頭高く天に冲する主峯北岳を仰いだときは、我白峯山脈の偉大なることを痛切に感じた、こゝから見ると農鳥の他の一峯が、更に長大な岩の屏風を大井川の方へなげかけてゐる、直ぐ鼻先に間の岳が横はつてゐるのに、態々この山稜を迂回して行くのが何となく馬鹿〳〵しい樣にも思は

れた、「始めてこの山脈を縱走した折、こゝ（農鳥山の三角點）から北岳を望んだ時には、到底登れまいと思つた」と、宗平が云ふた、成程さうも見えるだらう、間の岳と北岳を聯結する尾根が、間の岳に隱れて見えないのに、如何にも北岳の山容が、特立して、恐るべき其の急坂は間の岳の後で、谷へずり落ちてゐる樣にも思はれるから。

絕え間なく强烈な日光の直射を受けて、皮膚がぴり〳〵する、山稜へ上つた時分から、非常に咽喉が渴き始めたが、もう兎てもやりきれなくなつた、何時も雪のある農鳥には、全く跡方もないし、ここから間の岳の雪田を見ると、雪の氣は更に見えない、農鳥の三角點から中岳（間の岳）に雪が見えなければ、仕方がないから明日午後谷へ降りるまで、水を飲まずに暮すのだと、云はれた時にはつくづくなさけなくなつた、山又山を歩きつけてる山人等でも、水がなくつちや中々えらいぞと、泣き言を云ふ位だもの、私のやうな一向いくぢのないものは、其苦痛を豫測して悲觀しない譯にはゆかなかつた、暴風雨の用意に三人が一日食べる位な代用パンを持つてゐても、晝飯の時の樣子では、兎ても、咽喉へ通りさうもない、樂しみな茶や汁粉も飲むことが出來ず、乾き切つた身體を焚火で一夜あぶつたら、干物になりはしないかと思つた、どうも先刻から歩いてゐる樣子では、甲州の山は、飛驒山脈の山々に比して、非常に不便で、又熱さも强い、もう八月月半になると、雪が少いから、山の宏大な割合に、水に不自由することが甚しい、この方面の登山客の頻繁でないのも、これが一つの原因ではなからうかと思つた。

今夜は農鳥を越して、間の岳との中間の夜營地に泊るのだからと、一枚の名刺を三角石標の上へ殘し、西に連る最後の連嶂を辿り始める、午後一時三十分、そろ〳〵高山特有の雲が四方から、もく〳〵と出始まつた、その內に大井川の谷の上で、二ッ三ッ、ゴロ〳〵と雷鳴が聞える、振返ると、遙か西南の赤石、惡澤、魚無河內岳の頂上が、雲に包まれて、速力の早いその前衛は、既に鹽見岳の巔

を越し、大井川の谷を蔽ふて、一行の方へ殺到して來た、早く夜營地に降りて油紙を擴げ、水の代りに夕立を貯へようと、氣はあせつても足は中々進まない、小さな人間が、長大な山稜の、櫓の樣に重なつてゐる巨岩を、おぼつかなくも辿つて行くのだから、とても雲の足の無碍なのには及ばない、やがて暫の間ばら〳〵と降つて來たが、幸ひと大降りにならない內、雲は何時の間にか方向を換へ、奧仙丈の上から、北岳の方へと、廻り込んで、その尖頭に屯し始めた。

山々に無數のあざを印して、日は又强烈に照り出して、岩燕が目まぐるしい程飛交はす、漸く西の農鳥を越えて、その急斜坂を下る、早川の荒川の上流や、井川の東俣の上流が、左右の直ぐ下に小さく見えて、疎くたる栂や白樺の矮林が鮮かに、谿流の流動するのまで、はつきり見える、荒川の上流が可なり近く、緩やかに見えるので、彼處まで降りて水を採りに行くと、何の位かゝると人夫に聞いたら、それこそ半日以上は樂にかゝると云はれて、成程大氣が淸澄な高山では、距離の目測を誤まることが多いと思つた。

午後三時、農鳥を降り切つて、稍緩かな小山を二つ程越して、大きな溝の樣になつてゐる凹地へ出た、こゝが今夜の露營地で、四方の丘は偃松で蔽はれて、風當りの少い山稜の夜營地としては、先づ上等の方だ、白河岳からこのかた一番よい夜營地の樣に思はれる、石で圍まれた小さな竈があつて、周圍が可なりの廣さがあるから、非常に便利で、そして居ながらにして、農鳥の嶮嶮を南に、間の岳の大岳を北に眺めることが出來る、こゝから見る農鳥の峨々たる長い山稜は、中々壯大なものだ、先刻降りて來た鋭いリッヂを仰ぐと、殆ど絕壁の樣で、一寸降りられさうにも見えない位だ、大きな間の岳の全容が丸裸になつて、外諸山の蒼黑なのに引かへ、これは白茶色の岩石で、全山を形ち造り、僅かな偃松が山側のへこみにこびりついてゐるのが、如何にも心許ない感じがする。

焚火を始める、未だ時間が早いから日光は中々强烈だ、それでも日影へ入らうものなら、氷室へでも

入つた樣にぞつとする、何とかして水が欲しいものだと、色々考へたが、兎に角まだ時間が早いから、無駄骨を折つたと思つて、間の岳の中半の雪田のある處まで登つて、雪の有無を確めることに定めて、一人の人夫を出發させ、後は宗平と二人で偃松の枯木を集めながら、近傍を逍遙する、約二時間程經て大きな雪の塊を三つ程負ふて、小山の上に現はれた人夫の姿を見たときは、飛び立つ程嬉しかつた、砂漠のオーシス、それにも似たこの山の殘雪は、登山客にとつては、實に、貴い必要品だと思つた、雪田の雪は隨分解けて、遠くからは全く見えないけれども、それでも傍へ行つたら、可なり凹にへばり着いてゐるのが、まだ一週間位はあるだらうと云ふた。

先づこれで一安心した、これから茶が出る、菓子が出る、急に夜營地が賑はいで、人夫は暢氣さうに歌を謠ひながら、竈の方で夕飯の支度にかゝる、「木曾の御嶽や夏でもさあむーいー。」

日は木曾駒の後に當つて、龍卷の樣に叢立つて、黑雲に蔽はれて、夕榮の眞紅の色が西の空を一杯に罩めると、壯麗な御光が幾筋かの金色をオレンジ色の天半に放射する、と見るとその反映が東方富士の稍東に、陽炎の樣にかすかに、霞の樣に美妙な色彩を顯示する、澄み渡つた大空には、雲が全く影を收めて、僅かに天龍川や大井川の谷々に、塒を搜してゐる雲の群衆が、丁度自分等の歸趣でも求めるやうに、むら〳〵ともつれ合つては谷底に沈んで行く、甲府盆地の上には少しも雲が降りてゐない、釜無、笛吹、荒川の三川が銀蛇の如く鮮かにくねり、富士の右下に湖水のやうに洋々と見えるのが、名にし負ふ富士川の大川である、甲府の町は雜然として芥の如く、少し離れて兵營が稍大きく明かに見える。

甲府盆地をふまえて淡紫にすみ渡る富士の高根と向ひ合ひに、秩父山塊の麗峰金峰山の頂が鋭く光つて見える、國司岳の鷹揚な心地のよい山頂の右に、甲武信岳が丸い頭を出した、雁坂、大洞、雲取から、武甲の山と、だん〳〵うすれて夕闇がこの方面から迫つて來る、仰ぐと何時の間にか空の色が

水の樣にあせてしまつて、もう夕星の數をかぞへる樣になつた、激變する高山の氣候に驚かされ、急いで焚火の傍に戻る時分に丁度夕飯が出來た、夜に入ると西方にあたつて、物凄き程高く大きな夕立雲が、だん〳〵擴がつてその內から稻妻が盛んに光り始め、時々遠雷の響を聞く、この野でんで夜半に夕立にでも遭つてはならぬと思つて、早速假松の枝々に細引を縛り付けて、結構な幕營が出來、其內へもぐり込んで寢た、高度が非常に高いせいか、この夜は實に寒さが激烈だつた、うつら〳〵として中々寢られないで、夜半幾度か起出でゝは焚火に松をくべる。

あまり月がいゝので、思はず丘の方へ歩いて行く、高山の深夜、天地闃として風全く死し、流水の如き月光は、岸々谷々を隈なく照らし、四顧の山川糢糊として、自から夢の世界に入る、とりのこされた漂浪者の樣に、岩角にとりすがつてゐた自分は、暫くの間驚異の眼を放つて、心往く程、不可思議なる萬象を眺め入つた、つい數日前まで、市井の裡にこせ〳〵と暮して居た私が、今この大嶺の一角に立つて、幽玄なる自然の樞機に接したとき、何とも云へぬ深甚の思ひが、ひし〳〵と胸にせまつて、人憚からず、思ふさま慟哭して見たい樣な氣がした。

頭痛がするので、急いで幕營に逃げ込んで横になつたが、曉方になつて漸く二時間程よ〳〵寢られた、案內に起されて驚いて目を開くと、もうそろ〳〵東の方が白みかけてゐる、焚火を盛んにして冷え切つた身體を暖める、その中に空がだん〳〵鮮やかになり、午前五時少し過、東の方武甲山の上にたなびく、朱樺色の横雲を破つて、今しも紅團々たる日輪が徐々として登り始める、日光の第一線がこの山稜に當ると、天地が急に活氣づいて自然が全體に陽氣になる、今日は間の岳と北岳を越して、廣河原の小舍まで降りる豫定なので、急いで朝飯をすまし、午前六時半人夫に後始末を托して、一人で間の岳を、指して先發する。

青々とした假松や山草の中をかき分けて、なだらかな丘の樣な尾根續を三つ程越すと、間の岳のガ

レの端に出て、それから重に崩石の上を登る、約一時間程あえぎながら、ひた登りに登ると、大きな岩の後に、雪田のある處に出た、雪は少ない、然し奥行三間間口七八間位は、まだ摺鉢の様な山側にこびりついて、その中程に眞白く堀り割つた跡がある、その雪の御影で、昨夜は樂しい一夜を過すことが出來たと思ふと中々有難いことだ、雪を嚙りながら、夜營地の方を振り返ると、先刻迄蟻の蠢く様に右往左往してゐた人夫どもが、もう見えなくなつた、多分出發して、向ふの青い小山の影あたりを、登つて來るのだらうと、又そろ〳〵登り始める、これからは山容がなだらかで至極樂だ、約半時間程行くと、何時の間にか間の岳の右端の山頂の一角へはい上り、草原の上を降りて、なだらかな山頂を絶巓へ登り着いた、顧みると農鳥山は隨分低くなつて、降るときは左程氣がつかなかつた、偃松の叢や青草が、尾根の隈々に、青々として美くしく見える、その右に高き農鳥を凌ぐ大嶺鹽見岳が相變らずその威容をそば立てゝ居る。

今日も天氣晴朗で、南アルプスには一翳の雲もなく、晴れ渡り、鹽見岳と農鳥山の間に聳立してゐる、黑糸縅の惡澤岳と、魚無河内岳との間に、赤石山の赤黑い山巓が、羽を擴げて飛び立つ様に見え、その山の額には殘雪が一點、星の様にきら〳〵と光つてゐる、農鳥の後に遠く突兀たる首を擡げてゐるのは、雨畑の笠が岳であらう、聖岳は見えない様だ、西方木曾駒の上を超して、大きな御嶽がすき透るやうな翠色を挺んでゝ、その遙か左手に孤立してゐる氷藍色の乘鞍が稍霞んで、雪が非常に多く、朝日に反映してきら〳〵光つてゐる、その裾野の長大な緩斜地と、山頂の尖鋭なのとが、如何にも調和のよい大火山の姿態を示して居る、乘鞍の右の方から著しく霞がゝつて、飛騨山脈の上には横雲が澎湃として、丁度渚に寄せる波濤の様に、遙か越後境の方までも延び擴がつて、望みを屬してゐた北アルプスの大觀を絶無にしてしまつた、僅に燒岳の丸い頭や、槍ヶ岳穗高山のぎざ〳〵した山稜と、その山の皺や雪溪が朧に見えるばかりて、其他は全く雲煙の中に閉されて、戸隱の山彙すら見ること

を得ない、奥仙丈の黑い大きな山塊が鼻先の野呂川の向ふに横はつて、その大仙丈澤の大カレガ中々壯大に見えて、一寸登りたい樣な氣がする、右に連る駒ケ岳の白頭が一際目立つ甲府方面から見た程豪壯な趣はないが、その白崩れになつたピラミダルの山巔が、心地よい程爽快な感じがする、地藏鳳凰の山頂の花崗岩が朝日に照されて、鳳凰山の地藏佛がペンの先を立てた程に尖がつて見える。

間の岳の山頂は、非常に大きい緩斜地になつて、西方國境に連る尾根に一峯を越して、其先は漸次低夷して野呂川と田代川の分水嶺を爲す、一面の石原には、偃松と山草が處々にはびこつて、中々美しく見える、この山脈を歩くのには、時期が遲いせいが、草花は全く凋謝して、岩桔梗や、ッガ櫻等の僅かばかりの遲咲が、朝風に慄えてゐる、正北に當つて頭々相對してゐる北岳の峻嶺が、澄み渡る朝空にをさまり返つて、こゝから連る尾根には幾つもの小山を起して、中々長く、そして隨分の降りになる、あまり風が强いので、三角點の西下の小平地に、うづくまつて休んでゐると、人聲がして、二人の人夫がひよつくりと、東の尾根上へ現はれた。

午前九時五分出發、一時間程かゝつて長い尾根を降り切つて、北岳の登りにかゝる、右は荒川の北澤の上にあたる谷に漆喰のやうな殘雪がずり落ちて、今迄氣がつかなかつた間の岳の東方の一角にも雪が見え始めた、當面の北岳を仰ぐと、中々急峻で、殊にその絶巔間近のガレのある邊が、ひと際峻險の相を帶びてゐる、午前十時四十分、北岳直下の小丘の上へ出て約三十分程休む。

人が降りて來ると、人夫が叫んだ、ふと行手を見上げると、成程高い〳〵北岳の絶巔から、その峻坂を一人ずつ落切る樣に迅速に降りて來る、すると又後から一人何やら脊負たのが、大きな岩の後から、ぽつんと現はれて、同じくずる〳〵辷りながら、やつて來た、漸々近づくのを見ると、前のが登山客で、後のは案内者らしい、やがて一行のゐる丘の上へ辿り付いて、荷を下す、暫時立談をする內、舊き友に會つた樣な氣持になり、名前を承はると、小島烏水氏の令弟、小島榮君であつた、さう云へ

ば、どうも身體のこなしや、口のきゝ具合などが、よく烏水先生に似てゐられる樣に思つた、君はこれから、間の岳を極め、引返して野呂川の上流へ降つて、明日大仙丈澤を仙丈岳へ登らるゝ豫定なのださうだ、午前十一時頃、小島君にお別をして、愈々北岳の急坂にかゝる、然しこゝまで來れば、傾斜は益々峻急だけれども、距離が短いので、思つた程困難でなく、頂上直下の險も知らぬ間に這ひのぼり、正午遂に北岳の絕巓に立つた。

展望は、間の岳のと略ぼ同じく、唯益々甲斐駒山脈に近づいた爲、駒、朝與、地藏、鳳凰が非常に明瞭に見える、駒ヶ岳の向ふに、稍低い八ヶ岳の頂上が亂立して、見渡す限り廣大なその裾野の翠が實に美くしい。

北岳の狹い山頂に、二つ程並んでゐる小さな社の前の斜面で中食をする、海拔一萬五百有餘尺の高嶺の頂點は、日光が頗る激甚で、飯を食ふ間も堪えられぬ程熱苦るしい、半分ばかりで止めて、未だ早いから、雜囊を枕に横になつて見たが、餘り照りつけられ、とても晝寢どころのさわぎではない、支度もそこ〳〵、午後一時五分、なつかしき白峯山脈を降る。

右方直下には、大樺谷が深く蔭落ちて、その上流には、殘りの雪が、まだ所々谷を埋めてゐる、遙か下流の目のくらむ程下の方に、大樺池が青いベルベットを敷つめた樣な、草原の中に、珠玉の樣に光つて見える、北微西に連る尾根を、どん〳〵降つて行く、右下にヤブ澤を見て尙少し進んで尾根を放れ、右側の急斜面を、大樺池に向つて下る、一面の青草原を、尺餘の草を踏みしたいて、遙二無二急激な降りにかゝる、約三十分程は五歩に辷り、十歩に倒れ、漸くにして白樺の林の中へ入つたが、矢張辷ること夥しい、今日迄は一日に一足半位の草鞋しか費やさなかつたのが、僅か一二時間のこの降りで、三四足を無駄にしてしまつた、暫くの間、林の中を苦歩して裾の草原へ拔出ると、直ぐ下に大樺池が見える、隨分ひどい降りだ、足がが〳〵して、中々震えが止まらない、池の汀に出て、咽

喉を濕さうとしたが、餘り不潔なのに失望して止めにしてしまつた、殘雪のある頃ならば兎に角、埃だらけで鈍色をしたこの水は、兎ても飲む氣にはなれない、池の傍を通り拔けて、栂、唐檜などの鬱葱たる尾根に入り、急歩して益々降る、隨分長い尾根だ、暫く行くと下方の谿流の音が可なり大きく聞える、早く清冷なあの谷川の水を、思うさま飲んで見たいと思つた、空腹をかゝえて晝尙暗き深林の木下道を駛ける樣にして降つて行く、溪聲はすぐ下に聞えるが、中々急に谷底へ降りられさうもない。

午後四時少し過、漸く大樺谷の下流に出て、第二回の中食をすまし、半時間餘休んで谷を降る、交々大石の上をひろい、鐵砲にした跡の棧道を辿つて、野呂川の落合廣河原へ出る、すぐ上流の方に、廣河原の大きな小舍が青葉の茂りの下に二つ程見え、野呂川の河原が、廣さを增して悠々と、その前を流れて居る、一寸閑靜で、詩趣に富んだ所だ、大樺谷の上流を仰ぐと、磊々たる北岳絕巓附近の障壁が暗赭色に連らなつて、眞白な夕立雲が、くら〳〵と大きく延び上つて來る、まだ時間が早いのと、小舍で蚤に攻められるのが辛さに、又一しきり淵に添ひ、渡を渡つて野呂川を降る、約一時間程降つた頃、毀れかゝつてゐる危橋を渡り、地藏ヶ岳から流れ出るアカヌケ澤の落合に出る、午後六時五分、周圍の具合がいゝので、こゝを今夜の野營地と定める。

心地よい白砂の上に荷を卸して、どつかりと腰をおろしたら、もう立つのさえも物憂くなつた、暫くの間茫然として夕榮する高空を眺め、山谷の隈々に迷ひ込む夕靄を見入つてゐたが、身體が冷えるので漸く我に返つて、荷物を擴げ賄の材料を出す、人夫が流木の大きなのを集めて、焚火を始めた、今夜は一つ大きな焚火をやらうと云ふので、ひと抱もある樣な大きな流木を二人して幾度も荷つて來る、炎が餘々として高く上つて、さなきだに寒い谷川の露營地を賑はした。

この附近の河原は、一面に清麗な白砂に埋められ、所々に巨岩が横はつて居るのが、風よけになつ

て、露營には具合がいゝ、野呂川は二間程前を、トウ〳〵と淵の樣になつて流れて行く、その廻り水が丁度炊事にいゝ樣に、函の樣に圍まれた、幾つかの岩間を通り拔けて、米をといだり、洗物をするのには非常に好都合だつた、夜に入ると焚火が益々勢を增し、谷の上の方までも燃え上り、對岸の森林に焦げ付きはしまいかと思はれる位で、熱くつて傍へは寄りつけないから、一間餘も放れて、毛布を敷き、最後の露營を祝する爲、茶、くず湯、菓子など貧しい蓄へを傾けて、御馳走をする、今朝とつた雷鳥に玉葱を添えて、汁をつくつて夕飯をすます。

もう大分土地が下つて來てるのに、夕立の來る恐れもなさそうなので、天幕を張らずに毛布の上へ防寒着を着たまゝ、油紙を被り足を焚火の方へ出して寢る、夜半アカヌケ澤を渡つて來る寒風に、時々目をさますと、宵の中にくべた巨大な流木が、まだ盛んに燃てゐる、月は森林を漏れ、谿水を照し、岩にむせぶ水聲、森を渡る谷風の音が、いとゞ谿谷の寂寥を添へる。

八月十二日夜が明けた、もう山へ入つてから五日だ、今日は愈々里へ出られると思ふと、暢氣なさすらい人も、なか〳〵そは〳〵せずにはゐられない、午前七時夜營地出發、空を仰ぐと今日は前の數日と異つて、早朝から澄み渡つてる谷の高空に、煙の樣な雲が切りに動いてゐる、大分天氣が續いたから、もうそろ〳〵天候が變るのかもしれない、夜營地を後に、野呂川の奇勝を賞して、川添を降る、荒川の落合で、その上流に農鳥山が大きく連なつてゐるのをなつかしく見上げた、少し降ると、芦安の者が五六人、長い鳶口を以て材木を流してゐる、これは採伐の折、谿谷に捨てられた大きな流木を、澤山かき集めて來て、谷を流しては、アユサシの小舍まで持つて行つて賣るのださうだ、案內者が、この十日程前に來た時には、廣河原連を流して居た、その流木を今日迄かゝつて、漸く荒川の落合迄纏めて來ると云ふ、岩石の多い谷川のことだから、その位かゝるかもしれないが、その暢氣さにはあきれ返る。

午前十一時半、アユサシの小舍へ着く、幾つもある大きな小舍が、皆戸締りがして、人は一人も見えない、晝飯を終り、暫くうたゝ寢をする、目をさますと谷の向ふの雜木林に、二人程の桑取りが歩いて居る、十二時少し過、夜叉神の登りにかゝる、空はそろ〳〵曇り始めたけれども、至極穩かだ、大分登ると右下の谷底の方で、切りに鎚の音がする、注視すると谷向ふの大きな崩れの傍の穴の様な處で、人が動いて見える、少し行くと右の山道の分れめに、新らしい棒杭が立つて、大きく芦安鑛山道と記されてある。

何處かで魚のヒレの様にぎざ〳〵した聖ヶ岳が一寸見えた、峠の頂上は一面になだらかな草原で、振り返ると谷の向ふに白峯山脈がその長大な全容を横へて、數日間この山谷を經過つた我一行を嘯ふ様に見える、初冬か、早春、この峠へ登つて、雪に蔽はれた白峯全山容の壯觀を恣まゝにすることが出來たなら、如何にも壯嚴なことだらう、是非其内に一度は來て見たいものだと思つた、然し白峯三山の崇高な面影は、どうしても南北即ち農鳥山方面か、駒ヶ岳方面から見るのに限る、夜叉神から見たのも、よいけども、幅は中々あるが、奥行が狹い様に思はれる、黑河内岳の左に惡澤岳の千枚澤岳から上が見える。

峠の頂を辭し、甲府平原を見ながら下る、關東山脈が、前日の翠色に似もやらず、今日は心地惡い程、灰色になつて、その上空に少しばかり青空が二筋程見えてゐたが、何時しか鼠色の雲に吸込まれてしまつた、藍鼠色をした富士が、大きく盛り上つて、その頂上が笠雲で蔽はれて居る、同じ様な笠雲が、又跡から一つ動いて來た、富士の笠雲が、北へ廻ると暴風になると人夫が云ふ、注視すると矢張北に廻つて行く、愈々これは荒れになるなと思つた、然し曇つてこそゐるが、雲が非常に高く風が穩かだから、さう急に雨になる様なこともないと思つて、氣まかせに降り、一時間程下ると、山奥の仕事小屋が所々に顯はれ、漸く御勅使河の上流に下り、流れに嗽ぎ、もう直きだと云ふので暫く休憩

をして出發する、最後の山の端を廻ると、里近い畑や社なぞが思はれ、午後五時芦安の清水屋旅館に着き、久しぶりで疊の上へ寢ることを許された。

その夜八時頃から、とう〳〵暴風雨になつた、翌日は龍王の橋が落ちたため迂回して六里程の道を、暴風暴雨を衝いて、甲府に向ふ、昨日迄水嵩少い小流だとみくびつて居た御勅使河原は、濁流滔々として、猛りに猛つて、怒濤の兩岸を洗ふ樣物凄く、橋は殆ど落ち盡して、途中身體谷まり、漸く村の若者を雇ひ、泥潭を渉り、午後二時少し前に甲府に着いた、もう甲府近在は火事場の樣な騷ぎで、村々の若者が長い鳶口を以て諸川の橋梁を警戒する、先日まで水量の少い鰍澤邊の富士川は、急に汪洋として溺水の樣な大河となつた。

甲府へ着く時分には、そろ〳〵天氣になつて、懸念した笹子小佛も、遲々として過ぎ、その夜無事に歸京することが出來た。

久しく憧れてゐた白峯大山脈、その山谷から得た深刻な印象を、懷に秘めて、私は又自分の故郷なる、塵の都に立ち戻つた、私の貧しい日常生活をして、力あり、潤澤あらしめる、諸ろ〳〵の自然の大景の內に、今年は又白峯山脈と云ふ壯大なる收穫を加へた幸福を心から喜んだ。

高頭さんの御作りになつた白峯山脈臆測圖にある、大籠（イモリ）の南の廣河內とあるものを、シラ河內と宗平が云つてゐました、それから農鳥の南にある白河內岳を、ヒロ河內岳と云ふてゐた樣に覺えてゐます、或はヒロ河內の上流にあたる白河內岳が廣河內岳で奈良田の手前のシラ河內（地圖にシロ河內とある）の上流の方に當る廣河內岳が、白河內岳ではないかとも思はれますから、暫く疑を存して置きます。

野呂川の山と谷

小島　榮

一

本年は二十年振の酷暑だと、新聞が暑さうに書き立てゝゐる通り、稀有な晴天續き、吾々登山者にとつては、又と得難い好天氣だ、うか〳〵と河童の眞似をしてゐる間に、出發の日が遲れてしまつた、友達からは、頻々に山信が來るので、もう堪らない、追ひ立てられるやうな忙しい氣分になつて、忽々行李を纏めて、南アルプス見參に向つたのは、氷の値段が二割方騰つたといふ八月八日であつた。

瀛車は東神奈川から、一直線に相摸野を突き拔けて、八王子へと軌る、見渡す限り、青い〳〵桑畑の中を、凋落に近づく殘綠の雜木が、點在してゐる、丹澤山脈、秩父山脈が、こゝでは巨人の如く行手を遮ぎつてゐる、橋本驛を過ぐる頃から、自分の頭には、白峯や仙丈のことばかりが蟠つてゐて、他の何ものゝ侵入も許さない、其ためだか、不二山を右肩に小さく抱へた大山の頭の格好が、仙丈の三尖頂に似て來て、最高の丹澤山の尖鋒が、北岳のそれに似てくる、遠くは武州御岳大岳と言はず、全山脈、殘る隈なく見える、自分の心魂は既に南アルプスに飛んで、目前にあるものは、凡てそれに滲入聯想されて止まない、自分の前には繭買らしい商人が、相手を欲しさうに煙草を燻らしてゐるので、どつこいと目を外らしたが、遂に捕へられた「ヘエ、龍王から山の奥へ、葡萄が澤山採れるでせうな」可哀さうに金剛杖に、學生服の自分を、流石に鑛の脈を探るとは見なかつたが、甲州だけに葡萄の仕入と判定された千里眼には、全く恐れ入つて、ハタと無言の行を勤めてしまつた。先刻からの

樂しい聯想も、趣味好尙の全然相容れぬ此男と、雨の如き煤煙の突入と、ガタ馬車のやうな上下左右動で、完膚なくイリユージョンを破られて八王子へ着いた。

運惡るく一時間程待たされて、十一時に松本行が來た、待ち兼ねて飛び乘ると、偶然隣りに三高の中原君がゐる、挨拶宜しくあつて、樣子を聞くと、君は日光の山々を歩いて、日本アルプスの見參に入るため、中央線を迂回して、歸阪の途中であるさうな、山好きが集まると、相談は野呂川の水より早い、二つ返事で、地藏、鳳凰だけ、同行する事になつた、大月へ着くと、お山で魑魅魍魎と立ち廻りするやうな嚴めしい姿の富士參りが、ドヤドヤ下りる、此手合に限つて「下車の際は靜肅にすべからず」とでも訓令されたやうに、只さへ蒸し暑いのに、わい〳〵わめきながら、號外賣のやうに鈴迄チン〳〵鳴らす、一方プラットホームには、音律無視の大仰な音樂隊附きの出迎があつて、ドン〳〵、ブー〳〵、やらかすので、愈々以て助からない、靈山不二が崇拜渴仰されながらも、嫌惡の情のまつはるのは、こんな手合ひの附き物が跋扈するためであらう。

初狩からスローブ緩和の第一回目の逆行がある、この暑さに疲れて横臥し、よい心地になつて、假睡してゐた村娘が、このバックの際に、見事ドタリと振り落されたのは、氣の毒でもあり、可笑しくもあつた。

笹子を越えると、自分等は地圖と首ッ引きで、双方の窓を往復して、交代に首を出し初める、勝沼は白峯を見るに最もよい地であるが、白雲漠々として、空しく山腹を見るばかりであつた、龍王で下りたのは、自分等たつた二人、時に三時半。

驛前に出て、芦安行最初の質問の矢を放つたのは、通りかゝりの青年會の兄さんらしい若者であつたが、意外にも芦安の名を知らなかつた、僅かに釜無川を聞いたばかりで、丁字路に出る、突き當りの荒物屋で聞くと、主婦はやはり知らなかつたが、主人が煙管を咬へ、大跌座をかき乍ら「芦安ア、俺

も行つた事があるだが、ゑらいところだ、さあ、日のある中には迚も着けねえね」と、氣の毒さうに道を敎へてくれた、左折して行くと、すぐ四ッ辻に出る、右に曲ると一直線に長い村道が釜無へと續いてゐる、もう芦安へは迷はない、馬車馬的に傍へ外れずに行けば、盲人でも容易な路である。

暫くは兩側畑で、眞夏の下午だ、强烈の日光は、自分の夏帽を通して、頭髪を燒き縮らすばかりに射つける、輕からざる荷物を持つた自分の背には、眞ッ黑に汗が滲み出る、風が吹くと、目も開けられない、黄塵が歩く度に、パッと揚がつて脚絆を忽に白く染めた。

前面を見渡すと、夜叉神、堀切峠の一帶が、日字形の心棒以下を領し、其上半の空位に奥深く白河内、農鳥、間の岳を秘してゐる、頭は團々と白く光つた銀髯のやうな雲を被つて、明日迄待てと言はぬばかりに、勿體をつけて隱れてゐる、右の大枯の頭の續きには、地藏鳳凰があるのであらうが、是も邪慳な白雲のために、お預けをされてゐる、然し其右—自分の右側から背面にかけて—の八ヶ岳、金、茅、金峰、奥仙丈、國司以下に至つては、晴れも晴れたり、一般の紫色より黑ずんでる部分は、茂つてる森林であらうか、流汗を拭い乍ら、快哉を叫ぶ、去年採集登山をした中原君は「横岳から赤岳があれで、編笠、西岳、阿彌陀」と說明詳細を極めたが、暑いのと、重いので、赤岳の高峻だけを認める、龍王警察の前を過ぎると、甲府行の馬車發着所があつて、待合の客が、ラムネを冷す落し水を前にして、氷水をザクザク音をさせ啜つてゐる、休みたかつたが、前途が氣になるので、素通りする、間もなく清流を渡つて釜無河畔に出た。

兼て『山岳』で、こゝに渡船があると聞いたが、廣い河原を見る所、殆んど水がない、二三個所柴を組んだ粗末な架橋があつた、歩き惡い砂礫と、草の生えた河原を、二三町横切る、富士山が其秀容を、前山に胴切られて、夕陽に映じ、有名な赤不二になりかゝつてゐる、遙か北方の赤黑い、高く削られた河淮が見える、處々に麗はしい草花で點彩し、下には油のやうな靜をつくり、彩管あらば下手

ながらも、なすりたいと思つた程、實に好箇の畫題であつた、對岸には時代物の返り討には、附物である「欺し討とは卑怯な奴」と齒を食ひしばる主人公が、住むやうな非人小屋に髣髴の番小屋がある、覗くと世を忍ぶ零落の武士でなく、禿頭頽齡の老爺が踞くまつてゐる、一錢五厘宛を橋料として、徵收される、こんな田夫に無理とは思つたが、八ヶ岳を指點して、其各峯を聞くと、案の定、赤岳さへも知らない、「赤岳ッてね、昔から頭が八つに岐れてるだから、八ヶ岳と言ふだ、八つの名は、何といふだか知らねえ」と言ふ張合のなさ、其上聞きもしないのに「此橋番は源村八ヶ村より交代で、去年の末から俺の村に當つて」云々と淋しい時によい言葉敵と饒舌られるので、降參し、凉しい河風だけに胸襟を開き、早々に逃げ出す。

河の堤を下りてから、少し宛は芦安迄高くなつてくる、此附近で芦安を問ふと、女子供は知らないのが多い、百々村の村社の境内を通る、田舍は爭はれぬもの、理髮店でも、荒物屋でも、まるで山中の無人小屋のやうに、森閑としてゐる、益々暑いが早く着かうと思つて、荷を左にしたり、右に變へたりして、急ぐ、煙草畑や、水に乏しい田には、農夫が入つてゐるが、巡査と教員の外に、見馴れぬ洋服姿が珍らしいのだらうか、鍬を休めて、自分達を穴の明く程見たり、忙しい蠶の手を止めて、目送してゐる家もある、頑是なく夢中に遊んでゐる子供も、走け寄つて來て、薄氣味惡さうな笑を洩して、中には殊勝にも、御辭儀する子もある。

水が豐富で、路傍を勢よく流れてるので、纔かに清凉の感を與へる、渴き性の自分は、附近の農家の手杓を借りて、數杯を息もつかずに飲んだ、遙か行手を見ると、千山襟を搔き合せ、廣い平地も追々山川に狹められ、愈々谷に入り込むやうな氣配がする、結局は一致するのであつたが、路が二つになつたから、念のために通り違がつた眼のクシャ〳〵した不潔な老爺に聞いたら、喜こんで教へてくれた「東京からお山へ、それは御奇特な、御無事にお參り」と言ふ意味で、ペコ〳〵頭を下げたのが、

全で自分の初孫に對する態度なので、スッカリ汚ない田舍のおぢいさんが氣に入つた。

有野村を過ぎると、左は夕風に稻の穗が、一齊に靡く畑で、右は松林だ、しかも其後には、御勅使川が控へてゐるので、何となく凉しい、芦安には自分等二人と思つたら、一人の女がトボ〳〵と歩いて行くので、疲勞しながらも、之を追ひ越す、分流の奔湍が沸えくり返つてるやうに、躍り上つて道を横切る、いふ迄もなく自分は荷を投り出して、顏を水中に埋めた、第一回の休憩をする五時四十分。

これから靑柳、鰍澤方面の分れ道を通ると、すぐ雄大な河原に臨む、人家がチョイ〳〵ある、自分の休んでゐた間に、前の女は數町も先に行つてるので、又追ひ越す、右すれば河原、左すれば村への分岐點に來る、水のない河原は一層疲れると思つて左へとる、一小社あり、不潔な陋屋を過ると、急に坂になる、此坂を向ふに越すと、こゝにも一小社がある、農夫が三人、一頭の馬を圍んで、首を撫でたり、腹をさすつたりして「……安いだ」などゝ話し合つてる、賣渡されるらしい、舊主に別れると知つてか、悄然と俛れてゐる狀が、妙に旅愁のセンチメンタルの心をそゝる、河原に出ると少し下流が落合になつてゐて、右上手から大きな河原が赤く出て來るので、一層濶い、こゝの水の流れで、第二回の休憩をする、時に六時、もう日も落ちかゝつて、是からは河原ばかりで、谷に入るのだ、芦安の湯迄一里餘あるさうな。

廣い河原も、水のある所は二ヶ所、それも一つは徒渉するには餘りに小さい、一つには獨木橋が架してある、ゴロゴロした石を傳つて、河原を横切り、對岸に移つてから、七八町程、草の中を行く、又前の女は遙か先に小さく見える、こゝで考へた、自分達は足が早い、人が遲々と歩いてゐると、齒痒くなる、早く歩けば、旅行の第一要件たる觀察が疎陋になる飛脚と變りはなく、何の趣味もない、この點は心得てゐても、性質で直らない、しかし疲勞を早めるので、時々休む、この間に不斷に歩んでゐれば女のやうな足ノロでも、却つて先になる、道學じみたことを言ふやうだが、齷齪すればする

程遲れてしまふ、人間の一生はこんなものではなからうか。

一小橋を渡たると、前面に村外れの人家が見える、坂路の畑路を過ぎ、再び川をわたると、芦安二百戸が、殆んど見える、皆川の上から山の中腹にかけて、群をなして散在してゐる、が湯には中々遠い、二三町行つて、又丸木橋を渡る、村に入ると、ホンの寒村であるが、それでも神社もあれば、小學校もある、農家の常として蠶が忙しい、暮色漸く迫つて、嵐氣を帶びた夕風も、頰を撫て、浴衣がけに角刈のねつからイナセの若い衆も歩いてゐない事はない、人家を離れ、一小流を横過し、山上目がけて急坂を上る、對岸からは湯に通ずる容易な路もある、上り切つてから左折し、夕月夜に細い路を蓋ふ草を搔き分け、再び河へ下ると、對岸に二階建の一つ屋が淋びしさうに立つてる、之が今晩泊るべき清水館で、この方面の白峯、地藏、鳳凰登山の唯一の發足點たる芦安無二の宿屋である。巨岩累々の間に架けた丸木橋を渡り、喘ぎつゝ上り、漸く主人の爐邊へ着いたのは、人の顏も分らぬ七時であつた。

「今日は來ねえかと思つたよ」と主人に勞れを犒はれつゝ、二階の新家に導かれ、浴衣を借りて、硫黃泉に飛び込む、飛び込むと威勢よく書きたいが、實は深さ數寸で、慌て者がいさぎよく飛び込めば、打撲傷を負ふこと受合なり、湯槽は正方形で、二人入れば狹い、都會生活の吾々こそ、湯の主人に對してはお氣の毒であるが、こゝに狹隘不潔といふ醜陋な文句を被らせたいが、こんな邊鄙な寒村に、湯のあるのが、勿體ないくらゐだ、只中房や、上高地、西山溫泉には、迚も及ばない、湯は微溫くて少なすぎるけれども、硫黃の常として、後で毛布を捲いてるやうに暖まる、湯から上つて八時頃、夕飯を食ふ、初めて蘇生の思ひがあつた、主人は、山通だ、明日からの旅程を一通り話した、案内者も前報してあつたから、既に來てくれた、此宿には生憎鑵詰一つ無い有樣だから、早速夜陰を冒して、村迄食料品を買にやらせる、殘月山頭に懸つて、星光爛として、天に滿ち、風伯亦鋒鋒を收め、只御

勅使川の瀨の音丈が、四邊の寂寞を破つてゐる、十時頃蚊と蚤と惡戰しつゝ、何時の間にか夢路を辿る。

一たい自分の旅程はかうだ。

第一日　芦安發—苅安—御室—地藏、鳳凰登山—御室泊
第二日　御室發—セエバ—野呂川—廣河原泊
第三日　廣河原發—北岳—間の岳—右俣下り—兩俣堂泊
第四日　兩俣發—大仙丈—仙丈岳—池の平—北澤泊
第五日　北澤發—廣河原—鮎差—夜叉神—芦安

であつたが、第一日は酷暑のためと、出發初日故、是をいたはり、地藏、鳳凰を放棄し、御堂に早泊り、第二日は其埋合として强行し、地藏、鳳凰を濟ませて、廣河原泊り、第三日は豫定通り、第四日は三日と同じく、會員濱谷氏に敎はんとしたが、野呂川がコハイので、尾根を傳ふて、荒倉岳から仙丈に、以下豫定通り、第五日は前夜來の未曾有のアレのため、信州戸台に至らんとして、黑川の暴流のため果さず、再び北澤に引き返へし、第六日は野呂川氾濫のため鮎差に行けず、第一、第二の往路を反覆して、芦安へ歸つた、即ち

第一日　芦安發—苅安—御室泊
第二日　御室發—地藏、鳳凰、藥師、觀音—御室—セエバ—廣河原泊
第三日　廣河原發—北岳、間の岳—右俣—兩俣の堂泊
第四日　兩俣の堂泊—荒倉岳、仙丈岳—池の平—北澤泊
第五日　北澤發—池の平—信州黑川上流—池の平—北澤泊
第六日　北澤發—廣河原—五達根—苅安—芦安

二

八月九日（晴天）芦安—苅安—御室

「それでは、へえ氣をつけて」と主人に送られて、金剛杖をとんと突いたのは、七時五十分であつた。

大石の車地藏

一行は四人、自分の案内者は深澤善二郎といふ、年配は四十位、肩幅濶く、丈高く、赤ら顔で、言動の靜かな、偉丈夫だ、友の案内者は小柄な兵隊上りださうな、荷の繰り具合も、貫目に大分相違があるらしい、湯から直ちに、急坂を上がる、五分と立たぬ中に、もう湯の屋根を足下に見下す、善二郎は急に止つて「旦那方のむすびを持つて來たゞか」と相手に言ひながら、荷を置いて、身輕に駈け下りて行つた、自分は下の湯へ蠻聲を發したが、背後を流れる御勅使川の、轟轟に消されて聞えない、やがて息せき切つて、むすびを持つて來た。

御勅使川を遙か下にして、桑畑の間を行く、右手の高い山の上にも、人家が見えるあたりに、巉岩が亂立して、石と石の間を潜つたり、小さな棧橋などがあつて、流石は山に入る道だけあつて、初めから脅かす、又河原へ出る、奈良田道と別れて、丸太を三本組み合はした橋を渡つて、直ちに曾根尻の急坂にかゝつたのは、八時十五分だ、二三百尺で、又桑畑の平地を歩く、奈良田へ行く衆が七八人、恰で人形のやうに小さく足並揃へて、單縱陣になつて、川縁を行くのが、活動寫眞のやうだ、今日も猛烈な酷暑で、右に瞰下されるショ澤の瀨音がなつかしい、凡そ

◎野呂川の山と谷　小島

十分程で大石の車地藏の森蔭に休憩する、石を城壁のやうに、一間程累積した上に、木祠と石の地藏さんが、あぐらをかいてゐる、一面に落葉松があるので、高山に入つた氣がする、友の案内者は、パクパク煙草を吹かす、吹かすと尻が重くなる、從つて休む間が長い、やたらに一服やられる程不快なものはない、殊に急ぎの時はさうだ、感心に善二郎は、煙草は呑まぬ、酒もやらないさうで、此點も氣に入る、三十五分發、間もなく清冽な水が、樋から落ちてゐる、一行皆變な格好をして口をつける。

ショ澤を横切ると、一寸昇りになつて、畑地に出る、前の高い山の中腹にかけて、密生する落葉松が、朝霧がかゝつた様に、感じのいゝ白味を帶びてゐた、九時少し前、森に入ると右手の山側に當つて、痛快な音響が、けたゝましく耳朶を打つ、素破崩壞かと思ふと、丁々伐木の音が、かすかに聞ゆ、又ショ澤に出るとサデがあつて、山人が切りに、中途で停滯してゐる材木を、物凄く突き落してゐる、扨は森の中で聞いた音の正體かと思ふ、喘ぎ々々油汗を絞つて上る、七八貫の荷を背負つた善二郎たちを思ふと、空身の自分は、贅澤は言へない、ヤセォネで休む、傍に方圓一尺程の水溜があるので、携帶の湯呑ですくふ、一體今回の登山は、諒闇のためでもないが、出來るだけ簡易を旨とし、テント携帶の煩を嫌つて、至るところに破れ小舍ながらも、殘存する野呂川の山を撰んだのだから、水呑迄、置いてきた、しかし自分は人並以上の渴き性で、水がないと、折角の健脚も用ふるに由なく、ヘタばつてしまふ、たとへば北岳と間の岳の途で、會員冠氏に會つた際の如き、猛烈な渴のため、碌に口も利けなかつた、それだから、觸目する水は、大抵呑む、こゝ迄來るにも腹一ぱいやつたので、胸が燒けて來たに拘らず、又四五杯すくつた、瀘車の中でどうしても水呑が必要だと考へ、不圖足下を見ると、茶に附屬した湯呑がある、それが如何にも小さくて、丈夫で、邪魔にならぬで、一寸ポケットに忍ばせた、之が思ひがけなく非常に役に立つた、こゝでもさうだ、人夫共が双腕に力を籠めて、上體

を支へ、兩足を延ばして、蛙のやうにへたばつて、口をつけてるのに反し、樂々と腰をかけたまゝ、しやくつて飲める類だ。

人夫はバクバク吸つてゐたが、足下の一つの赤い石を取り上げて「是だあ」と善二郎に見せる、何だと聞くと、黄鐵を含む鑛石で、夜叉神峠、野呂川方面、カレイ澤で、澤山採掘してゐるさうだ、何でも芦安の衆が、十人程稼ぎに入つて、多量に採れると言ひながら、大きな石を碎いてゐる、こゝにも散見するので、工科の中原君は、標本になりさうなのを、ポケットに入れた。

九時に出發、依然として急坂を、お定まりの電光形に登ると、上から小柄な官吏風の八字髭が、人夫を先立たせて、一散に下りてくる、こつちの人夫が、今晩御厄介になりたいと鞠躬如と挨拶をすると「四人なら宿まれる」と、捨臺詞して去る、測量のお役人の主任で、當分御室に天幕を張つてゐるので、登山者には頗る好都合である、これがないと、野宿の外はないのである。

十時三分、大曲に着く、本道から右に折れると、自分等の取る鳳凰で、眞直に行くと、夜叉神峠から、野呂川の鮎差に至る道で、幅も廣い、十時十二分、モミソに出る、山人の大きな辨當箱が、黑い袋に包まれて、木から數個吊下がつてゐるのが、全でハムが乾してあるやうで奇觀だ、一寸入ると、申譯けに樋から水が落ちてゐる、吸つてから、すぐ重たい足を促がす、數町昇ると、頭上で、だしぬけにウーウと凄壯な獸の唸り聲がする、まさか猛獸の襲擊でもあるまい、と思つてると、ワンと一聲高く、草の中、熊に非ず、豹に非ず、人間に最も忠實なる獵犬であつた、偉大な傘を擴げて、灼熱を遮ぎつた巨木の下に、グミの枝が一面に敷いてあつて、一人の若者が、死んだやうに大の字に熟睡してゐる、傍に小祠が鎭座してある、友の人夫は切りにグミを食つてる、やがて犬の主人も目覺めて、話し合ふ、知合ひと見える、もう餘程高くて芦安で見上げた八田山などを、脚下にしたが、遙か頭の上は、苅安で、欝蒼と樹木が茂つてゐる、二三百尺高い所に、一際目立つ巨樹が、二本ある、上のが

蛙股だといふ、十時四十分、さあ行かうとグミを二本の手では足りなさゝうに、忙しく食つてる仲間を急がせて、善二郎はうんと背負子に肩を入れる、間もなくゲエル股の巨樹を後にする、成程太い腹の蛙が、四肢を張つてるやうなので、苦笑する、十一時十分前、清水に着いた、これから御室までは一滴の水さへ得られないので、晝飯を使ふ、常はこの小祠の前に、水がある筈だが、旱天のため、涸渴してゐるので、善二郎は少し崖を下りて、凛冽な奴を鍋一ぱいに入れて來た、お蔭で粗糲も舌鼓み打つてすまされた。

前に見える數百丈の、見事のナギのある大枯の頭の右へかけ、金峰、奥仙丈、國司の一帶が、桔梗色に高聳してゐる、こゝの谷底を流れてゐるのを、タテノ澤と言つて、芦安の湯から遠からぬ點に、テンゴー（天狗）の瀧といふ、數十丈の見事な飛瀑を懸けてると、善二郎から聞いた、十一時五十分に、晝寢をしてゐる仲間を起して上る、自分の希望に依つて重荷を背負つた善二郎に水入りの鍋をブラ〳〵持たせる「たとへ火の中、山の奥、手鍋提げても」といふ具合なので獨りで笑ひ出した。

漸くトテモコハイ峠を登り切つて、頂きの刈安に着いた、此瞬間に自分は思はず、アット叫んで竦んでしまつた、時零時十分。

先づ鋭く眼底に入るは白峯山脈だ、動かざること山の如しとはよく言つた、大地を踏まへて天梯となり、天半を斷じて一萬有餘尺、豪然横はること幾十里、脊梁は碧落に接し、白雲を腰に漂はせ、銀線數丈、夏尚寒く深谷に落ちて、閃々是れ果して實在か、幻想か、其辨別は夢のやうに淡い。

屹立は當に最高にして、嶮相な北岳に名くべし、雄大は肩幅濶く、均整の間の岳に與へん、莊重は殿將を承はり、腹に大鵬を抱く農鳥山に冠らせてよからう、實に農鳥山は黑い、岩石偃松の間に、天人の手に成つた絨氈のやうな青草は、疑ひもなく鳥形で、何者か之を讃美しない者があらうか、耳新らしいことであらうが、此下に比較的完全な、更に大なる鳥形がある、農夫の善二郎は「昔から農鳥

山に、馬が出るとも、鳥が出るとも言ふ」と敎へてくれる、併し農鳥山は芦安からは見えない。

農鳥の南に續いても、嵩高なものである三角形の小さい白河内岳から、後に高く首を擡げてゐるのは、農鳥より高い荒川岳か、もつと南の白峯山脈尾根の上に、グォ〳〵顔を出してゐるのは、赤石山系の主領連だらう、二人して幾度か快哉を叫んだ、人夫達は自分達の躍つてるのを見て、滿足らしい顔をしてゐたが、何時しか叢影に倒れて、グーグー寢てしまつた、長い長い峠、又は森林を疲れた足を引きずつて、登り詰めた時、突如ニョッキリと大山系が、露はれた時には、誰でも躍り上がるだらう、抱き合つて泣く者もあらう、少なくとも驚異の眼を張つて、恍惚とするだらう、中房から燕の尾根、島々から德本峠、大町から針木峠などに立つた時、例を擧げればいくらもあらうが、誰も經驗したことであらう、清水からブラ下げてきた鍋の水を平げる、是が前に齒のしみるほどの水であつたかと思ふ程、鍋臭く生温るくなつてしまつた、又怪しいスケッチをしてゐると、汗がポタポタ垂れてくる、如何に無風で灼きつけるかゞ分るであらう、上から山稼ぎの女が、大原女のやうな姿で、二人荷を背負ひ、高聲に笑ひ乍ら、勢よく下りてきた、芦安から清水迄凡て一里半、清水から苅安迄半里と稱す、凡て登り。

草の生へた崖といふべき、急坂を上つてゆくと、不二山が偉大な裾野を、長く曳いて、紫色に西の空を占領してゐる、靈姿に自ら頭が下がる、威あつて猛からず、惜しい哉白峯には不二の柔みがない。

足の踏場も分らぬ蓋ひ被ぶさつた茅で、よく辷べる、左へ徑がある、地藏平を經て、野呂川へ下りる道だといふ、上り切ると、再び森林に入つて、砂拂まで、眺望があまりない、こゝは稍平で、甲府市や、釜無の長橋、御勅使川が箱庭のやうに見える、笹の密生する所を、すつすと歩く、堀切といふ、この上で一服やる、一時三十五分、芦安から今まで二人並んで通れなかつた狹かつた道も、こゝから杖立迄は、一二間の廣い坂路になるが、歩き惡い、こゝから杖立迄は、平地もなければ、下りもない、

只上へ上へと行くばかり、十數町で四王門に出て休む、「昔この通路の兩側上下に、一本宛拔群の巨樹白樺があつて、御關所の如く、行人は必ず此四本の圍に入らざるを得なかつたが、十年程前から、惜しや枯死して、今尙餘喘を保つは一本だけと、右手を指す、成程兩側には巨軀空しく地に倒れて大蛇の如く横はる衰殘の姿は、何となく哀れであつた。

二時五分前發、この路は農鳥はよく判らぬが、北岳と間の岳は、ちよい々々樹間に隱見する、二時十五分漸く杖立についた、野呂川がゴーッと音のみして、未だ現はれない、是れからは急激な下りはないと、御宣託が下つたので、有難いと思はず感謝する、四坪程の廣場に細い木を、鳥居擬ひに組み立て、其奥に小祠が祭られてあるのが面白い、仙丈が初めて見えると、樂しみにしてゐたが、極支脈らしいので失望する、勇んで下ること六分で、セエバに着く、左へ下りると北岳行の野呂川だ、明日又こゝへ戻るので、米は一升（芦安人の一升は、勿論甲州桝故、三升也）だけ、自分量で持ち、鍋と米袋をこゝへ置いてゆく、夜露にかゝらぬやう、叺に入れて叢の中へ隱したが、露出しに放ぢいても誰も失敬するものはない、都會の所謂、紳士が、往々衆人稠座の宴席で、フォーク等を胡魔化す者があつて困るといふ非難を、新聞で拜見するが、如何に大きな顏をしてゐても、公私の道德に於て所謂田夫野人に及ばざることは淺ましいことである。

今日はお室泊りであるから、もう着いたも同然なので、悠々と風月堂仕入れのボン〳〵を振舞ふ、又上りになる、三時五分前に出ると、十五分には切明の小舍跡を通る、身輕になつたので、案内は休みもしないで、ずん〳〵進む、小舍といふけれど、全く荒廢して、羽目板も屋根もなく、白骨のやうな無慘な形骸だけ殘つてゐるので、泊まれない、急峻とはいへないが、可なりのスロープで、行く事數町で、新らしい標石が二三個轉がつてゐる、しかも境界の二字が、今彫り終つたといはんばかりに、白く抉ぐられてゐる、二三町急ぐと、果して印絆纏が歩ひてゐる、追ひ付いて、辻の小舍跡で共に休

む、こゝは小舍の跡さへない、直ぐ此下が御室だ、暑いので襯衣一枚になつて、仰向けになる、こゝにキャラメルの包紙が散らばつてるのが目に入る、石屋さんの話を聞くとかうだ、彼は測量部の常用石工で、山梨縣の高山は、殆んど登り盡した、駒ヶ岳山脈には既に三週間程居る、こゝを濟ますと、小太郎岳から、白峯三山へかけると言つた、未だ四時にならぬに山氣磅礴し、急に凍える樣に冷えてきたので、慌てゝ上衣を着けたが、慄へが止まらぬ、然しもうこゝ數日間は、氷屋のコップと沒交渉になつたかと思ふと、貧乏慄ひも、武者振ひに變つて來る、御室の水に話が移る、石工と案內者と三人で、切りに「御室の水はコハイだ」と言ふ、何がコハイのだと聞くと、要領を得ない、此後もこのコハイを十數度聞かされた、醫者でも治らぬ下痢や、腹痛は、是に限ると善二郎は叢の中から、數束拐つてくる、ワウレンの類だ、四時出發す、芦安を出てから初めて下りなので、無性に氣持がよい、暫くは森林のため、眺望は皆無だつた、一寸切れたと思ふと、前面の山に當つて、奇巖峭立天を突いてゐる豪壯に、思はず鳳凰山の地藏佛と叫んだ、然し全く間違ひで、是は地藏岳の藥師邊の巨巖らしいが、始めての者は、誤認するだらう、直ぐに再び隱れて、益々下ると、パッと夜が明けたやうに、五六百坪の廣い草原に出る、此處だ此處だ々々々、右平に當つて天幕が八字形に張られ、左には「コハイ水」が潺々と流れてゐる、天幕より水の方に飛びつく、一町程ある、天幕の中に入ると、誰もゐない、時に四時二十分。

到着が早過ぎて、小舍をかける仕事もないので、焚火にあたつて、ボンヤリしてゐる、地藏岳へでも行かうと思ふが、二時間かゝるといふので、止める、善二郎はテントにも入らず、一生懸命に草鞋を作つてゐる、其中に人夫頭の元氣のいゝ聲が外にする「なに、お客樣か、さあ〳〵泊つておいで」とカーキ色の洋服が入つて來て、早速愛相よく番茶を侑めてくれ、歡待至らざるはなく、旅の疲れもお蔭で忘れられた、四方山話で、一時間も立つと、測量人夫が四人切明小舍上に轉がつてゐた、石標を

背負つて來たので、丁度十人物凄い嵐の吹き去つた後は、深山の寂寥は、テントから洩れる、どつとくづれる笑聲で破られる、晩餐は全部カーキ色から借りて濟ます、「こゝの水はコハイので、飯がよく出來ねえ」と、又コハイを聞く、寄宿舍の食堂のやうな騷ぎ、主任が下山したから、清々したと、快活な頭が一人ではしやぐ、話もきはどいとこ迄進行するのも一興だ、天候は一週間は受け合ふと、清水館の主人もこのカーキ色も言明したが、どうしたはづみか、急に電光がピカリ〳〵と射て、遠雷がけたゝましくする、星も月も隱れた、是は一苦勞するなと、內心ビクついてると、案外にも直ぐ止んで、再び快晴な星月夜になつた、用事に立つた人夫の一人の子供が、外から歸つてきて、今のは確かに名古屋に降つたと言ふ、どこから中京と割り出したのかと、一同其無邪氣さに哄笑する、又人夫中の一人の青年は、西山溫泉の家の者だ、去年から溫泉を受けついで、山岳會員には、特に便宜を計りますと言つてゐた、寒いので焚火を、どし〳〵燃す、九時頃に「寢やう」と、十人焚火を中央に、五人宛兩側に寢る、こゝは特別に寒いからと、親切にも、皆が毛布や防寒具を貸してくれる、益々山人が氣に入つた。

カーキ色の饒舌を聞く、石屋のと大同小異だ、一週間前から、仙水峠を經て、朝與、ゴーロ、早川尾根、鳳凰、地藏を野營して、こゝに一週間程前から居る、こゝを濟ますと、深澤に巢を喰ひ、測量がすむとそこから小太郎岳を經て、白峯三山へは、十月頃になるが、寒いから來年になるだらう、早川尾根には立派な天幕があつて、風呂迄入れる、仙水峠から案內者なしに通れるやうに切開きをして來たから、山としては立派な路で、迷ふことはない、この數年は、樂なものだ、今年から仙水峠から地藏へかける人は幸福な人で、路も至極容易だ、自分の行く、至る所は切開きをして、登山者の便宜を計ると、氣焰萬丈だ、白峯北岳へ行くなら、是非仙水峠へと縱走して、仙丈へ出よと勸めた、自分も其方に大に色氣が起つたが、肝心の米と鍋を、セエバに置いて來たので、殘念乍ら中止する。

成程寒い、二三度、目が冴えて眠られなかつたが、蚊はゐず、蚤亦芦安程ひどくないから眠れる、もう人夫たちはスースー鼻息高く、熟睡して、消えかゝりの焚火が、ハタハタと風に搖らいでゐる、眞夜中になると、親切に貸してくれたはいゝが、何時の間にか隣りの貸主の人夫に、惡意なき强奪のため、剝ぎ取られ、夜中寒くて、寢られなかつたと、中原君は翌朝こぼした、矢張り自然は、人間を容赦なく正直にさせる。

三

十日　御室—鳳凰—地藏岳—廣河原

「寢過ぎた」と善二郎は慌てゝ起きる、時計を見ると、未だ五時にならぬが、外は明るい、楊子を持ち、霜を踏んで「コハイ水」に行く、白露を置いた草の冷たさ深山の朝冷えは、厭應なく心身を緊張させる、何といふ霽れかたゝらう、一點の雲もなく、天核迄桔梗色に透き徹つてゐる、星も一つ一つ消えて行き、殘んの月も淡くなつてきた、自分は昨夜の明月を思ひ出す、草の葉もそよがない閑寂を、畫のやうに明るい寒光を投げ、蟲のすだく音も心地よく、嵯峨野の秋のやうだ、騷人墨客が、高嶺の月を、詩題とするのも尤もだと思ふ、人夫が鍋を提げてやつて來た、飯を食つてる中に、測量部の連中も起き出す、此一行は一人は食料補充のため、芦安に下り、三人は早川尾根に標石を運ぶので「昨夜は十人の賑かで、面白かつたが、今晩は石屋さんと二人だけだ」と、カーキ色は言ふ、石屋さんも鐵槌をいぢくりながら「さうだね」と合槌を打つ、カーキ色は言を繼いで「併し相手は石部金吉だから、至極お堅いものき」と警句を吐いたので、ドッと一同笑ひ出した。

善二郎を案内として、六時に發す、すぐ前の森林を目がけて驀然(まつしぐら)に上る、この路は切明小舍附近のやうに、轉石を傳ひながら、行くのでなく、腐融土の足觸りのいゝところだから、大に歩きいゝ、但

し巨木往々仆れて、交通を遮斷してゐることや、眺望絶無の苦痛はある、水はこの山脈に一滴もないのには閉口する、やつと頭に出ると、巨岩累々と峙立して、急に眺望展開し、砂で眞白な廣場に出る、砂拂である、全部花崗岩の霰爛で海濱のやうに、氣もちがいゝ、野呂川、白峯三山、仙丈は言ふに及ばず、其他中央、北アルプスの一部を初見參する、是からは始終野呂川を俯瞰して、尾根から、少し下がつた山側を辿るので、立派な道がついてる上に、大した上下もないので、岩燕のやうにと風を切つて行ける、高山植物も豐富だが、駒草はなかつた、白峯や仙丈は飽きる程見られるから、早く尾根へ出て、淺間の煙、八ヶ岳の雄姿、果は槍、穗高、北アルプスの巨魁が見たかつた、砂拂から數分で藥師岳の巨巖が、砲臺のやうに聳えてゐる、それから左に折れて、雜木や偃松の間を過ぎて、少し上ると、右に觀音岳があるらしい、又ざく〳〵した山側になつて、地藏ヶ岳迄多少の上りになる、この邊には熊の足跡が、紀念スタムプのやうに、白砂に奇麗に押捺されてあつた、野呂川は遙か脚下に當つて、繃帶を布いたやうだが、流石にサーと風に馮つて、谷底に騷いでゐる。

善二郎は多年伐採に入つたから、野呂川の谷は、山より明るい、北岳の中腹を指して「青いとこがあるずらあ、あの下がオーカンバの池で、その左から澤が出て、野呂川に入るのが、オーカンバ澤、北岳の麓を右に曲がつてる所が、今晩泊まる廣河原、時間が遲れて行けなければ、それこの下のシレイ澤の小舍に泊るだあ」といふ、勿論小舍は見えぬ、こゝを一直線に下れば、一時間程で着けさうに思はれる、が迚も荷を背負つては、行けないといふ、しかし空身でも、獸性に近くないと六づかしからう、が迂回して七時間かゝるより、短時間で濟むなら、泡鳴氏ではないが、半獸主義を奉じたくなる。

地藏岳頂下に着いたのは、七時十分であつた、久し振で八ヶ岳の右肩に、淺間山を見た、吐き出す煙は、直上して其先が右に曲つてゐる、無風なのが分る、去年立山の頂上で、佐伯神官から、正面の淺間山を指して、あの煙が右に曲がつてると、天氣が惡るくなるといはれたことを思ひ出した、鳳凰山

はゴーロ澤、朝與岳に連く尾根から、右に分岐して、天を刺す、地藏佛の奇峭は、こゝからでは、玩具のやうに、小さいので、稍失望した、駒ヶ岳は一際高く絶壁數千仞、白崩れが崩れ、光つてゐる、且北アルプスの重鎭乘鞍と穗高槍とを左右に振り分けた形貌は、雄渾を極めて、痛快だ、白峯仙丈の額を壓するばかりに控えてゐることは言ふ迄もない、カーキ色に借りた水筒の水を、半分程呑むうまさといつたらない、二十分程休んで、又も山側を行くと、すぐ尾根に出た、こゝには奉納の小石佛が數十個鎭座ます、直ちに偃松の間を下り初めると、木魂岩といふ恐ろしい巨巖が、削立してゐる、この邊から砂走りになつてゐるから、砂烟を揚げて一散に辷る、基部に達して野呂川方面に行つたら、柵があつて危險だ、之は違つたと戻ると、小武川方面の森林帶に果して道があつた、凡そ二十分ほども、小逕を辿ると、又も低い尾根に出る、こゝを眞直に花崗岩の白い霞爛を上つて行くと、ゴーロ澤、朝與の道で、鳳凰路は前と同じく、右手の森林に入るのである、カーキ色の言明した通り、太い偃松が、バッサリと切口新らしく、伐倒されて、目標になつてる、之も十分程で出ると、突如として一大巨巖地藏佛は、天に冲立して、其見事さに驚嘆する、富士山は遠望が偉大だが、鳳凰は基部から見上げるに限る、巨岩が幾個となく重疊累積して、恰で筍の皮のやうに編み組まれて、細長い三角形を作成し、其頭には例の

鳳凰山地藏佛（基部より見たる）

十何間のオベリスク樣が、大小二塔、抱き合つて、天を刺してゐる、あの頂きの巨巖の下迄、攀ぢるのかと思ふと、慄とする、草山から急斜の砂地をザクザク喘いで、愈々ロック、ライミングに取りかかるべく、金剛杖を投げ捨てゝ、手をかける、こゝで考へた、平地を歩いたり、山に登る際には、左程吾々と異らない案内者も、危崖をへつゝたり、險流を渡渉したりする時は、急變して迚も及ばない、こゝでも善二郎は、猿のやうに身輕に巨軀を扱つて、上へ横へとしがみついて、影を沒す、こつちは血眼になり、しかもよた〳〵と不器用に、岩塊に嚙ぢりついたり、飛上がつたりして、淡い恐怖を感じた、人の登り得る範圍の頂きにある小祠前についたのは、八時十分であつた。

祠には名刺が數枚ある、巡査の名前が大分あつた、巖頭に立つて、下を見ると凄いオベリスク鯨節（クジラブシ）（經節から來た新熟語）を、二本垂直に立てたやうで、吸盤があつても、取縋ることは不可能に見える、名譽會員ウエストン氏が、ロープを利用して、登攀した快擧は、驚嘆する外はない、近頃活動寫眞で往々マッタアホルンや、ユングフラウ登山の實況を撮影する、豪岩雄大、日本の山岳は、到底足下には及ばない、此石頂に綱渡りするくらゐは、何でも無いものに思はれてゐるかも知れぬ、外國の寫眞を見ると、綱も用ひず、しかも靴で數丈の垂直岩壁に蝸附してゐるのがある、殘りの水を嘗めるやうにして飲み盡す。

八時二十五分去る、地藏佛よ、余は汝に餞す、汝は過去現在のやうに、未來永劫虛無主義を標榜し、批評的で、冷酷な時の流れに超然として、其雄姿を天の一角に保有せよ。

脊擦岩ともいふべき、一尺もない巨石の狹い間隙を、腹を凹ませ氣味で拔け、一周して恐惶默々、前に攀ぢ來つたところを下る、地藏佛と向き合つた草丘で、見上げる、餘り見事なので下手なスケッチをする、傍に例の小さな地藏佛が數十個ある、其の前に凹穴がある、こゝに手を深くさし入れて、金を握むと金滿家、砂をつかむと福が來ない、泥をつかむと云々といふ傳說があることを、御室で話

してゐた、善二郎は八ッ手のやうな大きな掌を、穴に挿入してゐたが、砂をつかんだらしい、格別嬉しさうに見えなかつた、往路を戻つて歸ると、木魂岩の所でオーオーと、道場で使用するかけ聲をすると、成程エコーがある、高山のエコーは、妙に沈痛で薄氣味惡るい。

九時二十四分地藏岳の頂上に立つ、此邊一帶凡て標石のみで、三角檐がないので物足りない、雷火に打たれ、雨淋風打で破壞するのは、詮方ないが、わざ〳〵人手を借りてまで、打ち壞すは登山者にとつては、是非止めて貰ひたいものだ。

八ヶ岳の麓に瀘車が這つてるのが、瞭然と見える、村落も餘り小さいので、馬鹿らしくなる、大部分例の山側を通り、左りを昇ると、直ぐ觀音岳だ、岳といふより岩と言つた方が適當だらう、藥師岳も然り、砂拂ひに來ると、丁度測量部の人夫三人が、石油や、標石をかついで上つて來た、挨拶もそこ〳〵にして、御室をさして、一散に下る、三人とも炎熱を急歩したので、異常の渴を覺え、コハイ水が見えるや、樋を嚙みつくやうに、がつ〳〵と豪飲する、一町程隔つたテントからは、カーキ色が、半身を乘り出して、自分達を迎へて待つてるのが見える「お早かつた」と迎へられて、入つたのが十時を廻つてゐた、遲くなりついでだと、晝飯を使ふことにする。

十一時半、淋しい山奥に、カーキ色一人殘して、いざさらばを極める、如何に元氣な人夫頭も、一人ぼつちでは、所在なからう。

水も飲んだし、腹もつくつた、人夫も元氣なら、こちらも元氣だ、辻も過ぎ、切明に近いところで、石屋さんが、コチコチ作業してゐる、告別を交換して、トントン惡路を下り、瞬く間に切明も後にし、セエバに荷を下ろしたのが、十二時二十七分。

こゝで三日間、同行した中原君と別れねばならぬ「命があらば、御緣があらば」は、熊谷陣屋の哀別だ、聖代に生れた有難さには、そんな殺風景な文句は要らない、「何れ又、御機嫌よう」と頭を下げ

合ふ、二人宛上下に別れる。

昨日置いた鍋と、米袋を附けたので、善二郎の負擔は、可なり增えた、笹道を飛ぶが如く下りる、路は頗る惡るい、旣出本路紀行を見ると、道もよければ、八軒や赤澤邊に、小舍があつたやうだが、今は小舍の跡さへなく、或部分は道も分らぬ、況んや人間に出會ふやうな、珍らしいことはない、小舍や樵路は、昔の紀行文を當にすると、不測の災を蒙ることがあらう、注意すべきことである。

多くは下りで、これから廣河原迄、あざみの猛襲で、大に苦しめられたが、一時に五葉根の破れ小舍に着いた、傍からは淸冽な湧水が、樋を傳つて、迸しつてるのが、爽快に感ぜられる、屋根も半ば崩壞して、殆んど泊れない、急ぐので休みもしないで續行する、森林を突切り、賴りない草をつかんで、崖をわたると、崩潰した荒凉な慘狀に出る、近づくとサァーと石の割目を流れてゐる、第一の澤の深澤である、小澤とも稱して、兩方を使ふさうだ、一時十分、其嶮崖を渡る際、足を心配して身體を宙に浮かせるやうにして通る、一時十分、スバオネを一時半に過ぎ、尙五分で大笹の中に沒頭し、搔き分け、搔き分け、暗中模索の體で進む、所謂八軒の小舍らしいが、小舍は愚か跡らしいものもなく、兩三年の間に、全く荒廢消滅したらしい、附近に水があるさうだが、構はず突進す、一面の笹で足塲が判らず、兀々した木の根や、石片で、生爪を剝がし易いから注意する、野呂川は未だ未だ深くて見えぬ、或時は峠道のやうに下るところもある、上りはあつても少ない、二時十分、五月蠅い森林を離れると、小さな板狀岩が、何萬となく赤く谷底に落ちて、水が物凄く飛び上つて、落下す、即ち赤澤であるが、寧ろ瀧といひたいくらゐだ、急湍を木の枝につかまつてわたり十分程休む、二時十分だ、善二郎は中々强い、大抵のものは、此間一二回休むさうだが、彼は不斷に歩いた、又あざみにチク〳〵刺されて、急歩し、三時十分前石の小さな流れに出る、森中にあるから、天日もあたらず、苔がベッとりと附着してゐる、陰鬱として頭を押されてゐるやうな氣がする、之れがゴトゴト澤で、成

程耳を澄すと、ゴト〳〵水の音がする、試みに善二郎が杖で堀つてみると、濕潤してくる、もつと深くすれば、水は谷のやう、三時六分に立石澤に着く、もう一つ澤を越せば、野呂川に下りられるので、七分程休む、一般に森林から澤に近づくと上りになり、愈よ澤が見え出すと、急下して達し、こゝを去ると、又急上して森林に入る。

四時十五分前、最後の森林帶を通過して、嘉助澤に着いた、この手前から遙か冥土のやうな下に、野呂川の奔湍が、泡を飛ばして、眞白に轟々流れてゐる、善二郎は暫らくためつすかしつ物色してゐたが、「岩魚取は入つてゐねえ」と言つた、こゝは野呂川中、最も嶮流、從つて奇勝に富むさうだ。

此邊一帶に苺が到るところにあつて、堪らなくうまかつたので、無頓着にどん〳〵下る善二郎を、見失つてしまふほど意地汚なく、採つて口に投込む、流石に直下溪谷に下りるので、非常な傾斜だ、飛ぶが如く急ぐが、巨岩或は轉石の惡路のため、思ふやうに捗取らない、五時七分前に、棘を分けてヌーッと河原に出た、ヤレ嬉しやと思ふと、ポカーンとしてしまつた、恰も待ち遠しい卒業試驗を終えた瞬間のやうだ、數分河原を上つて、既う廣河原には近いので、喫飯すべく汀に疲れた足を、グタリと投げ出した。

自分は、水があまり見事さに、じつと見つめた、淸きは水の姿なる哉、激して泡沫を吐き、滯つて潭となる、彼は白龍の物に怒つて狂ふが如く、此は濃油の壺に收まつて動かざる如しと、珍妙な對句が滾々と湧いたが、其時限りで流してしまつた、前後の山々は飽く迄高く聳え、野呂川の水は永劫盡きず流下する、風は山に語り、水は巖に叫ぶ、蕞爾たる自分等二人は、自然の前にヒレ伏して、沈默を强ひられてしまつた、漸やく吾に返ると、一日の勞働の結果、初めて或る衝動を覺えた、「むすびをくれえ」と呼んだ。

喫飯終つて四時二十分發、シレエ澤の小舍はすぐ右手の雜草の中に在つた、無論岩魚捕はゐなかつ

た、小舍は可なり大きいが破壞も烈しい、入口に大書して曰く「猥りに屋根を壞ちて、燃す者は法律處分に附すべし」と、人間といふものは、勝手な者だ、雨露を凌いでくれる大恩人を、不具にして迄、不當の慾求を滿たし、他人の迷惑、未來の不便を省みない、併し一方から見れば、荒天狂雨に當り、燃燒物全く絕え、餓餒凍えんとするに際し、絕體絕命、違法行爲に出づるは、止むなかるべし、況んや一日の行程佩劒の司直吏なく、人跡なきに於てをやと、同情もしてみる、アルプスの山中迄に「法律處分」の如き法的確信の發現を、强制威嚇される人間の淺ましさには、面を背けずにゐられない、此邊は樵路の兩側一面に、グミの鈴なりである、二人とも手に餘る程、ビシ〳〵折つて抱へ込み、喰ひながら歩む、四時半シロイ澤を横切る、これから沮洳の地で、寒冽な水に足を突込むこともある、少し行くと、赤澤を大きくしたやうな澤に出る「オイ此澤は何といふのだい」善二郎は食ひ盡した赤いグミの枝を腋下から拔き出し、ポンと放つて「赤拔澤」

ゴーロ澤を過ぎてから、粗造な吊橋が架つてゐる、之を渡つて二三町行つて、又故の對岸へと渡涉する、此間は絕壁になつて水又深く、河に沿ふて行く事が出來ぬからだ、これからは斷崖をへつるのであるが、危險な處は大小の蔓、又は針金にて、堅固にした橋が、十數個あるので、大に助かる、間もなくぐつと右手の叢中に入ると、廣河原の小舍があつた、一見すると案外穢陋なのに悲觀する、中を覗くと薄暗くて、空氣は異樣な惡臭を帶び、周圍は六尺ほどの雜草に蓋ひ被ぶされ、尺寸の足の踏場なく、しかも濕めつて長虫類の巢窟に非ずんば、幸ひな有樣だから、迚も我慢ができず、飛び出す、高頭氏の臆測圖及野尻氏の紀行によれば、この對岸しかも河原に在るが如く、これとは似ても似つかぬ轉變である。急に評議一決して、今宵一夜の假の住居を、河原の鐵砲下と定め、丁度五時に着いた。

善二郎は、夕飯仕度と寢床をつくるに忙しい、自分は一日の汗を拭ふため、痩我慢して、裸體の儘

水際に立つた。

何といふ爽快さだらう、身心暢達、嵐氣清明、自然の音樂、超人の繪畫、觸目する寥廓、一として遲鈍なセンスを、グイ〳〵と刺戟壓迫してくれざるはない、明日は日本アルプス最高の北岳を征服するのかと思ふと、種々のアナロジィから、じつとしては居られなくなり、無意識に踴躍した。

強度の戰慄に慌てゝ着衣し、焚火に蹲る、善二郎は甲斐々々しく働いて、もう夕飯も出來上つた、山中の寂莫は氣も滅入りさうだ、善二郎は不言實行主義だ、寡默の男だ、年齡を問ふと「もうだめだ」といふ奇妙なこともある、駄目といふ年があるものかと追求すると、四十に近いと白狀する、孔子は流石に豫言者であつた、善二郎は而立不惑の域に位す、然り此旅行通じての行動を見るに、確かに自律にして不惑なり、山に詳しからず、生路なりとも、彼の案内振は、他律的に非ず、無比の健脚と、頑丈な體格を骨子として、多年の經驗を肉被し、自己の所信を斷行して、苟くも躊躇せず、逡巡するなく突進す、しかも温和にして人馴れず、會員諸子に推奬するに足る者である、いやに提灯持をしてしまつた、其代りに既う暗くなつたので、食器を洗はせに、懷中電燈を持たしてやつた。

「明日は早えで」早く寢やうといふ、よからうと、頭に吊つた小田原提灯をフッと消す、星斗爛として、寒光を發し、嫦娥亦水に碎けて、キラ〳〵する。

四

八月十一日（晴天）廣河原―北岳間の岳―兩俣の堂

「起きしねえ々々々々々」と何だか幻に呼ばれたやうな氣がする、目を微かに明けると、善二郎が焚火の烟に目をこすりながら、飯をつけてゐる、さうだ、今日は白峯へ入るのだと、カバと飛び起きたといひたいが、夜中の寒さで寢られぬ反動が、曉の今となつて、モロに利いて、澁々立ち上る、尾籠

な話だが河原に出て、用を足す、此氣分ときては、到底都人士が一坪に足らぬ圃に、蠢動する苦痛と比すべくもない、但し或必要からこの際常に好まぬ紫煙を燻らしたが、最も妙であつた、吹いた煙は、穏かに輪を畫いて、仙丈尾根の淡いスカイラインに混じ、朝靄に消えた、まつた用濟の後は、必ず巨石にて蓋をすべきこと、夢々懈ること勿れ、白馬の頂上小舍前で、往々ヌルリと辷る苦い經驗は、一生涯忘れられない。

五時十分出發す、すぐに徒渉して、對岸に移る、以前はこゝから道があつたが、今は消えたからと、森林帶に入らず、オーカンバ澤を溯る、例の如く義經壇の浦の奮戰の亞流で、跳躍奇歩す、白峯は水に乏しいところだから、この邊で水筒の代りに、體中深く藏す胃袋に、大に詰め込む、半時間上つて右手の森に入ると、約五寸幅の道があるので、一散に上る、十數分で右に澤あり、淙々、左にオーカンバ澤、亦轟々、未だ明けやらぬ曉天は、駒鳥の清い叫びに驚き、地藏岳ゴーロの頭は、方に深き眠りより醒めて、眞ッ黑に峙立萬仞、壯觀を極む、名取氏の白峯神社の御堂に出たのは、六時、直ぐ上に無慘にも崩壞し、木片ばかり累積した本堂がある、折しも赫々たる日輪初めて地藏の頭に上りて、茜色にぼかし、微光梢をかすめて、宮のルインを照す、自分は時代の推移に伴ふ廢滅の悲哀と、興隆の榮光との對照を、しみじみ味はつて、低徊顧望暫しは去ることができなかつた、其實は長い間の坂路で、疲勞物質が、進行を止めたのであるらしい。

六時半喘ぎに喘いで、雨乞平につく、こゝに來るまで、數町は胸突八町のやうに、木の根をつかんで、重い身體を引き上げたこともある、北岳の絶巓は、かの豪岩、甲斐駒の白崩れたる如く、削壁白化、物凄い形相を呈して、人間を畏服してゐる、善二郎は野呂川から重い荷を背負つて一度も休まず、登る精力に感心した、雨乞平は、いふ迄もなく、旱天水を欲する時、村民大擧してこゝに火を焚き、降雨を祈願するところ、惜しい哉聖世一の小町なし、これからは左に折れて、サデを渡たり、左へ左

オーカンバの池より見たる北岳

へと平ならずんば、下る、至極樂なものだ、約十分にして、一小流に下り、清冽を掬し、七時突如叢中を分け出で、オーカンバ池に着く。

由來山の池、殊に深山無人の境地のは、神秘的で、妖女でも出さうに凄い、此池は案外小さい、周圍一二町か、水は流石に幾千載を經たれば、凄愴だ、青しと雖も、野呂川の純美なく、清澄に非ずして混濁なり、而も池中深く藏すアルプスの山影、見よや北岳の倒影、眼前に現出するを、池畔に踞んで北岳を見上げる、まるで强度の眼鏡をかけたやうに、强烈に、鮮明に、嚴格に、絶巓が青空に赤黑く聳えて、浮彫のやうだ、あの天壇迄登らなければならぬかと思ふと、山登りも厭になる、善二郎は、職掌柄、切りに最近に泊まつた形跡のある小舍を調査してゐたが、大分多人數で泊まつたらしい、鑓を拔いた一升樽が轉がつてると言つた、之から絶頂までは、藥にしたくも平地はない、池から急斜の草地を一直線に數町登る、池から其道がよく見える、昇り初めると全く姿は草中に沒して進む、夢我夢中だ、時々振り向くと、大樺の圓い池が、遙か下に青く靜まり返つてゐる、漸やく森林帶に入る、こゝか

ら左に行けば、正路であつたが、もつと向上主義を發揮して、猪突し、御苦勞にも少し右に曲つたので、今迄登つて來た青い草が、樹間から僅かに隱見するばかり、頭上には北岳は愚か、尾根さへも見えず、全く急斜な灌木帶に包圍されて、二進も三進も動きがとれなくなつた、勿論人跡未踏で、這つたり、辷つたり、吊下がつたり、目を突かれたりして、何時になつたら、此密生から免れるやら、便りなくなつて、ベッタリと腰を下すと、厭なブトがS九十號のやうに、好敵御座んなれと、五月蠅く襲擊するので、流石の戰鬪艦も持てあぐんでしまつた、捨てる神あれば、助くる神あり、急にパッと明るくなつたと見れば、嬉しや灌木帶を去つた。

もう尾根だらうと見れば、後門の狼、毒牙を利いで偃松が手ぐすね引いて、待つてゐる、こは敵はじと、流石の善二郎も、苦い顏をして行方に迷ふ、運は天に在り、牡丹餅は棚に在り、吾行く道も何處かになかるべからずと、目を皿のやうにすると、果して在り、しかも立派に蹂躙した足跡を發見したれば、雀躍して跟隨する、又もや偃松の中に入つたが、一方の血路を開いて、難なく左に一町程行くと、尾根から直下につゝく急斜面の草原に出るので、ホッと息をつき、倒れるやうに尻を下す、下を見ると、蝟のやうに眞ッ黑に茂つてる、あの中で彷徨したのだ、もつと下に泉水のやうな、オーカンバ池が、瀟洒に見える、大樺澤の上は珍らしい大雪田になつて、北岳頂下に續いてゐる、南アルプスでは雪田は餘りない、北岳の頭は益々高く威壓する、油汗がニジム程熱かつたが、急に凉風が颯と吹く、附近は一面の偃松で、この斷れ目〳〵を縫つて登るのであるから、濃霧の際、慌てゝ下山したら、可成苦楚を嘗めるだらう、不圖傍の巨岩に、可憐な雷鳥が一羽クックックと鳴いて、日向ぼつこをしてゐる、其上の巖にも二羽の雛を連れた親鳥が、睦まじさうに物語つてゐる、何といふ美はしい情景（シーン）だらう、自分はこゝで淺ましい罪惡を犯したことを謝罪する、「今夜食つてやらう」の獸性が、洪水の如く漲つて、無慘にも金剛杖を大上段に振り被つた、愛子をかばつて逃げ遲れた母鳥を一擊し、

逃ぐるを追ひて碎けろとばかりに投げつけた、幸に失敗に歸したが、キリスト敎が頭から厭ひな自分も、此時だけは博愛敎を欲した、手當り次第に殺戮するやうな獨逸そこのけの蠻的行爲は、今後永久に矯めて貰ひたい、否萬物の靈長と自ら納まつてる吾々は、積極的に彼等可憐を保護してやるのが當然であらう、北岳の絶巔は、左手に當つて、まだまだ高い、疲れ切つた足を引きずるやうに運ぶ、勿論一直線なので、氣息喘々爲の有樣で、小一時間かゝり、漸やく尾根に着いた、仙丈以下、アルプスがずつと出たので、困憊も一時に忘れてしまつて、快哉を叫ぶ時、正に午前九時、約半時間程休憩、雪多き北アルプスから吹きつける冷風に、恐縮して、岩蔭に正體もなくゴロリと寢る。

九時半發、もう占めたもの、嶮しと雖も尾根傳ひ、何程の事やあらん、意氣天に冲し、金剛杖を輕々と振つた、少し身體に餘裕が出來たので、猛烈に渴を覺えてきたが、詮方ない、息もつかず、踏み越え、乘り越え、蹴破し、遂に久戀の白峯の最高點に、着いたのは、十時十分過であつた。

自分は學術研究や、寫眞撮影に來たのではない、今の處、自分は山に入つた以上は、必ず絶巔を極めなければ意義のないものと思つてゐる、少なくともアムバルフェイと思つてゐる、所謂ピーク、ハンターの名を甘受したい、よしや濃霧に彷徨しても、途中で歸るのは厭だ、南穗高の三角點で、晴空の奥穗高の嶮絶を眺めながら、引返へした遺憾は、未だに忘れられない。

今自分は、富士山を除いて、最高の山頂に立つてゐる、近くは赤石山脈、遠くは北アルプス、あの嚴めしく聳えてゐる百千の雄峯大岳も、皆自分の足下にあるのではないか、と思ふと、天上天下唯我獨尊痛快に堪へない、今自分の旅日記を飜すと。

十時十分最絶頂着。

日本國中見ゆ

瀛車走る。

とある、如何に當時の自分の興奮した感情が、此短かい三行の走り書に、流露してゐるかゞ分つて、微笑せられる、再び言ふが、天氣は晴朗、秋空のやうで、甲府の町が箱庭のやうに小さくかたまつてる、瀧車が虫の這ひずるやうに、音もなく白煙を揚げてゐる、オーカンバの池は、眞ッ青な圓いテーブル掛のやうに、凹地にあるくらゐにして、何々山が何々方面に見えるの類は、煩鎖だから省畧する。

小石祠の中には、名刺や紙片がギッシリ入つてゐる、山岳會員でない名前もある、東京某氏の一行十一人の多勢登山とあるは、心强く感せられた、扨はオーカンバ池の小屋掛の主だなと、善二郎と囁いた、横濱の村川氏が「農鳥間の岳を經て登攀」とあつたが、同じ町に住んでる人は、未知ではあるが、懷かしい氣がする、スケッチする元氣もなく、偃松の蔭に日向ボッコをする、是が炎熱燬くが如き八月と思へやうか。

愈間の岳へと出たのが、二十五分過、路は微かについてゐる、裏へ廻ると呆れるほどの峻急で、無事に下りられるかしらと、不安に思はれた「千番に一番のかね合」と江川の玉乘のやうな格好で、調子をとりながら、がう〳〵と落ちる墜石の音を聞きながら、下りる、善二郎は急に足を止めて「人が居る」と遙か下の方を指した、熟視すると、果して石礫大の黑點が三四個見え、洋裝らしき登客と、剛力三人らしく、識別される、足も勇んで、猶も下りると、先の一個の黑點は、背負子なるを知り、同勢三人の一行が、悠然踞してゐることがよく判つた、早く到つて、山の話を交換しやうとあせると、ポカンと爪先を石にブッける、飛上るほど痛い、漸やく東側の大岩壁の下を過ぎて、峯下の尾根に着いた、こゝから北岳を仰いだ雄姿は、正に矗立萬仞、渺たる人間の登壇を許さゞる聖座の如く、崇高に見えた。

この登山者が、會員冠松次郎氏なることを知つて、初對面の挨拶もそこ〳〵に、山話に耽り、種々の敎示を受けた、且同氏の案內者は、白峯赤石兩山脈では、一といつて二と下がらぬ中村宗平であつ

たから、右俣の下り路や、何かを聞くと、かうだ、間の岳の平前から、右俣に下りる棚が二つあるから、それをよければ、小舎に行ける、右俣にも小舎はある」「それ」と指す方面の谷底の奥に、成程燐寸箱大の建物が、白く光つてゐる、冠氏は昨夜農鳥山の尾根に泊り、今日は廣河原に下りるのださうで、北と南へ、おさらばと別れた、之から暫くは尾根を下るので、樂であるが、其先は天梯のやうに、蜒蜿と曲りくねつて、天上指して昇つてゐる、渴は烈しくなる、咽喉は痙攣するやうだ、間の岳に行くには、數段の順序を踏む、この上が頂上だらうと、勇を鼓して登り切ると、未だ頭上に、長い長い尾根が雲間に續く、左俣右俣の分水嶺の尾根で、晝飯をやる、天龍川がよく見える、梅干を含んでも、唾液が出ない、空腹だが、食慾は起らない、早く間の岳へ行つて、雪をとりたい、右俣へ下りて水が飲みたい、野呂川へ降りて、寢てみたい、とゴツゴツした石片の上に仰向けになつて、空を眺める、岩燕がスイ〳〵氣持よく活動する、野呂川の峻谷は、ゴーッと流れてゐる、風はヒューッと、偃松をザワつかせ、恐慌を起させる、自然は物理的化學的に、直接に間接に、不斷活動してゐる、自分の活動は鈍つてきた、この儘枯死して、靈魂は滅ぶのではないかしらとまで淋しい苦痛が、猛然と湧いてくる、之かし善二郎の赭顏巨軀鬼をもひしがんばかりな双腕に、不折の畫いた「巨人の足跡」大のメンコを抱えて、詰め込んでるのを見ると、賴母しくなる、もう一息なるぞとばかりに、躍進前へと唸つて出發す、北岳の絕頂から間の岳の畝々した尾根を見て、「之は豪いぞ」と善二郎が言つたやうに、歩いて見ると全く豪かつた、絕巓の數町近くへ來ると、成程宗平の敎へてくれた通り、胸がドキつくほどの石の流れが、數千尺餘も、谷底を蓋ふ、森林目がけてずり落ちてゐる、どうせ戻るのだからと、荷をこゝに留守番さして出かけた、空身になると、善二郎の足は、天翔り行く鳥程でもないが、自分を瞠若たらしめる、頂下にはカール形の凹地があつて、野宿の跡か、食事の仕度をとつたのか、燒木杭や鍋の破片などが、二三ヶ所に見えた、必死の勇士が堅塞を一番乘するやうな元氣で、猛然と間の

岳の三等三角點に着いたのは、午後一時半であつた、例に依て名刺を檢すると、高頭幹事や、山梨山岳會の青柳氏の名が見えた。こゝから農鳥を見ると、北岳に至るよりも以上に長いので、立派なものだと思ふ、白峯三山の壯嚴なる、何人も日本アルプス中の偉觀と讃嘆するだらう。

追ひ立てるやうにして、雪を取らせにやる、自分は渴死とは、こんな辛さかと、スケッチをする氣も失せて、横になつた、午後の高山の空氣は、日は照てるが、何となく底冷えがする、十數分待て共、影を見せないので、農鳥の尾根へと歩き出すと、岩影から汚ない夏帽に、山のやうに詰め込んで持つてきてくれた、自分は奪ふやうにして、ガッ〳〵嚙つた、過半は手拭に丸めて包んで、右俣に下りる迄、吸ふた、壓力を加へると濾過されるやうに、清冽な滴れとなるので、具合がいゝ、既う面倒な北岳も、間の岳も、濟んで、しかも三時半にならない、これから一直線に野呂川に辷り落ちればいゝのだ、登攀もなければ、飲料水も豐富だ、かうなると勇氣も百倍して、いそ〳〵と頂上を辭したのが、二時二十分。

間の岳から尾根傳ひに、仙丈に出やうとしたが、格別面白いこともなからうし、水に乏しくテントの設備もないので中止する、但しこの尾根傳ひは、高低の差甚しからず、わけはなかりさうに思はれるが、全部森林帶なので、少しは面倒であらう。

元來た登路を引返へす、數町下ると留守番をしてゐた背負子が、この方が勝手だと濟まして、遠くに小さく見える、こゝからも下りられるので、自分だけ一直線に辷り出す、岩片は拳大ぐらゐで、急傾斜だから、偃松がなかつたら、足溜りがなくて、一寸下りられまい、無論人跡はない、只人間の登り得る最大限の急斜を、反り氣味に斜めになり、中心をとつて、ザク〳〵辷るのだ、別方面から下りてくる善二郎は、一寸法師のやうに可笑しいほど、小さくずり落ちてくる、やがて合一した、左手には右俣の支流（或は却つて本流の源流かもしれぬ）だらう、瀧のやうな水の音がする、二人同時に下

るのは、危險の恐れがあるから、十數間分離して行く、十町餘も下ると、厭でも應でも、偃松帶に入る、これは僅かで、右手に突破すると嬉しや、右俣の谿流の水源が、サラ〳〵と岩の間隙を傳ふて、流れてゐる、二人とも飛んで往つて、チュウ〳〵やる、この溪流に沿ふて下れば、もう大丈夫だと安心する。

下りるに從つて、水は太くなる、巖石は巨大になる、一跨ぎほどの幅も、二三間になる、行けば行くほど、急斜になる、飛び下りる、轉落を防ぐ、水勢猛に、果は小瀧になる、兩側の崖は物凄い陰森とした氣分になる、扨は宗平の言ふ棚が近づいたなと、ヒヤリとすると、果然高さ二三間の棚に出た、不安に滿ちながら、下を覗くと、猛烈な瀧になつてゐる、暴虎馮河の勇を振はないでも、下りられるかもしれぬが、君子危きに近寄らず、少し戻つて右手の森林に入る、左手に入ると、下るに從つて垂直の嶮崖になつてるから、注意を要す、これからは只想像だけで、人跡未到であるから、只滅茶苦茶に見當をつけ、草を分け、木を伐り盲進する、要するに此森林は、右俣の本流と、この支流との二流間に、介在するから、どう往つても野呂川に出られることは、保證するが、深くて大きいから、注意を要す、もう大分下つたから、よからうと恐々墜落を用心して、溪流に臨むと、峭壁をなして、迚もコハイので、又禽獸の如く草を分けて進む、此の時對岸を見ると、二三丈の絶壁であつたので、左手の森に入らなかつたで、よかつたと胸を撫で下す、あざみの勁敵と苦鬪して、數町下ると、二尺幅位の緩漫な石瀧がある、是を辿れば、溪流に出ることは疑ひないと、半身を沒する草を搔け分け下りると、果して無事に溪流に出た、上を見ると、又も棚になつてゐる、丁度是が二ッ目の棚だらう、もう、此行は障害なしと、樂觀する、かくして漸やく左手から本流が出て來た、この合流點に休憩したのは、四時前十五分、附近に小舍がある。

こゝから數年前迄は、野呂川の伐木人夫が、二三百人入つてゐたので、立派な路があつて、棧橋も

堅固に崖崩れも修繕され、無事に通れたであらう、否兩三年前の旅客は、大した苦痛もなく、通過が出來たらうが、自分の來た時は、殆んど破壞されて、危險が少なくはなかつた、愈々下るに從つて、純然たる峽谷になつて、右岸を（下流に向ひ以下凡て同じ）行く、今迄は水際を通つたが、忽ちの中に脚下二三丈の深谷となり、七ッ釜とも稱すべき危巖怪石の間を、水は狂奔怒號し、世に知られてゐない奇景絕勝を作つてゐる、しかし崖をへつる自分は、憂懼なきに非ず、往年の危橋も腐蝕して、墜ちんばかり、樵路亦深谷に崩下して、物凄い、一度足を踏み外すと、古い文句ながら、身は粉碎して野呂川の鬼となると、言ひたくなる、若し日既に沒したる後は、提灯位あつても、危險である、且本年の暴風雨で、更に險惡になつたことを斷言したいから、此方面の旅客は、野呂川最奥の荒廢に就いて、留意ありたい。

再び水際に下る、徒渉して、右に大曲りす、平凡な前進を續けると、數分で伐木事務所に達す、時五時半、既に薄暮、嵐氣坐ろに寒冷を催うし、北岳より落ちる左俣、前面に合流して、瀨音高し、深山の孤屋、早速焚火をして暖をとる、入口に恭しく祭神を安置する、其背後遙か高天紫府に當つて屹立天を刺し、夕日に躍動せんとするもの、これ白峯山の北岳に非ずして何ぞや、と痛快を叫ぶ。

事務所といつても、名ばかりの殘骸、大半屋根もなければ、床もなく、冷風は吹くに任せ、高寒は遠慮なく迫り來る、暴風雨に遭遇せば、危難計るべからず、床及屋根の殘存する一部分を掃除し、素早く晩餐は出來上つた、明日は仙丈登り、これで旅行は終りだ、後一日でよいから、晴れて貰ひたいと、天空を見れば、無數の銀砂子のやうな星月夜、八時になつた、薪は豐富であるから、ドシ〳〵燃やすが、それでも寒くて眠られない、野呂川の水音が、どこかに出張した平家の公達のやうに、耳朶を脅かされる、近いのはサー、遠いのはゴーッとするわいと、研究する、森林美論者は、伐採を極力惡魔視する、自分も大賛成だ、しかし今日嘗めて來た經驗で、人の通行し得る伐採は、堪へて貰ひた

い、否奬勵したい、伐採すると、人夫が入る、人夫が入れば、道をつける、道が出來ると、吾々が樂になる、人間と自然と交渉して、自然美論が湧く、野呂川森林の如きは、いくら伐採しても、美觀を損ねるべく、餘りに大き過ぎる、さりながら、上高地とか、箱根の舊道、立山の彌陀ヶ原などの開けた土地にまで、斧鉞を加へるのは、反對である、名取氏の白峯寳路を開拓された努力に、感謝する、其偉功も空しく失敗に期したが、山岳會設立以來、この十年間に、多數の會員の足跡が、期せずして立派な道をつけてしまつた、會の事業たる山小舍の建立、登路修繕等も、前者は原始的生活を味ふ點に於て、不必要と唱ふる連中もあり、後者は多大の經費を支出しないでも、自然と出來るわけだ、願くは會員が、歐洲アルプス登山用の釘だらけの靴をはいて、縱横無盡に蹂躙して貰へば、それでいゝ、それでなくとも、山岳不語、下自成徑とかで心配はなからうと、雜念に耽つてる間に、善二郎はグッスリ寢込んでしまふ、よく歩き、よく食ひ、よく寢る男だと、羨ましくなる、焚火が消えかゝつたが、寒くて起き上る勇氣がない、藏六の格好で、何時の間にか夢幻の境に逍遙す。

五

八月十二日　兩俣の堂—荒倉岳—仙丈岳—北澤小舍

又、起きしねえ〳〵、と搖り起される、元々寒いため、空寢をしてゐるので、慌と起きる、もう出來たての飯が、ふつ〳〵白い煙を上げて、うまさうに見えた、手拭を首に捲きつけ、手をポケットに入れ、首を縮め、慄えながら河原に行く、既に曉明北岳の尖頂は、想像以上の高さで、靑い天空に燃え立つてゐるが、あれが人間の登れる山かいと、疑はしくなる、齒磨粉を使つて含嗽すると、齒の根も合はざるほど、水冷だ、夜露を踏んで破れ小舍に歸る、朝食を型の如く濟ませ、仙丈に向ふ、時六時前二十分。

初めの豫定は、野呂川を下つて、大仙丈澤から登つた濱谷氏の經路を、踏襲しやうとしたが「野呂川がうるせえで、尾根傳ひに行かう」と緊急動議提出、深善君の日程變更に、起立異議なく賛成、こ暫らく陣笠の體にて、深澤進行博士に從ふ。

即ち小舍の便所の側から、背後の山に入る、長いサデが溪流に沿ひて、上昇する、數町の間は、或は溪澗を、或はサデの上を渡り、遂に最上部に達す、こゝから前面を見ると、北岳と間の岳の、長い尾根が隈なく見え、右俣の下り路も、殆んど垂直に崩れて、よくあんなところが、翼なくして下りられた、鵜越の逆落しも、洗足だと、一人で感心する、左俣と右俣の分水嶺や、其他の小分水嶺が、襟の如く、野呂川に重なり合つて、落ち込み、深谷の印象を痛切に味はゝせる、遙か下の森林で、ゴーッと音を立てゝゐる、無論野呂川である、早く尾根へ出やうと、グン〳〵清新な空氣を呑吐し、腐蝕土の感じのいゝ森林帶を、飛行機の昇騰のやうに上昇するも、中々盡きない、こつちは根氣が盡きたが、北へ向つて斜右に上る、雨が降ると池になりさうな凹地を突切り、猶も直上す、七時二十分頃漸やく尾根へ出ると、意外にも一筋の道が、仙丈へと續く、測量部一行の開拓ならん、三峰川方面が見える。

間もなく峰頂に出る、全部花崗岩で、偃松と白花石楠花が蓋ふて眺矚大に開け、三峰方面は空木、木曾駒、乘鞍、硫黄、笠、穂高、槍、仙丈迄一望に收め、野呂川方面は、駒は仙丈の大塊で、遮斷されて見えぬが、朝與から砂拂に至る駒ヶ岳山脈、近くは小太郎岳、白峯山、赤石山脈が、よく見える、今迄天日も通らぬ森林帶から、急に濶達になつたので、頗る氣に入つた、北岳から野呂川に入る、尾根から源を發する澤を、善二郎はシラネ澤と明言した、高頭氏の地圖には、間の岳と農鳥山の間に、シラネ澤？が、疑問に書かれてある。

こゝを出ると、下りになる道は、ついてるのだらうが、草に埋沒して、殆んど分らない、二三峰の

上下をやる、何れも二三百尺と上下はないのである、或一峰に登りつくと、懐かしくも三角櫓が組み立てゝあつた、二千五百餘米突の荒倉岳は、これだらうと、柱を削つて鉛筆で記す、森林で眺矚を妨げたが、小太郎岳がよく見えた、荒倉岳は樹林草莽の裡にあつて、頗る振はず、前の無名の一高點の高山的風貌を有するに比すべくもない、仙丈岳を見るに、其偉大なる肩幅は、益々廣く、尾根は連綿として絶えない、中々長い惡路を下つてゆく、時々標木第何號と記してあるのが、散見する、常に頭上は翁欝たる繁茂で、薄暗い蚋の襲撃もあれば、半身を沒する、叢中を行くこともある、又一峰を越す際に、偃松を嚙切つた新らしい切口がある、熊が通つたのであるといふ、又二三段を上ると、急に平旦で、一面に青草を敷いた、誰でも寢そべりたいやうな暖かな廣場に出る、加ふるにグミが鈴成に熟つてゐる、眺望もよい、景品附の休憩場だ、無論どつかと尻を下した、東方が明いて三峰川の重疊した山が見える、九時である。

グミを徵發して、頰張りながら、登ると間もなく愈々アルプス獨特の尾根らしい、執拗にして猛烈な密雲が、モク〳〵集まつたやうな偃松帶に出た、仙丈岳は、全容を曝し、白峯山脈赤石山脈の豪壯な景色が、展開する、扨こゝで路が失せた、何處に踏入れたらよいか、當惑する、後で考へれば、この儘前進するか、少なくとも左折して、三峰方面を廻ればよかつたが、右折して野呂、大仙丈澤方面に一町も迂回した、無理して來たから、上も下も一面の偃松、しかも斷崖に懸垂した奴だから、今迄遭遇したことがないほどの偉大のもので、下手な松樹ぐらゐあると思ふが、それが「吹き流し」の樣に、空に浮遊してゐる、その中に二人は挾まつてしまつて、身動きも出來ぬ「オイ戻らうか」と言ふと、折角來たのだから、も少し探して見ると、善二郎は大蛇が悶えるやうな格好で、忽ち消えてなくなる、下を見ると、千古斧を入れざる森林で、大仙丈澤が、頂上近く迄及んで、瀨音が喧ましい「オイ行けるか」と頭上を見ると、善二郎は重い荷を引つかけて、困つてゐるらしい、「行けなくつても行

くさ」と小氣味のいゝ返事がくる、「よしやッつけろ」と直上する、登山の初歩者でも、偃松帶に入りはしない、しかもこんな深い、大きい、急斜な偃松帶に飽く迄、一直線に登る元氣が嬉しい。

さあ是から事だ、兩手で頭上の幹にしがみつき、ピーンと反動をつけて跳躍する、うまく行くと其儘一間程登れるが、股部や腹の間に、ニョッキと無數の枝が邪魔すると、幾度もやりなほす、もう面倒臭くなつて、大道を濶歩するやうに、兩手兩股を滅茶に動かす、大分登つたと見ると、六尺と進んでゐない、徒らに天に唾する類だ、强襲法は不成功だから、正攻法に變へる、吊り下がる、跳ね飛ばさる、胴締や、絞首されることもある、潛る、突かる、押さる、ピンと撲られる、手は赤筋が數條、夏洋服はビリ〳〵裂かれ、股引が驚いて、白く顏を出す、あまり馬鹿らしいので、苦しいより苦笑する、善二郎は遙か頭上を、熊のやうにモク〳〵やつてゐるが、姿が見えない、自分は疲れ切つて、枝を寢臺にして、仰向けに横はる、赤い曲りくねつた枝が、自分と並行に何千本と、槍襖を作つてゐる、前年ゲーロ岩の附近で、類藏が、偃松の中へ入つて寢たことを思ひ出した、「旦那出たゝあ」と善二郎の聲が上の方から洩れてくる、扨は尾根に出られたかと、狩屋の五郎時致が、兄を討つた仁田の名乘を聞いた時のやうに、草を靡ぐが如く、猛然と苛り立つて、漸やく尾根に出た、切開きがある、是から仙丈迄は、難所はないので、ホッと一息、金剛杖をトンと突いて、仁王立になつた、十時。

これからは全然樹木はなく、只崔嵬たる岩石と、偃松の綴在するのみ、概ね三峰川側を傳ふが、或は危巖をわたり、或は偃松に半身を埋め、又は西側の草地を行く、上りは烈しからず、數町にして仙丈の南肩下に近づくと、こゝに數百丈の嶮崖がある、巨石を突き落すと轟々一瀉千里、三峰川に潰裂して、飛下する壯觀、物凄しとも物凄し、仙丈の南肩（大仙丈と稱するものか）の、半腹邊から右折、大仙丈澤の上方へと横過する、急峻なれば、ズリ落ちる憂あり、最も注意して二三町、或は偃松に縋り、或は巨石に移り、足場を確固にして、蟹行す、早く頂きのスカイラインに出たいと思ひ、一轉し

て直上する、漸やく近づけば巨岩累々として、自然の障壁をなして、風を除ける凹地あり、偃松もあれば、宿泊することができる、初めてスカイラインに出る、北アルプス、南アルプスを一望に收めたので、雀躍する、この空線を傳ふて、仙丈絶頂に出やうとしたが、歩き惡い個所が見えたため、其下方を迂回する此時に、數町前面の絶頂に當つて、青空を背景として、鮮明に黑い人影があつた、併し呼べど叫べど應答がないので、可怪に思ひ、熟視すると、大きな細長い石であつたのは、つまらなかつた、又偃松に遮られて、却つて時間を潰したので、スカイラインに戻る、馬の脊越、劔の乃渡りといふ嶮所も多いが、日本全アルプスを回顧するので、見惚れて危く踏み外しさうになる、三峰川に落ちるとは言はないが、一二丈は、墜落しさうなので、ヒヤリとする。

例の大仙丈澤、近くの偉大なカールは、寫眞で拜見する通り、實に見事だ、三峰川方面の峭壁は、數千尺恐ろしい相を呈してゐる、かく仙丈を縱斷して、絶頂の三角點についたのは、十一時五十分であつた。

晴れも晴れたり、底氣味惡い程、澄み返へる暴風雨の前後の徵候ではあるまいか、記憶すべき八月十二日の正午、視界の達するところ、一として見えざるはない、飛行機に乘りたいと、血書する者がある、そんな馬鹿な眞似をしないで、こゝに來れば、より高いではないか、脚下天龍川の村落、及山河は模型のやうに、小さい、日本アルプス其他の名山は、皆柔かい霞を漂はせて、紫色にボーッとしてゐる、遠きは浮ぶが如くふわりと、近くは額を壓して嚴めしく、其絶大觀は、自分をして、禿筆を振ひ、一時間に亘る開觀圖を作るべく、餘儀なくせしめた、午後一時。

例に依て、名刺紙片を一つかみにして、檢査する、會員の方々が、大部分を占めて居られるので、愉快だ、善二郎は晝飯をやつて、風に當らぬ北側に、焚火をして、グウ〳〵寢てゐる、大分寒くなつた、雨を含むやうな冷い風が、颯々と吹く、「何だか變だなあ」と思ひながら、焚火に當つて、飯を食

べる、今日で、登山も終へた、地藏の鷹揚な、鳳凰の奇警な、北岳の威嚴ある、間の岳の沈重な、而して最後に仙丈の太つ腹に、たよつた自分は、愈々これから、土一升金一升の、雲霧ならぬ煤煙の世界へ、突き出されねばならぬかと、思ふと、一刻でも長く、山姫の懷にゐたいやうな、氣がする、一時十八分、おさらばと、一揖してトン〳〵下る、御岳三柱大神と刻つだ石柱が、無殘にも蹴倒されてあつたので、善二郎は歸りがけに、丁寧に石で圍んで建立し、殊勝にもポン〳〵と拍手を打つて額づいた。

馬の脊が直ぐ下に、悠長な姿を呈してゐる、依然と尾根を飽く迄傳ひ、北端の峰頂に出る、是から池の平に向つて、ヒタ下り、仙水峠及北澤は正面に見えて、鐵砲が二三ヶ所目立つ、駒ヶ岳は白く、高く、鋸山は赤くて低い、一寸道を失つて、又猛烈な偃松突擊を敢行する、こゝに至つては、佛の顏も二度三度、少々御機嫌斜めであつたが、前と違つて下りであるから、大に樂だつた、雷鳥が二三羽驚ろいて飛び出す、靑い偃松から出入したので、色彩の配合が、極めて美くしかつた、これで偃松も盡き、もう一向平凡な森林帶で、路はあるが、眺望はない、長居は無用と、耳がゞん〳〵鳴る程駈けるやうにして下りる、山鳥がだしぬけに、獰猛に羽を搏つて、飛び出す、長い長い下りも漸やく盡きて、四時十分前、急下すると、池の平に着く、左手に池がある、左に下りれば信州、右に降れば甲州の國境だ、全體今日は、朝から、今まで甲信國境を歩いてゐたのであつた。

野呂川北澤の小舍に泊まるので、右折して二尺程の立派な道を、草を分けて進む、池の平は分水嶺なので、溪流が初めて出てきたので痛飲する、間もなく北澤に出で、右岸に沿ひて二三町で、小舍に着いた、やつと重荷を卸した氣になる、善二郎は誠の重荷を下して飯支度、四時五分過だ、小舍は數十人泊まれる程廣大で、爐のあとが七八ヶ所ある、便所もあれば祭神もある、清水も樋を通して、川迄行かずに汲める、往年屈竟の若者百餘人が、勞働を終へて集合し、談笑した面影が見えるやうだ、

併し今は全く荒廢して、二坪程の此旅行中、唯一の完全に近い一室あるのみである、市中に出せば、數十圓も値する良材曳板が、惜氣もなく累積してあるから、薪に毫も不足はない、善二郎は珍らしくも、裏の山からジャガ芋を堀つてきたので、夕飯が鶴喜代君ではないが、待ち遠しい。

七時頃から、寢支度をしやうとすると、締め殺され相な悲鳴が戸外に聞える、スーッとピッタリ閉ぢた隙間から、寒い風が入つてきて、小田原提灯をバタ〳〵と動かす、火が消えかゝつて細くなる、何となく厭な夜だなあと、話し合ふ。

入口をハタと鎖す、森閑と靜まり返つた深山の孤屋は、物凄い、サーッと表の戸を、箒木で撫でる樣な音がする、氣が滅入さうだ、突如天空にビューと聲あり、ガタリと外の板は倒れた、表の瀨音は異樣に變つて、吼え初め、木の葉の擦れ合ふ音が、唸るやうだ、「暴風雨が來た」チョッと善二郎は舌を鳴らして、むづかしい顏をした、暫らくすると、天地晦冥暗澹になつて、戸にどし〳〵豪雨はぶつかつた、天井からはポタ〳〵漏れる、爐にはザーと雨水が堤を切つた樣に侵入して、焚火をチュウと消して終つた、小田原提灯も消えた、取あへず懷中電燈を照らして、板を數十枚運び、急造天井を作り、水を排除して、焚火をする、煙は濛々と滿ちて、目も開けられない、二人とも必死になつて働らく、其中に益々暴威を逞ましくしてきた、雨は降るといふより、瀑となつて落ちるのだ、風は吹くといふより、小舍を包んでさらつて行くのだ、野呂川は大砲を放つてるやうに、ドン〳〵鳴動してゐる、往々あることだが、水底に巨石を流し、其摩擦する音は凄まじいものだ、是が山上であつたらどうだらう、それでなくとも、昨夜の破小屋だつたらどうなつたらう、自分等の幸運を祝福しなければならなかつた、明日は晴れてくれるだらうと、勝手な理屈をつける、時々目を覺ます、少しは外も納まつたやうだが、又直ぐに盛り返へす、川の水は刻一刻に漲溢してくるだらうと心配する、ポタ〳〵と雫が垂れる、氣持が惡るいが、寒いので、毛布をとるのが臆劫になる、足先は焚火に突込むやうにして、

暖をとる、隙間からは戰慄に値する冷風が來るので、位置を色々に換へ、所謂まんじりともせず、不安の一夜を明かした。

六

八月十三日　北澤—黑川—北澤

サーッと谷川の音のやうに、羽目に夜來の雨が當る、ポツリ〳〵と急造天井から、雫が横顔に落ちる、ほんとの寢耳に水を喰つて、驚ろいて起き上る、「まだ止まないかなあ」と焚火に當りながら、嘆聲を洩す、通常の朝だつたらどうだ、もうキラリと日光が侵入して、萬物生々、自分達も希望の光りに滿ち、いそ〳〵と活動してゐるのだ、六時といふに、提灯をつけなければ、顔も分らぬ、室のものは凡て濕つてゐる、元氣な人間迄、濡り勝だ、雨も風も、時々疲れたやうに勢を休む、其間はシーンとして、只燻りながら薪の燃える音が哀れだ。

食料品を調べると、もう鑵詰類は食ひ盡した、梅干がない、米も殘り少ない、只辨當箱に、半分に足らぬ味噌が殘つてるばかりだ、朝の汁も儉約して止める、此風雨では迚も野呂川は渡れないが、野呂川と言はず、アルプスの嶮流は、急に增減するものだ、雨が一時間止むと、一寸位減る、兎に角止んだら行かう、しかし考へると、天候は出來過ぎる位、長く續いたから、降り出したら最後、二三日は止むまい、二三日續いたらお粥にしても足りない、周圍の事情は晴天を待つを許さない、せめて小降になつたら、斷然出かけやうと、自分は一歩も引かず主張した、善二郎も食糧を考量して、無謀ながら略贊成した、しかし野呂川を行くことは、絶對に不可能なことを頑張つた、「あの水を見るだ」と戸を開ける、見ると驚ろいた、北澤の水は物に狂つて、阿鼻叫喚、逆捲く怒濤のやうに躍り上り、矢を射るやうに、下流に殺倒する、毒々しき水色よ、川上から泥土に混じた生血を流したやうな、凄慘

の惡彩、ぞつとする「清きは水の姿なる哉」と詩人めいて納まつた一昨日が、懷かしかつた。

見詰めてゐると、引込まれるやうに、グラ〳〵とする、アレ〳〵岸上に水が這つてきた、水の精が自分を捕へにくるのではないか、愕然吾に返ると、空中を引つ掻き廻はしてゐる獰惡な烈風、猛雨の中で、地軸も裂けんばかりに、雷鳴が轟々憤つてゐる、もう先の元氣も何處へやら行つて、慌てゝ逃げ込み、小犬が主人に折檻されたやうに、小さくなつて、蹲るより外に仕方がなかつた。

八時頃になると、大活劇大騷動も、稍收まつた、雷鳴も鳴を潜め、小屋を震はす烈風も、屋根を打ち拔く白雨も、「もうよからう」と言ひ合はしたやうに、其鋭鋒を緩めた、非常に明るくなつて、雲斷れする氣配が見えたので、自分は歸路を考へた、一は野呂川を下る、二は信州側へ下りる、三は仙水峠から御室に出るのである、これを相談すると、一は全然話にならぬ、二は池の平を越えても、黑川が迚も渡れぬ、三は生路の上に今からは一日では、むづかし、且山巓は危險だ、結局滯留の外はない、しかし食料の問題は、到底便々と天候と根氣競べをするわけにゆかぬ、二は未だ目に觸れない所だから、萬一を期して決行することにした、善二郎は「迚も駄目ずらあ」と言ひながらも、自分の希望通りに、素直に承諾し、冒險下山準備にとりかゝつた、之をそんぢよそこらの客を客とも思はず、骨を惜んで理屈を言ふ、お豪い案内者に、特に此一言を呈したい、焚火を消した雨具を、物々しく緊と着け、雨中を突破した時は、二人とも興奮してゐた、自分は若しも逆歸する事もある用心にと、新らしい燐寸箱を、一つ濕らぬ樣、板敷の下に秘して置いた。

依然ザーと土砂降りだ、草を分けながら、池の平に向ふ、北澤を離れて、こゝに注ぐ一支流を過ぎる、堅固な橋は、既に水中に埋沒してゐたのを、危く渡ると、數町の間は、殆んど一尺ぐらゐの水深で、時としては膝迄來るので、何の事はない、川を徒涉してゐるやうなもので、初めから恐氣を震つた、殊に足は拐れるかと思ふ程、冷たい、ヂャブ〳〵やつてゐる中に、飾海老のやうに、露出した部

分は赤くなり、他人の足が運轉してゐるやうな無感覺で、情なくなつた、猛烈な流下で、之れに逆らつて行くのであるから、着實に足を入れないと、水にすくはれて、流されさうになる、やつと突破して池の平に來た、分水嶺なので、今度は反對に水に順つて下るのであるから、生れ變つたやうに樂だ、且通路には水は流れてゐない、此邊一帶の凹地は、水で厭な白濁の池になつてゐる。

これから一千米突以上も、黑川に向つて森林を下るのだ、もう殆んど全身ズブ濡れで、外套の頭から、だら〳〵胸へと流れてくる、往年は荷馬が通つた位だから、道はいゝ、例の電光形の峠道を、無言で足を早め、ドン〳〵下る、數町も下りると、急に恐ろしい斷崖があつて、仙丈岳の脊から流れて來た、黑川の上流が、其下を非常な騷音を立て、赤黑き濁水が狂奔してゐるのが、俯瞰される、耳邊を最大急行列車が過ぎる時のやうに、木魂に響いて、物凄い、幅も北澤の二倍以上もありさうなので、善二郎は「ウーン」立ち止つてしまつた、橋は小さいが七ッ八ッ完全に架つてあるので、助かる、一時間餘で、愈最前、上で見た溪流に下り切つて、廣い赤い河原に出た。

こゝは仙丈方面と、駒ヶ岳方面から落ち來る二川の落合の間にある、駄々ッ廣い河原だ、殊に駒ヶ岳方面から流下するのは、川としては驚くべき程、峻急であるから、隨つて獰惡を極め、巨木を流がし、巨巖を破碎し、水は巖に堰かれて、猛烈な噴水を、諸所につくり、阿修羅の如く暴れ廻つて、其狂暴なること、到底野呂川の比でない、之を横斷して、戸台に至らうとは、夢にも思へない、水涯は見る間にくづれて、赤烟を揚げ、川幅を增してくる、「小舍に居ればよかつた」と、孤影悄然、金剛杖に凭れて、濁流をぼんやり見てゐる、折しも白雨瀧の如くどつと閧を作つて降り出し、數間先は暫らく見えない、僥倖を期して、渡河點を探しに往つた善二郎も百計盡きて、荷も卸さず、河緣に突立つてゐる、ションボリした後姿を見ては、氣の毒で堪らなかつた、二人はものゝ十數分、物も言はず落膽して動かなかつた、自然は寄つてたかつて、自分達を窮迫して止まないのだ。

「北澤へ返るだねえ」「仕方がない、戻らう」の會話も悲壯で、瀨音に妨げられ、碌々聞き兼ねるくらゐだ、こゝを渡れば戸台だ、それから高遠だ、疊の上に寢られる、馬車もあれば瀧車もすぐだ、僅か五間に足らぬこゝが渡れぬばかりに、又雨を衝いて、高い長い峠を登つて、深い無人の北澤の、古巢に寒威と戰ひ、歸らねばならぬか、あゝ、怨めしきは自然の飜弄なる哉と、峠に歩を廻らした刹那の哀痛は、今回想するだに、悲慘のものだつた。

峠をテク〳〵力なく登る、能ふるだけ、重衣し、防雨に勉めたが、滲透すること一刻も止まず、最下衣迄、水が透つた、池の平に出てから、又例の臨時の川をザブ〳〵渡り、再び脚部の末梢神經を凍死せしめて、小舍に戻つたのは、正午少し前であつた、前に殘留して置いた燐寸は、果して役に立つた、小舍も燒けよとばかり、熾烈に焚火し、戰慄しながら、二人とも赤裸體になつて、天井四圍に滿艦飾をして、乾燥に全力を盡す、最も驚ろいたのは、合羽、洋服、冬シャツ、ジャケツ、網シャツ、胴卷、皮財布と、七重八重に堅固に防備したにも拘らず、中の紙幣がグッショリ濡れて、まるで水中に漂つてゐたやうであつた、白米は明日の晝迄を殘すばかり、副食物は味噌少量のみ、明日は槍が降つても歸るが、今日は滯留するより外は手段がないといふ、まだ僅少の「都の花」(紫蘇の粉末)があるので、食事には鬼の首のやうに大事にふりかける、六時頃如何した拍子か、吊した提灯が急に燃え出して、烏有に歸した、連日使つた懐中電燈も、亦疲弊して燈心のやうに、赤い細い線が見えるばかりだ、逆境に瀕して、ゐる際だから、非常に心細くなる、風雨は未だ屏息はしないが、大した事はなさゝうだ、暗中に慰安を與へてくれる光明にも、見放された自分の前途は、どうならうか、しかし大分馴れてきて、今更悶えても仕方がないと觀念して、コロリと横になつてしまつた。

七

八月十四日　北澤—廣河原—苅安—芦安

黎明の目が覺めた、敵地深く探る斥候のやうに、耳を澄ますと、やはり降つてる、しかし狂風の怒號も、なければ、銀箭のやうな暴雨もない、巨砲連發の北澤も、沈默した、只狂奔してゐるが、水量も減つたことがわかる。

朝飯には少量の辛味噌を、甘さうに嘗め合ふ、今晩は斷食しても、居られやうが、明日は空腹を抱へても、强行しなければならぬ、野呂、黑川が不可なれば、駒ヶ岳山脈を傳ふて、歸らうと決心する。

善二郎は、雨を犯して、川水を見てゐたが、嬉しさうに飛んで來て、水が減退した、架橋をしたら、渡れぬこともあるまい、勇を鼓して歸らうと報告する。迅速に結束は出來た、三日二夜の救主に、無言の感謝を捧げ、欣然と出發したのが、八時頃だ、折角乾かした洋服も、一町と行かぬ中に、濡鼠になる、絶えず右岸に沿ひて、進む、見下すと怒濤岸を嚙んで、わめいてゐる、數町行つた時、先導の善二郎は、踏み出した足をヒョイと戻して止まつた、自分も何だか其瞬間、物に襲はれるやうな氣がして無意識に棒立になる、何の氣なしに上を見ると、二三丈高い所から、松の巨木がスーと音もなく下りてくる、ハッと思ふと、通路の斷崖が、十數間バクリと眞赤な口を開いて、小徑もろとも凄い地辷りの音を殘して、ズル〳〵と谿谷に呑み込まれてしまふ、赭色の急流が、忽ち土色に變つて、泡を噴いてゐたが、沈沒した穡のやうに、其巨木の枝が首を出してゐた、も一歩早く蹈出すか、又は今一秒崩壞が遲くれたなれば、自分たちは、あの徑に足を運んだに違ひない、松の巨幹が、根こぎに落ちるくらゐだから、勿論土に包まれて生きながら、野呂川に葬られるのは當然のことだ、胸の鼓動は早鐘のやうに打つた、三日連續の豪雨に崩壞し易い難所が、此後何十箇所あるかもしれぬと、思ふと、寒

心の至りである、恐る々々、この崩れて彫られた綠を、木の根や草に身を支へて、高廻りをした、一二町毎に小規模ながら、無殘な崩壞があるので、或は水邊に下り、或は高廻りをして、越える、横斷の出來さうな時は剜ぐられた楕圓形の內部に、足場を作り、震ふ足を勵まして、危く渡る、早く對岸に移らうと、鵜の目鷹の目で、探すと韃靼たる瀑聲、幅は四五間に過ぎないが、容易に架橋を許さず、況んや徒涉をやだ、小舍から十町餘と來たが、巨巖が兩側から出で、折よく屈曲したる所とて、稍狹められた個所がある、占めたと近づくと、水面上は怒濤に抵抗して、飛沫を吐く黑いものがある、踴躍して至れば、流木巨巖に支へられ、自然の獨木橋を形成してゐる、是はお銚へ向きと、喜びながら足馴らしに、善二郎は先づ巨巖から巨木に移つた、自分も平氣を裝ふて續く、周圍二丈程の巨木だ、一歩進んでは止まつて、二度程搖り、動搖を檢し、所謂石橋を叩いて渡る主義をとる、樹幹の頭部は對岸に達せず、水中に沒してゐるので、全力を集注して、幅飛びを應用して、成功した。

「これで、へえ芦安に歸つたも同じだあ」とニコニコ笑ふ、自分も胸のつかへが下りたやうな氣がして、休憩す、昨日から手帳を出して、書くほどの餘裕がないので、大分忘れたが、アレ澤を越して、岩魚捕の小舍があつた、こゝから數町下つたところ、野呂川と、北澤との堂の水勢の猛烈さが減つてない、若し今渡つた自然の獨木橋が、なかつたら、この本流が渡れないで、益々川幅が廣くなるばかりである、又十町も行くと、アサヨ澤に出る、赤い巨岩が磊々と轉がつて、瀧のやうに流れてゐる、此邊で對岸の高い山の峭壁から、數條の落ち水が、瀧のやうに數段に分れて、サラサラと奇麗なものだ、恰で第一科の日本畫にあるやうで、晴れても此白絲があれば、一千尺以上の巨瀑となるであらう、雨も殆んど止んだので、雨具を脫ぐ、又數町のミヨシ澤邊では、久し振りで赫々たる日がかつとさしたので、堪らなく嬉しい、廣河原澤も越す、こゝ迄に崩壞と難所もあつたので、森林に入り谷底に下ることもあつたが、概して立派な道がついてゐる。或る破れ小舍には、風呂迄あつた、良材が豐富だ

から、作れるのだ、淺い所をヂャブ〳〵やつて、第二日目の野宿場に出た、桑滄の變といはふか、豹變といはふか、餘りの慘狀に自分の視覺を疑つたのであつた。

青い水は濁水に、靜流は暴流に、廣い河原は水漫々、鐵砲下の寢所は、水こそ乾いたが、海嘯の後のやうだ、先に徒渉した點は不可能だから、數百尺森林を登つて、難所を裏から過ごす、この途中で岩茸を、多量に取つた、嘗て渡つた橋は、ブツツリ中央から切斷されて、西側に其殘骸を僅か餘してゐた、ゴーロ、アカヌケ澤を過ぎ、シレイ澤の間で、例のグミをとり、カヌケ澤の入口で、堪能する程食ふ、カヌケ澤から野呂川を離れて森林に入るのだ、鮎差迄、數里下るのを歸りがけのお土產と樂んだ、がそれどころでない、這々の體で川から一刻も早く逃れてしまつた、猛烈に空腹になつた、立石ゴーロを通つて、赤澤で正午頃、こゝで辨當を使つたが、ギャッと產湯を使つて、二十餘年、こんなうまい冷飯を食つたことがなかつた、深澤からセエバへ來て、杖立からドシ〳〵飛んだ、もう三日前の好霽に立ち返つて、白雲も銀のやうに光つて暑い、カリャスで、白峯三山を見た時は、北岳と間の岳の長い尾根で、苦しんだことが思ひ浮んだ、今日は芦安泊りといふので、ゆるりと歩く、所々で寢轉んで、流汗を拭ひ、暑さを避けた、ヤセオネを下りたところの御勅使川の假橋は、無論流失したので、架橋して渡たり、芦安に着いたのは四時頃であつた。

湯の主人や居合す村の人々が、遭難を慰問してくれる、明日歸らなければ、搜索を出さうと思つてゐた、よう何事もなくと、共に喜こんでくれた。

御室の天幕の一行も、全部十二日の晩に、芦安に命からがら逃げ歸つて、今日も泊つてゐた、カーキ色の人夫頭と、又顏を合はし、話し合ふ、聞けば測量主任と、カーキ色と、暗夜御勅使川を徒渉する時、二人共激流に捲き込まれ、流されたが、危く助かつた、と例の快辯で話された時には、氣の毒であつた、今晚も到着の晚の樣な、いゝ星月夜で、あんなシケを起したとは、どうしても思はれなか

つた、主人に聞くと、會員大槻禎郎氏は、自分が御室を出て、白峯へ行つた後に、駒ヶ岳山脈を縱斷して來られたさうだ、同じ近所に住んでゐて、期せずして同じ天外に、同時に登つたのに、數時間の差で、遇へなかつたのも面白い。

八

久し振りで疊の上で、暖かい布團にくるまつたので、寢坊した、慌てゝ起きると、測量部の連中は、がや〳〵言つて、又御室へ引き返すところだ、主任と山の話を交換す、職務となると、登山も辛からう、主任は數人の人夫を連れて、湯宿を辭す、其後から縣廳のお役人が、一人一面の底豆で、重病人のやうに、杖を賴りにそろり〳〵這ふやうに跟隨する、又其後を日給七十五錢では、氣の毒な程、元氣なカーキ色が、擁護してゆく、自分が登山者を見て、惻憾の情に堪へなかつたのは、この斃れて後止むの勇敢なる、お役人のみであつた。

八時頃、親切な善二郎は、賴みもしないのに、龍王迄送つてくれることになつた、御勅使川の河原を通る時、一回架橋した、釜無川に着いたが、二三の柴橋は全く流失して、二三町上を迂回し、二回の渡船で對岸に移つた、時間一ぱいに芦安を出たら、瀛車に乘り遲れるところであつた、龍王驛で待ち合はしてゐた時、仙丈の偃松で、自分のズタ〳〵に破れた洋服が、衆目の中心になつた、二三人の若者が、自分に聞えがしに「富士山に登るのだらう」と言つた、金剛杖さへ持つてゐると富士詣でと思ふ輩が、甲州人にあるのかと思ふと厭になる、「富士山なんて、何でもないよ」と自分にあてつけたには愈困つたものだ、善二郎は別れ惜しさうに、歸つて行く、好漢健在なれと、自分は彼に幸あれかしと念つた。

要するに此旅行の特長を摘記すると。

アルプスの山と谷とを併せ歩くこと。
短日に名山大岳數座を極められること。
日本アルプスの殆んど全部を望見せらるゝこと。
代表的カール、オベリスク狀巨巖を有すること。
小舍あり、當分テントを必要とせざること。
などであらう。

十三日の暴風雨には、東京が洪水、滊船が陸に乘上げたり、東海道が不通になつたさうだ、深山幽谷にゐながら、無事であつたことは、偏に山靈の加護と、感謝せざるを得ない、高頭氏の白峯山脈臆測圖は、この方面に於て、權威ある案内者となつたから、必ず珍重携帶すべきことを、最後に記して置く。

甲信武國境縱斷

小佐野迢々

甲斐の北國境上、即ち甲斐武藏信濃の三國界に連立する山岳に、登山した人が、殆んどなく、到底連嶺を縱斷するは不可能と多くの人が思ひ、山岳に趣味を有する者でさへ、さう思ひつゝ居つたのである、山麓の三富村でも、さう信じて居て、自分等が登山の途に就く際になつてさへ、尙縱斷の覺束なきを云爲した者があつた。

一部の信者が登山する國師嶽や、武州秩父の三峰神社へ參詣する者の越ゆる雁坂峠と、屢々人の登山する八ヶ嶽と、金峯山以外、他の山岳には登山し得ぬものと思ふのか、是迄北の國境上に聳ゆる連山を踏破した者はなかつた、我が山梨山岳會は、此北國境の連嶺を縱走し得るや否やを試むべく、且世に廣く登山し得る事を知らせんと、會員糸賀、佐々木、田中と自分の四名で、此縱斷をなす事となつた。

七月二十九日午前六時五分、甲府發の滊車で、日下部驛に下車した、同驛に來て居る笘の田中氏が見えない、三名は暫く待つたが、詮方なく同驛を去つて、北に歩みを進めた、小田驛の四辻を北して、笛吹川に沿ふて行くのである、音立てゝ流るゝ此川の源流及び源流に近き山岳を踏破すると思へば、其流聲さへ快く覺えられた、八幡橋（假橋）を渡り、田畑の中の細道を通り、松林の中を辿りて行けば、馆場温泉の所に出でゝ、少し行くと岩手村となる。

同村で重き登山用の食糧や、副食物抔を入れたパックを、荷馬車に托して、三名とも身輕になつた、諏訪村に入ると、隼區の西に立つ山の側面が、浸蝕作用で崩壞し、樹木が少なく、石灰や礫岩が露出して居る、此山に二つの洞穴が有つて、一は韮崎の穴觀音に通じ、一は德高き行者が行を修した所だと云ふ傳說がある、隼區は地盤が岩石に掩はれて、井戸を堀る事が出來なく、地味に適せぬか檜葉、杉、栗などが育ち難いさうである、西保川に架した諏訪橋を渡れば、窪平區である、窪平は諏訪村で、最も殷賑の部落で、商店が多かつた、登山に要する補充品を買ひ求め、岩手村で托した荷物と共に、三富村川浦温泉へ屆ける事を、買物をした家に賴んで、窪平を出立した、矢張り同村である、唐土神社の拜殿で休憩した、脚下を笛吹川流れ、對岸の松里村に胡桃や栗などが、河岸に林立して居る、過ぎて行く路傍に姫甘草、河原撫子、松虫草などが咲いて居る、丘陵に、山に、路傍に見ゆる岩石は、秩父古生層の石英閃綠岩であつた、笛吹川に架したる一の橋の、少し下なる河岸の樹林の中に休憩し

た、川風涼しく快よかつた、檜、杉、白だもなどが、此樹林に多かつた、路傍に崩壞した石英閃綠岩の砂が、鐵分を含有して居るのか、酸化せられて赤土となるのが、現實に認められた。

午後一時四十分三富村湯の平なる川浦溫泉山縣館に着した、登山服を浴衣に更へて、笛吹川の河岸なる浴場に汗を流した、浴後附近なる笛吹川の、一の釜の稱ある瀑布を見に行つた、河岸から少し下りて見ると、轟々と喚びの聲を立てゝ、落下幾丈、廣き玉簾は長く岩壁の間に懸つて居る、流水は烟れる如く、白く泡立ちて、壯麗壯絕、雄大のものであつた、瀧の落下する岩壁や、近き河岸の岩石に、數條の層の有るのが見えた、瀧の落下する所の岩石を、熟視すると、以前はもつと前の方に瀧が落ちて居つたのであるらしいが、絕えぬ流水の浸蝕作用によつて、岩石が削磨せられて、現在の所に落下するのであらうと思はれた、瀧の附近の樹木は、白だも、落葉松、杉、松などであつた、宿へかへると、同行の方が來られたと告げられて、少なからず、自分等は嬉しかつた、浴場から出でゝ來た田中氏は、遲れた事情を語られて、富士山の砂辷りで痛めたと云ふ股の關節へ、黑き藥を塗つて居た、案內人を曩きに、端書で山縣館へ依賴して置いたが、此日同村天科區の昨年迄久しく獵師をして居つたと云ふ廣瀨庄太郎(四十四歲)と、同村湯の平なる橋爪貞吉(二十七歲)の二名を賴む事とした、登山の準備を其夜の中にして睡りに就いた。

案內人を先導として、山縣館を出發したのは、七月三十日の午前四時三十分であつた、軈がて天科區のオンダシと云ふ處から、秩父街道に入つて、道は笛吹川の右岸に沿ふて行くのである、過ぎ行く左右の山に見ゆるは、水檜、落葉松、白だも等で、笛吹川に流れ入る溪流が、左右に三四あつた、圓川と云ふ部落が十九戶で、對岸の芹澤と云ふ部落が十四戶であつた、少し步めば權三郎岩と云つて、巨岩が對岸の河岸にあつて、松樹二本、其石の上に危く立つて居る、權三郎と云ふ笛の名手が、水魔に魅入られて、笛吹川に溺れて死したと云ふ傳說のある其岩である、其巨岩の附近の杜に、不動尊の祠

があつた、權三郎岩から笛吹川の名は、子酉川と變るのである、子の方角から酉の方位に流るゝから、此名有るとか、三富村であつた、子酉川の上流に七つ釜、五つ淵とか云ふ所があつて、近頃七つ釜附近で、熱湯の鑛泉を發見したと、案内人は云つた。

袴越と云ふた禮山の向つて左の尾根が、前面に見えて、乾德山が對岸の山の間から、向つて右の嶋起した所を、峙て、居る、下廣瀨に入らんとする子酉川の對岸の山の側面が、崩壞して、石英閃綠岩が多く露出して、栂、落葉松の枯木が、凄慘として立つて居た、下廣瀨から廣瀨全村を見ると、かなり展開した廣い開墾の耕地がある、上下廣瀨を合して、戸數が二十五戸で、民家を使用して居る小學校もあつた、廣瀨を初めて開墾して、今日に至らしめた雨宮某の碑が、上廣瀨にあつた、上廣瀨から爪先上りで、玆になると、もう高原地と云ふ感がする、軈て赤ッバ尾根となつた、此尾根の上より雁坂峠、破不山、雞冠の大岩の諸山が北々西に峙つのが見えた、是から登らんとする山である赤ッバ尾根より、少し下りになると、赤志と云ふ部落で、家が二軒あつた、服を着た人を見慣れないか、飼犬が頻りに吠えた、歩を進むれば、落葉松尾根である（箱根八里は馬でも越すが、わたしやいやだよ雁坂越は）斯く唄はるゝ雁坂峠は、幕府時代には、裏木戸と云つて、抜け道であつた、箱根の關所を通れぬ者が、是を越したのであるとか、多くは女連れである、戀に狂へる若き二人が、弱き足を忍んで、所謂八里八丁人家なしと云ふそれも厭はず、戀したかと思ふと、戀の何物をも忘れしむるを思はずには居られなかつた、落葉松尾根を行けば、峠の澤の溪谷に、路は入るのである、此溪谷に秋田縣の横谷と云ふ人が、木材を以て、遠くより水道を作つて、水車をかけて製材をして居るが、中々事業が大きいやうである、レールを敷いて運輸の便を計りなどして居る、製材した板は、自分の縣から連れて來て居る牛に負はせて、三富村湯の平迄運んで居る、工場の外に建築物が三四あつた、峠の澤より登りになつて井戸の澤と云ふ溪流に休憩した。

蟾がて登山の途に就けば、登路漸く急峻にして四十度の勾配であつた、白檜、黑檜、梅、大檜等の喬木帶の樹木の中を行くのである、岩千鳥、シモツケ草、伊吹トラノヲ、白山女郎花、車百合、小灌木のシモツケ抔が、美しく咲いて居る、暫くにして山頂に着したのは、午後零時十五分であつた、三等三角點で三峰圖幅の、二千八十二米突である、山頂の展望は、秩父の栃本を望み、武藏の仙元山塊、上州三山赤城榛名妙義を見、日光山塊、那須火山帶の連山遙かに遠く、甲相境上の大群山脈、相州の丹澤山彙、信越境上の北日本アルプスの北部の連峰を望み、立山は連嶺の上から其山頂を示して居た、近く古禮山、笠取山、雁峠東方に連らなり、富士は山麓の高原地迄見え、御坂毛無二山脈併走する背後に、栃代山が、尨大なる山容を見せて居る、白峯山脈は魚無河内岳邊りから南が見えた。雁坂峠の東は袴越と云つて、古禮山の西に延びた尾根で、また袴越の背後から東に延びる尾根を、前葡萄、奥葡萄と云つて、奥葡萄が三峰圖幅に在る水晶谷で、袴越から六町行けば、小屋あり、小屋より六町ゆけば水があるとの事だ、水晶の採掘は、今は休止して居る、雁坂峠の山麓、井戸の澤の邊りから、秩父古生層の岩石が見え出して、雁坂峠の山頂は粘板岩であつた、此峠より秩父へ行くに、新道が出來て、舊道より一里餘遠いが、道は新道の方が平であるとの事だ。

午後一時雁坂山頂を出立して、砂不山の尾根へかゝつた、通路は國境の切明きを行くのである、國境の切開きは、漸く通れるやうの狹いもので、生木を三尺位の所で切つて、兩國の區劃を明かにし、尙二十米突位の間に、矢張り生木を切つて、正しく四角に削つた標木があつて、甲何號、武何號と書いて矢張り境を明かにして居る、山頂であるから、從つて風荒く、雪損木の倒れ木が多い、殊に石楠花、コメツガ、アスナラウ抔の小樹木が密生した所は、切明き判然せず、しかも小樹林を分けつゝ行くのであるから、行路が困難である、砂不山の尾根も雪損木が多かつた、やがて山頂の三角點に達したのは、一時五十分である、二千三百十七米突である、山頂の展望は、信州の南東部に峙つ立科山彙

を見、飛信國境上の北日本アルプスの大連嶺を望み、槍ヶ嶽大天井岳などがそれと分る迄見える、白峯の北岳、小太郎山を望み、白峯山脈は、白河内岳より南が見え、鳳凰山、地藏嶽、藥師、觀音等の連山を見、赤石山系の惡澤岳、赤石嶽、聖ヶ岳が見えた、二十分休憩して、尾根を傳ひて行けば、雪損木、小樹木が多く、漸く下りて中の澤のたるに着いたのは、午後三時であつた、案内人はたると云はず（たほ）と云つた、中の澤のたるからなめら澤の頭（二千二百米突位）に登るのである、石楠花、ドウダンツヾシ、コメツガが密生して、一歩に樹木を分け亦一歩に樹木を分けつゝ進むのである、しかも雪損木が多く、跨ぎ、潜ぐり、飛越し、器械體操か輕業のやうな事をして行くのである、行路の如何に困難であつたかは、筆舌のよく盡す所ではない、然して四十五度の勾配である。

漸くなめら澤の頭に着したのは四時五分であつた、また下つて（たる）に下り（ぬく澤）の（二千百米突位）頭に登るのである、倒木多く、一町に五十本以上で、しかも、小樹木の密生である、辛うじて（ぬく澤）の頭に登り、下山すれば又小樹木の密生で、足を入るゝ所なき迄に茂つて居つた、歩むのではない、樹木の上を這ふやうな事をして、辛うじて二百米突許りを下り、鷄冠の大岩の東へ延びた尾根を横に行けば、樅の大樹の中に、コメツガが密生して居る、急峻の登路に疲れ、雪損木、小樹木に惱まされた自分等は、此路に、如何許りか困難を覺えたのであらう、小樹木押し分て行けば、流れの音が聞えた、自分等は疲勞を忘するゝ迄に喜ばれた、此日雁坂峠の山麓、井戸の澤より、これ迄水がなかつたのである、もう時刻も露營しなければならない頃であつた、されど案内人は確かに水があることを云はない、谷へ下りれば、あると云ふのみで、どの位下りるのか、それさへ明かでなかつた、斯る時、流れの音を聞いたのであるから、心より喜ばれたのである、焚火の材料を蒐集し夕飯を濟まして、横になつた、樹間を洩れくる月光が美しかつた、此溪流は鷄冠谷の澤で、溪流の少し上に、往昔採掘した金鑛の痕跡と云ふ所があつた、芦安村や白峯山附近で、頭と云ふ所を、三富村では（せり）と云

ふ、何々谷のせりとか、何々澤のせりと云つて居る、(せり)とはせりあがつた所と云ふ意味らしいのである、褶曲と云ふ文字が思ひ出された。

鷄冠谷の露營地を出發したのは、七月三十一日午前六時廿分であつた、登路は四十五度の急勾配で、倒木多く、小樹木の密林を分けつゝ行くのである、漸く山頂に着した、金峯山圖幅の二千百十二米突がそれである、山頂に巨大の岩石があつた、鷄冠の大岩なる名は、是より來つたのであらう、稍下りてやがて倒木多き五十度の急勾配を、登攀するのである、辛うじて山頂に着した、金峯山圖幅の二千四百六十八米突の鷄冠山である、山頂に岩桔梗が愛らしく咲いて居た、山上の展望は、木曾の御嶽山塊、飛信境上の槍、常念、二山脈、近く駒ヶ嶽、朝與岳が眸中に入るのであつた、矢張り國境の切開きを尾根傳ひに行くのである、山頂又は山頂に近き處であるから、風雪多き爲めか、雪損木が夥しい、三富村や案内人の三國と呼ぶ甲武信嶽を、踏破すべく、鷄冠山頂を出立したのは、九時廿分である。稍下りて尾根の弛みに出でゝまた登るのである、小樹木の密林に丈高き石楠花に屢々惱まされ、五十度の急勾配を登攀すれば、軈がて甲武信嶽の山頂である、案外に山頂が狹少で、貧弱なる山容であつた、山頂に秩父古生層の岩石と、深造岩と紛亂して居た、甲武信嶽は、其名の如く甲武信の三國界に跨がつて居る、三角點は勿論なかつた、鷄冠山より餘程低いと思はれた、甲武信嶽の山容は、尨大なるものと云ひ、東京の高臺から見ゆると云ふが、恐らく眞の甲武信嶽が見ゆるのでないと信ずる、鷄冠山を以て甲武信嶽と思ふのであるまいかと、自分は考へられる、さなくば甲武信嶽と、尾根を一つ距てゝ、武信國境上に峙つ尨大の山容で、山の右肩左肩が高い山岳がある、金峯山圖幅の、三角點のある二千四百八十三米突のそれである、甲武信嶽の狹少なる山容には、呆るゝ外はなかつた、同山を下山したのは、午前十時四十分であつた。

これよりの國界は信濃である渴を覺えたが、水筒の水が乏しい、コケ桃の實を喰ひて、其酸味に渴

を醫した、下山の路は一方崩壞して、樹木なく、石と砂のみで、所謂ガレであつた、一方は倒木夥しく、此上に小樹木が密生し、一二間先は分らぬ迄に茂つて居る、斯る難路で、道は更に捗取らない、下りが終りとなると、急峻の登路で、四十五度の勾配で、しかも流水の爲め、岩石が露出して、歩むに困難であつた、漸く山頂に登つた、金峯山圖幅の二千三百七十九米のそれであつた、案内人は山名を知らなかつた、路下りとなつて、金峯山圖幅の二千二百七十一米突とある所迄來た、もう水筒が一滴の水もない、渴に堪えられなかつた、殊に晝飯の時でさへ殆んど水を飲まなかつたのである、然して是迄來る行路が、困難であつた爲め、午後二時を既に過ぎて居る日中に、國師嶽に達するのは不可能である、行く先に水がなく、谷に下りるには餘程下らねばならないのである、金峯山圖幅を見て、信濃の梓川の源流に流れ入る溪流の有る所へ、下る事にした。

約二三町尾根を傳ひて歩み、信濃の國境を西北に下りたのである、急下りの坂路で、倒木が多かつた、やがて溪流の音が聞えた、直に馳せ下つて、したゝかに咽を潤した、下つた所は信濃國南佐久郡梓川村大字落葉松久保であつた。

馳せ下つた時に、小屋が見えたが、木挽小屋であつた、昨年七月下旬から、製材を初めたと、小屋に書いてあつたが、久しき以前より、製材を休止して居つたのか、小屋も荒れて、壁も半以上落ち、屋根にも大きな穴があつた、勿論人は居なかつた、邊りにあつた板を、小屋の中へ敷いて、急作りの板敷を作つた、落葉松久保に下つたのは、午後三時三十分であつた、此日の行路は約二里であつた、九時間以上を費して、斯く短距離しか歩めなかつたのである、如何に行路が險惡なりしか、推察し得やうと思ふ、小屋の壁の落ちた處から、月光は清くさし入つた、板の上へ着眞蓙を敷きて寢たのであるから、體が痛くて落付いて眠れなかつた。

落葉松久保を出立したのは、八月一日の午前五時卅分であつた、國境の切開きに出づべく、下つた

所を登るのである、暫くして國境の切開きに出でた、矢張倒木が多い、四十五度五十度の急勾配を登る時もあつた、國師嶽へは、長き尾根を傳ふて行くのである、つがや、大檜などの、樹木の中を行くのである、倒木はあるけれど、小樹木の密生がないから、道は捗取れた、石塔尾根の登攀は、五十度の急峻であつた、セリ葉鹽釜や、紫紫葉鹽釜が白き花を着けて居る、石塔尾根の頂に着したのは、午前十時三十分で、少し早かつたが、晝飯を濟まして、石塔尾根を出發した、國師嶽よりの尾根へ出でた、矢張り五十度の勾配であつた、登路が隨分困難であつた、山頂だと思ふとさうでなかつた、斯る事を幾回となく繰返して、三角點に登つたのは午後零時四十分である。

三角點は石で作られた、一等三角點であつた、古い三角點は木で作られた、大いなるものであるが、傍に倒されてあつた、三角點のある所より、稍高い所が東々南に見えた、尾根傳ひに行くと、巨岩が夥しくあつた、山頂の岩石は黑雲母花崗岩である、高山植物は、僅にガンコウラン、苔桃、岩鏡のみであつた、岩石の間に偃松が蟠まつて居る、山頂の展望は幾分雲があつたが、周圍に同じ位の連立せる山岳がある爲めか、案外わるかつた、西々北に立科山彙を見、近く朝日岳、鐵山、金峰山を望み、茅ヶ嶽、御嶽山、及び附近の群山、釜無川、七里岩等が見えた、背後より見る國師嶽は、尨大なる山容であつた、山岳二年三號にある荻野氏の國師嶽より、金峰山迄の縱斷の時、奥千丈嶽を通過したと記されて居るが、奥千丈嶽は、國師嶽の東々南に峙つて、金峰山圖幅の二千四百九米突四の山で、國師嶽に登るにも、同山より金峰山迄の縱斷をなすにも、通過する山でない事を茲に記しておく。

軈がて、下山の途に就いた、下山の際再び三角點の方に歸り、三角點の少し手前で、下りるのを間違へて、偃松のある所より下山した、少し行くと溪流があつた、水筒に滿した、暫く行くと、正しき下山路に道は合した大嶽山神社の奥の院は、風化水化の作用で、浸蝕されて、露出して居る、花崗岩の岩石が、疊々と重なり合つた所に祀られてあつた、道は此背後で、矢張り花崗岩の露出して、重なり

合ふ所を下るのである、登攀なればかなり難路であると思はれた、花崗岩の露出した所が終つて、道は平易になつた、折々西澤の溪流の流聲が聞こゆる、鬼五葉の散つた葉で、屢々危く辷らんとした、下山して西澤の溪流に沿ひつゝ、京の澤の小屋に着いたのは午後四時であつた、矢張り板の上に寢るのである、體が痛くて、餘り眠られなかつた。

京の澤の小屋を出でたのは、八月二日午前七時である、奥千丈嶽より、國師嶽への尾根より、奥千丈嶽に偏して、東々北に走向する一支脈が、蘆毛山脈で其蘆毛峠を越ゆるのである、四十五度の急峻であつた、一時間許りで、山頂に近き所に登つた、こゝより下りになる、茲が牛首と云つて、所謂牛首越えである、牛首へ登る途中で、西澤御料地の山の突出端に、巨岩が二つあるのを見た、それが大机小机と名付けられて居る、舊曆四月七日に、三富村の大字芹澤の村民の總べてが、參拜して、祭典を行ひ、然して毎年抽籤で、三人を選び、選ばれた三人が、千尾の川魚を生きた儘、社前を流るゝ西澤の溪流に放つのだと、庄太郎は云つた、昔から今に至る迄やつて居るとの事である、千尾の川魚殊に生きたのを集めるは、骨折であらうなどゝ思はれた。

蘆毛峠に一丈餘の石楠花が多くあつた、熊笹のある所を半里餘りも下つたが、朝露に脚部が濡れた、一の丸を經て、塚本山の殖林を見、大嶽山の神社所在地に着した、十時四十分であつた、同社に休憩し、案内人二名と別れて、三富村を出立したのは十二時頃であつた。

國師嶽より甲武信嶽に續く、長き尾根より殆んど直角に、走向する一支脈が、東澤御料地の山岳で、奥千丈嶽より國師嶽に續く尾根より、直角に走向する一支脈が、西澤御料地の山岳である。

西澤御料地より流出する溪流が西澤で、東澤より流出する溪流が、東澤で、二溪流が相又と呼ぶ所で、合流して、子酉川となり、甲武信嶽より以東の北、國境上の連山より出づる溪流を集めて、流がるゝクド澤が子酉川に合して、櫂三郎岩より、笛吹川となるのである、北國境連山の溪流が、合する少し

下流迄、山脈と同走向に子酉川は流るゝが、是より下流は、横谷を流るゝのである、笛吹川の東西河岸の岩石は、層を同じうし、沿岸の山脈は左右とも、秩父古生層の石英閃綠岩である、斷層作用で、陷沒した弱點を、流水の浸蝕で、現在の流域を作つたのであらう、此横谷は、三富村の終り迄である、出立の折りは、金峰山迄、縱斷する豫定であつたが、行路險惡の爲め、豫定の日時以外を要したるを以て、國師嶽より下山したのである、國師嶽より金峰山迄の縱斷は、大嶽山の信徒などによつて、屢々試みられる處で、行路は平易である、此縱斷は、敢へて自分等が試みる必要もなく、國師嶽迄で、今回の旅行の目的は達せられたのである、一の橋から東の道を執つて、笛吹川に沿ひて、松里村七里村を經て、鹽山驛から氣車で、甲府へ歸着した。

雙六谷探檢記

中野善太郎

一

奥飛驛は上寶村の北隅に雙六と云ふ里がある、材木石の傳說、乙姫の口碑、盤の石の話等幾多の美しいローマンスが背景とせられて、クラシカルな感じをそゝる名である。

源を雙六、蓮華、北俣、笠、拔戸の諸岳に發する水流は十里無人の境を走つて茲に至り溶々として西北に流れ、見座に至つて高原川と合し、神通川の上流をなして居る雙六川これである、此雙六川の上流に向つて古來獵夫樵人の徒ならで、一歩も踏み込んだものもない、日本北アルプス中の暗黑場所

として傳へられて居る、此神秘な蓋を開いて見たら、どんな珍事實が潜んで居るだらうかとは、好奇心に驅らるゝ人情とし探ぐつて見たい、殊に水源を綴れる諸岳は、北アルプスの脊梁をなして居て、飛驒山脈研究上の要所と聞えて居るからには、若しも吾等の微力が、此暗黑の扉を開き、其一端をも解し、自己の修養ともなし、世人にも語り得たなら、天の與へた三旬の恩惠に酬ゆる所以でもあり、吾等の當に務むべき道ではなからうかと云ふ考へが、我が上實敎育會の聲となつた。偶々小島烏水氏の同樣の企てあるを聞いて、之と同行を乞ひ、種々の有益な指導を仰ぐことを得たのと、村當局及び澤田穗束氏が、多大の應援を賜つたのを感謝するのである。

二、廣河原まで（大正三年八月二日）

午前七時見座の橋場と云ふのを合圖に、準備が整へられた、然るに烏水氏の豫定が變更したので、二日の午後三時に延引の通知があつた、吾等の肉は遂に一日間の猶豫ならぬまでに躍つて居る、中洞君、大霜君と共に、一日早く金木戸から山道五里を溯つて、廣河原で本隊の一行を待つことゝした、午前七時兩君と共に、一日分の食料を携へて長倉を出發した、天よ願くば暫し風餐雨虐の怒りを鎭めて、吾等の素志を遂げしめよ、實に吾等の恐るゝものは、天候のあやぶまれるのであつた。

軟かい朝風に顏を洗はれながら、熾んな朝暾が黃金色の幕を、ゆる〳〵と卸して來るのを見るのも心地よげに、いつしか見座へ着いた、食料品の二三を補ふて、暫く休憩の後出發した、今年は近年稀に鮎の溯河が多いなど話して居られた森本君は、何時の間にか向ふ岸で釣竿を垂れて居る、中山の橋を渡つて、河に沿ふと、一筋の小徑は上流に向つて吾等を導ひて居る。

水に洗はれたり、土砂に埋められた凸凹の烈しい峽路で、時々荷物の來るのに出逢ふては、除けるのに困らせられた、それでも流石に雙六の境である、山の態、水の姿は既に超俗の趣があつて慕はし

い。

九時此處の學校に立ち寄つて結城君、岩城君を誘ひ出した、これで先發隊の一行は五人になつた、盛夏の日光を強く頭上に浴びせられて、汗は上衣を透して流れる、それでも暑さの嚴しいだけ、樹蔭の涼味を味ふとの出來るのはうれしい、學校から半里で金木戸の製板所に着いた、一人の職人に案内せられて、樋の上を五六町が程歩きながら、叮嚀に敎へて呉れた、即ち木谷に沿ふて本道は五里、板小屋山と云ふ近道をして三里半だと云へば、僅か五里の間に一里半少くとも濟むとのことに、ツイ其近道を辿ることゝした、易きに就くは人情で此處で、一里半の勞を惜んだのが、抑も失敗の始めで、一行は言ふべからざる困難を極めたのである、此板小屋山は、笠ヶ岳山脈が西北に延て、中山に終つて居る、其支脈が雙六谷に向つて、直北の方向を取つて、突き出て居るのが板小屋山である。

これがために、本谷は其山裾を極端な弓なりに流れて居るため、正道を辿ると近道を登るとは、裾に弧と弦の關係になつて居るから、地圖の上では近い筈である、然るに麓の取りつきから並ならぬ傾斜を保つので、歩行の苦しさは一歩毎に增して來る。

紺青の空は、いつしか北方に打ち續く連嶺の頂から、中腹に亘つて、うすい代赭色の靄がかゝつて來た、茫々として居て、雲ともならず雨ともならず日光は唯どんよりとして居て、蒸し熱い、二時間の奮鬪で最早エネルギーも續かなくなつた、油蟬のジージーと鳴く音に伴ふて、吾等の汗腺は絞り出されてしまつたのであらうか、出なくなつて來た、燒けつく迄に咽喉は乾くし、蒸される間は耐え得るけれども、炒られる樣になつてはたまらない、一歩にして一喘、そは吾等の現在を言ひ表はす言葉としては、餘りに意味が弱いのである、平素健脚を誇る山男等が、今は一片の石塊、一筋の細根に躓づいてさへ、よろめく迄に疲勞を覺える、熱さと渴と急坂とに抵抗して全力を盡しながら、登る途中、フト足下を見ると夏草の茂れるに隱されて細流が見出された、水、々、水さへあれば、これまでの憂き

目に逢はなかつたのだ、一行は轉ろげ込むが如くに、吾先にと水にありついて、氷の如く冷たい小流に口をつけたまゝ、ゴブ〳〵〳〵と暫らくは動きもしないで、胃壁も張り切るばかりに味はつた、吾等のためには元氣を恢復さするための靈水であつた。

服裝を整へたり、汗を拭ふたり、暫らくにして再び突進の準備をした、吾等がベストを盡して有らゆる辛苦を嘗めさせられた行程は、仰ぎ見る大山に對して、未だ三分の一にも及ばぬ感がある、努力、努力、吾等は旅程の第一日から、探檢らしい探檢にとりついたと思へば、極端な肉體の苦痛に伴ふて、言ふべからざる努力の興味を感ずるのである。

此邊は薄が全山隈なくめぐつて、風の吹く毎に、白い裏を飜しながら、波形をゆらめかして行く、其中を苅り開いて、帶の幅ばかり通ひ得られる樣にしてある、金剛杖の代りに手當次第細枝を拂つて、手頃なものを作つて身をまかせて居る、急に尾根から道は谷底に向つて方向が變つて來た、谷底の道は老樹の蔭で、翠蓋の下を朽葉の踏み心地よいので、知らぬ間に道もはかどるが、只吾等の進みつゝあるのはまがひ路ではあるまいかとの心配が起つて來た、上らんか下らんか、進むべき道は一筋であるが、吾等の目ざす廣河原とは、正反對の方向を取つて行かねばならぬ、一層金木戸まで引き返さうか、進まうか、扨も迷宮に入り込んでしまつた、衆議容易にまとまらなかつたが、遂に中洞君の主張で續行することになつた、成敗は運に任せん、道の限りを足の許すまで。

午後二時半晝食の包を解いた、傍らの樹の根には八月二日午後二時半中洞外四名此處にて晝食と記された名刷が貼られた、本隊の目標のつもりである。

途は漸く不安になる、彌々吾等は迷宮の一夜を決心せずには居られなくなつた、三たび途は轉じて再び急坂に差しかゝつた、樅、栂、櫟、山毛欅等の巨木が行手に當つて根こぎにされ中折れになり、交互錯綜して横はつて居る狀よ、數百年來水源を養ひ山體を賑はして、氷雪を凌いで立つたあはれ老

大木よ、平和の終りを全うし得ないで、時ならぬ風雨に襲はれて無殘の横死を遂げたかの如くあはれである。

日は漸く西に傾いて漠々たる中に眞紅に光つて居る、見下す遠近の山々は、インヂゴーの薄靄に包まれて、おぼろげな輪廓をゆらめかして居るばかりである、道開けの人夫に出逢つて委しい説明を聞いた、漸く疑念も晴れて、廣河原に通ずることも分明になつた、頂上へ着いたのは五時半、地衣類の繁茂は、山骨を蔽ふて一足毎にシーツの上をまたぐ樣な心地がする、濶葉林はつきて、いつしか身は樅栂の針葉林中に運ばれた、見渡す限りの一帶、皆これ樅栂一樹の交りもない、其高さも太さも、度られた樣なのが衝き挿された樣に密生して居て、枝を錯へ幹を交はし、峯々をめぐり、谷々をうねり、終に偃松の境をかすめて居る、偉大なる哉、自然の神の手に成れる庭園よ、枝ぶりの改められたる者なければ、配致の意をこらされたるものも無い、唯々雜然亂立せる栂と樅の連續單調の權威とも言ふべきか、嚴肅にして平靜なる自然は、遂に吾等を恍惚として、太古の森林中にあるかの如く魅せられてしまつた、さても塵世多感の人の子が心のゆくまで、彷徨ひ歩いたらどんなにか樂しからうに。

時間は刻々とせまつて來て、煙草くゆらす暇さへない、直に下り道に向つた、三十六町坂とは此坂の里程から名づけられたのであらうか、四十町も五十町もあるかの樣に思はれた、急坂を一息に下つてしまつて、川に沿ふた草原を三町ばかりで、我等の庵と頼まれた小屋に着いた、直ちに食事の用意に着手して、樽をこなすもの、米を磨ぐもの、火を炊くもの、晝の間にと急がれて、暫らくにして夕飯も炊き上げられる、小屋の大さは九尺に二間ばかりのもので、中央に長方形の爐が設けられてあるから、五人の宿としては廣くはない、十時頃まで雜談をつゞけて探檢一夜の夢を結んだ。

三、滯在（八月三日）

近所の栃の葉隱れから駒鳥の鳴聲が勇ましく聞える、廣河原の地名から、吾等の想像した廣河原は、眼のあたり打ち見るに至つて、案外の思をさせられた、河原とも云ふべき處は、一面に草茫々として居る、四顧するも僅か數町の間にさへ見通せない、向ふ側の山の根を洗つた緩かに流れてゐる河の外、特徴とも言ふべきものは更に見られぬ、其流れを隔てゝ、向ふの針葉樹の山は、頂きから麓まで滿山隙間もなく茂り合つて、處々には岩角が表はれ、其間に白く曝れた枯木が衝き出て居る、四面は思ひ切つて大きい大木原である、中洞君、大霜君と共に望を囑して居た香魚を漁りに出かけた、七八町が間も流れに沿ふて試みたが、遂に一尾の獲物がなかつたのは、どうした理由だらうか、小屋へ引返して來ると、誰にも釣れなかつたので、兩君とも力拔けして僕の歸りを待ち構へて居た、其僕にも何物もなかつたので共に苦笑した。

取らぬ狸の皮算用で、副食物を携へなかつた報ひは、朝飯に鹽を副へねばならぬことゝなつた、生温い風が吹いて、附近の峯に霧の幕が幾重とも切り下げられる、と見るまに一滴二滴とボツリ〳〵落ちかけた、栃の葉を打つ音が、トタン張の下にでもある樣に聞える、忽ちにして大雷雨となつた、全く平地のそれに比して物凄い、縮み上つてながめて居ると、其雨足が時に速く、時に緩く、或は強く、弱く、高く、低く、極めて複雜な律をなして、山蔭を押し出る樣である。

晴れ間を見かけて、釣に行くもの、スケッチをする者、思ひ〳〵に出て歩く、雨上りの太陽は、斷雲の隙からのぞいては、不快な熱さを覺えさせる、七時になつて、今朝見座を出發した烏水氏一行は漸く着かれた、是は一行の先着で、最後の人夫の二人は、九時半に漸く到着した、ドシャ降りと險路を夜陰のために、散々苦しめられて、命からがらの姿はみじめなものであつた、吾等は、一日分の食料を盡して、飢餓の決心して居た所へ、兵糧も運ばれる、一行も先づ揃つたので、蘇生の思ひがした、焚火は小屋の内外相應じて、炎々たる焔がゆらいで居る、九人の濡衣は不規律に渡された枝の上から

濛々たる湯氣を立てゝ乾く、行程の難儀が話題になつて、話は倍々佳境に入る、やがて十二時床に入る。

三、黑淵探檢（八月四日）

昨日からの天氣模樣は今朝になつても變らない、一行の中には、身動きもならぬまでに疲れ切つた者さへあるのに、今日の行程を思ふと、昨日にも勝りて難關ばかりを行くのである、うづ暗い墨を流した樣な雲が、後から〳〵と北に流れて行く、霽れる望もないのに、此難關に向ふのは無謀だと云ふので、逗留することゝした、朝食後、しばらくで雨を浸して、黑淵の探檢に出かけた、黑淵と云ふのは、怪物の棲家として、中に居る魑魅魍魎は、意に任せて風雨を起すと言はれ、旱魃の際、村人の雨乞ひに來る靈淵として、知られて居る場所だけに探檢に努力を要する、笠ヶ岳のピークから流れ込む小河原谷を、十町ばかり溯るのである、道と云へば形は無いが、溪を攀づるより他に行き樣がない、累々たる岩石の中を走る溪流は、激しては緩く流れ、急下しては靜かに澄む、全く瀧と淵との連鎖に外ならぬ、其極端まで鋭き傾斜に從つて、四ッ這ひながら攀ぢ、或る時は數人が前面の岩角まで、一人を押し上げ、それに由つて帶が下げられ、漸く手さぐりに登るので、時には水垢滑らかな谷底を踏んで、瀧壺にすべり込むなど珍らしくもない、吾等の滿心の努力によりて、得らるゝものは、仙境の自然、振り仰ぐ水成岩の連壁と、見下す淸澄とである、黑淵から一町計り下流に當つて、獵夫の岩屋がある、此小屋に宿る毎に、洪水の害に遭ふた獵夫は、黑淵の「ヌシ」が、焚火の煙を厭ふての報復だらうと云ふので、今は泊る者もないと案内者の高田は語る、高田は愛すべき快活の男だ、五十の坂は一つ越して居ても、壯者を凌ぐ元氣もの、恬淡寡欲、妻も子もない獨身もので、一日中汗水流して酒に交へてしまふ樣な、暢氣な質だ、此男更に感慨に堪へぬ樣な面持ちで、少し下つて向ふ側を指し

ながら、一冬狩して宿つた際に、雪崩に襲はれて住所が塡められたから、槍をつき差したら、光りが見えたので、一人の同僚と共に、雪を掘り退け、一命を拾つたと物語る、更に語を次で、寒中に越中の有峯こちら山づたいに熊や氈鹿を狩る有樣を語る、勇壯極りなく、我等の血を湧かすばかりである、生れて幾春秋、無人の幽谷に分け入り、鳥獸を友として風雨を凌ぎ、霜雪を破り、時に推寄する雪崩にもまれ、時に荒れ狂ふ泥流と戰ひ、辛うじて一命を全ふした樣なことは抑も幾度か、百勝の勇士が千軍萬馬の功名話とも、ゆかしい好箇山男のタイプである。

十町の道に二時間半を費して、黑淵へ着いたのは、午前十時、霧間もなしに雨は降りしきる、淵は花崗岩の絶壁で包まれて、高さ十間計りなる直立せる樋から落ち來る水量を受けて、南北十五間、東西約二十間の楕圓形をなして居る、底の深さ中心點に淺く白砂の底を透して、香魚の游泳も數へるまでに見えるが、緣に至つて漸く深く、遂に東北隅に至つて黑く靑く、底ありと思へないまでに、恐ろしく岩壁をえぐつて居る、淵も樋も壁も、總て一連の花崗岩から成つて居て、附近の鬱蒼たる樹木は、淵を蔽ふて晝尙ほ薄暗く見ゆる、暫らくにして歸途に向つた、累岩の間を上下しながら、正午に小屋に着いた、交る〳〵河邊に漁る、少しは釣れる、中には一尺以上のものもある、夕食の汁の實にした、小島氏からは、種々登山の經驗や研究事項やらを承はる、果は雜談が交はされ、各自の思ひ切つた失敗談に花が咲く、南の空が靑く見え出したので安心して床に就いた。

四、下拔戸の岩小屋まで（八月五日）

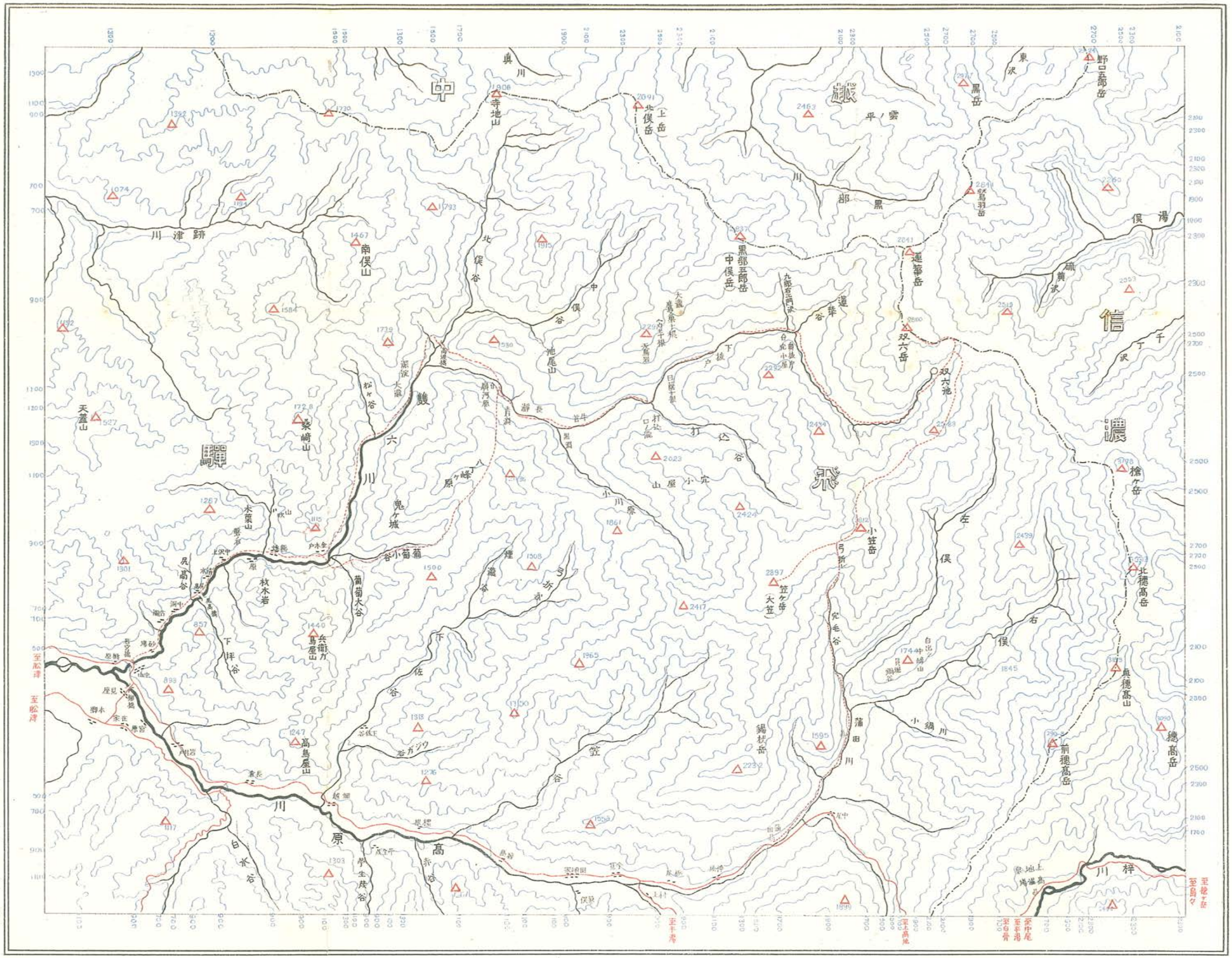
六時二十分前と云ふのに準備が出來た、何たるみじめなことだらう、灰色の空は重苦しく頭上を壓しつける樣に座つて居る、糧食の都合で、是非出發せねばならぬ、駒鳥の啼聲ばかり、吾等の氣を添へる樣に聞える、袖振り交すも多少の緣とやら、まして吾等のために三日三晩の家庭とせられたなつ

かしみは、無心の山小屋にも、さらばの一語を殘さずには居られない、五人の人夫は、各々八九貫目宛を脊負ふて一行八名の後に續く、小河原谷の出會ひで、道形は無くなつて終つた、人夫中の壯者大倉を先導に、密叢せる藪原に一歩を踏み込んだ、道の開けざるのも、山の險しきも、岩角を這ふのも、覺悟の上ながら、咫尺を辨せざる大雨は、絶え間もなく降り續いては、たまらない、足下の土が腐つた樣に軟くなつて來るから、一足を進めるのにも、滿身に注意を拂つて、徐々と行かなければ、一滑りが境で、再び引返し得ない谷底に陷り行くのだ、手當り次第に細根にすがり、朽木に依り、這ふが如くに山腹を縫ふて、時には五六尺も飛下り、時には手を引き合つて下がつて行く、吾等の目的は、河原さへ辿れば、水源は極め得るのだが、其河原は到る所、幾百尺の岩壁が聳立して居て、是非なく岩壁の頂まで登つて降らなければならない、漫々たる靑ざろ淵の中に、突き出て居る絶壁程じれつたい思ひをさするものはない、河原なれば、一二間の間が宙を飛ぶことも出來ない、已むを得ず大迂廻もさせられる、中には十町以上のものもある、併も此廣茫たる全山を通じて、唯一箇所以外に通ひ得る場所はないのだ、境は愈々迫まつて來る、白い河原と碧い淵と、黑い山の配合が、特殊の形態を作つて幽谷の趣を展開する、十一時打込谷の合する少しく下で晝食をした、地名は「ジウネ」とか言ふ、打込谷は源を拔戸岳に發して「高橋日蔭」と下拔戸を東西に分つて居る、水量は殆ど本谷に匹敵するより見れば、深さの境も計り難い、雨も霽間になつて附近の有樣も望まれる、大鷲が悠々と空に浮んで居る、岩壁と溪流の程は益々奇峽に入る、見上げても見上げても、大きな岩壁の恐ろしいものばかりだ、奇嚴怪石そは俗界の物である、偉大なる自然の彫刻には何等の技巧をも加へられて居ない、屹然として水を扼し、左右相對峙して、藍色の面を廣げ、凸凹の襞を見せながら、雲表に刺し出でゝ居る莊嚴の態と、秀靈の氣とを秘して、うそぶく形は、之を詩とすべく之を畫とすべく餘りに人間の微力なるを感ずるばかりである、岩壁を仰ぎながら道は次第に奥深くなつて行く、水は物凄きまでに澄み

飛騨國
雙六谷流域概念圖

大正三年十月製作

日本山岳會々員　高野鷹藏製作



一分万拾

(主ナル通路 / 小島氏一行ノ通路)

水準線ハ毎ニ百米突ニ記セリ

切つて此峽谷を驅る、河幅は狹くなつて來たが、水量は夥しい、轟々たる反響を立てゝ、岩の根に踊る、雪融けの水を運んで骨を刺すまでに冷かである、時々淺處を選んでは徒渉する、腰より乳までを沒して戰慄する、始めの間は怖しくもあつたが、慣るゝに從つて、追々平氣になるが、併し探檢中の最難事だ、岩境は千變萬化して、水の續く限りに亘る關門の形をなせるもの、蓋狀をなすもの、左右顧眄岩又巖、稜々たる巖面の罅隙には、石南や鵝の木の珍種が懸つて居て、滿花の景色を懷はせる、鈎り竿を垂れつゝ行くから、時に驚くばかりのものが獲られる、腹を開けては人夫に托する、道は益々險しくなつてくるにつれて、足はつかれる、押し上げたり、引き上げられたり、鈎り下げられたり、凡らゆる手段をつくして、漸く河原に下ると、再び大盤石に遮ぎられる、淺處を選んで向ふ側へ徒渉する、河底の岩が都合よく突き出て居て、自由に飛び移れることもあるが、足を踏み過つては、水垢のために流れの中にすべり込む、碧流の兩側を扼して突立つた磐石の頭から頭へ飛び越へて、ホッと一息をつく、流れの態に應じて、種々の越し方法が案じ出される、飴を流す樣に靜く見ゆるのが、意外な急瀨で、一行中の壯漢を先立てゝ、杖を便りに手を引き合ひながら渡る、少し下方に當つて、一人づゝ河中に立つて流されたものを引き上げるために構へて居る、實際の役には立たぬけれども、徒渉者の度胸をためしてうれしい、溪流幾變轉、此方の河原を這ひ、彼方の岩壁を過ぎり、斯くして一日中に三十餘回の瀨越しと、巖越へに、高山特有のドシャ降りさへ加へられ、形容すべからざる慘憺たる探檢を續けて行く、時に七時、漸くにして下拔戸の岩屋に著いた。

岩屋は向つて河の右側から、流れに面して、猪の口の如く、六七疊敷ばかりの長方形を開いて居る。日は次第に暮れかゝつて、暮色は四面を罩めてくる、長雨の最後の名殘を集めたかの樣な一團の大きな雲は、團まりつゝ、離れつゝ、山蔭に隱れてしまふ、五體を引き締る樣な双六風に身を震ふ、案内者の高田は、此岩屋で雪崩の爲に、獵夫の死んだ話をする、其死人は此邊に枕をして居ただらうか

など思ふと、よい心地はしない、更に八里に救ひを求めるために、七日を要して歸つて見ると、番犬は傍に置た氈鹿一匹と、主人たる獵夫の左腕一本を喰つて居たとか言ふ、岩窟の一宿にふさはしい話かも知れないが、むごたらしいこと夥しい、人夫の油紙にあるものゝ外に、何一つ乾いた物は無い、御叮嚀な濡れ方、懷中藥も、紙幣も、スケッチ帖も、差當りの苦痛はないが、虎の子の樣にして居た煙草が、腐つた樣に潰つて、容易に乾かされないのは、補充し得ないので何よりもなさけなかつた。

自分々々の塲所を選んでは、樅の葉の煙に燻りながら、曲る花崗岩の大盤石に枕して、まどろむ身の幽谷の巖を枕とは、今ぞと思へば恐ろしくも可笑しくもあつた、夜は益々冴えて、寒さは次第に增して來る。

分時當番は絶えず薪を補ふ、河原を馳けめぐる夢におどかされて身を顫はせる。

五、双六岳を經て弓折まで（八月六日）

昨日までの重々しい空は、名殘なく打ち霽れた、今朝の天氣都合に由つては、旅程の變更まで覺悟せられたのに、願ふてもなき空模樣に心が躍る、之から奥の地理に就ては、案内者さへ知らぬと云ふのに至つては、益々興味が多い、五時四十分窟屋を出る、直ちに例の河渡りである、一晩中かゝつて乾かして忽ち濡れてしまつた、草山、大森林、岩壁、河渡りと今日で四日續く。

それでも豪壯なる岩壁と、嚢々たる溪流の奇峽にたゞよはする秘語を味ふ餘裕はある、快晴の中に眺める景色と、雲霧漠々たる中に望むとは異つた感じを覺えさせる、水の激する態と、植物帶の白樺、岳蓮等、繁茂せるので、目的地の近づいたのを想はせる、關門の如くとざして赤い面を光らしながら一二町が程で、溪は漸く開けて來る、巖らしい岩は、是れ以後見られなくなつた、忽ちにして東北の空に當つて、悠然たる山體を表はしたるは、本邦中侏羅層の最高點なる北俣岳につゞける圓岳（やまのだけ）中俣岳

又は黒部五郎岳土人は圓岳（まるたけ）と呼ぶのである、激流と岩壁の外には世界ありとも覺えなかつた吾等の神經は、岳名さながらなる温容玉の如き靈容に接して、革められてしまつた、蓮華双六の二岳は、緩かな線を引いて東方に續く。

道こそなけれ、歩みながら四方も望まれる、翠巒の山腰をめぐる間に、幾條の細線は、銀色に輝いて、コントラストの妙を談つて居る、望遠鏡のレンズを透して、手に取る如くに見える水は、段々と細る、一里ばかりにて溪流は蓮華谷（假に）と分れるあたりから、何の苦もなく過ぎられる、山は低し、天は漸く廣くなつて來た、十一時頃麓に着いて、晝食を濟す、生來最も美味な鹽を食べたのは此時だつた、岩角に腰を卸して憩ふ、一行は何時やら、三枝驥逸氏のブックに收められた。

傾斜は一段と弱くなつて來る、日光が直射して、山裾の連綿の上に落ちる、鮮かな色だ、其鮮かな綠の上を渡つて來る風は、何處からとなく、吾等の熱い肌を、心地よく撫でゝ行き過ぎる、名も知らぬ高山植物の身の丈にも餘れるが、山ザンショ岳樺の、地這と錯綜して麓一面を蔽ふて居るので、一度分け入ると、容易に拔出られない、多くの登山で行はれる如く、溪を這ひ上るのだ、谷と云ふより水の枯れた瀧である、双六、前笠、拔戸、笠、吾等の登るべき諸岳は、睫眉の間に迫つて居て、一攀に心は速るが、前に續ける障碍はじれつたしと思ふがまゝに、歩を移させない、麓から十町と測られた行程は、一里以上の延長なるのに驚く、二時間半を要して目的地の双六平に着した。

時に八月六日午後二時二十五分、吾等は人事をつくし、今や探檢の功成つた、飛信の境上に立ちて叫んだ、探檢隊萬歳の聲は、衷心の熱血を沸した、快哉の迸りであつた、直ちに双六岳に向ふ、高山植物の珍奇なるが五月野の如くに見える、キンポーゲにも似たるシナノキンバイが、雪融の水にさらはれつゝ、さびしげにほゝ笑んで居るのや、チングルマが唇の樣な小葉をならべて、露の玉を宿して居るのもいぢらしい、絶頂には三四十分で達し得る、皎潔崇高なる宇宙の大キヂマーラーは開けた、

東方の一小峯を隔てゝ北アルプスの盟主槍ヶ岳は群山を壓して碧空に刺し出でゝ居る、天には一點の微雲さへ浮んで居ない、絶頂の午後をいぶかるまで澄み切つて居る、南方に延て前奥北穗高の三嶺は、殆ど直角的の傾斜を示して、蒲田川の上流を限り、硫黄岳に終つて居るクリムソンレーキの山體をめぐる硫黄の噴煙は、岩城君に山火事と見違えられた、北東に當つて常念山脈の分岐するあたり、稜々たる山骨を表はし、鋸齒の如く鋭い角度を刻んで、遠く南信の境に延びて、常念、大天上の突起を示して居る、吾等は北に連なる立山、後立山、黒嶽の三大山脈を足下に纏めて、一望唯大塊の皺を重ねたるが如く起伏する中に、ピークを指摘する黒嶽、赤岳、蓮華、烏帽子、白馬、赤牛等、岳名は直ちに各々特有の色と輪廓とを語つて居る、何れも八九千尺以上の標高を保つて、群中の霸を爭ふが如くに、交互連亘して遠く北越に向つてうねり行く。

靜寂なる天地、塵の世には何かあらん、煩悶、懊惱、人生、哲學、唯神の造りなせし沈靜の境に跪座して、更に深く内心を喚び起すのみである。

再び双六平に引き返した、吾等の憧がれて居た双六池は、周圍四町ばかり、紅白の植物に緣を取つて、泥の底の上に二三尺の水を有して居るのみ、吾等の描いて居た俤はないので、稍張合抜けの感じがした、薄緑色の毛氈を布きつめた樣な、廣野との釣合はとれない、池の水もて炊き上げた飯は、粥の如く軟かに、食ひ心地は惡い、彼是時計は四時を報ずる、笠が岳の尾根へとかゝる、双六、槍、笠の三嶽は、各々正三角形の頂點に置かれて、槍と双六を繫ぐ一線は、殆ど南北の方向を取つて居て、其中點とも思しき邊に左俣岳（假に）が位置する、左俣岳と笠岳をつなぐ尾根は、吾等の辿るべき道で、前笠、抜戸岳を貫いて、笠に至る約三里西方に向つて居る、忽ち周圍の自然は濃霧に呪はれて、溪谷に起る一握の靄は、俄かに群がり、忽ち消えて行く、朦々として起り、雲の上更に山を築き山、雲を生み衆峯風に集まつては羽の生えたる如くかすめて行く、斷雲の間に望む穗高と槍は、物凄きまでに澄

み切つた大空をバックとして鎮まり返る。

思ひ切つて茂れる偃松の間を漸くにくゞり拔けると、キバナノ石南は、踏心地よげに山嶺を綴る、さるにても誰か敷きけん無縫の綠氈を足にまかせて、醜き跡を印せんことの恐ろしくもうたてくもあるかな、日は西山に落ちて行く、斜陽は力なく投げかけられて、赭色の自然を現出する、吾等の體を限りに、七色の圓形を染めた思ひがけない御來光を拜した、一人に一つづゝの輪が懸る、十三の輪が並べられる筈であるが、自分のものより他は見えない、衆皆奇現象に驚く、遙か西方の海洋の中に浮べる鯨の如く横はる白山、南に偏して御嶽の緩かな圓錐の相貌と、更に近く乘鞍の雄々しいインジゴー色の鞍をなげかけて見える、豫定地迄は一里を殘して弓折に宿る、心は矢竹とはやるが、薪水の供給の都合と、足の疲勞とに餘儀なくせられた、日は蓮華の蔭に隱れた、雲の千化萬變は、脚下に繰り返さるゝ、飛ぶが如きあり、射るが如きあり、舞ふが如きあり、轉ろぶが如きあり、忽ち蔽ひ忽ちにして引き去る、アルプスの舞臺は、雲の幄に隱れては裝ひを整へ、遠來の客を呼ぶかの如く、槍が岳の一本槍は群山を叱咤して、岳神に命じ、凡らゆる技巧を弄して、吾等の氣を呑む口に似たり、擴げられては、引き去られ、引き去られては復顯はれ、赤光を浴びオレンヂ色を示し、インヂゴー色を表はしながら、消へつ顯はれつ斯くしてアルプスの連峯は暗色に呑まれ行く、莊嚴雄大崇高造化の一瞬に擬せられたる自然の大文章に對して、吾等の叫びは、何程の意味を有するものぞ、一語を發することが出來ない、唯默々として邪念もなく、野心なく、怨恨なく、偉大なる自然に同化されて恍惚たるばかりである。

晝の姿に魅せられた吾等は、再び月下の眺めを貪ぼるのである、偃松の枝は、うづ高く積まれて、新鮮な薫を放つて燃へる。

穗高の向ふは、夕立やあらん、けたゝましき電光は、絶えず上つて居る、漸くにして、槍の空が金

色を浴びつゝ、滿月の雄姿は表はれた、月下の岳は、晴れ切つた谷間に蔭を投げて居て、明暗が物凄いまでに劃せられて、靜座する、靜寂の二字は、今の消息を最も妙に表はす言葉だらう、天下何物をか靜寂と云ふ、何處にか靜寂の地を求むる、笠尾根の假松に身を托して、滿月下の日本アルプスを一眸に治める、之れぞ眞に天下の靜寂を語り得るものだらう、時も有らうに滿月、處もあらうに假松の間に、天候もあらうに微風だにない天下、何物か之に勝りて幸福があらうか。

天幕を張るのに都合が惡いので、野天の儘、雪融けの水で、煮た茶をすゝりながら話は續く、北斗七星はいつしか頭上に廻つた、持合せの外套、ゴザ、油紙に、ミイラの如くくるまつて、思ひ〳〵に焚火を便りに、松葉の床につく、寒さの烈しいのと、双六谷探檢中の魔夢に襲はれるので、熟眠し得ない、身體の上にまで露が結ぶ。

六、笠岳登り（八月七日）

四時に起き出て仕度を始める、東の空は早くも紅に光る、下界は如何にかあらん、吾等の宿は全く明け放れて、クリムソンレーキに朝暉は反射する、扨も劫初の昔より、永遠の未來に亘つて、無限の空間を超越して、朝に射出せらるゝ金箭を浴びながら、遠く近く澎湃たる太洋に身を委せ、島嶼の浮ぶが如く、彼方此方に點在せる朝の眺の雄々しきことよ、南方遙かに木曾駒の雄姿は、桔梗色のおぼろげなる輪廓より望めないが白山、御岳、乘鞍は紫のベールを排して雲表に羅列する、最終日と云ふので糧食の囊底を敲いて、今朝は美味しく食べた、小島氏からは、食料に就ても一方ならず援助を受けた。

五時四十分出發、拔戸岳に向つて尾根をつゞける、高山植物黑百合は、左俣方面に見出された、百合の形と思ひの外、花は桔梗に墨を塗りたるが如く、葉はリンドウに似て對生して居る、花で黑いの

は珍らしい、所々に熊の糞と踏み荒らされた草原がある、一連の尾根は、双六谷に向つて緩かに、蒲田川に面して險はしく、見るも恐ろしき泥流が、白雲群がる溪底幾千仞に打ち續く、過つて踏落す石塊は、始めは一つ、次に二つを誘ひ、五つとなり七つとなり、石石と相擊ち、衆石相應じて、轟然たる響と共に、谷底に向つて推して出る、一歩を誤まることが出來ない、上野君は大鷲を射損じた、これ上野君の供をした火器が發した最後の響で、また最初の音であつた、振り返つて靈峯槍を仰ぐと、錐形のピークは、稍々東方に倒れかゝつて居て、勢力も衰へ、穗高の三峯劍を並べたるが如く、相摩して立つのが最と神々しい、甲を伏せてカーマインを塗りつけた樣な野口五郎岳、藥鑵を伏せた樣に見ゆる黑岳も、今は名殘りの惜しまるゝが如くに跪いて居る、双六の英姿は、蓮華と並んで、薄靄の中に離別の情をつぶやくが如く、直下に俯瞰する双六の溪谷は、舊友に邂逅せるかの如く、懷かしい、黃楊羽は翻々と岳風に舞ふ、拔戸の麓で淸冽なる水を汲んで憩ふ。

前笠へ登るには、鋭い角度を攀ぢねばならぬ、一方蒲田の上流が飽まで、豪壯に男性的なるに比し、双六谷の悠々迫らざるは女性的なり、天下の難關を封じた境をも見えぬ前岳、拔戸に源を發する打込谷は小河原谷と並行的に本谷に向つて切れ込んで居て、笠岳方面よりの二大支流をなす、地理の關係は明瞭になる、北側より落つる黑右衛門澤は、蓮華谷と共に本谷を形成して、圓岳の支脈、池が尾の突端に於て、北俣川を併せて、幽遠の峽谷に落ちて行く不斷の鼕聲を、連巒の裾にたぎらせ、峯々谷々、森の中林の中、草木の露をも集めて、北の海に向つて逝くのである、夢よりも淡い富山灣は、能登半島を桔梗色に浮べて居る、拔戸の八合目を過ぎつて、間もなく蒲田よりの登山道に會す、一行は暫らく疲れを休めて、人夫には炊飯を命じ、直線的に續く尾根を、優秀なる笠の絕頂を仰ぎながら、丘瘤幾つかを越へて進む、最後の大隆起は目睫の間に迫つて居るが、稀薄なる呼吸の中にあつて、空腹に打ち勝てない、中洞君の炒粉を、雪水に丸めて漸く飢を凌ぎつゝ、絕巓に急ぐ、切り出された儘に

稜々たる斑岩は、扁平な斷片を丘稜起伏の全山に打ち廣げて、頂上に近く疊を重ねたるが如く、碁盤を合せたる如く、煎餅を積みたる如くに連なつて、其間一木一草なく、赤裸々を露はして居る、絶巓に達したるは一時、岳神は吾等が宇宙の絶勝を貪ぼるを忌むか、谷底に凝滯せる濃霧は、見る〳〵沸き上つて遠近の自然は漸く呑まれ行く、富士も、淺間も、富山灣も、蒲田も、双六谷も、暗雲に隱れて、渦卷の如き狂雲の絶え間に、一部の山體をうかゝふのみ、吾等は無限の怨を絶頂に殘して、力なく歸途についた、脚下に開かれた山懷の廣野は、明鏡の如き池を圍んで、赤黄紫彩色豐富な花圃は、吾等の足を許されない、三々五々に集まり終つたのは三時、直ちに穴毛の險路を下り始めた、後より續けるのに石塊を落さぬ樣に、注意しながら二三町の泥流を下りついて、途は谿に取られる、水の涸れた瀧の緣を這ひ、中々飛び、三つ四つ打ち續く、胸の動悸を制へつゝ高さ十數丈許りなる瀧の下に降る、直ちに見るも恐ろしき雪の大クレッバスが開いて居る、兩側より推し寄する雪崩の濤は幅二十間にも滿たぬ深谷を塡めて、厚さ數丈の溪流に穿たれたるトンネルは吾等の下る唯一の道である。

紅色に明けては、紅色に暮れる服は腐り、脚胖は裂け、杖は折れ、淪落の姿に赤光を浴びて、夕靄の中に消えて行く吾等の樣子は、哀れである、斷岩の上を渡る風と萬年雪の上を吹き颪す風は寒熱の兩者を吹交へて來る、此谷の依つて名づけられたる穴毛の岩は、頭上高く、火成岩の突出を通して、直徑二間ばかり、高さ二十間の窓を、天に貫く、仰いで居ると、岩燕の群が上下する、綿の如くに疲れた體を支へて、岩の上より石の上、石の上より岩の上へ飛ぶ毎に響く衝動は、頭まで打たるゝが如く心地惡い、左俣谷を越し、右俣谷を渡り、林道に着いた、暮色は全く吾等を罩めた。

疲勞の烈しき身にも、六夜目で薄團の上に寢るのを思ふと、雀躍がする、凱歌を奏して引き上げたのは、當に八時二十分であつた。

夕食後慰勞の宴は催されて、深更まで騷ぎ謠ふ。

七、解散（八月八日）

嬉しいことゝ悲しいことの、兩極端を集めた吾等の探檢は、終つた、一週間に滿たざる間、或は廣河原の小屋に、拔戸の岩窟に、肌寒き風に吹かれて、一夜を明かし、或は岩壁の横這ひに、又は溪流の徒渉に、助けつ助けられつ、雲際に聳ゆる奇峯を賞し、側を流るゝ碧峽を謠ひ、喜びを分つ雲上の樂園に、盡きぬ名殘を惜しみ、半熟飯を共に食ひしも、皆これ過去の頁に卷き込まれて、フイルムの如く腦中に寫るのみである、而して吾等の子弟の如く導いて下さつた小島氏は、三枝氏と共に、慕へる吾等を奥飛驒に殘し、都の空に歸らるゝかと思ふと、離別の情に耐へぬ、復何時の日にか、見ゆることが出來やう、林道の橋まで見送つて互に健在を祈りつ、早峠の一回り、木葉隱れに影は消えてしまふ、而して吾等もまた思ひ〳〵に回想すれば、吾等過去の六日間を、最も充實したる人生の如く感ずる、科學の天地、哲學の天地、藝術の天地、而して浩大なる自然の天地は、北アルプスの關門を扼して、雙六谷の仙寰に開けて居る。

唯吾等の腦中に刻まれたる悌をも、留め得られざる筆の力を恨み、不肖を悲しむのみである。

鑓ヶ岳大黑縱走記

吉澤庄作

人夫　佐々木市次郎（音澤村）

一、大正三年八月二十日出發……黑薙溫泉一泊

◎鑓ヶ岳大黑縱走記　吉澤

◎鑓ヶ岳大黒縦走記　吉澤

二、大正三年八月二十一日、鐘鈎温泉を經て舊祖母谷温泉一泊
三、同　二十二日、祖母谷川を溯り（五萬分地圖には夜澤とあり）硫黄澤の終點、一ッ岩附近露營
四、同　二十三日、鑓ヶ岳（五萬分地圖槍ヶ岳）頂上より背梁を南走して、大黒鑛山に出で一泊
五、同　二十四日、南越より祖母谷舊温泉場に出で、鐘鈎温泉を經て黒薙温泉に歸着一泊
六、同　二十五、歸宅

はしがき

七月の初めであつた、加藤理學士より、大黒から白馬岳の縦走に關して尋ねられた事があつた。此方面には自分はまだ、一度も足を入れた事が無かつたから、此方面に對して、多少の智識を有して居る音澤村の佐々木仁次郎に就て聞いて見た、兎も角行けるには行けるが、殆んど通れぬ處は、一箇處だけある。是れは大迂回を要するとの事であつた。

自分には一度は行つて見たいと思ふ念が、一層強くなつた。

一

八月の二十日、朝早く三日市から馬車で愛本まで行つて、直ちに音澤村の佐々木助七を尋ねた。相談の上で、長男の市次郎を伴ふ事とした、市次郎は、若い頃硫黄澤から鑓ヶ岳まで一度行つた事があるばかりで、それから南進した經驗が無いのである。小柄ではあるが後備軍人の壯漢で、殊に獵師として、又黒部の木呂流しとして鍛ひられて居るから、山地の跋渉には格別の技倆があるのであつた。彼の云ひ分が面白い。

『どんなに險しい山でも、一箇處は必ず人の登れる處はあるものです。食料と地圖さへあれば屹度行けます』

併し私には多少不安の念慮のある事は勿論の事であつたが、他に何等の拘束を受ける同伴者がある
ではなく、行ける處まで行つて見るまでの事、途中で方向を更へるなり、中止するなり、臨機の處置
を取る事は勝手であるから、さまでの心配もいらなかつた。只十三四日の豪雨以來、天候がはき〳〵
しないのは、何よりの氣係りであつた。其日黒薙温泉に着いて、主人佐々木孝次郎君の好意に依て、
食料其他蠟燭、マッチ、鍋、湯沸、急須、油紙、細引、草鞋等、及余の携へた採集用具、衣類、茶菓、
炒粉等を夫々荷造りした。

二

二十日午前八時。黒薙温泉出發。黒部の本流を溯る。此月の十三日より十四に亘る豪雨は、黒部の
谷では非常の暴威を逞うしたのであつた。崩壞、堆積、荒寥、至る處に其跡を殘して居る。
七谷の附近で鹿子木氏に逢つた。人夫は北條の良太郎と外一名で、此人夫等は市次郎を知つて居た。
白馬尻から白馬に出て、杓子、鑓より南に縱走して「天狗の小屋」に露營。翌日大黒鑛山に一泊、更
に黒部に出て小黒部川を溯つて、立山に出る積りだつたさうだが、先日來の洪雨の爲に、小黒部も大
分荒れて居る相であつから、立山行は中止したと云つて居た。昨夜は鐘鈎温泉泊、是れから泊驛に出
て、瀘車で歸るとの事であつた。
鑓から大黒までの山の樣子を聞いて見ると、容易では無ささうである。何でも此方面に行くには、
能く路を知つた經驗のある、倔强の人夫を要するとの事で、余等の前途に對しては大分氣遣はれてゐ
た。兎も角最近に於て此一行の通過を見たる事は、私等に取りては非常の心强さを感ぜしめたのであ
つた。
鐘鈎に至ると吊橋は落ちて居る。吊籠に乘せられて、辛くも越へる事が出來た。鐘鈎温泉場で晝食

を濟ました、ガラ谷、ウド谷などが甚だしく荒れて居る。櫟平から祖母谷に移ると、諸所に山拔けや林道の崩壞があつて、茲にも曩日の慘害を語つて居る。

祖母谷温泉場に着いて見ると、吊橋の爪にあつた姫子松の巨幹が、三四年見ない中に枯れはて丶居る。創設の當時から屢々見慣れて居た客舍は、尙舊觀を存してはゐるが、離々たる庭前の茅茨、前年の洪水に洗ひ去られた浴場の跡、荒寥の氣が此空谷に漲つて居る。

更に壞れかけた小屋の片隅や、取去られた戸障子、狼藉たる器物を見た時、私は其處に敗殘の寂しみを感ぜざるを得なかつた。而してつく〴〵往時を追想しては、堪へ難き一種の悲哀。例之ば舊戀の佳人をはる〴〵瀕死の病床に訪づれた時、枯槁骨立して舊時の温容また見るに由なきが如き感がした。

大黒の鑛山へ行く人達が三人許り先に着いて居た。長屋の椽先に火が燃やされて、鍋が掛けられてある。『河原の間に湧いて居る湯は入れる樣にしてあるから、疲れ直しに行つて來い』と云ふ。市次郎は夕食の準備をして居る間に、自分は湯に行つて見た。滾々として盡きない美しい湯は、取擴められた巨岩の間に導かれてあつた。底の砂の上に體を横たへ乍ら四邊の風光を眺めた。

嘗ては本舘の二階から見た前面の連山、姫子松や櫸や栂や其間に立雜れるブナ、楢などの濶葉樹は、今も鮮かに夕日に照り映えて居る。其間に徂徠するうすれ〴〵の白雪。自分に取りては誠に盡きせぬ思出であつた。

晩餐を濟ましてから明日の行程に對して種々と考へて見た。大黒方面を先にして北進すべきか。最初に祖母谷を溯りて鑓方面より南走すべきか。明日の天候が好晴ならば祖母谷川を溯る事と定めて萬事手筈を決めた。荷物の中幾分は此に殘す事とした。

三

二十二日、天候は申分が無い、六時出發した。前面の吊橋は昨年新に架け更へたのであるが、此附近の硫氣孔より吹き來る亞硫酸瓦斯の爲めに、著るしく錆てゐる。之を越へて林道に移る。

さなきだに打茂れる萩薄には露が置き餘つて、しどろにもつれかゝつて居る。其蔭で前身は取卷いては居るが、見るまに全身ずぶ濡れとなる。少し許り行くと、至る處に歩道の崩壞がある。其都度下方の河原に下りては、又に餘る薄や蓬の間を掻き分けて、舊道に辿り着く。歩道の終點からは一層の荒寥を極めて居る。懸崖の間を傳ひ雜木の間を過ぎて河原に下りやうとすると、下は激流の渦卷く碧潭に變つて居た。驚いて更に横に雜木の間を傳つて辛うじて河原に着いた。徒渉の地點を選んで左岸に着く。

幾度となく右左に水を渉つた、今度は急湍を避ける爲に右側の絶壁を攀ぢる。更に斜に急斜の地を横卷きにして又河原に出た。かくて巨岩の間を次第に上るのである。右側には大山拔けがあつて、泥と共に大きな岩が落ち重なつて居る。

是から又右側の崖地を登りて、長い間山地を横卷きにするのである、登り口には蕗の三四尺のがある。危き崖地、雜木の生ひ茂つた籔の裡を掻き分け掻き分け進む、例のサハグルミの森林に入る。打仆れた巨幹、其下の蕁草、ヤマソテツ、爬ひまつはる山葡萄を踏み分けて此叢中の一溪流を横つて、更に雜木林の下路を潛りつゝ漸くに廣河原に着いた。時に九時十分。

更に右に移り左に渉り、幾度となく腰に及ぶ水を徒渉して次第に進む。

十時十分、硫黄澤の分岐點（五萬分地圖一、一七八米の地點）に着いた。是までの間、諸處に温泉の浸出せる處があつた、富山圖幅によると、祖母谷より硫黄澤にかけて全部安山岩として示されて居

るが、安山岩は殆んど見當らない、至る處角閃花崗岩にして間々閃綠玢岩を見るのみである。

是より先は私に取りては處女旅行である。兩蜓は花崗岩の絶壁で、其間の水は中々に深い。左側の蜓を草や雜木に縋つて横卷に進む。更に河原に出た。巨岩の間を左右に渉ること凡そ九回にして廣河原に着いた。上流地方を見ると、赤く兀げた山が氣味惡く頭をあらはして居る。右より一溪流が落合つて居る。本流に比すると三分の一にも足りない。

地圖を按ずると硫黄澤（夜澤）の上流にて分れた二溪の内、左の一は「大拔け」の間より來るもので、短くて小さく。右の者は遠く鑓岳の附近より發するもので、長くて大きい。地圖に依るとどうしても右のは本流で、左のは一支流の如くに見えるのであつた。

今此實況によると全く反對である。これが爲めに少なからず迷つた、此「大拔け」より來る左の本流に就ては、其上流に於て地圖の誤れる事は後に至て明かとなつた。

此處で晝食を濟まして右の一支流を溯る。初めの程は傾斜は緩やかであつたが次第に急を加へて來る。急湍飛瀑巨岩の間にありて溪間の惡絶驚くの外は無い。右側は中脊山の山稜が急に迫つて、崩れかゝつた巨岩の堆積が、急斜面をなして行路を阻んで居る。それが一足毎に瓦落々々と崩れる。而して胸突く計りの急蜓が、行けども行けども盡きない。實際登攀は容易では無かつた。

次第に登り行くと、前面に當つて赤く兀げた奇骨稜々たるが頭をあらはして居る。兩側に堆積せる岩塊を見ると、花崗岩の外に安山岩がある。又石英岩をも見た。かくて進み進みて稍打開けた廣河原に出たのである。前の赤兀は前面左側に立はだかつて居る、硫氣の爲めに霧爛して裸出せる形相は、悽絶を極めて居る。此より上流摺鉢狀の全部は殆んど燒け山で、硫黄澤終點の光景には遠に驚かされた。

基盤をなせる岩骨の露出を見ると、鑓ヶ岳特有の玢岩もあれば、又花崗岩もあり、其間に石英脈が

連なつて、其罅隙には水晶の晶群を見る。中には紫水晶をも含んで居る。右側には硫化の爲めに成れる黑色岩の堆積がある。深造岩の角礫の稜々たる急斜面を踏登ると、一足毎に崩れかゝるのだ、前面には硫黃の堆積層があつて、昇華によりて結晶せるもの、塊狀のもの等が廣い面積を占めて居る。其上部は一帶鑓ヶ岳の裾で、稍平旦な草原をなして居る。露營地として右の小溪を辿つて、之れに向へばよかつた事は、後に分つたのであつた。

左側に屹立した例の赤石山を目蒐けて、左に小溪を登る。半頃に至つて初めて矮小なる草木を見た。ホツヽジ、岩鏡、米薄、根曲竹や、偃松が漸くあらはれた。

登り詰めると、硫黃澤の本流との分水脊梁であつた。其前面(東北面)脚下を眺めた時、直下の深谷、赤裸々として全く一物をも止めない、而して白い溪流が幽冥の境に微かな唸りを立てゝ居るのだ。

地圖によると「大拔」附近△二、二六一の地點に於て、其北側の清水谷とは一脊梁によりて境せられて居るが、自分の今見る處によれば、其間に中介山脈が無い。地圖の所謂清水谷の上流なる溪流、即ち白馬の南麓、杓子、鑓の西北方面の水を併せたるものが流れて、今自分の立てる前面の幽谷、即ち「大拔」の間を流れて、硫黃澤の本流を形成して居る事が明かに見えるのである。是れは此數年間に於て、侵蝕に因つて地圖に變更を成したとも思はれない。

身一たび硫黃澤を溯つて、二溪の分岐點を見たるものは、其北側の「大拔」附近から來るものは、今自分等の溯つた支流に比して、其河幅、深さ、水量共に極めて老成したる大峽谷にして、其水源の遠かるべきは容易に、首肯し得らるゝのである。

今此脊梁に立ちて眺むると、清水平は近く其北に相對して居る、白馬は吾人の所謂朝日岳(清水平の連峰で白馬岳の西隣高峰)に遮られて見えない。西南の方を見る時、近く猫又及不歸岳あり、遠く僧岳、瀧倉(毛勝)より劔、立山の雄峰は嶄然としてあたりを拂ふて居るのである。

時既に五時半、暮れぬ裡にとて露營地を物色した。暫し此脊梁を辿つたが、偃松は多いが、水は少しも見當らない。更に南西一帶の低地なる草原を尋ねて、此脊梁の南側を斜めに下り、一つ岩（此低地草原中孤獨の巨岩）の北方に於て、オホイタドリと偃松の間なる水邊を選み、露營地を卜したのであつた。約二、二五〇米、時に六時半。暮雲低く垂れて四邊の漸く蒼然たるを覺えた。大イタドリを切り敷いて地を均らし、偃松を切りて大油紙を張り廻はして、此に小屋を結んだ。

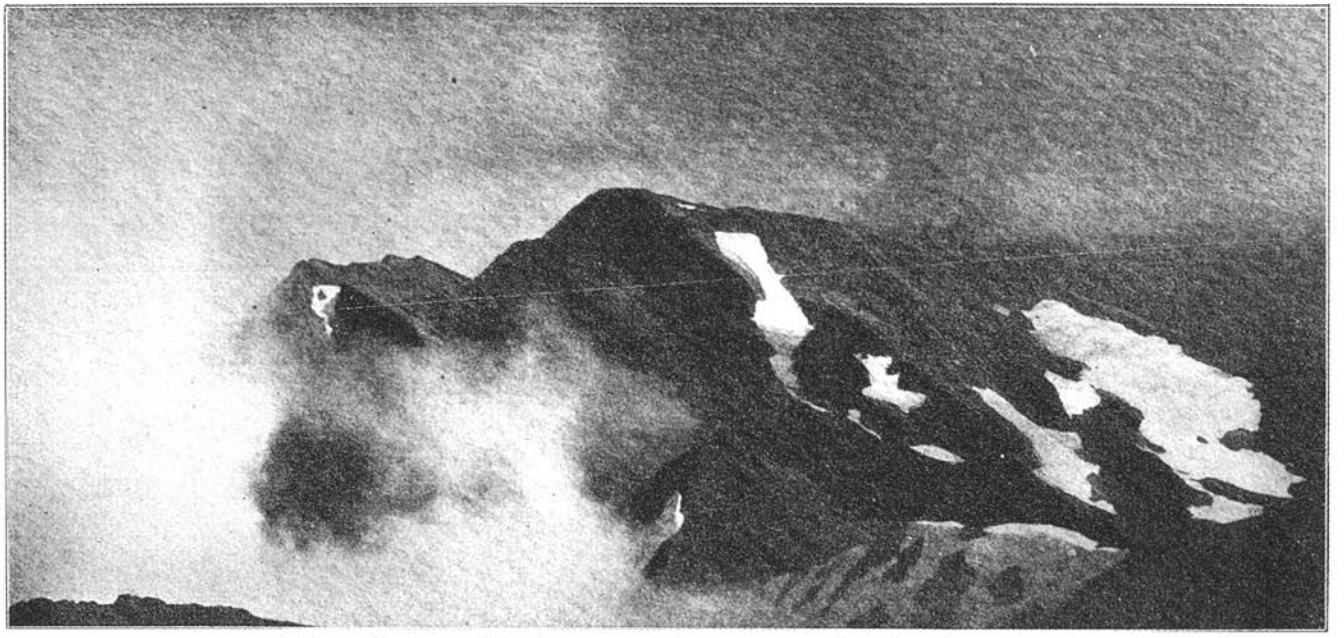
夕食を終へた頃はもう薄暗かつた。夜となると遉に寒い。どつさり着込んで火に向つた、先程から次第に惡變した空には星一つ見えない。遠くの方では雷が聞える。此分では明日の空は怪しまれる。否、今にも降らんず氣配であつた。

焚火に足を差し伸べて寢て見たが、安らかに眠られさうにも無い。此うなると明日の日程が氣に懸つて來る。市次郎は火の消えるも知らずに晝の疲れに寢込んで居る。自分は屢々起きては榾をさしくべた。而してその毎に空を眺めた。暗憺たる裡に夜色は次第に更けて行くのであつた、心ならぬ心を無理に押し靜めて、力めて寢入るべく試みた。

うつら〳〵と寢入つたが、冷え切つた寒さに又も眼が覺めた。空に氣が附くと、ぶす〳〵燻ぶつた煙の末に、星が一つ輝いて居る。意外の思ひに小屋を出て見ると、鑓の頂上附近スカイ、ラインのあたり、薄く剝がれた雲の間から、三つ四つの星が見えて居る。市次郎も眼を醒ましして、是なら大丈夫だと喜ぶ。

朝

差し伸べた足の熱さに氣が附いて見ると、市次郎はもう起きて朝餐の用意をして居るのだ。小屋の內外が餘程明るい。何時かと聞くと、もう四時に近いと云ふ、起きて山の端を見ると、其淡黃ばんだ



暴るゝ前（白馬岳より鏡ヶ岳杓子岳を望む）
（高野鷹藏氏撮影）

東雲の輝きに、昨夜の不安は全く拭ひ去られて居る。

私は此時山靈に默禱を捧げつゝ天祐を感謝せざるを得無かつた。其中に食事も濟まして出發を急いだ。

かくて小屋を出たのは五時半だつた。

露置き餘る大イタドリ、一葉蓬、オンタデやコバイケイサウ等、身を沒する許りの中を潜る樣にして、東北の方面、昨日登つた山稜を目蒐けて横卷に登る。此あたり、草叢がよく發育して居る。兎や熊の餌を堀りあさつた爪跡が、所々にあつた。

其尾根に辿り附くと一溪谷を隔てゝ清水平、小蓮華（△二、五九一、の地點を越人は云ふのだ）朝日岳等が、手に取る樣に見える、吾等は鑓の頂上を逐ふて、東に東にと尾根を上るのである、此尾根を辿り盡すと、廣場があつて、此方には白馬のなだらかな頂上が見える。

是れからは廣大な區域に亘つて、なだらかに膨らんだ樣な地形だ、短小な白山風露や岩鏡や、白根ニンジンや禾本莎草の柔かな毬の如き上を偃松の絶間々々を目當に進むのだ。例えば球面の赤道方面からは、其上極が見えない樣に、鑓の頂上は容易に出て來ない。其中に幾つかのうねりを越して、初めて左方に當つて、横に延びた屋根形の杓子岳が見え出した。

恁くて朝日に輝く草葉の露——小さい玉毎にレフラクションを起して、スペクトルの美しい光彩が、きら〳〵ときらめく露——を踏みしだきつゝ、偃松の幾群かを左右に避けて、白い砂礫の地に出た、鑓ヶ岳頂上の三角標が眼前に突立て居る。杓子岳の裾に連なる一帶の砂礫の尾が、長く低く垂れて、其下方の低原には殘雪が煌々として朝日に輝いて居る。

遠く南の方鑓ヶ岳よりの連嶺を見ると、幾つかの高低起伏せる尾根が、低く平に連なれる間に、一基の三角標が小さく見えて居る。而して其遠くには五龍岳の尖鋒が突立て居るのだ。西南一帶の地は

鑓ヶ岳固有の白色の玲岩質の砂礫が急に低く裾を引いて、硫黄澤より中脊山及中ノ谷へかけて走つて居る。如何にも雄大な山相である。日本アルプス中、是程雄大な山は他に多くあるまい。

偃松は發育次第に衰へて、爛砂の間には可憐の駒草が見え出した。脊梁の間には長之助草が爬ひ附いて居る。これより頂上に至る間、其北面急斜の間には種類に富んだ高山植物が多い。高峰キンポウゲ、雲間キンポウゲ、山オダマキ、鯛釣黄耆、色丹草、雲間草、岩桔梗、小松蘭、岩鬚、岩梅、鬼菊、常爽龍膽、富士ハタザヲ、千島アマナ、雪割シホガマ、浦島ツヽジ、小金梅、地ムカデ、ウルツブサウ等は其主なるものであつた。

八時頂上に着く。二基の三角標が天際に鳴つて居る。雪の如く白い玢岩の砂礫より成れる上半身を宙外に抽んで、尨然たる綠の裾を四周に張つて居る光景は、實に立派なものである。

西北清水平附近より白馬、杓子は近く相呼應するが如く、東南の空遠く白雲模糊の間に、倒扇形の富士が見えて、更に南西の空遠く鎗、穗高、笠ヶ岳、白山より近く立山連嶺が前に迫つて居るのである。

是より私等の縱走を試みんとする行程を瞰たる時は、履下の蟻塔に過ぎない樣な氣がした。

澄み渡つた空には、日は春の樣に暖かく照つて居る。何とも云へぬ壯快を覺えられた。自分の寫生したり採集したりして居る間、市次郎は荷を枕にして、三角標に足を持たせ乍ら、いゝ氣になつて鼻歌を歌つて居た。

九時半此を立ちて南に脊梁を辿る。瓦落々々と崩れる爛砂の間を流れる樣に下ると、一基の鳥居が建つて居た。是よりオヤマヱンドウ、ウルツブサウ、コメハツガザクラ、キンスゲ等の綠に包まれた、なだらかな小丘を登る。此地の岩石は鑓ヶ岳とは違つて居る。黑色の地衣類に封せられた花崗岩である。是れからは殆んど低平な脊梁を行く、只僅かに緩漫なうねりを見るのみで、行手を遮る偃松一つ

無い。其間に煎餅の様な薄片に碎けた玢岩質の平に敷かれたる處を過ぐると、三角標（△二八一二）を有する小峰がある。東側を見ると一段低く廣い平地があつて殘雪がある。淺い水溜りがあつて、傍には露營の跡があつた、所謂「天狗の小屋」である。鹿子木氏の露營したのは此地だつた。三角標のあるのは此地から中ノ谷と奥不歸谷との間へ延びた脊梁の頂上で、岩蓍やタカネゴケに封ぜられた大形花崗岩の、磊砢たる間に建てられてあるのだ、巉岩に踞して晝食をした。時に十一時。

更に南に向つて丘陵の如き尾根を下る。其間にフジハタザヲ、ヤマヲダマキ、コマクサ、ウルツブサウ、ヤマウヰキヤウ、チヤボカラマツ等を見る。稍行きて急に深谷に向ふ。眞立の下り路であつた。右は奥不歸の深谷、左は信州南又入の絶壑である。其間殆んど髮を容れないのだ。

用意の細引を取出し、草鞋を穿き固めて、降路に就く。霧爛した花崗岩の破片は、一足毎に瓦落瓦落と奥不歸の深谷に向て轉落する、而して其あとを見ると花崗岩の岩骨が磨肌の如くに輝いて居る。岩角に杖を突立てつゝ一足づゝ運ぶ。辛うじて下方の鞍部に達した。其東側を窺ふと岩壁の下に露營した跡があつた、雪のあつた時であらう。これより又前面に峙つ巉岩の一角を登る。偃松を踏み岩角を辿りて其尾根を行くのだ。此は奥不歸の急斜面で、下方には落葉松の上半身の枯れたるが、一方に傾いた儘林立して居る。丁度餓鬼の群が等しく手を伸べて自分等を招いてでも居る樣に思はれた。

かくて一峰を登つて、又急に深谷に向つた。

蓋し此縱走中で最も苦んだのは是れからであつた。天狗の小屋附近から眺めた時、一二の小峰を越せば、大黑まで雜作がなささうに思はれたが、歩いて見ると目前の低い鞍部に下りては急に突立つた岩山を登る。幾度となく同樣の地形を繰返へすのであつた。其東側は常に千仞の絶壑で雲の間からは、此安曇の村落や姫川の流れが見えて居る。

今此に至つて前面には突然全山花崗岩より成れる、直瓶の一峻峰に出逢つたのであつた。自分は其

剎那に於て、嘗て別山の頂上より初めて劔岳の雄峰を眺めた時の感想を連想したのである。宛然巨鐘を伏せた樣な堅岩、如何に見ても取り附き樣が無い。市次郎は荷を下ろして諸方面を物色した。佐々木仁次郎は此を赤兀山と呼んで居たのだ。而して大迂回を要すると敎へたのはこれであつた。

頂上附近よりは西方に長く尾を引いて、奥不歸谷に低下して居るが、只屏風を立て廻はした樣な、直截の絶壁のみで、迂廻の手係りも無いのだ。只最近に鹿子木氏一行の通過した事を知つて居るのが何より心强かつたのである。

必ず何處かに一縷の活路があるに違ひない。彼の人夫の告げたのは、只尾根通り行けと云ふ事であつた。此處では迚もそれで通れ無い。

先程から怪しかつた空は、次第に惡變して來た。其内に市次郎は右に直下せる一石逕を下りて、稍跡らしき者を認めた。一縷の望を繫いで、兎も角市次郎の跡に從ふ事とした。ミヤマハンノキや偃松の枝に縋つて、横に岩壁の間を辿ると、岩壁の一部に於て、頂上附近より西北方面谷底目蒐けて斜めに走れる一罅隙を認めた。仰いで見ると斷續して數百尺の頂上に繫がれて居る。

次第に此石逕を攀ぢる。峻嶮たる危巖は一たび手を觸れると、今にも兩側から一時に崩れかゝる樣に思はれる。前途に對して不安の念に驅られ乍らも、一足づゝ歩を拾ふのである。而して踏み轉げた岩塊が、轉々谷底に落ち行く時、頭を覆ふ岩壁に反響して、恰も巨鐘を亂打するが如く、全山今にも崩れかゝるかと怪しまれた。

怪しかつた空は、益薄暗くなつて、遠くの方からは雷が聞えて來る。さては一滴づゝの雨が落ち出した。かくて巉巖の間を一足づゝ攀ぢ登りて、漸く頂上亂岩の間に達した。一巨岩を乘り越すと、打つて變つた平夷な尾根に出たのであつた。

今まで緊張して居た全精神が、一時に緩んで、例えば襲はれた惡夢の覺めた樣に、云ふべからざる

快感を覺えたのである。恐らく我生活史中、例尠き記憶の一たるに相違無い。

實際此間の險岨は類ひ稀なるものには相違ないが、自分の不安に堪へなかつたのは、險岨と云ふ許りでは無かつた。奥不歸の谷の窮まる處、天地の間には只自分等二人のみで、而かも此石逕を選んだものゝ、果して前途に誤りなきか。一歩づゝ辿る裡にも、恰も知らぬ暗路を辿る中、不意に燈火の滅した時の樣な、冷めたい寂しみが頭から押へ附けて居たのだ。二人の内で誰れかゝ嘗て通つた路であつたならば、今私共の通過した處は、さばかりの難所では決して無い——よし雷の音と一粒づゝの雨に氣を阻まれたとしても——勿論雨の日では、此地は絶對に通れる處では無い事を、此に切言して置きます。又「天狗の小屋」から大黒までの間に於て、雪時は別として、夏季に於ては、一滴の水をも得られ無いから、此間では露營の出來ぬ事をも附言して置きます。

此を越へてからは、もう時間の問題で、險阻の處は既に過ぎ去つたのだと云ふ確信は、此峰を越へた刹那に於て、一種の快感と共に起つたのであつた。而してつく〴〵私は思つた、此縱走は、今までも行はれて居たが、大黒方面より逆に行くと云ふ事は、極めて困難で、今に其經驗が無いと云はれて居たが、自分の見た處では却て都合がよからう、少くともより困難と云ふ事は無いと思はれるのだ。

次第に雨脚が早くなつて來た、時計を見るともう四時だ、前途に對して急がざるを得無かつた。此尾根を次第に辿ると、前面に一鋭峰がある、其左側を辿ると、唐松岳より東に延びた八方山の一支峰が、舌狀に低下して、其間に低平な一面の草むらがあつて、牧場の樣であつた、「八方の池」は鏡の如く其間に澄んで居る。而して東側直下の深谷には、大雪溪が懸つて居るのだ。

此前面の岩山を登つて下ると、又同樣の岩山が頭を擡げて、唐松岳は其後方に聳えて居る、大黒鑛山はまだ見えない。進み進みて唐松岳の三角標を左に見て、其西側に廻つた時、其南西の方に低く延びた一支峰の下方に、大黒鑛山の建物が白く見え出した。駒草は此あたりにもあつた。

◎鎧ヶ岳大黒縦走記　吉澤

これより下ると偃松や、根曲竹や、其他の雜木林であつて、逕路を辿らないでは一歩も動けないのである。其尾根の南側に面した處で、市次郎は一縷の逕路を見付けた、マツムシ草、オヤマリンダウ、ヤマハヽコ、カライトサウ、コバイケイサウ、立山ウツボ草、タウヒレン、オタカラサウや、アキノキリンサウ、テウジギク、等の草木が一足下る毎に多くなる。

雨は南側から横しぶきに吹き附ける。さなきだに滑り易い諸種の禾本類が雨に濡れて益滑り易い。時計を見るともう六時である。

今朝露營地を出發してより一滴の水も得ない、而して此間の行程は決して少なくは無かつた。風に狂ふ雨は帽や真蓙を打て、四肢の運動も自由で無い。暮色は次第に前面を壓して來る。疲れた足元が一寸踏み滑ると、溜りも無く横様に打仆れるのだ。

恁くて尾根に沿ふて下ること、約三十分許りで、欝蓊たるシラビソの密林に入つた。吹き附ける雨から逃れて、漸く息附く事が出來た。四五町も行くと又左側に出る、今度は殆んど路跡は分らなくなつた、雨は小止みも無く降り注ぐ、益迷路に入つた。シラカンバの枝に縋つて下つて見る。尾根に沿ふて一綫の跡らしいのがあつて此れを逐ふて見ると、次第に方向を誤つて行く。これではと急に左側の雜木の間を穿ちて漸くの事で炭竈の頽敗した跡に出た。少し下つて、初めて路を得たのであつた。此間には少なからず時を費した。

用水に沿ふて、漸く大黒鑛山の事務所に辿り着いたのはもう七時過であつた。

導かるゝまゝに二階の一室に通つた。

今日は能く歩いた。而して隨分疲れた。温浴を勸められて、此に初めて生氣を得たのであつた。

室に歸ると志村君が事務長君等と爐を圍んで居られた。

志村君は明日大黒から、私等の今日來た路を逆に白馬方面に行くとの事で、例の廣太郎と他に一人

の案内が附て居た。事務長君の好意によりて、素麺の御馳走を受けた。

夜に入つて事務長君の得意の、琵琶の演奏があつたが、疲れた私には、早く床に就て温い夢を結ぶ事を得たのは、何より難有かつた。

五

二十四日、今日は朝から細かい雨が降つて居た。志村君は止むなく中止して下山せらるゝ事となつた。自分等は朝七時事務所を辭して、餓鬼山の南側に、殆んど同高線に沿ふて切り開かれた歩道を、祖母谷へと進んだ。自分には能く知られた路であつた。約一時間半で「餓鬼の田圃」に着いた。

此から南越を下れば祖母谷であつたが、今は此より奥鑛山に連なつて居る脊梁の、西南面を迂廻して、南越谷と祖父谷の落合附近に出る、新道が出來たのである。其途中では劔岳や、其東側面一帶の展望を縱にすることや、山毛欅の純林の美觀に接する事が出來るのである。頂上より一時間餘を費して、祖母谷の舊温泉場に歸着したのであつた。

火を焚いてゆつくり休んだ。

曩に殘した品物等を整理して、出掛けたのは十一時であつた。鐘鈎に來て見ると、「應急の吊橋はもう出來上つて居る。

かくて無事に黑薙温泉に歸着したのは、午後の五時過であつた。

温泉主の佐々木君は、私の爲に成効を祝された。市次郎は其重任を全うすることを得たのを心から喜んだ。而して人の見られぬを見て來たとて、人毎に吹聽して居た。此晩は私の室は賑かであつた。

筆を終るに臨んで、此行に對して諸稱の便宜を與へられた佐々木君に感謝し、更に案内の市次郎が、始終私の爲めに忠實に働いて呉れた事を改めて茲に言明する事を得たのは、私の衷心最も愉快とする處である。

（大正三年天長節の晩）

晩秋の立山

石崎光瑤

第一信

とても堪へ切れぬ登山慾を、此夏は、とある製作の方に殺がれ候爲、十月三日の夕、最終の筆を擱くと同時に、發作的に其夜十時五十六分の列車にて、京を飛び出し申候、日本アルプスに對する積年の憧憬を、今度は滿たす考にて例の立山に向ひ申候、立山を選び候は、晩秋の頃は、天候其他多少危惧の念も有之、充分地理の了解せる山なる可き事と、且以前、岩峰寺村の佐伯數馬氏、及伏木測候所を煩はして、初冬の頃の氣象を、照會致し置候事も有之、夫等をも參照致し候上、咄嗟の間に、他の方面を、問ひ合す可き時間を缺き候故、旁々此方面に足を向けし譯に御座候、伏木測候所の調査になれる、立山の初雪の記錄一寸お目にかけ申候。

年	初雪日	年	初雪日
二十五年	九月七日	三十三年	九月廿一日
二十六年	九月八日	三十四年	九月十六日
二十七年	九月十五日	三十五年	八月五日(最早)
二十八年	九月二十日	三十六年	九月廿五日
二十九年	九月十三日	三十七年	九月廿五日
三十年	九月八日	三十八年	九月六日
三十一年	九月十八日	三十九年	九月三日
三十二年	九月六日	四十年	十月三日(最晩)

四十一年　九月廿四日　　四十四年　九月廿二日
四十二年　九月二十日　　平　年　九月十三日
四十三年　九月十二日

越前福井驛にて黎明を告げ、追々白山の優姿に近づき申候、朝暉の光芒を正面に迎へ候故に、山は只淡き桔梗色にかすみて、雪らしき粧ひの見えざるに、稍々失望の念を懷きつゝ、目を外らして白山群彙の朝霧の中に、ラスキンの所謂、ナイフの刄の如き遠く打重れる連脈を眺めつゝ、太陽の高く、山頂を離るゝを待ち行き申候、小松驛に到りし頃は、既に白山は頭上より光線を浴び候も、遂に銀冠の光なく、縞裝の裝ひなきに、ガッカリ致し候が、金澤驛も過ぎ、倶利迦羅隧道を出でゝ、立山を望みし刹那、キラリと白刄の如く眼を射し銀色の雄姿の莊嚴さ、占めたとばかり、思はず包み難き微笑は幾度か、隣席の客に、不審られ申候、九時三十分高岡驛に下車、天候の豫測と、知人の訪問などに此日を消し申候。（十月四日高岡市にて）

第二信

晴、朝二番列車にて高岡を發し候、高岡驛待合室にて、北陸タイムス紙上に下の如き記事を讀み申候。

本年の初雪　　伏木測候所報告

山名	本年	昨年比較	平年比較
越中立山	九月二十七日	遲廿三日	遲十四日

（猶此夜、白馬山、蓮華山、後立山、杓子岳、鎗ヶ岳、唐松岳、等の飛驒山脈一帶に初雪し、十月一日には海拔六千尺の高山に、悉く降雪せるを見たり）

十時三十分、富山驛に下車、直ちに腕車を驅つて、上瀧に向ひ申候、富山市街を貫ぬく神通川のほとりより眺むる日本アルプスの美しさ、秋晴一碧、小春の光は、チリ〳〵と、アイスアックスを射れば、

◎晩秋の立山　石崎

◎晩秋の立山　石崎

眞白の連峰がキラ〳〵と、アックスの穗に去來するかの樣、こゝから、此銀色のアックスを投げるならば、すぐとかの雪白き高原に、突つ立つかの如き心地致し候。

富山市を離れて、上瀧に至る三里餘の道路は、八月の水害に全く荒廢し、一望の田園磧の如く、土砂岩石の堆積せるには、當時の慘狀と、農家の災厄誠に想ひやられ申候、上瀧より岩峅寺村に架れる、例の壯大なる常願寺川の長橋も、跡を留めず、こゝに車夫に荷を擔はして磧を打涉り、立山社務所佐伯治重氏を訪ひ、こゝにては收穫期に人夫を得難きにより、芦峅寺村迄、荷持ちを傭ひ申候、夏は暑熱に苦しむ此川邊も、今は山の半腹より磧迄、蕎麥の花は雪かとばかり、咲き布きて、虫の聲さへいと寂かに聽え申候、銀龍の如き常願寺の秋の水、前方天涯に袖を連ぬる雄山の續き、雪白き峰頭、午後の光を受けて、綿を千切れる如き水蒸氣の、立ち迷ふさま、瑞西の寫眞帖にても見る心地に御座候、月明く、星淸き夜、銀龍の咆哮のみ、此麓に深秘のリズムを傳へる時、アルプスの女神たちは、此雪の如き岸より岸の花園に、霓裳羽衣の曲を奏で給はんも知る可らず候。

黃昏、芦峅寺村の佐伯忠胤氏方に入り、此夜はこゝに客となり申候、人夫の選定や何かと一方ならず配慮を仰ぎ申候、人夫には佐伯政吉、同茂吉の二人を伴ふ事と相成申候、政吉は若き獵師に御座候、室に書畫帖あり、中に小島先生の筆にて、杉風の句「名は知らず草毎に花あはれなり」を記されたるあり、小生も强つての望みに、スケッチ用の畫具にて一枚を汚さしめられ申候、あすは然らぬだに短き秋の日、途中觀賞を擅にす可き時間もあり、日暮れては、寒氣の襲ひも氣になり候儘、出立は四時半と定めて人夫を歸し申候、谿谷を彩る山葡萄の色、高原の霜葉、峰頭の白雪、幸ある明日の前途を夢みつゝ寢に就き申候。（十月五日芦峅寺村にて）

第三信

いつも製作の後は、キッカリ四時半には目の覺める習慣がつき申候、燈下に支度を始め居候ところ

へ、人夫は早くも參り申候、政吉は銃を携へやうか如何かと、思案致し候が、防禦の要はなければ、時ならぬ登山なれば、意外の興も、無きにしもあらねばと、すゝめ候處、家に馳せて持ち參り申候、十六夜の月は尙遙かの中空に、爛々として輝き居候下に、愈々今日よりぞ日本アルプスの圏内に入らんと、三人が吐く息、白く、溪谷の靜さを破つて、力足堂々と出立致し候、辭するに關らず、忠胤氏二三の家人と村外れ迄、見送られしは恐縮致し候。

藤橋に到りて、夜はほの〴〵と明けはなれ、丈なす芒尾花の間に埋れる休息小屋に、一掬の清水を含みて、遲れたる人夫の來るを待ち申候、東方の空、怪しき一點の雲影、山の端に浮むよと見しが、看る〳〵擴がり行くさへあるに、地獄谷の硫黄の臭氣の遠くこゝに來れるには、尠らず氣になり申候、藤橋を渡りてより山毛欅坂に至るの森林は、近年斧鉞頻に入りて、晝尙ほ暗かりし太古の森は、今や何處、天日空しく其遺されし切株の、墳墓の如く白く累々たるを、容赦もなく照らし居候、山毛欅坂の小屋のほとり、亭々として聳ゆる白樺の大樹あり、王者の如く其白き胸を張りて、金色の光を浴びて立ち候、是も斯くある可きはそも幾何に候はんか、山毛欅坂より、カリヤス坂に到る間、ナヽカマドの紅葉、目覺むる樣に散見致し候、獵師は熊山椒と呼び居候、韓椿と聞ゆる稱名の瀧、何時見ても壯大に候、谷の廣き爲、白水や華嚴の如く、咫尺の間に望み難く候も、周圍の山容の宏大なる、まこと萬山の奥より流れ出づる神々しさは、他に覺えざる幽玄の趣ヒシ〳〵と胸に迫り候、三段に深碧の淵をたゝえては、岩を撲つて奔下するゆたかさ、さゝがにの精靈が無限の絲を投ぐるかの樣に御座候、午前十時、彌陀ヶ原の一角に出で、針葉樹林の間に、藥師岳を眺めつゝ晝餐を喫し候、寫眞など撮りて更に進み行く、白樺の間より、山鳥の羽音凄じくたち出づる事頻りに候、海を拔く六千尺、廣袤三里と稱する大高原、百草皆衰へて、我母香の實、名も知らぬ小さき禾本科植物の穗のみ、此の光りに、寂しげに輝ける間を縫ひて、弘法の清水に着き申候、一度降りし泡雪も、秋の日に忽ち消えて、漸く

凹地岩蔭等に、氷となりて殘れるのみ、岩車の葉の赤く照りたる、御前タチバナの實の光澤やかなる、寂しき中に美しく候、姥ヶ石附近を過ぐる頃、悲風谷より起り、岩間に舞ふ落葉は、輕快なる音を立てゝ、見えずなる迄、天高く翻り行く、落葉を咏じてベソを搔く歌人に、此嚴肅なる高原の落葉を見せたしなど存候、鏡石に到りて、初めて、雪白き連峰を望み、殊に雄山の、一際白く、眩きまでに輝けるを見て、人夫の來る間遲しと三脚を組み立て申候、こゝかしこ、撮影に遊び暮らし日の暮るゝ頃、こゞえる手に、三脚を抱きて室堂に入り候、茂吉は既に火を起し居り、小生は乾板を更めて又飛出し、暮るゝ山々を眺めまはり候、奇しき亂雲の、落日を掩ひ、金線の覆輪を施せる一方には、大日の、黑き迄に紺青の濃き山塊を挾みて、湧き騰る白雲の、セコンドの針毎に變り行くたゝずまひ、たまらなく嬉しく、日の全く暮るゝ迄、立ち盡して、室堂に歸り申候、此夜の味噌汁の旨かりし事、實に空前に候、未明より出でゝ、冷氣に滿てる山間を辿り暮らし、齒の根も合はぬ、辨當と、水を掬ひ雪を嚙み候反應なるは申す迄も無御座候、廣き室堂、只三人にて獨占せる心地よさ、併し沍寒身に泌みて、夢の結び難きには閉口致し候、防寒としては、冬服の下に毛絲のシャツにメリヤス二枚を重ね、長き將校外套に身を包み候上、二枚續きの毛布二枚を打被り候、念入りの有樣にて如此に候、氣温は何程なりしや、寒暖計を携へざりしを憾み申候、夜半夢成り難きに、業を沸やし、跳ね起きて、戸を排し、屋外の景色に眼を放ち申候、折しも、十七夜の月は、皎々と澄み亘り、峨々たる連嶂ブラチナの屏風の如く、室堂を圍繞し、宛ら眞晝の如きに、折々浪の如き勁風、靜寂を破りては、復た太古の靜けさに、かへり申候、噫々壯重深秘の光景に候かな、古しへの詩人が夢みし、嫦娥の寒宮を、まのあたり打見る心地致し候、此時襟を正し候は、啻に寒さの鋭かりしのみには無御座候。

七日の朝は斯る中に來り候、天晴れたれども、寒氣鋭く且つ絶頂は、曉風烈しきを以て、日光の全山を照らす迄、室堂内に籠居致し候、八時頃、和き朝日影は、室堂の中に、さし込み來り候、戸外に

雪の積れるあり、天地の靜かなる、何とは知らず、新春を迎へし感有之候、八時半、茂吉を室堂に殘し、政吉と二人にて山頂に向ひ申候、室堂附近より、急に空氣の稀薄は呼吸の苦しさに知られ申候、一の越に到り、槍ヶ岳を望みて、ホット休息致し候、三の越に到りし頃、室堂の屋根にあたりて、三羽の猛鷲、入り亂れて、低く圈を描いて翔るを瞰下致し候、途中幾度か撮影をなしつゝ、十時に頂上に達し候、快晴の爲、日本アルプスの名高き、大山崇岳、殆んど餘す處なく双眸の中に收まり申候、富士、八ヶ岳の裾は雲海にて滿され居候、稍々失望致し候は、白馬連峰を除きて他の高岳に雪の思ひしより少かりし事に御座候、龍王を隔てゝ藥師との間に、擁護せらるゝ五色ヶ原、見るからに一大樂園としみ〴〵思ひ申候、絶頂にて一番氣に入り候は、絶頂より瞰下したる、黑部に面せる、谿谷の雪に候、夏にても雪多き此谿は、新雪の粉粧に小さき岩々の皺に至る迄、千古の銀絲は振りかけられ、未だ陽のさゝぬ雪の面は、瑠璃をひそめ、あるは翡翠の色を宿し候、日本海より衝き寄する强風に、三脚の浮み勝ちなるを、政吉に握らせつゝ、幾枚となく撮り申候、頂上にて、プレートを三度迄交換致し、其間の靜止に、痛くなる程、寒氣に責められ申候、權現を祀れる堂宇は、扉を外して、床下、屋根裏迄、石を以て塡充しあり候、冬季烈風に堪ふる用意と存候、淺間の烟は、夏季に於て見るよりは、甚だ稀薄にて、心せずば知り難き程に候、冬は烟の少きにや、地獄谷も極めて衰ろへ居候、絶頂を辭して、三角點下に遊び居候ところ、天候次第に險惡の兆を呈し來り候に愕き、今夜尙室堂に宿泊の豫定を變更して、温泉に下らん事を、緊急動議し、室堂に向つて急行致し候、所謂、高根の雪に封鎖さるゝ禍を慮かり、七日の食糧を用意致し居候も、此上の淹留の、危險多きを慮り、急遽結束、室堂を始末して、午後一時半、こゝに室堂に別れを告げ申候、温泉迄は高低三里餘の道程、遠きにあらねども、秋の日の暮るゝ事早きを以て、只管急行致し、肥滿せる茂吉は遙に隔り申候、待雄峠に來りて、時間の餘裕あるを測りて、藥師を寫しなどして、茂吉の來るを待ち、坂を下り申候、湯川の上流一圓の平に、

◎晩秋の立山　石崎

蠶々簇生せる幾千本の白樺林、朝々の霜華に金色の葉濃かに、雪よりも白き幹の肌、暮靄を破りて、目に立ち申候、危き吊橋に湯川を渡りて、温泉に着きし頃は全く夜の幕に鎖され申候、微かなる燈光一穂、僅に生氣を漲らし居るに安堵致候、砂防工事の人夫も引揚げ、浴客とては猶更絶無にて、もはや、宿の人々も一二日の後全部下山すると云ふ時に御座候。

午後より擴がりし妖雲は、怪鳥の如く其翼を伸して、星の光もなき空を仰ぎつゝ、燈の影暗き浴槽に、疲勞を醫し、室に歸り候時、雷鳴の頻りなるを聽き申候、大雪の降る夜にあたりて、雷鳴の見舞ふは、幼き頃より識れる處、山上の暴れを想ひつゝ、今日下山し得たるを今更の如く喜びつゝ、此稿を記し申候。（十月七日夜温泉にて）

第四信

五時に一度戸外を覗きしも、土砂降りの暴風雨、茂吉も尋ね來りしも、此風雨にては、出立も欝々しければ、暫らく歛まる迄見合す事と致し、八時過、風の少しく歇みしを見て發足致し候、新道は今夏の水害に、崩壞せしを以て、舊道を取り、長き常願寺の沿岸を、雨に惱まされつゝ上瀧に五時に着、人車を得ざりし爲、更に人夫を鼓舞して、富山市に入り、やつと、上り終列車に乘じ、十時、高岡に歸着仕り候、尙此雨は、十日に至りて初めて、霽れ候が、雲の散じたる後、立山の遙か麓迄、全く純白の姿に化し居るを見申候、而して其後の某新聞に、松本電話にて、十日に槍、穗高、等日本アルプス一帶に初雪せりとの記事を讀み申候、是等の山々を、立山より望みし時、雪の稀なのに、意外に思ひ候が、地勢の關係上にや、矢張、立山、白馬が雪の量の多きと共に、初雪の覆ふ事も、是等諸峰より早きかと存候、北國は晩秋より冬季に續きては常に、暗雲冷雨の絶間なく、今回の如き好天氣を拾ひしは、甚だ僥倖に御座候、雪の期待よりも少かりしは、遺憾に候ひしも、若し此降雪に鎖され、數日の後に温泉に下つたとしても温泉も無人の境、且つ雪の深き事も察せられ候へば、不慮の災禍を招

きしや測り難く、こゝらで蟲を抑へて滿足致し申候。

立山の里程、近時大林區署の實査せられたるを、左に記し候、同時に在來傳へられし豫測の里程と比較するも、一興と存じ附記致し候。

	實　査	豫　測
富山市外より上瀧町迄	(三　里　九　丁)	(三　里)
上瀧町より芦峅寺村に至る	(三　里　二　丁)	(三　里　半)
芦峅寺村より藤橋迄	(一　里十八丁)	(一　里)
藤橋よりブナ坂の茶屋迄	(一　里二十丁)	(二　里)
ブナ坂よりカリヤス坂迄	(二　十　丁)	(一　里)
カリヤス坂より第二回稱名瀧を望む迄	(二十二丁)	(一　里)
そこより弘法の清水迄	(十　八　丁)	(十　八　丁)
同所より一の谷迄	(一　里十丁)	(一　里　半)
一の谷より鏡石迄	(一　里)	(一　里)
鏡石より室堂迄	(一　里)	(一　里)
室室より本峰絶頂迄	(三十五丁)	(一　里　八　丁)
室堂より立山温泉迄	(三里十五丁)	(四　里)
温泉より原村迄	(四　里　卅　丁)	(五　里)
原村より上瀧迄	(三里二十丁)	(四　里)

(十月八日高岡にて)

雜錄

フレッシュフィールド氏の日本山岳旅行記（一）

去年日本に來遊せられ、本會の歡迎を受けられた英國の登山家、ドウグラス、フレッシュフィールド氏は、英國山岳會發行の「山岳」雜誌（本年五月號）に、A Play ground at the east end. Rambles in Japan と題して、日本山岳旅行に關する觀察や感想を、發表せられ、頗る美くしい寫眞版を七葉（東より見た日本アルプス一葉、妙義山三葉、伊香保一葉、上高地二葉）挿入してある、文中には、我々日本人には珍らしく思はれる記事もあるから、大要を譯出する。

同氏は、西伯利亞鐵道を利用さへすれば、倫敦から日本へ行くのは、Selkirks へ往くより、いくらも遠くないと言ひ、九月初め、日本に到着したが、天候が惡るかつたゝめ、ウエストン氏の忠告に從ひ、富士登山の計畫を放棄して、支那の北京へ廻り、十月になつて、日本へ歸つて來たときは、富士の小屋は、みんな閉鎖されてしまつてゐるので、この高名で單調なる一萬尺餘の大火山に登る代りに、もつと偏僻な日本アルプスへ、飛脚旅行をすることに決めた。

その前に、函根の宮の下へ遊びに往つたが、溪谷は高絶で、山中の光景は、時折カムバアランドの湖水を憶ひ起す、函根にも輝やいた溪流、畫のやうな森、蕨類に富んだ藪、綠青の高丘があるが、柔和な、黃綠色の竹叢は、草の位置に代つて、上部の傾斜は、いかさま日本國の風景畫、そつくりの、彼等自身の調子（トーン）を與へてゐる、宮の下から函

根驛へ往つたら、十國峠の嶮を往返し、箱根舊道の石高道を横切つた方が、興味が深い、さうすれば、海岸景、輝やく太洋、岩の岬角、點々たる嶋嶼、綠の谷、閃めく川、日本の特色なる透明の雰圍氣に峻立する遠山などを、見渡すことが出來る、函根湖水を帆船で渡つてから、大地獄と呼ばるる硫氣孔へ往つたが、恰度日沒後で、夕榮えのため、眞ッ赤に色取られた蒸烟が、この國民の藝術に、屢ば見えてゐる效果(エフエクト)を、預言してゐるやうな、美くしさに見惚れてしまひ、歸りの崖路が、見分かぬほどの暗やみになりかけて、駈け足をした。

マアレイの日本案内記は、登山家には、秀ぐれた案内者である、甲府から精進湖を經て、富士近くへ行けたのも、同書のおかげである、甲府は日本に於ける、田舍の市街の、殆んどいぢくられてゐない標本で、城のある阜や、幅濶の市街があり、その市街には、商店の招牌や、旗が出てゐる、快活な住民は、町の行列や、畫のやうな鄕土的工業や、一二の秀ぐれた旅籠屋を築いてゐる、豐饒な小高い平原に、位置を占めて、美くしい岩山に圍まれ、近い山稜を越へて、富士の雪を被つた頂上に、反對する日沒を見られる。

同氏の旅行と觀察は、それから日本アルプスに入つてゆく。(小島)

高瀨谷の鐵砲流し

急に染まつた紅葉の色に、誘はれて、一夜を高瀨の中の澤入りに、寢にゆきました。

高瀨谷に入ると、間もなく釣橋で、川を渡つて左の方、鍬峯山の裏へ入り込む三里あまりの道は、丁度秋の遠足には、もつてこいです。

中の澤奥、神明澤に、此春から小林區の斫伐事業があるので、一寸とした事務所があつて、疊の上で布團を着て寢られるのです。家に下宿してゐる役所の人がゆくといふので、木流しの鐵砲を見物かたがた、出かけたのですが、私共が事務所で、晝飯を食べて仕舞つて、茶を飲んでゐる所へ、急に『下の鐵砲が、きれかゝつたぞう』

と人夫の一人が、大聲に報らせて來たので、慌

て丶飛び出して、鈴木さんの後について、馳けてゆくと、もう奥の鐵砲が、切り拂はれて、襲しよせて來た水が、下の鐵砲を乘り超えると同時に、悽まじい響をたて丶、眞赤に濁つた泥水に押落さる三百棚からの材木が、澤底の岩盤に、はね返り乍ら、一散に流れ落ちて來るのでした。

ゴーッといふ底力の籠つた音響が、山に反響して、何とも云へぬ壯快なものです。

鐵砲について、飛び降ると、もう事務所の前の澤口まで襲しよせた山の樣にうづ高い材木が、そこに停滯して仕舞つて、いつかな動きさうもない。見る間に、堤まりきつた濁水が横に切れて、事務所が流れやしまいかと思ふ位な、大騷ぎでした。此から木澤に押流さうといふ計畫が、見事に失敗したのでした、それは新らしく作らへたばかりの、下の鐵砲が不完全だつた爲に、まだ水が一ぱいに、堤みきらない中に、拂はなければならなかつたからでした。

此下の鐵砲を拂ふ時、一人の人夫は、危ふく捲き込まれる所を、漸く助けられたとか、體中泥水に汚れながら、材木の上に立つて『惜しかつたなあ、惜しかつたなあ』と殘念がつてゐました。

北海道といふ一番年老の人夫は、鐵砲が失敗で、祝ひの酒にありつかれぬと、落膽をし乍ら、長い鳶で木を突ついてゐました。『到頭、また五十圓ばかり損だな』

と鈴木さんが笑つてゐました。『晩に一杯買ふから、今日の中に、二つの鐵砲を堤んでくれ』

酒といふ聲を聞いて、急に元氣付いた北海道が、先に立つて、また奥へ登つてゆく、後を見送つて、斯うした無邪氣な山の人足達の生活が、實際愉快でなりませんでした。

谷の深い所は、まだ全く赤くなりきらずに、夏のまゝの青葉を繁らせてゐます、けれど外は大抵、眞紅に色づいて、陽に光る時の美しさつたらありません。

三度の汁の實には必ず、栗茸とか、もたしとか、舞茸とかいふ茸が入ります。

舞茸といふのを、人夫がとると、其茸の生へる場所で、人夫達が踏むんださうです、さうしてお

けば、來年も澤山生へるといふ迷信があるのです。

山葡萄が甘くなりました。其他、あけびと、くちなしの實が、山の御馳走です。

植林の常夫が擊つて來た、（がっち）かけすを燒いて、其晩の肴にしました。

町へ酒を買ひにやつた人夫が、暗くなつて、漸く歸つて來ると、口あけを德利についで、笹の葉を挿して、材木の前に滯りなく、木の出るやうに神酒を捧げます。

そして、事務所の障子を開けて、若い常夫が元氣のいゝ聲で。

『オーイ、酒が來たぞう！酒をやるから取りに來い』と怒鳴ると、澤の向岸の小屋からも、後方の繁の中の小屋からも、各自に手鍋をさげて來る奴、鐵びんを持つて來る奴、なかには、バケツを捧げて來る奴もある。

『貴樣の方の小屋は、何人だ、此れに一杯が一人宛だぞ』なんといひ乍ら、鑵詰の空で、それ〴〵に配つてやると、人夫は一人々々嬉しさうに

『旦那御馳走樣で』といそ〳〵と、小屋に歸つてゆくのです。

『北海道』といふのは、平村の借馬の者で、若い時に東北から、北海道の方を流浪して歩いたとか、其中に、人違ひから、殺人の寃罪を受けて、其れが動機で、再び國へかへつたのださうです、誰でも相手が見付かると、直ぐに『俺が北海道にゐた時分』とやり出すのが、評判なのです。

此頃爐傍へ、蟋蟀に似た虫が飛で來たのを、常夫達におだてられて燒いて食つて、『こいつあ油ぽくて甘い』と、痩我慢を云つたのも、此親父なんです。

無邪氣な、僞をつくのが上手で、聞手に何と茶化されても、得意になつて、饒舌るので、皆に可笑しがられてゐるさうです。

私共が夕食が終へて仕舞つて、蓄音器なんか、持出してやつてゐると、もう大分彼方でも、醉が廻つたらしく、盛んに歌ふのが聞えて來ました。時々高い笑聲がする

『北海道の奴、また始めやがつたな』

暢氣な山の一日も、私には限りなく、樂しいものでした。

十二月一日に、中の澤を流しだして、本瀨を下だす、それが此年の事業の終りださうです。さうして無邪氣な山の人達が、山終ひの祝酒に醉ふ頃は、あの美しい紅葉も、影を消して、たゞ寒い冬が谷の隈々まで行渡る事でせう。

時々時雨がハラ〳〵とやつて來ては、たまに紅い葉がヒラ〳〵と舞ふのも、もう秋が更けたと、報らせます。

峯に粉雪がサラ〳〵と
紅い木の葉がヒラ〳〵と！

斯んな言をひとりでに口にのぼせると、それが詩の一句になるやうにも思ひました。

稻刈も始まりました。

そして、殺生好きな佐平隱居は、田の仕事は、息子達に任せて、自分は四圓なにがしの稅金を納めて、鳥屋場の小屋作りに、山に登ります。

此十五日から、小鳥が獲れます。

メジロ、ヒワ、ツウメ、鵯、アトリ抔が、首を並べて繩に結はへられて、市に出るのもぢきです。

今年は珍らしく、雪が消へた年だとか、昨夜山から降られた、大黑鑛山の吉原工學士のお話に、いつか死んだ人夫の鐵砲が、雪の下から、二挺でて來たなんと言つてゐました。

そろ〳〵炬燵の出來た家も、あるやうになりました。（十月十二日、百瀨愼太郎）

「甲信武國境縱斷」を讀む

本誌九年一號の雜錄欄で、東京から見える山の補遺を書いた時、甲武信岳が市內の北部から望まれることを記して置いた。聞けば其後小佐野君から山岳會へ通知があつて、それは恐らく眞の甲武信岳が見えるのではあるまいと思ふ。其事に就ては別に山岳誌上に書くと言はれて、間もなく寄稿されたのが、本號所載の甲信武國境縱斷と題する紀行文であるさうな。自分は前記の雜錄や、秩父奥山の記事などを書いた關係上、本號の編輯前に特に其文を讀まして貰つた。そして怪しみながら

も大なる興味を以て讀んだのであるが、豫想に反してこれはまた餘りに他愛も無い想像說なので、

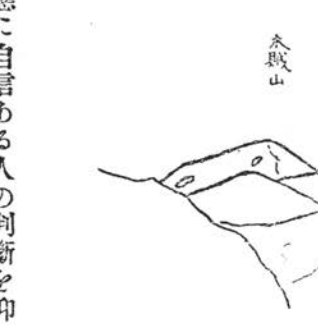
銚子原から樅澤岳や雙六蓮華などの諸山を見られたといふ報告よりも、一層驚かずには――根據の無いのに――居られなかつた。初めて或山へ登つて、これは想つたより小さいから某所からは見えまい、これは案外大きいから屹度見えるに相違ないと極めて仕舞ふのは、手間が掛らなくて好いかも知れないが、普通人の敢てし得ない方法である。自分はあの補遺の中で、同じ場所からではないが、東京市内から三寶、甲武信、雲切の三山が共に見られることを書いて置いたのであるから、あの文を讀まれた人ならば、東京から見えるのは甲武信岳でなくして、三寶山か雲切山（君の所謂鷄冠山）の間違であらうなどゝ言はれる筈はない譯である。恐らく君は人傳てに聞かれたのみで、あの文を讀まれなかつた事と思ふ。又甲武信岳山容は尨大なるものと云ひとあるが、初めて本誌上に甲武信岳の紀行を書いた南日君は勿論、自分と雖も曾て其山に「尨大」なる二字の形容詞を呈上した事はない。推量するに、これは故荻野君の甲州國司岳紀行中に、奥院から甲武信岳の尨大なる山容が望見されると書いてあるので、それを引合に出したものであらう。荻野君は國師岳から東北望して、彼の三山を一坐の甲武信岳が三頭を分岐した者と思つたか、若しくは恐らく北寄りの三寶山をそれと思つたか、二者孰れかの原因からして、尨大なる山容と書いたのであらう。これは無理もない話で、現に自分等も實際甲武信岳の頂上に立つ迄は、三寶山をそれと思つて居たのである。荻野君が遠望して尨大と形容した

◎雜　錄　「甲信武國境縱斷」を讀む

甲武信岳が、登つて見た所ひどく小さかつたので、失望した君は直ぐに東京から見えると書いた自分の記事に想到して、こう小さくてはとても見えないと盲信したのであらう。これでは別に說明も辨解も要しないのであるが、自分は念の爲に發見の次第を述べて置きたいと思ふ。

東京市內から雲取山と白岩山との間に遠い山の見えることは、東京住居の會員で、好んで山を展望される人は誰でも知つてゐる事實である、惡澤岳が發見されて間もなく、或晴れたる日の朝、自分は凌雲閣に上つて展望に耽つた際、三十分間二錢の雙眼鏡を借りて、可なり鮮かに望み得た秩父の連山を物色した。其時ふと白岩雲取二山の間に頭を擡げてゐる山のうちで、左に見える山の恰好が雲取山に酷似してゐることに氣が付いた。同山の頂上から左へ引いた接空線は、特長ある曲線を描いて、たやすく自分の注意を惹起したのである。さう思つて右の山を見ると、如何にも甲武信岳らしい。幾度見直しても自分の考は益其方へ引き込まれて行く許りであつたが、雙眼鏡の倍率が小さいので、それと斷定するに足る程度迄に見る事は不可能であつた。翌日其事を中村清太郎君に報告した。然し同君の首は容易に縱に動かなかつた。雁坂嶺の絕頂は東京から見ると、正しく甲武信岳と重らなければならない、而して距離が近いだけに二百米突近い標高の差はあつても、甲武信岳は其後に隱れるであらうと言ふのが同君の非難であつた。此懸念は自分にもあつたので、夫以上强く主張するだけの根據を持つて居なかつた自分は、暫く沈默を守るより外に仕方無かつた。其後東武鐵道の太田驛附近から、秩父連山を望見しつゝ入京した事がある、其折瀧車が粕壁邊まで來ると、破風山が雲切山の九合目あたりへ重り合ふのを見た。そして破風山と雁坂嶺の絕頂とは、肉眼では高低の差が、識別されぬ程に似寄つた高さを有してゐた。越ヶ谷草加の間では、雁坂山が破風山を後ろに隱して甲武信岳の下に近寄るのを見たが、間もなく總てが白岩山に遮斷されて仕舞ふので、甲武信岳と雁坂山とが正しく重り合ふ迄の經過を知ることは出來ないが、兎に角甲武信岳が雁坂山

の上に拔け出ることだけは確であるとの信念を得たので、快晴の日再び凌雲閣へ登つて、今度は八倍の雙眼鏡で、右の山は甲武信岳に相違ないことを確めたのである。



其時雲切山や雁坂山の頂上の切明けまで判然と認めることが出來た。自分は好んで遠方から東京の空を覗いてゐる山々の形を物色して喜んでゐるのであるが、いよ〳〵或山が某山に相違ないと確めるまでには、疑はしい點は必ず相應に自信ある人の判斷を仰いだ者であることを斷つて置く。

自分は此文に依つて、今まで知らなかつた甲州方面の知識を、秩父與山の記事に加へることを得たのを君に感謝する。然し有體に言へば、山頂の模樣なども特長が少しも記載してないし、知りたいと思つた澤の名はあつても、それが地圖上のどの澤に當るかゞ指示してなかつたりして、佛作つて魂を入れ忘れた憾みがあるのは殘念である。こんな餘計な差出口を叩くのも、君と同じく此山脈を少しでも精しく世に紹介したい爲で、他人の紀行文に就て彼是言ふのは失禮であることを知らぬ譯ではないのですから、其邊は大目に見て戴き度いと思ひます。

先づ袴腰からいふと、自分は甲斐國志に從つて腰の字を用ゐたのであるが、現在越の字が用ゐられてゐるならば改めてもよい。然し山形の似たるを以て名付くといふ國志の文には當てはまらなくなる。そして其袴越なる名稱が、三峯圖幅に古禮山（二千百十二米突）としてある山から西へ出た尾根に與へられたものであるといふことになれば、益以て國志の記事と背反することになつて、名實の甚しく相副はざるに驚くのであるが、古禮山は

畢竟古禮澤から導かれたもので、秩父の稱呼であるのみならず、其澤の源頭には立派に秩父で古禮山と稱する峰が聳えて居るのであるから、自分は依然國志の記事に從つて、此袴腰狀の山を名實共に一致した袴腰山の名を以て呼びたいと思ふのである。

袴腰山の北を流れる澤は即ち古禮澤で、其北の谷は瀧川谷の本流水晶谷であること圖幅の示す通りである。雁峠一名燕（つばくろ）ダルミ又の名笠取峠から發源するものが、秩父の所謂葡萄澤であつて、甲州人の前葡萄といふのが之に同じであるならば格別、若し古禮澤を前葡萄、水晶谷を奥葡萄と稱するのであれば、甲州葡萄は名は同じでも秩父のそれとは全く關係のない名である。然し此邊は山も澤もまだ〳〵研究の餘地が大分あるらしい。

雁坂峠の頂上直下から湧出する俗に一杯水と唱ふる清水の末は、井戸の澤と呼ばれて、更に下流は峠の澤と呼ばれるらしい。水の清冷なる點に於て將監峠の井戸澤と好一對である。が、水量は後者の方が遙に多い。雁坂峠の頂上に三等三角點があつて、高さ二千八十二米突のやうに書いてあるが、峠の頂上には三角點も無いし、又眺望も廣濶でないから、これは峠の頂上でなくして、雁坂山の絶頂を指したものであらう。然らば二千八十二米突は二千二百八十九米突の誤りである。想像するに君の一行は峠の頂上へ出て國境の切明けを辿りながら登つたのではなく、井戸の澤を離れて草原の斜面に懸ると、左に切れて直に絶頂を指して登られたのではあるまいか。

破不山は破風山と書くのが正當である。破不では何の意味もなさない。測量部の宛字にはまゝ斯樣な無理がしてある。同じ三峯圖幅の十文字峠の途上にある白泰山の如き。之をシロタヘヤマと讀みる人は恐らく有るまいと思はれる。雁坂山から破風山の三角點まで一時間足らずで行かれたのは、健脚驚くの外はない。雪損木とあるのは、明治四十三年の大暴風雨の際に倒れた木をいふのであらう。此大嵐は秩父奥山を甚しく荒廢せしめた者で、其慘狀は今尙歷然と名殘を止めてゐる。破風山の頂上殊に三角點のある西破風のやうな特異な山

相を呈した所は、秩父山脈には珍らしいのであるから、一言の注意を書き加へて欲しかつた。破風山の頂上を出立した君の一行は、木星に引かれた彗星のやうに、突然常規を逸して鷄冠山へ出られたが、何處を通つたものかあれだけの記載では、自分にはとても想像だも付かない。唯國境の切明けの跡を辿られたものでないことだけは確に分る。從つて中の澤、なめり澤、ぬく澤などいふ澤は、地圖の上でどれに當るか判斷が付かぬ。尤もなめり澤は地圖に記入してある。自分が赤志で敎つたのも同じ澤であるが、君のいふなめり澤とは違つてゐるのであらう。さもなくば破風山を出立して、中の澤のたるみへ下りて、それから、なめり澤の頭へ登るとある其なめり澤の頭といふのが、地圖では破風山の西破風と同じ者であるからである。この破風山頂から鷄冠谷の露營地に行かれた迄の道筋は、最も價値ある部分であるから、更に詳細の說明が望ましいのである。普通ならば時間は少し早くとも、破風山を西に下りて秩父側の木賊谷を二十分間も降れば水が得られるから、其處に野營して翌朝國境の切明けを西に辿る方がよい。三時間で樂に木賊山に登れるし、路も器械體操を演出する程困難ではない。

鷄冠山といふのは、鮫の齒のやうに聳立した崎岩の列が、鷄冠に似てゐる爲に名付けたので、木賊山の絕頂から南に延びた尾根の或部分に特別に與へられた名稱であるから、尾根が續いてゐるとは云へ、遙に高い絕頂までも其名で呼んで差支ないといふ程自由な性質のものではない。木賊山に對する甲州方面の別名として、雲切の名と共に保存すべきものであらう。鷄冠狀を爲してゐる大磐石は勿論花崗岩に相違あるまい。赤志附近から西を望むと直ぐ目に付くので、近所に人でも居れば

誰も其名を聞いて見たくなる。

甲武信國師二山の間の連脈は、自分も僅に一度通過したのみで、其時の記憶や手控を基として書いた「秩父の奥山」の記事以外に、立ち入つて彼是言ふ程まだ自信がない。それで一先づ茲に筆を擱くことにする。唯一言したいのは奥仙丈岳のことであつて、君は奥千丈嶽の字を用ゐ、二千四百九米突の地點を夫と主張せらるゝ所から察すると、金峰山圖幅を根據としてゐられるやうで、聊か物足らぬ感が起るのも已むを得ない。又故荻野君の國司嶽紀行に、奥仙丈岳を通過した記事があるのを訂正されたのは、あの紀行發表の當時ならば格別、一目瞭然たる金峰山圖幅といふ詳しい地圖が出版された今日、荻野君の通過された山が眞の奥仙丈岳でない譯や、奥仙丈が奥千丈と字が變つた譯をも說明してなければ、何の價値もないことを茲に記して置く。尙ほ秩父山脈は東の雲取山から西の金峰山に至る迄、國境を通行する以上は、行路險惡と稱す可き程度の箇所は一箇所もないことを自分は責任を以て保證するものである。(木暮理太郎)

山岳のクラ及びチヲの語原に就て

「山岳」の四十一年十一月號で、私は「日本山岳にクラの名稱多き理由」と題して、書いて置いたことに就き、友人野尻正英氏から、音韻學者なる甲府中學校長大島氏の創見として、この語原の新說を示敎せられた、大島氏の說は左の如くである。

「倉(クラ)と鞍(クラ)と同義なりとするはあやまれり、「堀(ホリ)る」に對し、「洞(ホラ)」の名詞ある如く、「穿(クル)る」に對し、「クラ」の名詞ありて穴の類を指すならん、クの音多く穴ある物、又穴をあくるものに關係す、クチ(口)クダ(管)クキ(莖)クギ(釘)クヒ(杭)クシ(串)など、此例なり、クキ(軸)は、古言にて山の洞の事なり、案ずるに「倉」の古義は、岩窟にて、古代そこに物を貯藏せしならん、今日、猶この例を見る事あり、後岩窟より建築物に意味移る、物

の貯藏所の意となりしなるべし。「鞍」のクは「倉」のクと異なり、下の義を有す、これに上の義ありと云ふは如何。クラは上より、乘るものゝ事なり、坐るものゝ事なり、座鞍は此の義より出づ。跨り乘るの形容にて、山の名にもクラを用ゐるも、亦此義なり、「鞍」「座」同義。更に「位」のクラも同義なり。又「比ぶる」は位置の比較に基ける語ならん。

クには高の義なし、クモ（雲）は全く語源を異にす。」

野尻氏、附記せられて言ふ、右に依れば乘鞍岳、高御位山等は、同義を根とし、荒倉山、高倉山等の倉は、鞍の轉訛か、又は形より來たものであらうと。

又前號の私の尾根の語原に就いて、同氏が或學者の説として、報知せられたところに依ると。

『峯は尾の如く曳くより、起れるものにて、語原は寧ろ尾にあるべき、脈も亦同じかるべし、根も「の上」の略語ならずして、やはり「曳いてゐる」といふ意なるべし、屋根の語は、偶ま古代民族が、屋根を土に接し居りし言語學上の斷定を下し得べく、床は緩處にて、草など引きし、小高き土地の、ゆつくりせる場所を示し居るが如く、岡は尾のあり處」ならん』と。（烏水）

大井川上流の流量

今は不成立にて、解散したれども、日英水力電氣會社が、大井川の、田代より井川、島和合の村落を含み、西山澤に到るまでの水源を囊括して、水力電氣事業用の貯水池を作成せんとしたるときの説明書は、大井川水源池の流量に就いて、參考となるべきものあるを以て、左に摘載す。（K生）

日本内地の高山に於ける雨雪量は、極めて多く、而かも其水源を是等の高山に有する河川は、概して奔湍激流に富むと雖も、地勢上多くは、其延長甚だ長からず、隨て一年中の流量極めて不定なるを免かれず、夫の大井川上流の如きも、季節によりては、其最大流量、優に一秒時八萬立方尺に達するも、最渇水の時に於ては、僅かに三百六十四

立方尺（古老等が六十年來の渇水と唱へし明治四十年二月、井川村に於て實測せる流量）に過ぎず、是則ち日本の水力事業が、特に貯水池を必要とする所以なり、併しながら貯水池は、決して何れの河川にも、築造し得べきものにあらず、唯天與の形勝を具備する地點に於て、始めて之を作ることを得べきなり、彼の墨西哥國「ネカクサ」水力電氣事業の如きは、渇水時に於ける流量僅かに七十五立方尺に過ぎず、故に此最少流量を以て計算すれば、二萬馬力弱を發生し得るに止まれども、數箇の貯水池を築造して、以て優に二十四萬馬力を發生し得べしと云ふが如きは、實に天賦の形勝を利用したる好箇の一例にあらずや。

夫の大井川貯水池の堰堤は、井川村に於ける本川の屈曲狹隘部に位し、其兩岸は天然の岩磐聳立して相迫まり、堰堤より上流は、急かに展開して、河水も亦比較的緩流をなせり、其地勢實に最良の貯水池を設くるに適し、宛然一大財囊の如し。

井川村貯水池は、面積約七十萬坪、水量約卅四億七千萬立方尺にして、一秒時三百立方尺の水を單に此貯水池のみにより、供給するものと假定して、尙能く四ヶ月の久しきに耐ゆることを得べし、而して大井川に於ける渇水期は、冬末より春初に至る約三ヶ月間に過ぎず、此期間、自然の流量に加へて、貯水の幾分づゝを引用するとせば（貯水使用の爲め貯水池水面の低下をも算入して）一年を通じて、優に六百十二尺の落差を以て、七百三十立方尺の水を使用することを得べし。

「飛驒遺乘合府」を讀む

「飛驒遺乘合府」といふ本は、飛驒國に關する野史私乘の、世に遺つたものを、求め得る度毎に、謄寫合綴した叢書で、原本は岐阜縣下を搜索しても、斐太中學校に一部あるのみである、この本の撰者は、この國の小八賀鄕、桐山村の名望家、桐山勘兵衛といふ人で、安政五年に四十九歲で病沒した、今度その遺族の桐山磐根氏が、先人追考のために、之を飜刻して、弘く世間に流布することになり、同國の篤學者、岡村利平氏が、囑を受け、

原本の卷冊に秩序のないのを、見よくするために、社寺、地誌（紀行文を含む）『雜抄、史傳の四部門に分ち、部分的に異本類本あるものは、嚴密に校合せられ、叢書中に收めてある一々の書目に就いて、解題を加へ、一冊に纒めた印行本として、世に出されたのである。そして本書の出版書肆は、一意專心、この洵美なる鄕土の紹介に全力を注いでゐられる、同國高山町の住伊書店主人、住廣造氏である、素より興味を主とした書籍でなく、飾りッ氣のない、山川の地誌、生國に對する執着の力で、書き溜めた鄕土の史料であるから、始めから至つて少數の讀者を有する約束の下に、生れたものであるかも知れぬ、併しながらかくの如き美くしい人情の動機に依つて生れた、貴重なる本書に對して、私は紹介の義務を負うのを悅ぶのである。

本書を通覽するに「社寺」では、神社佛閣の緣起を主として、碑文から狐憑きの記錄にまで及んでゐる、「雜抄」は主として、古典文學から、この國に關する部分を引抄したもので、和歌から、芭蕉翁の俳句、關ヶ原合戰記をまで、涉獵してゐる、「史傳」は、本書を重からしむる部分で、軍記、物語、日記、由緒、系圖類を網羅してゐる、更に追加として經文、牒狀、家系を加へてあるが、私が最も愛讀する本書の部分は、地誌の一部門である。

地誌の部門に收めてあるものも、亦他の部分と同じく、片々たる隨筆類か短篇集で、何等力のこもつた製作は無いやうであるが、その片言隻句は、質樸で、擬ひものがない、さうして一二の修飾した紀行文類を除けば、山民の生活史としても、鄕土藝術としても、立派なものがある、就中山民の生活史として「高原舊事」を取り、鄕土藝術として「飛驒枕發句集」を取る、前者に於て私は飛驒の美くしい山川、殊に高原川や、雙六谷に於ける山民の生活狀態や、自然に對する驚異、恐怖の心の、發露を伺ひ、後者に於ては、更にそれが日本人の通有性なる微温的審美心に觸れて、美麗なる詞章となつてゐるのを感ずる、「高原舊事」に就いては、私は双六谷の描文で、充分に書いて置いたから、こゝには何にも言はない、「飛驒枕發句集」

は、この國のジレッタント、津野滄洲を主人にしての俳句會及びその句集で、題詠の中には、乘鞍岳や、笠ヶ岳が交つてゐる、天生峠もあれば、中山七里もある、特色のある山岳文學で、私がこの叢書中から、發見して驚喜したのもこれである。

この稿本は、安永五年（一、七七六年）に成つたらしく、「洛の蝶夢老師は、予が折簡の交なりしが、安永の今年、文してその國に名だたる、雅俗の奇蹤の句を見んとあるに、頻に古人の句を尋ね求め、あるは今人に語りて、見るに隨ひ、聞にまかせて、得たるを、小冊になして、洛に贈り、わが方にも留め置きぬ」とある、撰集の主人が諸國行脚の俳諧師を、宅に留めたり、文通して、遠近の風流人に句を求めたりして、閑寂なる山の町に、この集を編んでゐたかとおもふと、その人の風格が偲ばれる、安永は德川幕府の、極盛を通り越さんとして、江戸には狂文、狂歌、浮世繪、歌舞伎等の民衆藝術に、市民が浮身を窶つして、其日其日の歡樂を追ふてゐた時代であつた、かゝる時、日本アルプスの山村で、この太古の如き無事泰平なる句集は成つたのである、私は數多き句集から、一句二句を拔き取つて、見本とすることの、愚かしきを知つてゐるから、こゝに引抄するの勞を免かれて置きたい、けれども

かんこ鳥迷ふ路さへなかりけり　其汀
名の知れぬ草を尋ねん人もなし　巴國
天生（あもう）から取り出すものや雲の峰　仙兒

などいふ「天生峠」の句だけでも――それが月並調であらうが、無からうが、――山岳文學の特色を認めるのに充分であることを認めて置きたい。

文學としての本書を、紹介するつもりでは、初めから無かつたのであるから、こゝらで「飛驒枕發句集」の話はやめにする、要するに「高原舊事」と「飛驒枕句集」とは、興味を主としない本書の中でも、おのづと最も興味に富んでゐる部分であり、且つ最も私の好むところに近い文書であることを言つて置く。

終に臨んで、住君が「飛州志」「飛驒山川」「飛驒遺乘合府」と、都人士も企て易からない浩瀚なる

大冊を、續々發行して、この國の、地誌、史跡、文藝を照明ならしめてゐる努力に、私は同感してゐると共に、是等の事業に伴なふべき種々の困難から、君を自由ならしめんことを希ふものである。　（小島）

本號挿圖「立山谿谷の新雪」解說

三年十月七日午前十時、雄山の絶巔に立ちて、東面直下の深谿を俯瞰せるものなり、蹉ぎ落ちし巉巖の下、こゝに廣くゆるやかなる一傾斜地をつくる、立山連峰中、最も宏大なる積雪を有せる谷にして、夏季にありては、殘雪甚だ多く、風雨の浸蝕作用によりて、彫り刻まるゝ無數の細溝、萬條の銀絲を投げたる如く渦をなして、一種の奇觀を呈す（高山深谷第一輯に「立山深谿の雪と雲」と題して挿みしは此谿の一部なり）、立山は大抵九月初旬に初雪を被るを常とす、（初雪期の記錄は登山通信欄に寄せしを以てこゝに省畧す）、本年は甚だ晩く、九月二十七日に初雪し（平年より晩き事十四日、昨年より晩き事實に二十三日なり）、更に十月三日再び降雪し後、四日を超へて撮影せるもの此寫眞なり、背景の晴きは、黑部の大森林なり、澄み亘りたる秋の光は、コバルト色の空より、濃き紺青の谷に、其影を投げて、繽紛として新たに積れる白雪を照し、壯大なる巖壁と相映じ、或は瑠璃の光を宿し、或は翡翠の色をひそましめ、純潔莊重の美、吾人に迫るものあり、印畫として現はるゝ時、其同一感興を、人に傳へ難きを憾むのみ。（他は「晩秋の立山」參照）　（石崎光瑤）

雜報

山岳會展覽會

山岳趣味を鼓吹する爲に日本山岳會は今度第二回關西大會を京都府立圖書館樓上に於て開會することになつた、一日は其初日である

▲登山用の天幕　先づ會場入口の登山用の天幕は第一に眼に附く、天幕の上には日本山岳會の記章が附せられて、入場者は早や山岳に一歩足を容れた樣な氣分になる、ソレから順路圖書館三階の北會場の入口に行くと、我本土中央部の地圖が展べられてある、南北中央の日本アルプスの壓然其所在が知れる、其傍には登山用及び動植物採集の器具がゴチャ〳〵と陳列せられてある。

▲北館の陳列　北館には日本アルプスに關係ある參考品が陳列してある、富士の寫生圖、御嶽、廣重の日光、鳥海山、淺間山、箱根山等の錦畫、山の護符、京都大學地理教室から出品したる礫石、神保博士の北投石、加藤理學士の白馬岳氷河擦痕石刷は何れも面白いのである、例の平瀨介翁は內地產陸貝數十種を出品して居る、雷鳥二羽、高島北海氏篠信飛騨峰の屏風は珍らしく、場の中央には富士の立圖が置いてある、これは富士登山者に餘程便利なものであると思はれた、高山の動植礦物も陳列せられて居る、其他日本アルプスの寫眞、水彩畫が所々に揭げられて居るのは餘程興味を惹いた。

▲南館の陳列　北館から南館に傳ふべき廊下には山岳會幹事高野應藏氏が各地より收集した雪眥、水彩畫、高山動植物の圖などが揭げられてある、南館に入るとこゝは歐米アルプスに關する器具書籍が陳列してある、先づ眼を惹くのは中山文學士の出品して居る墺國式スキー用具及びアルプス山越に使用せし旅行具である、それからマッタホーンの模型、歐米各國の山岳雜誌、アルプスに關する書籍、氷河の寫眞、大谷光明氏出品のエバレスト山頂の寫眞は面白く觀られた、此館の一隅に日本ツーリスト・ブウロー出品の大正二年度の外人到來統計が圖說してある、それによると同年度に到來した外人の總計は二萬千八百八十六人、其の最も多きは支那人七千五百人、次は米國の五千人、英國の四千人、露國の二千五百人、獨逸の一千人、佛國の百四人等は要なるもので伊、墺、和、白、西、諸、瑞等は殆ど七百名未滿であるさうな。

▲講演會　山岳會の展覽會は一日より三日間であるが講演會は一日午後五時半から京都大學學生集會所に於て開會せられ、比企工科大學助教授の山岳と岩石、小島烏水氏は飛騨山脈に於ける雙六谷の探檢、岩村理學士のホインパー氏と歐洲アルプスの雄峰アッタホーン（幻燈使用）と題する講演があつて午後九時散會した。

▲招待會　山岳會關西大會の爲に態々東京から入落した小島烏水、高野鷹藏、岩村圓、三氏の爲に歡迎會を、一日午後一時から京都大學學生集會所に於て開會した、出席者は約五十名にて、總代今村住友銀行京都支店長の歡迎の辭、小島烏水氏の答辭あり、午後三時閉會した。

◉夜の山岳會

日本山岳會は關西に山岳趣味を鼓吹する爲に目下京都府立圖書館樓上に展覽會を開いて居るが一日午後五時より京都大學學生集會所に於て講演大會が開かれた、幸にも此日は休日の事であつたから聽衆は極めて多く定刻迄に五百を算し、田邊、小川(琢治)の兩博士、比企工科大學助教授に民間登山黨の旗頭今村住友銀行支店長の顔も見えた、やがて高野鷹藏氏開會の辭に山岳跋涉は決して危險なものでない極めて安全なものだと述べて山岳趣味を鼓吹して降壇し次で小島烏水氏が演壇に現れた。

▲日本アルプス　演題は飛騨雙六谷の探檢と題するもの先づ冒頭に歐洲に於て最初に山登りをやつたものは英國人が主であつた、然るに近年に至つては獨逸人が旺んに山登りをやる、何しろ獨逸人は忍耐性に富む活力旺盛の國民である、日本アルプスの地理的記述をしたのは我國のガイドブックを書いたチャンバレーン氏である、ソレから地震學で有名なミルン氏、造幣局の雇であつたウイリアム・カウラン氏であるが日本アルプスの名稱を濃飛の連峰に附したのはウォルター・ウエストン氏であつたと述べ、それから日本アルプスの地質を詳細に述べて氏は本年夏八月飛騨の高山にあつた山岳會に出席し人々にすゝめられて旅裝を整へアルペンストックを手にして本郷村に出で雙六谷を跋涉し幾多の危險を冒して雙六谷の水源に達し雙六谷の舊記、口碑を始め興味ある物語を一時間もやつて大喝采の裡に降壇し、

▲山岳と岩石　比企工科大學助教授は岩石の種類を水成、火成、變成岩の三つに區別することを素人分りのする樣に述べ、次で近畿の構造線を圖說し、滑稽交りに面白く物語つて大向ふの喝采堂を動かし此時記念の撮影が始まつた、山好きの大谷光明師、岡本梁松博士の顔も來賓席の一隅に現れた。

▲幻燈の說明　これから愈幻燈が始まる英國のウインパー氏がマツタホーンに登らうとして八回も失敗し九回目に漸く成功した危險なる物語は血湧き肉躍るの感があつた、殊にウインパー氏がマツタホーンの項上に達した時の幻燈は聽衆に登山の愉快なる印證を與へ下山に際し同行者が三人迄變死した物語には哀れを催ぼさしめた、此幻燈が濟むと今度は日本アルプスの幻燈が初まつた、說明者は高野鷹藏氏で如何に山嫌ひな男でも一度は日本アルプスに登りたい樣な氣分が湧いて來る、斯て午後九時過ぎ多大の成功を收めて散會した。　(大正三年十一月三日大阪朝日)

各山雪降る

●妙高山の初雪

上越後地方は九月二十七日朝來降雨あり冷氣一入にて夜に入りては降霰さへ見るに至り信越國境妙高山には白雪を頂くを認めたり。

●淺間山の降雪

淺間山頂は九月廿八日朝氣壓頓に降下し參四度に至り廿九日朝は四十度となり前掛山麓迄降雪ありたるが長野測候所に於て同山に測候所を設置以來九月に於て降雪ありたるが如き事は未だなき由なり最近に於ては一昨年の九月廿五六日頃湯の平に降霜あり氷を結び十月十一日頃降雪を始めて見たり昨年は九月廿五日頃芦の平に於て氷を結びたる程なりしと。

●御嶽駒ケ嶽初雪

九月二十九日朝、木曾御嶽駒ケ嶽は五合目迄初雪降りたり。

●白山降雪（金澤）

九月廿九日縣下白山に降雪あり前年に比し廿八日遲く例年より五日早し。（以上三十日發）

●富士の大雪

富士山麓一帶の地は九月二十九日夜來寒氣烈しく人々は綿入に外套を纏ふの有樣にて殊に御殿場附近は三十日午後より霙交りの降雨あり恰も十一月頃の季節の如し山上は木立附近迄白皚々と雪降り積りて尙歇まず。（小山）

●男體山の初雪

九月三十日、日光男體山に初雪降り七合目迄眞白になれり氣候も俄に冷氣になり十月二日午前九時頃華氏五十五度を示しつゝあり。（日光）

●日光初雪

日光白根山及び二荒山に九月三十日來降雪あり中禪寺二荒澤一日の溫度、三十度、日光は四十二度也。

●初雪降る（盛岡）

十月一日夕巖手山七合目迄初雪降る、昨年より十三日早し。

●農鳥山に雪降る

△之れ本縣下の初雪

山岳愛好家の常に其美を嘆賞する南巨摩郡西山村大字奈良田字農鳥山恩賜林に九月三十日夜降雪あり峰より中腹迄白雪皚々として積り深さ五六寸に達し美觀得も云はれざりし由此雪本縣下の初雪にして來年夏期迄は消ゆる事なしと。

●駒ケ岳道路視察

木曾駒ケ根村にては駒ケ嶽登山路へ村にて相當補助をなし開發を計るにつけ芦鳴道と德原道との回遊線を作らば好都合ならんとて視察の爲め九月廿八日澤木村長和木土木主任書記、上田、山下、

宮下三村會議員、宮林本社特派員等一行十二人芦嶋道より登山し玉ノ窪一泊翌廿九日折柄三寸餘の初雪を蹈破して頂上をかけ德原道を下りたり芦嶋迄には途中キビオの瀧あれど非常の險路にて先づ絶望し德原道を專らとして補助せんとの事也。

●赤石登山

上伊那農學校長河野齡藏、松本女子師範學松長矢澤米三郎、松本高等女學校教諭岡田邦松、諏訪中學校教師牛山傳造、下伊那郡大河原小學校訓導前澤淵月の五氏は下伊那郡大鹿村澤井の獵師宮下牛五郎を案内として人夫四人に食料其他を負はせ赤石の連脈を蹈破すべく八月二十六日午後一時鹿驚を發し驚川を溯りて廣河原經木小屋泊り二十七日早天廣河原發尙驚川上流をきはめ南澤より尾根傳ひに三伏峠に出で中俣を下りて沿岸に野營二十八日は驚見嶽登攀の途に就きたれど濃霧は雨と變じたれば嶽麓の林中に野營せるが二十九日以後驚見をきはめ北荒川嶽に至り三峰川上流に下る。

會報

本會幹事の改選

本會々則に由り特別會員の選舉に依りて從來十一名の幹事は會務益々繁多なるを以て十二名に增員、左記の如く任命されたり、何れも從前の幹事重任に決し一名の新任幹事を得たり。

高頭仁兵衛　農學士　辻村伊助
工學士　辻本滿丸　中村清太郎
理學士　梅澤親光　理學士　山川默
小鳥久太　三枝守博
高野鷹藏　（新任）　木暮理太郎
（在英國）武田久吉（在朝鮮）法學士　城數馬

辻村、近藤兩氏遭難に就て會員諸君に謝す

別項所載の如く、本會幹事辻村伊助氏及び會員近藤茂吉氏のスイスに於て遭難するや、會員諸君より懇篤なる御慰問狀やら御問合せを蒙り、獨り兩人のみならず、本會も亦同志の士の御厚情を感謝するものなり、誌上にて會員諸君に深謝す。

會員辻村、近藤兩氏の歐洲アルプスに於ける遭難に就て

會員諸君の多く、日々の新聞紙上に一行でも山の記事を見出さうと、注視さるゝ諸君は、九月下旬の新聞に何時も山の事とさへ云へば、淺間が噴いた、やれ燒岳の灰だ、と云ふ外一行だにあつたためしのない紙面に、然かも大きな活字で「邦人のアルプスにて遭難—氷山から墜落」と云ふ意味の記事を見て、愕然として驚異の目を聳やかさないものは、絕無であつたらう、現に自分は、新聞の紙面より、山の記事をつまみ出す事の、徒勞で

ある爲めか、山の記事があらうとは思はず、遂ひ此記事をさへ見のがしたのである。此事實を知らずに過された諸君、及び此記事を讀れた諸君の爲めに、事實を述べる事にした。

此記事が出ると、懇篤なる御見舞やら、問合せやらを寄せられた諸君に、畧儀ながら本人等に代つて紙上で厚く御禮を申上げる。

新聞の記事は先づ次の通りである。

○邦人アルプスにて遭難

▽氷山から墜落

『日本山岳會の辻村伊助氏は會員近藤茂吉氏（何れも東京）と共に昨年十一月渡歐し、瑞西アルプス連山を跋渉の上、來十月二十六日横濱着の便船にて歸朝の筈なりしが、八月下旬近藤氏と共に强力二名を雇ひ、アルプス峻嶺ジベックホルンに登攀せし頂上間近にて雪崩の墜落に逢ひ辻村、近藤兩氏は雪崩と共に僅々二分間にて千四百米突許り墜落し、辻村氏は全身打撲、近藤氏は足部を挫折し目下瑞西の病院に入院中なるが本年中には歸朝覺束なかるべしと、右墜落箇所は登攀するに四時間を要する高所にて之を二分間にて墜落したるものなりと（九月廿八日東京朝日新聞）』

此記事は、大體に於て正確である、實は此事實は、決して新聞社が海外からの通信を得て、載せたわけではなく、自分の口から他に話したのを、廻り廻つて新聞に載つたのである、初めて此事實の報知が來たのは九月も末に近い時であつた、それは既に約一ヶ月の病院生活を了り陸路伊太利に向ひつゝあつた頃である、（戰爭の爲めに通信が非常に遲れた爲め）八月十日附インターラーケンから稍々詳しい書狀が來た、それは大體前掲の新聞の記事の通りである、只だ、山のほんとの名は Gross Schreckhorn（4080m.）であつて、事の起つたのは八月一日（八月下旬に非ず）墜落した距離は約四百米である。

七月の廿五日未だ大禍亂は、芽生への時分に、北の國スカンディナビアの旅を了り、獨逸から山の國スイスに入つた辻村君は、丁度ロンドンから巴里を經て來た近藤君とインターラーケンのベルネルホッフと云ふ宿で落ち合つた、先づ第一に登山

の準備をせねばならぬ、次でガイドを雇はねばならぬ、ふとした事から、緑と云ふのであらう、先年加賀君（正太郎）が、つれたヘスラーと云ふガイドが或事から訪ねて來た。

此二人、遙かの東の國から山に憧れて來た、「山登り」の計畫は、實際に、おゝそれたものである、約一ヶ月にして四千米突以上の山のみ十座も踏破する筈であつたのである。

七月廿九日には、總ての準備をしつらへて、ヘスラー及びプホイスの二ガイトをつれ、インターラーケンの宿を出でグリンデルワルドに車を捨てて、愈々登山の道についたのである、最初の目的は Gross Schreckhorn（四〇八〇米突）の登攀であつた、天候の爲め Bäregg の小屋に二泊し、次で Grindelwald 氷河に沿ひて、Strahlegg の小屋に一泊し、八月一日の午前二時、結束して出發し午前十一時半には既に、目ざす絶頂に達するを得たのである、下山の途中（時間、及び位置不明）雪頽れ（Snow avalarche）に遭遇し、三時間を要して登れる、約四百米突を、二分時に押し流され、幸にもクレバスを飛び越して、氷河の基底に達し停止するを得、幸運にも此一行四人は、九死に一生を得たりと雖も、近藤氏とガイドの一人ヘスラーは共に右足を挫折し、辻村氏は全身打撲傷を負ひ、何れも山下に運ばれ、八月二日にはインターラーケンの Bejirks-Spital と云ふ病院に横臥せねばならぬ事となり、プホイスなるガイドは最も輕傷にて、自宅にて治療しつゝありきと。

此病院に在る事約一ヶ月、八月の末には漸くにして退院するを得たれども、尙ほ歩行を禁ぜられ、其後三週餘りを、とある湖畔に送りて、漸くにして九月廿五日には伊太利ミラノに出づるを得、ゼノアを經てマルセーユに陸行し、そこより、吾が香取丸に乘りて、ロンドンに歸り、今は辻村氏は、再び香取丸に乘船歸朝の途に向ひつゝあり、近藤氏は、ロンドンより途を亞米利加に取り、何れも、此雜誌が、諸君の膝下に至る頃は、再び日本の土地を踏む時となるべしと思へり。

山中に此珍事出來せる時は、既に歐洲の風雲は急に、國交斷絶し、スイス政府は、外國人の國境

外に出るを禁止し國境には軍隊出動して事に備へ、銀行は硬貨の支拂を停止し、あらゆる交通通信機關は、其機能を失したり、此時には、よし健全の者にても、國境を越ゆるを得ず、ましてや、病床に横はる者には、心の悶へ身の苦しみ想像するに難からず、幸にして身體も舊に復し、國境を越ゆるを得たるは、望外の幸なりと云ふべし。

詳しき事などは知るに由なし、何れ再び諸君に其事實を傳ふる事あるべし。

「雪頽れ」(スノーアバランシュ)とは、つもれる雪が重力の爲めに落下する事にて、日本にても春、雪どけの頃、屋根に積れる雪など自然に落下する事あるべし、此れの非常に大なるものと思へば可なり、日本の如く、夏尙ほ高山にも雪少き國には、夏に「雪頽れ」の起る事絶無なりと雖も春、雪解の時には、日本にても間々人のそこなはるゝ事あり、アルプスに起る慘事は、毎年に數多くあり、其多くは墜落クレバスにも、岩角よりも＝此「雪頽れ」に遇ふ事なり。

案内書に由れば、此グロッス、シュレック、ホルンは、非常に急峻にて、其一面にのみ雪を附けたり、斯る狀態にある山は、極めて雪頽れの起り易しとあり、此れ極めて早朝出發午前中に頂上に達する次第にて、午後となれば、日は既に高く、温度上昇して、雪田(フェルン)は、其結束力弱く、雪頽れは多く、午後に起るべきが故なり。

此二氏の遭難は、極めて偶然の出來事にて、總ての點に於て、登山の方則に反したる事なしと云ふべし、即ち萬全の注意を怠らざりしと雖も、天運の遂に避くる能はざりし次第なりと云ふべし、冒險者の亞流なりと速斷するは誤れり、是を以て危險を說くは、街路を歩むの危險を云ふに等しかるべし、登山の危險率は、電車の人を轢く割合よりは遙に少なりと云ふべきか。

（大正三年十一月十九日蝶郎生記す）

會員小林浪三郎氏の卒去

會員小林浪三郎氏十月六日の夜九時腦溢血の爲め突然卒倒死去されたり、行年三十一、嗟悲しい乎、本會は前途多幸の會員を失ひし事を悲しみ、氏の

朋友家人の悲しみを懷ひ、深く哀悼の意を表す。左に氏の親友なる會員鄕道三郎氏の書面を載せて氏の小傳に代ふ。

……同氏は元來頗る多趣味の人にて謠曲清元生華ヴアイオリン寫眞等總て堪能にて就中寫眞は……たるもの從て旅行も亦好物にて平素……乃や五萬分地圖を座右に備へ餘暇ある毎に遊歷致し居候即ち同氏と野生とは小學時代よりの友にて職務位置境遇等は悉く異れ共旅行趣味のみは一致せるものか兩者の話題に上るは旅行のみに御座候會て吾が山岳會の趣意を聽き雜誌を見て羨望に堪へざりけん自ら進んで入會せしものにて今秋の大會に出席することも得ず遂に他界せしは實に遺憾千萬の次第にて候回顧すれば數日前「今秋は大分二日續きの休日があるが旅行の方面は」「いや無論行くが發表は出來ぬ」等の愉快なる會話を交へたるも永遠の別と相成申候通夜の際父君後庭より櫻の返り花を折て柩前に備へ「是は伴が生前に見出した花で今開きましたから手向ます」と涙に暮れて語らるるを見て

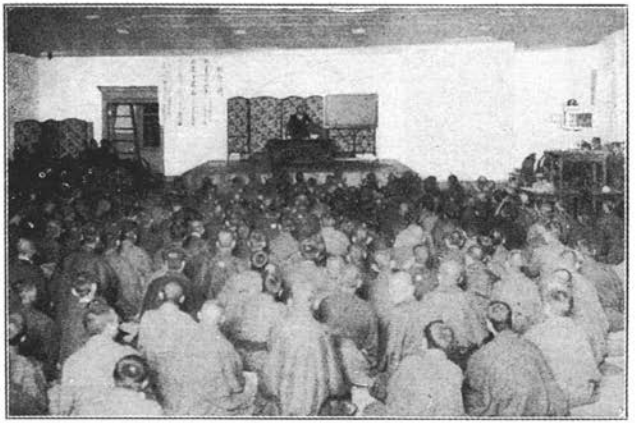
思ひきや君の見つけし返り咲
みたまの前に手向せんとは

高山深谷第六輯の發行

時局の影響は、遂に「高山深谷」の發行に迄及び、材料に藥品に甚しき打擊を蒙り、到底發行を敢てし難き憂ありしが、今年に限り發行を斷念するも如何あるべしやと思ひ、斷然其等の困難に耐へて、更に美裝して世に出でんとせり。本輯には新歸朝者辻村伊助氏の歐洲アルプスの寫眞を加ふる筈にして、內容外裝共に時局の困難と戰ふの覺悟を以て進捗せしめつゝあれば、希望者諸君の一日も速に豫約あらん事を。（詳細は本誌廣告にあり）

第七回大會の記

豫報の如く、十月廿五日、東京赤坂溜池三會堂に於て、開會せり、陳列室は、午前十時に開き、引



日本山岳會關西大會々場（石崎光瑶氏撮影）

きも切らざる來會者の中に、午後四時となりて、陳列室の閉鎖と共に、一同の來會者を階上に移し、五時梅澤幹事は、事務報告に兼ねて、外遊の辻村近藤兩氏遭難の報告に及び、それより講演に移り、理學士佐藤傳藏氏は、櫻島火山に就き、同火山の一般地形、及び地質より、說き起して、最近噴火の說明に移り、緻密明快に解說し、次いで幻燈を使用せられ、同地の部分々々に就き、畫的(グラフィカル)の講話あり、聽衆一同の感謝を荷ふて降壇せられ、會員大木操氏は、小黑部を溯りて劍岳に登攀せられたる、日本北アルプスの探檢談を、數十枚、の美麗にして印象的なる幻燈に依りて、逐一講話せられ、滿場の耳目を聳てしめ、右擧りて喝采の中に十時散會したり。

當日の出品物は、殆んど其全部を、京都に開かれたる關西山岳會大會に出品せられたれば、詳細は重複を避くる爲、同地山岳會の出品評判記に讓る。

當日の來會者中、本會の名譽會員ウォルタア、ウエストン氏は、横濱より、信濃山岳會長矢澤米三郎氏は、信州松本より出席せられたり。

第七回大會出品目錄

白井光太郎氏

日光松島紀行文○日光山沿革畧記○日光名勝記○晃山愿從私記序○遊中禪寺記○日本及日本人○開山勝道上人和讃○日光のまるべ○日光山紀勝○繪卷物三卷

加藤鐵之助氏

日本北アルプス地質想像斷面圖○白馬岳山頂岩石瘦石圖

岩村圓氏

Das Matterhorn ○ Das Kittellern in Fels.

梅澤親光氏

旅行要心集○東海道五十三次（國貞）

矢澤米三郎氏

高山植物標本と其掛圖二冊三幅

中村清太郎氏

朝の山頂（御岳山）油繪

片平重次氏

Relief karte von Bayerischen Hochland ○ Alpine Zeitung.

神保小虎氏

Nikitin's Hemisplier ○獨乙の天然紀念物保存協會雜誌○史蹟名勝天然紀念物保存協會雜誌○臺灣總督府にて保護せる北投石

池野成一郎氏

Alpenflora.シャモアの革にて作れる財袋○寫眞○アルバム四冊

小高秀一氏

八ヶ岳に關する資料二冊○乘鞍岳（油繪）○常念岳（油繪）

田中阿歌麿氏

諏訪神社御柱祭の御柱曳に用ゆる採配及寫眞

小島久太氏

Hulem—Familiar Swiss Flower 一冊○ Bormey—The Building of the Alps 一冊○ Hobbs—Charactristics of existing glaciers 一冊○ Coolidge—The Alps in nature and history 一冊○ Coolie—Climbine on the Himaraya and other mountain ranges 一冊○ William's—Thg guardians of the Columbia 一冊○ Williams'—The mo mountain thatwas God 一冊○ Henshaw-Mountain wild flower of Canada 一冊○ MacSpadden—The Alps as seen by the Poets 一冊○ Workmanl-ce—Bound heights of the Mustagh 一冊○ Hitchcock—Hawailand its Volcanoes 一冊○ Swiss Pictures 一冊○ 重廣重の版畫＝日光（畫帖）出羽鳥海山○信州淺間山○鳳來寺山巖○飛驒甑渡し○甲斐さるはし○越中富山船橋○越中立山○前橋細澤○岡部う津の山之圖○箱根○日光霧降の瀧○伯耆大野大山遠望○日光寫見瀧○不二三十六景○富士見道中双六

米國アリゾナ州高原峽谷の景○ Grand' Canyon 地圖○ Transaction of theAsiatic Society 一冊○佐夜中山古版殘葉○金峯山御禮○岩茸採集版畫○山の護符

Rev. Walter Weston.

The Pioneers of the Alps 一冊

別所梅之助氏

Fitz Serald The Hiıhest Andes 一冊○ Coolidges The Alps in Nature and History 一冊○ Gribble's Alpine Climbing 一冊○ Lun—The Alps 一冊○ Stuck's—The ascent of Denali 一冊○ Hooker—The Himalayan Journal 一冊○ Schroter Alpen Flora

震災豫防調査會報告○日本名山圖繪

ジャパン、ツーリスト、ビユロー

案内記及地圖十七種○ツーリスト（機關雜誌）九冊○規則書二種○「過去一年間に於けるジャパン、ツーリスト、ビユロー」二冊○ジャパンツーリスト、ビユロー大正二年度事業報告○歐洲各國に於ける外客誘致に關する施設二冊○カード類十一種○ポスター十三種○大正二年中外人渡來圖表

高頭式氏

東海道百分之圖（淡彩）五冊○同上折本五冊○濃州志略七冊○北寒談彙五冊○戀後國志九冊○東遊記三部四十冊○帖畫一冊○畫卷一冊○鶉山道開鑿眞景一冊○甲斐國地圖一冊

齋藤薬三郎氏

古圖書—尼ヶ崎兵庫附近大繪圖○從尼ヶ崎至萩府道中細見記○秩父札所地三峯山大日向子持權現道筋案内繪圖○秩父三十四ヶ所順禮先達直作御影○岩代國盤梯山噴火圖○峽山崩之圖○駿河國富士山繪圖○富士山神系御山繪圖○諸國瀧廻○信州諏訪湖○一寸見なんし今年の新ばん○富士山頂圖○相州大山道田村渡之景○北越七奇談○信州戸隱山畧繪圖○丹波國大繪圖○丹後國大繪圖○京都繪圖○攝州平野大繪圖○淡路國全圖○大和國繪圖○上野國輿地圖○荷蘭圖○羽州一ノ宮島海山全部○弘化丁未信濃地震動山川崩激之圖○大日本國方角分形圖○不二紀行詩○詩詩之名所○聖德太子

日本國未來記○天地自意○日用晴雨管窺○名水品靈○秋葉山參詣道中細見圖○大日本神社佛閣御領見立番附○諸國一目道中記○國名風土記○阿部滿河地○規矩之法町見辨疑○訓蒙天地辨○多武山二十六勝志

關西大會の記

人文の發達は、日本人をして今迄のやうに、山岳を雲烟過雁視せしめるとを、許さなくなつた、近來日本に於ける山岳熱は、驚くべきほどで、其研究會講演會は、既に數ふるに遑がない、先づ東京を第一として京都松本甲府高山の各市には、日本山岳會幹事が招聘されて、山岳研究會講演會が開かれた、其他の地方で種々の方面から、山岳を對象とする會が開かれたのは、屢々新聞紙上で散見するところである、松本甲府高山は、日本アルプスの所在地の國にあるのだから、必然のことであるが、時是れ金、金是れ樓に近い京都で開かれ、しかも第二回目であるのは、他に誇る所である。

忘れもしない昨年の十月十八日、三高山岳會と京阪會員の努力とに依つて、未曾有の盛大な山岳幻燈講演會は實現された、(本誌第八年三號雜錄參照) 夫れ以來、京阪神地方に於て、山岳熱は非常に瀰漫された、殊に京都では、手近の比叡山は登山者のために一層頭が禿げ出した、大阪朝日新聞等は、夏期に山岳欄を設けて、登山談を載せ、會員今村氏の如き、連日怪氣焰を述べられた、九月頃果して山岳會の、關西大會實行の議が持ち上つた、今村、小山、石崎氏が發起者になり、京阪神在住會員に、夫々案內狀を發せられ、銀行集會所に集まつたのは、九月二十六日であつた、此席上で、今村委員長の劈頭の報告は、來會者一同を愕然とさせた、それは、辻村、近藤兩氏の遭難であつた、獨逸アルプスに詳しい、市村博士は、喋々と未知の吾々に、快辯を振つて說明してくれた、目睫に最も困るのは、今回の呼物とした豫定の辻村氏の幻燈講演のことで、これが不可能になつてしまつたので、鳩首凝議の結果、東京の大會の幻燈畫を、其儘借用することにして、其他の一切のとは、實行委員に一任することにした、それから各自今夏の登山談に移り、十時近く迄愉快に話し合つた。

十月十八日には、既に計畫成り、紀念繪ハガキの發行迄進捗し、市内各所に廣告するビラは、石崎氏が槍ヶ岳を雄渾に揮毫した、今村總指揮官、小山參謀、石崎遊擊以下大學三高の學生數名は、各々部署を定めて奔走し、京阪神の會員と、内外共に多大の補助を與へられた。

廿五日の東京の山岳會は、盛大の裡に終つた、大木氏の寫眞は、殊によかつたと、在京の友からの通信が來たので、こつちのが待ち遠しくなる、幻燈畫は高野幹事の好意で、會員岩村學士御講演のマッタアホルンを數十葉作つた上、時間の餘裕があれば、劍岳の幻燈講演もやるといふ通知が來た、又時局のため繁忙な小島烏水氏も、萬障繰り合せて入洛し、同じく多忙な高野高頭兩幹事をも、同伴することに確定した、四氏共に、秒刻を惜しむ劇務に關はる方々なので、遠く百三十里の西に來られた事は、斯道發展のためとはいへ、感謝の至りである。

廿八日から小山陳列主任の指揮で、幹部や學生連が、襯衣一枚になつて、活動する持ち込む出品物は、山の如く積まれてゐるのを、片ッ端から、整理陳列する、そこは多年經驗の小山氏のことだからヌカリはない、三十日には、大體終り、三十一日には、完全に出來上つて、何時見に來ても、構はぬやうに見事なものであつた、今村委員長の如き、繁忙な公務の暇を盗んでは、やつて來て、相格を崩して喜んでゐられる、大阪朝日新聞社の吉田記者は、寫眞師を連れて來て、場内を撮影せしめ、展覽會の概況と共に、早速紙上に紹介せられたので、洛の内外一層の評判となつた、同新聞紙上に、次の記事が載せてあるのを見ても、同新聞がいかばかり、山岳趣味の鼓吹に、力を注いで居らるゝかを、知ることが出來る。

▲十一月一日から三日間山岳會が、京都で開かれる、處と時とを得た多趣味の會合だから、其盛況は今から想ひやられる、山岳趣味を、鼓吹するに勉めた、我々は、滿腔の誠意を以て、斯會の成功を祈るものだ。

三十一日は、曉明西下の幹事を出迎へに行く、夜來の雨は、遺憾なく晴れ澄んで、關西大會を祝福するものゝ樣である、無事役目を終へて、直ぐ圖書館に戻る、アルプス入りを、憶ひ起す登山テン

トは、入口に張られてあるので、通行人は、目を圓くしてたかつてくる、京都山岳會には、附きものゝ日本晴だ。

十一月一日になつた、愈々吾々が努力の效果を樂しむ日が來た、下町の娘が芝居に出かけるやうな氣分で、岡崎公園さして、いそ〳〵行く、入口の階段前の廣場には、テントが雲霧ならぬ陽炎を、揚げて靜座してゐる、其頭には、小山氏考案の、奇麗に縫箔した、山岳會旗が、小春日和のやうな、軟風にそよいでゐる、八時半といふに、下足場には、數十の下駄が絶頂から見下した、家屋のやうに、ぺタ〳〵と並んでゐる、京大教授田邊(朔朗)博士の如きは、第一着の入場者なさうな、そして早速比企今村兩氏の紹介で、山岳會に入會せられた、此外此機會に於て、入會せられたる會員が、彼此十二三人もあつたやうだ、日本興業銀行理事岩佐琨藏君、大阪朝日新聞社員長谷川如是閑君、畵伯山元春擧君、都路華香君、等其重もなるものである、此の如き有力なる會員の入會は、我等の歡迎するところであつて、會の發展上誠に賀すべきことだと思ふ、其他山岳會規則書を請求せられたる觀覽者少からず、此等には夫々後から發送することゝした。

これから陳列會場、午餐會、講演會、に就いて述べやう。

「こんな小さいものに、砲彈が置かれまつしやろか」と登山用のテントを戰鬪用のものと思つてる、人のよい下足番から、草履を受取つて、石段を二階へと行く、三階へ近づくと、右手の壁に「アルプスは高くとも靴の音は低かれ」と張紙がある、成程下は、讀書家が沒頭してゐる圖書館だと、早く見たさに駈け上る、中學生徒も、足を忍ばせる、正面には、紀念繪ハガキを、山積した机があつて、榎谷氏考案のスタムプのある、瀟洒な一組二枚の繪ハガキが並んでゐる、一枚は高野氏撮影の槍ヶ岳と其雪田で、他は石崎氏が先月上旬撮られた最近の立山連峯である、其背後には、小山氏が接待係席兼司令部に在つて急がしい、石崎氏は「昨晩一時までかゝりました」と殘餘の繪ハガキに、ぺタ〳〵とスタムプを押捺してゐる、其前面の壁に

は中原君作の、日本アルプス臆測圖が着色されて目立つてゐる。

正面の第一室は、日本アルプス室で、寫眞、繪畫、用具、書籍、模型、動植鑛物が、具合よく充滿してゐる、こゝから、第二室に通ふ約半町程の尾根ならぬ、白壁には、丸山茨木諸畫伯又故大下畫伯の山岳畫及び其棚には三十九足の雪草鞋數個のかんじき輪かんじきが陳列されて、驚異の眼を張らせる、第二室は歐米アルプス室で、矢張り第一室同樣の陳列と、衆目を集めた、墺太利式スキーの展覽がある、此室の前には休憩所があつて、『山岳』全部を縱覽せしめて、周到にも茶の湯の接待までである。

出品物の精細の觀察は、雜觀子に讓つて、筆は忽ち、大文字山比叡山を右手に睨み、岡崎公園を過り吉田町は、帝大學生集會場の、歡迎晝餐會に飛ばう、午後一時に幹事三名及岩村氏を、主賓として、京阪神の會員及有志者は、南側大食堂に集まつた、着席するも遲しと、山又山の物語、或は內地外國旅行の成功談に、失敗談に、果はスキー登山談、經驗談皆とりどりに面白く、話の相手初めは、當面と隣席に限られたが、對角線に飛び橫に走り、終は蜘蛛の網の如く、放射し、一時は混線しさうな程で、フォークやナイフの雜然たる音も、どつと起る笑聲に、打ち消された、比企、大谷、京二中學校長中山三氏の間には、盛んにスキー談が、起つた、比企氏はノルウエィにて、止まらうとしても滑走鋭く、モンドリ打つて投げ出された、話中「むづかしいもんですよハヤ」なんどの、滑稽さには一同笑倒した、本年一月上高地雪中橫斷をやつた八木氏は、名古屋からわざ〳〵來會されて、親しく其實況を語られた、雪中の凍傷に及ぶや、隣席の三高の山本君は、北米タコマ富士登山の際、猛烈な凍傷で、鼻が落ちさうになつたので、慌てて病院に擔ぎ込まれた、苦楚談も出た、塚本氏は知る人ぞ知る、神戸徒步會の會頭で、嚴めしい登山服登山靴は、異彩を放つた、談戰酬なる時、今村氏は、會員を代表して、主賓に對し歡迎の辭、及び山岳會の發展に就いて、詳細述べた、山岳會創立の際、京都在住會員は僅かに一名に過ぎなかつ

たのに、今日は三十三名になつたといはれた時は感慨無然たるものがあつた、之に對して幹事を代表して、小島烏水氏が、鄭重な謝辭があつた、最後に今村氏は會員の希望に依り、自己紹介を提議して、すぐ如才なく名乘られた、一巡する中には隨分奇拔な、自己廣告もあつて、起立、着席毎に、拍手喝采は急霰の如く起つた、「私は石屋であります」の岩村氏は、よかつた「創立當時から會員であります」に對しては、「入會ホヤホヤで、未だ會員名簿にも載つてゐません」と返すのも面白かつた、之も終ると石崎氏は、寫眞機械を持ち出してボーイに握ぎらす滑稽の中に、三時に乾盃して散會した、四時から直ぐ講演會なので、頗る多忙だ、お景物として會員の大半を、折しも三高で開催中の關西野球大會に招待した。

晝餐會の出席者左の如し。

（客）高頭仁兵衛　高野鷹藏　小島久太　岩村圓

（會員）大谷光明　加賀正太郎　高瀨春曉　田中孝雄　田中喜左衛門　田中清之亟　竹下英一　塚本永堯　榎谷徹藏　宗得恒三郎　芝川又之助　比企忠　櫻田文吾　朝輝記太留　山田鹿八木道三　森平藏　東儀一　山根義道　小島榮　中原繁之助　采野善次郎　山本宜治　石崎光瑤　小山源治　今村幸男

（篤志者）福田門彌　後藤三高學生　中山中學校長

午後四時の開會定刻にならないのに、角帽や、白線三條帽や、其他紳士學生が、續々詰めかける、何しろ陳列會、午餐會、講演會と、一時に重なつたので、少數の委員は、てんてこまひだ、陳列主任の小山氏は、午餐會も中途で脫けて、圖書館へ駈けつける、今村氏は座席瞬時も暖らず、應接に目を廻はしてゐる、石崎氏は人力車を飛ばして、東奔西馳、學生委員連も、準備萬端階上階下に動く、愈よ定刻になつた、祝電は雨の如く飛び込み、入場者は潮の如く押し寄せ、紀念繪はハガキは羽の生えたやうに消える、招待室では、午餐會の餘炎再燃して、吐き出す煙草と、共に人を煙に捲く、少し遲れて五時講演會の序幕は、今村委員長に依つて、切つて落された。

今村氏は、人馴れた明快な語調で、山岳會を紹

介し、登山趣味を鼓吹し、單純な開會の辭とは異なつた、深い印象を聽衆に與へて降壇する、夕飯時にも拘らず既に四百に垂んとする頭臚は、山岳なる對象に吸引され、こゝに集まつて來た、豫定のプログラムになかつた、高野氏は、山岳會の歷史から初めて、現今に及び、一層微細に亘りて、了解せしめ、登山の眞意義を丁寧に詳說して、喝采の裡に終られた、次に小島烏水氏は、飛驒双六谷探檢と題して、本論の前に、日本アルプス登山史の沿革を、構成する外人諸氏を紹介して後、今夏敢行された人跡未踏のアルプス峽谷を、溯つて笠ケ岳の登山談をした、拍手喝采裡に降壇、次に比企氏は立つた、多年大學の講義で、錬えた五分も隙さぬ、講演振り、兎角乾燥に流れる「山岳と岩石」なる、科學研究を、半ば學者的に眞摯に、半ば滑稽諧謔口を突いて、吐露し周知されない、日本アルプスの山々を避けて、市内及近畿の山岳を例證され、且黑板を持ち出して、解說されたので、一層どん底まで理解せしめたので、聽衆の滿足は見えるやうだ。

これから期待された、歐洲アルプスの幻燈で、「ウイムバア氏とマツタアホルン」の演題で、岩村氏は立たれた、愛情に堪へない、豪岩無比な數十枚の映畫に就き、或は簡單に、或は數分の長きに叙述し、多大の感興を與へた、殊に人夫の墜落の慘狀に際して、「只イムポッシブルの一語を殘すばかりであつた」と悲痛な聲を絞られた時は、數百の會衆咳もなく、シーンと靜まり返つて、弔意を表するものゝ如くであつた、九回目に初めて成功した、絶巓の危峯に雀躍する映畫や、岩壁攀登の方法、ウイムバア及人夫が、十字架と人影の亡靈を見てゐる、凄壯には、脅かされたやうに、慄然とした、ウイムバア氏の寫眞を最後に寫し、大喝采の下に降壇された、最後に高野氏は、再び「日本アルプス」と云ふ題で幻燈講演に登壇された、四十餘枚の映寫は、例に依り天然色に出で、痛快極まりない、殊に後立山々脈の、八ッ峰の嶮に至りては、日本唯一の縱走不可能の難所と、聞いて興奮した聽衆は、肩を聳かし膝を進めて、穴の明くほど見詰めた、又劔澤にテントを張つて、野宿の

第七回大會々場の内外　（たゝた生撮影）

光景がある、このテントこそ、今日圖書館に張られてゐるものであると、聞かされて懐かしい氣がする、前に此寫眞は、自分のではないからと、斷はられたに拘はらず、去年の幻燈講演よりよかつたといふ、下馬評のあつたほど面白かつた、午後九時大盛況で、今村氏の閉會の辭があり、かくして第二回京都山岳會は終つた。

聽衆散會後、演壇の前で午餐會に列席された、幹事會員打ち揃つて、眩ゆいフラッシュライトの紀念撮影をした、不相變比企氏は、「山岳會は何故禿頭が揃つてるだらう、年はお互ひに若いのだが」と、數名の同志の頭を撫で廻はして「禿頭だけ寫さないやうに賴む」哀願活躍して、一同を笑はす、今日の成功を語り合ひ、散會したのは九時半であつた。

今回の關西大會が、發起者側の微力で、しかも立派に濟んだのは、全く或は物質的に、或は精神的に、盡力された、京阪神會員の諸氏に感謝すると共に、連日貴重の紙面を割かれた、新聞記者諸氏、及び陳列會場の借入れを快諾され、多大の便宜を與へてくれた湯淺圖書館長、以下館員諸氏に、鳴謝するのである。

終りに臨んで、繁忙なる業務を犧牲として、入洛して本會のために盡され、或は講演されたる、高頭小島高野三幹事及び會員岩村工學士、比企助教授に對しては、感謝の辭を知らないのである。

（小島榮）

出品物雜觀

第一室

○近藤茂吉氏の傑作、立山頂上の寫眞がある、雄山神社は、累々たる危巖の上に載つかつて、風が吹けば飛ばされさうだ、遠望の黑部五郎と、笠岳の格好は、何とも言へなくいゝ、今村氏の出品。

○德本峠から見た、穗高山がある、「山岳」で度々御目にかゝつたから、珍らしくはないが、かう大きく引延ばすと、山が立派になる、大阪の登山奬勵家で有名な夕陽丘女學校教諭、會員竹下、朝輝兩氏の撮影だ、將來巾幗登山家も追々出やう。

○石崎氏の出品、吉田博氏の作富士の石室の圖が、峨々と畫かれてゐる。

○鷲藤氏出品の富士山繪圖には、富士の別名が二十程並べられて居る、人穴には吾々が子供の時聞かされた、傳說の仁田の四郎が

鎌倉迄拔けたといふとが、こゝに書いてある、祭神の中に京聖護院宮とあるが、こゝから聖護院が手の屆く程近くにあるので面白い。

○宍戸氏の富士繪卷は、大分奇拔で、今の富士と全然異つてゐる。

○小山源三氏の富士のしほりの古圖に、今言ふ砂拂ひが、砂ぶるいとある、どつちでも構はぬが、昔はかう言つたものらしい。

○白井光太郎博士の、名山寫生繪卷物中、富士の噴火口は、猛烈なもので見ると恐ろしい。

○故會員大下藤次郎氏畵の惡澤岳は、雪を戴いて青空に高い三角形は、永久に生きてゐる、今でこそ山岳を畵く畵家が、多いが、當時大下氏を除いて、誰が南アルプスのやうな、未知の山岳を寫したものがあつたらうか、氏の長逝は、哀痛に堪へないが畵界の先達をして、一新紀元を劃したものだ。

○竹下氏撮影の槍ヶ岳の雪田は、其奥に當つて、ピラミッド形に高聳する、常念岳の印象は、誰も忘れられまい、この寫眞は、有り觸れてゐない珍品だ。

○大下氏畵の飯綱山と野尻湖、溫健な畵伯が、嗜好の命ずる儘に溫健な山岳と、湖水を描寫するので、ピッタリと調和する。

○齋藤菊三郎氏の「鳥海山圖」に描かれてる、砂走りの際の草鞋を見ると、六層の厚さになつてゐる、富士山等には、こんな便利な草鞋はない、知らず、鳥海山に現存するかな。

○同大山之圖裏辨の瀧が、鐘紡の煙突のやうで面白い、瀧から頂きまで、菅笠で鎖のやうに繋がつてゐる、こんな片々たる繪圖を見ても、信仰の力は、恐ろしいものだと思はせる。

○同富士山頂の圖、これ登山隊の笠で山道が、下から上まで隙き間なく、塡まつてゐる、駒ヶ岳のところで、屁つ放り腰で梯子を渡つたり、大澤の危歩、釋迦の割石邊の下坂、皆恐ろしげに誇張した描き方は、却つて山靈の威嚴を示すものだ。

○同、岩屋めぐりの圖、膝に草鞋をつけたり、キリリツと鉢卷をして、禪をかけたり、一生の浮沈此一擧にありの體。

○石崎光瑤氏撮影の多枝原池と、言つても分らない人も多からうが、立山溫泉の附近に在る涼しさうな、山中の止水、大下氏の好きさうなところ。

○同、白馬連峯を望む、見て居ると、大文字山から北風が入つて來て、白馬の頭を撫でる、初冬に日本アルプスの寫眞を見ると、座ろに高樂を覺える。

○白井博士の日光に關する書の數多の中、日光のしるべは餘程古さうだ、日光神山の保護論は、吾意を得たもので、單に建築地のみに限らず、保護は自然美にも及んで尊重してもらひたい。

○山の御符（小島烏水氏）出品は、武州三峯甲州金峰山等がある、信州御岳にはあるだらうが、今年南アルプスの地藏岳登山をして、芦安の湯から御符を貰つて來た者がある。

○東遊記高頭氏出品は、南谿を思ひ出す、着色繪入の紀行文集。

○神保博士出品の、臺灣總督府で保護してゐる北投石は、ラヂウムを含有してゐる、貴重な鑛石であると聞いた。

○大峯八峯（小山源二氏）は、其大仰さ、宛然、德川時代の大名行列のやうだが、只前驅に法螺貝を吹き立てゝるのが、行者の群を表はしてゐる。

○穂高山（グリーソン氏）は、矢張り德本峠より見たるもの、耳に蛸の感なきにしもあらず、只巧妙な着色が紅葉の美を發揮した。

○早道步行傳（小山源二氏）は、本誌前號に考證が一寸出た、序に對照として一部を揭げると、「一呼に三寸、一吸に三寸、日夜の定息一萬三千五百息……」のやうに讀んで行くと、中々面白い、登山と呼吸は確かに調和を必要とする、生理的方面から研究すると登山も從來より容易になるかもしれない。

○旅行要心集（梅澤親光氏）は重寶なもの、例へばかんじきや輪かんじきの圖解解說まで、詳細である、試にこゝに出品してあるかんじきを照合して見ても、少しも變りはない、例へばかんじきの條を開けるとかう書いてある。

「樏（かんじき）是は鐵にて鎌の如く作り、草鞋の下へはき、雪の上にて辷らぬためのもの、又手輕に作りて沓草履等の下へはくなり、商人田舍の人是を用ゐざるものなし」或は又

「蔓にて作り、わらぢの下へはき、雪にふみ込まぬ爲なり山樵又は獵狩の人多く之をハク」であるが、今日は山樵に限らず、一流の紳士でも登山用としてはくやうになつた、此書は文化七年日本橋通一丁目須原屋の出版である。

○登山手社札（小山源藏氏）手當り次第に開くと、横濱八町堀、外神田藏前等の署名が見える。

○越中劍岳雪溪（石崎光瑤氏撮影）嘗て「山岳」に登山記と共に出て、駭目せしめたもの、額の枠は白樺の皮で、立山で採集した長之助草、黑百合シラ子糞を、挾んだ目新しい寫眞額。

○槍ヶ岳と雪田（今村幸男氏出品）は、高野氏の撮影、誰もこから、槍ヶ岳を撮るが、壯大な景色が平凡になつてしまゐ、只今回のそれでも寒劍一穗、白雲を突破してゐるのが偉大に見える、紀念繪ハガキの一である。

○ウエストン氏肖像（山岳會出品）十年前はいざ知らず、吾山岳會の恩人として、今は、誰一人知らぬものはない。

○チエムバレイ氏のハンドブックも、知らぬものはない。

○臺灣山岳景觀（山岳會）雲霧を、突いて長城の如く、紫府に蜒々た尾根、新高山の豪宕は、日本アルプスを瞠若たらしめる。

○朝鮮の金剛山、危石怪巖吾妙義山の企及する所にあらず。

○槍ヶ岳の坊主小舍（竹下氏）小舍とあれど、岩穴なので目を圓くした人が少くなかつた、上高地溫泉場と染め出した人夫が、三名小舍前に薪木を積んで、立つてるのを、參觀の小學生が見て「こゝで何を稼ぐの」は可笑しかつた。

○晩秋の立山（石崎氏撮影）これは、本年十月上旬の、新雪を撮影するための、第七回目の立山登り、何れ劣らぬ逸品ばかり拾數葉の中、雄山頂上の三角點の柱に登山者が記入した文字まで見える、因に立山々靈の加護で、石崎氏は下山すれば文展に二點とも當選する、殊に一點は褒狀を貰つた上、間もなく宮內省に御買上になつた、これでは御禮廻りに、正月頃第八回登山をやらねばならぬ。

○白峯北岳と間の岳は、大下氏の筆、雪白の高山南アルプスの盟主、日本第二及び第三位の高山と聞いて、驚かざるもの幾人ぞ、此下に北岳の絕巓より採集した、岩片が陳列されてる。

○高山深谷が、全部ある、あまり見事なので非賣品と聞いて手

に入れたいと、交渉に來る特志家もあつた。

○榎谷氏苦心の作、「後立山連峯」の一間半に餘る、長幅淡彩スケッチは、場内の異彩であつた。

○極高山と梓川（茨木氏畫）山を熱愛し、山人の風貌を有する超越せる茨木畫伯の人格は、アルプスを畫くに最も適してゐる、この繪を見て曾遊を憶ひ出さゞるものはあるまい。（今村氏出品）

○山岳に用ゐられた、地圖の原銅版の陳列は、印刷術に暗い人々に歡迎された。

○白山の頂上は、富田溪仙氏の筆で、吉田博氏の富士山に劣らざる巍峨たる山岳を描寫す。（今村氏出品）

○雷鳥の圖は、熙祥の畫で、山口松香氏の出品、夏冬二羽の剝製（鳥津氏出品）と相待つて、對照最も妙である。

○伊藤長胤の雷鳥の記は、享保年間のもの猪熊信男氏出品。

○嘉門次（竹下氏撮影）は、宮川の池で筏に乘つてゐるところ、面目躍如、之が嘉門次かと立ち止まつて見る人多し、翁の光榮亦た大なり。

○高島北海氏の、信飛連峯圖は陳列室の南側全部を領し、豪健なる筆致は、西洋畫に覗はれざる點あり、觀衆恍惚として、佇立徙徊、暫らくは去らず、知らず、畫伯の霧腕か果たアルプスの風光か、否恐らくは兩者の合致より發揮する。無形の索引力に依るのであらう、偉なる哉高頭氏の出品。

○羚羊の毛皮（荒川又之助氏）こんなものが日本アルプスに居るのですかと、驚くものあり。

○甲斐駒頂上より見たる、日本アルプスの大觀と、野日の五郎岳より見たる日本北アルプスの大觀のスケッチ、前者は淡彩、後者は鉛筆、何れも長幅二間を越え、之を畫くため全二日間を同所に費やしたる苦心の勞作、山を知ると知らざるとなく、驚嘆するも宜である、筆者はお馴染の榎谷氏。

○日本一の湖沼學者として、著名な田中子爵の諏訪湖研究は、寫眞に書籍に、祭禮等につき詳細を極む、氏は又好箇の鄕土研究者である。

○モモンガ（京都島津製作所）深山の森林に棲息し、飛膜を以て樹木の間を飛び廻る、鼠に似て細長く尻尾の長きもの、先年平の小舍から、左長越に向ふ途中筆者は親しく見たものだから、一層に興味を覺えた、此時大町の人夫は山鼠と言つた、數回投石したが、巧みに逃げ廻つて人間を愚弄した。

○日本一の貝類研究者として、誰知らぬものなく、自ら平瀨貝類館を經營してゐる、平瀨貝翁の出品には、山岳採集といへど、眞の日本アルプス產は殆んど皆無なのは、詮方ないが、こんな方面迄、蒐集する努力には感服する。

○此他芝川氏の高山蝶、竹下氏の高山植物、矢澤氏の高山植物標本等は、夫々研究者にとつて最も好伴侶として喜ばれた。

○最も喝采を博したのは、第一室の中央にある紙製の立體富士山で、山内の名稱、登山道、各神社、山麓の村落と言はず、何もかも、苟も洩らさず着色記入し、八面玲瓏なる形狀から、方位までも、正確に置いた、三高山岳會長理學士尖尸教授の出品である。

○其麓に嶋津氏出品の富士山愛鷹山の模型があつて對照に便利にしてある。

○大峯登山用の杖がある、新客（第一回入峯者のこと）先達用、大先達用（三十三度の入峯者）の格式に隨つて、種々六づかしい區別がある、行者の錫杖には、万壽院さかの院號が彫りつけられて、院號を許さる、先達に脇先達なる下級の區別があるさうな。

○朝輝氏出品の雪上用杖は、巧みに歐洲の氷杖を模倣した、日本製小形のものである。

○小川博士出品の氷河擦痕の石摺は、信州南安曇郡明ヶ平のもので、近頃やかましい問題の、ヘットナアストーンは、ヘットナア氏がこゝで初めて發見したるものと思はれてゐるが、實は其先に小川博士が發見したのである、堆石は砂岩硬砂岩等で明瞭に擦痕を發見することが出來る、學術的に發表した地學雜誌、及寫眞十數葉は田中氏の研究中のものを拜借したのである。

○加藤理學士出品の白馬氷河擦痕の石摺は、小川博士のものと同樣で、嘗て日本に氷河時代があつたことが、確實に證據立てられたのは、慶賀の至りである。

○今村已之助氏の日光山圖は、こんな精細に、明瞭に、簡單に、悉知せられるのを見たことがないと、嘆美するものが多い。

○日本アルプス臆測圖（中原氏作）は、日本アルプスを早分りさせるために、特に分り易く、山脈山系それに關する山岳を一も洩らさず數百數む、特に一萬尺以上のものは、朱線をつけて注意してある、又日本人に分り易いために、米突を尺に換算した親切も見えて床しい。

○日本アルプス標高は、富士八ヶ岳白山等の所謂名山も包含せしめ、全部スケッチから山容を寫して、形狀を酷似させ、山脈別に分つて、高度順に畫いた、非常に手數のかゝつたもの、前圖と共に刮目に値するものである。

これから廊下の陳列品である。

○前記のやうに雪具約四十、各々異つてゐるので、吾々には解らないが、來會者中、偶然に信州人が二人居て、受寛の説明係をあべこべに教へる、即ちウツツベ、コンゴー、メンベンゾ等の妙な名があるさうだ、一學生が輪かんじきを見て「こんな大きいものを足に着けるのかなあ」と、驚ろくと、又信州人は「俺の國ではこのくれえ大きいだ」と兩腕で直徑一尺程の輪を作つて見せた。（高野氏出品）

○窓ぎわに木曾山民が使用してゐた、小さな背負籠がある。（小山氏出品）

○夕陽丘女學校出品の、女學生登山用の新案袋がある、説明を見ると、平素は普通の手提袋で、登山の際は背囊となるとある、流石に巾幗者の持つ丈あつて、高山植物の麗麗と競ふ程の色の配合が美くしい、傍に赤子のはきさうな可愛いゝゲートルが添えられてある。

○この長い壁には、信濃博物學會出品の、信州動植物の圖がある、雷鳥の保護色の變化の順序を月別にしたのは、流石だ。

○山岳畫では、丸山氏の乘鞍の頂上と、白川村古風族の民家は印象に殘つた、茨木氏の追分は、荒涼の古驛の氣分が粗描に表はれたのは氣持がよい。

愈第二室の歐洲アルプスに入る。

○比企忠氏出品のノルウエイに於ける氷河の美觀と、那威フヰ

ン・ゼの渺々たる氷原を橇に乘つて、猛犬に曳かす壯觀、共に艷麗無比、何年後に日本で此印刷が出來るやら。

○片平重次氏の、バイエルン高原は、凸版圖のやうで、精巧な着色、百姓屋迄描いてある。

○山岳會出品のアプラハム氏のロッククライミングは、戰慄に値する、日本の鳳凰山の地藏佛ぐらゐ、何でもなからう。

○比企氏のチロール附近のアルプスは、廣茫たる平原、洋々たる河川あり、其奥に脈々たる銀雪のアルプス聳えて、堂々たる市街の建築物之に對す、自然美と、人工美の配合が、妙に調和された。

○小島氏出品のヒマラヤ氷界紀行、ホップスの氷河の性質等がある、熟讀すれば一夜に、一躍して下手な學者ぐらゐになれるだらうと、借りて見たくなる。

○名譽會員ウエストン氏の出品に、アルプスのガイドの列傳がある、日本でもう案内者の傳を作つて、いかさまものを自滅させ、登山者を安固の地位に置きたいものだ。

○市村博士出品のアルペン、マジエテーテン中のゲラシスウスに、針狀巨巖の絶巔に登山者が快哉を叫んでるのを見ると、こつちも一緒に呶鳴りたくなつてくる。

○ローゼートの「アルプスのスキー」を讀む、實物はこの室にあるので便利だ。

○スペインの探檢倶樂部から、立派な山岳雜誌が出てゐる、國際上に於ては、存在の價値も危い、スペインが山岳研究に於ては、鼎の輕重を反對に問はれるのではあるまいか。

○アベプリイの自然美論は、入學早々教科書としてやるので、三高に席を置いたものはよく知つてゐる。

○山岳會所屬小舍集がある、早く日本でもこんな立派な小舍が出來ないかと欲しくなる。

○「登山家たる手引」に物凄い、岩壁登りがあるが、決して恐がるべからず、日本には先づないから。

○チンダルのアルプス氷河、著者の名は屢々「山岳」で知つてゐる。

○ポール氏のアルプス案内、精細な地圖がある。

○スインヒンの「スカイツアランド」はよほど耽讀したる爲か、朱線だらけ「氷河とは如何」の如き、初心なる忠實なる一節あり、艷麗なる着色版を度々に添ふ。

○壁にはゼルマットや、マツタアホルンや、ユングフラウ等の廣告畫の要領を得たる者あり。

○南阿ケープタウンから、登山クラブの堂々たるものがあるから驚く。

○佛國山岳會の雜誌に、飛行機のアルプス横斷がある、餘計なことだが、飛行家はシヤゼー氏で、機は單葉モラールソルニエー式であつて、高度は七千尺下には自動車が走つてゐた。

○ミルン氏の日本氷河遺跡論は、例に依つて外人は豪い。

○英國地學協會雜誌に、ウエストン氏が日本南アルプスの地圖を添えた、千九百〇六年から十四年迄の製圖。

○加賀正太郎氏がユングフラウ登山の際、白皚々中の寫眞、及大谷光明氏の出品ユングフラウ等の大寫眞額は、高く壁間に掲げらる。

○比企氏出品の北米ロッキー山の寫眞帖がある、山に滊車が走つてゐるので、厭になるが、ブライアンの讃美した文句がある一節を抄出する。

Thou who would see the lonely and the wild.
Mingled inharmony on Nature' sface,
Ascend our Rocky Mountains. Bryant,

○山元春擧畫伯出品の、ヨセミテ峽谷及華嚴瀧に髣髴の大瀑布の大寫眞額がある。

○横谷氏模寫の、アルペンホートラーの水彩畫九枚と、中米南米の高山二十數葉あり、山岳に帆船を配したる圖の如きは、壯觀を極む。

○米國タコマ富士の、レーニア山中の、クレヴアズや、フート山の雪の大絶壁、アリゾナ大峽谷、ウイムパアのアンデス山旅行記、ゲラードのアンデス山中に、キヤラバンを思ひ出す、茫々たる砂原等は、日本アルプスも一寸三舍を避ける、凄絶雄大中々味をやる。

次に植物の書籍が澤山ある、片平、小山、小島、別所氏所藏にかゝる、何れも艷を競ひ、美を爭ふ。

○池野博士の、羚羊の皮にて作りたる錢入、高山植物を貼つた繪ハガキ等、目先の變つたものであつた。

○加賀氏出品の、銀製、銅製のマツタアホルン、ユンゲフラウ、及其連峯は去年見た者も、再び覗き込む。

○中山京二中校長出品の、スキーは大人氣だ、墺國式スキーで後退を防ぐ海豹の皮具迄ある、手袋は靴下よりも長大だ、修繕用具から、スキー術の各種の書籍の陳列があつめて、誰にも分るスキー用杖は、墺國式と那威式の二種がある。

○中央には加賀氏出品の、獨逸ミユンヘン製の、アルプス登山用のリユックサックや、猛烈な釘だらけの重い靴、墺國チロール製の婦人用男子用のアイスアックスは、今村石崎氏の出品。

○森平藏氏出品の疊み込ラムプは、先年の三角形に非ず四角、湯沸かしは登山用專用で小さく、疊込みになる、登山用洋服は、略獵服に似てゐるが、袖がピツタリ締められたり、腋下は切れて腕を自由にするやうな遠ひがある、墺國チロール製でローデンを使ふ、帽子はウイーン製、登山用のロープは長さ十二間ほどで、加賀氏が親しく歐洲アルプスに使つたもの。

○こゝにまた恐ろしく、奇麗な寫眞額がある、それは田邊博士出品のスウイスのスタンザアホルンの、パーラマで其傍に墨痕淋離、かう書いてあつたかと思ふ、但し正確でない「斯旦山頭雪色鮮忽看湖上幾多船滿畔峯巔冠雪不着今曾炎夏天大正癸丑瑞西國斯旦山上」とあつたと記憶する、旭光を受けた三角點、高山の雪巒たる湖水、淋しい山小舍、透き徹つた青空、目の覺むる高山植物、何ともいへない景色であつた。

以上は出品の七八分を、駈足をして瞥見した觀想であるから、素より當らず、省略したのも、見落したのも多く、珍品も、或は逸した怨みもあらうが、何分締切を忙がれて、時計と睨つくらの體で書いたのであるから、其御積りで願ひたい。

來會者は矢張り學生が多く、大學三高の教授連も多く、女學生の入場も少なくなかつたのは、巾幗登山家の出る下地と思はれる、フエルプス夫妻の外人の來觀は珍らしい、「實にいゝれ」等の讃嘆

の聲は、各所に湧いた、美術學校の生徒が肩から下げた、カンバスに千社札が二三枚貼ってあったのは思ひ付だ、紀念繪ハガキは殆んど賣り盡してしまつた、陳列場毎日の平均數は六百人程で、殊に初日と三日目は、廣い場内も人で埋まつた、無事晴天三日間の陳列會は、かくして大盛況で終つた、後片附をしながら、もう一週間も開催したく、てんでに愛情に堪へなかつた。(S.五生誌)

會員登山報

○小野崎真三、山田健吉氏は七月中信州大町より針木峠を經て針木岳に登り黑部川、平より雄山澤を溯りて立山に至り雄山、劍ヶ岳を極められたり。

△山岳九年一號を拜見致し候處「青木湯の移轉」と題し「多分高の田と云ふは牧場の邊ならん」と記しあり候へ共かゝる家の在所は明瞭にして置く必要も有之候に付失禮ながら一寸此所に明記致し候。

此の青木湯の移轉せし高の田と云ふは牧場(蓄座石)より遙かに下にして、此處よりコヲ澤につきて少しく登り、峠(青木峠)を下りて前の牧場より約一里程下りし所にて此處は小さき平地をなし目下青木湯の外に數軒の農家有之、田畑もあり養蜂をなし居り候。青木湯は五六月より十月頃まで開業致し居り冬は休業するも此の農家がある爲冬にても此處には宿り得るべく候、御一報迄早々。

(五味泰造)

△小生�八月七日午後十一時の列車にて長野に參り電車にて宮田に到着一泊の上此處より駒岳登山を致し候道は宮田より大田切へ參らずに直ちに登り山林局の開きし道にてホコタテと云ふ所に出で更に辻の小屋の上の尾根に出でゝ將棋頭より伊那道を傳ふて山頂に夕刻達し申し候此の道程約七里、玉岳の山頂にて野宿して翌朝劍峯を攀ぢて上松道を羅覺に下山致し候兩日とも快晴にてアルプスの大觀を恣まにし十二日に王瀧より御岳登山八合目に泊り候所暴風雨にて止むを得ず東都の人と相成申し候、これより先七月下旬一寸箱根の山々に遊び候がこれも極めて好天氣にて四邊の眺望を賞美仕り候、右は御報知まで草々。　(戸澤英一)

△八月廿日晴天飛驒朝日村より湯河溫泉を經て御岳に登り二の池小屋に一泊此處にて日和田への案内人と會し翌廿一日御來光を拜みマリシ天山を越え四の池五の池の中間を通りママゴダケ大六天の石碑の處より飛驒高根村日和田に降り翌日高山に歸り候途中奇景なか〳〵多く候案内料一日壹圓也。

案内人は高松村日和田原榮次へ依頼すれば便利なり。　(二木長右衛門)

△陳者健康未だ充分恢復致さず醫師より切に登山を封じられ居り候に付入浴の目的にて一昨日當地へ參り候中々繁盛の溫泉にて目下何處の宿屋も客にて一杯の由昨日は辨天溫泉へ往復僅か一里の距離にて然かも極めて樂な登りなるに係はらず患部痛み體力の著しく弱くなりしに驚き申候本日は珍しき快晴にて其儘過すも殘念に付荷置場(三斗小屋への峠)迄駕籠にて登りそれより茶臼岳に登り候噴烟は盛んにて硫黃を採取製造致し居り候遠山に雲がゝりて

見えず然し朝日岳、三本槍及大峠附近の山（大倉山、三倉山等）を望みたる景色は久々にて爽快を感じ申候山麓那須野ヶ原の淋しき景色も大に氣に入り申候。　（辻本滿丸）

拜啓一行三人即ち小生の外祖父江中山の兩氏と去る四日當地出立五日は四ッ谷山木に一泊白馬山中にて二泊再び大町に出で歸途に就く豫定なりし處天候の定りしと人夫廣太郎を得たるとにより越中に越え申し候第一日は白馬頂上第二日は清水平を下りて雪溪に出で雪溪のつきたる處にて露營仕候翌日は祖母谷温泉を過ぎ午後七時鐘釣温泉に一泊仕り候翌日三日市驛に出で金澤、山代、福井に泊りて歸名仕り候。　（八月八木道三）

△小生事七月廿一日越前勝山より大口峠を踰え同夜は裏坂の山中に月夜の山水を賞しつゝ露宿し、翌日牛首に下り之れより白山温泉を經て白山に登り室堂に一泊し二日早曉御前岳に登りて日出の壯觀雲海の奇觀に接し、午後六時より伊勢の行者二名と共に案内者無しにて裏山下りを決行し地獄谷の雪溪を踏み雪解の溪水を徒渉して辛くも大白川の溪畔に下り白水の瀧を見白川の平瀨まで下る豫定にて進み候處無案内にて手間取たると伊勢の行者一名頗る疲勞せしとにより大白川溪道に日を暮らし月明りにて危き險路を下り平瀨に達せしは夜の二時頃に候ひき。

本年七月一日より大林區署の事業として白山裏山道新設工事に着手せられ本月八日には竣工の見込に御座候此道路は白川字平瀨より白山絶頂に達するものにして白水瀧の十町奥温泉までは略畚道に修理を加へそれより地獄谷には入らずして右方の尾根を上り延長六里半位に候竣工の暁には案内者を要せずして白川より上下することを得べく候參考のため「山岳」に御掲載置被下度候。　（古家寶三）

△今朝北白馬より南烏帽子に亘る連嶺に初雪有之當地は一段と冷氣相增し候中腹の紅葉も美はしく相成候例年より十日も早き方に候。　（九月二十八日百瀨愼太郎）

△扨て小生去る六月廿一日暑中休暇に入ると同時に札幌を出發歸京の途次倶知安にて下車同日はマクカリ岳登山になる同山登山會事務所に一泊翌朝同所を立ち岩でマクカリ岳登山を行ひ即日下山倶知安に出で乘車廿三日夜盛岡着同所に下車翌廿四日柳澤口より岩手山に登り同夜は山上九合目の小屋に一泊し翌朝頂上を極め雫石道を降り盛岡に歸へり夜行列車に投じ廿六日歸京仕り候、この旅行の間實に理想的の好天氣にて非常に好都合に御座候ひき、次に七月に入りて友人の誘ふところに任せ十八日朝上野發足尾まで參り翌日庚申山を訪ひ廿日足尾を出で細尾峠を越えて日光に參り同地にて登山準備を整へ翌廿一日朝より日光諸山巡りの途に上り先づ女峯山に向ひ候、女峯にて頂上の直下の邊にて道を失し一方ならず苦心仕り候ひしも漸く頂上に至るを得直ちに山稜に沿ふて帝釋山に至り富士見峠に下り申し候。同日は猶ほ大眞名子小眞名子を越えて志津の小屋に至る豫定に御座候ひしも途中に意外に手間取りたるため同夜は富士見峠上の小屋に泊り候、同所にては當時の天氣續きにて渴水のため水に非常の不自由致し候。

廿二日小眞名子大眞名子の兩山を越え正午志津の小屋に到着こゝにて太郎山に至る豫定を變更し男體山を裏面より越え中禪寺に降り候。

男體山にては頂上及び五合目に農商務省の測候所開かれ居り候。中禪寺より舟を雇ひ菖蒲ヶ濱に渡り暗夜戰場ヶ原を過ぎ午後九時半湯本に着仕り候、廿三日は奥白根に登り候ひしも雲多くして眺望を妨げられ失望仕り候、廿四日湯本を立ち出で戰場ヶ原に出で御澤を溯り太郎山頂を極め志津の小屋に至り日光に出でゝ泊るより山の中の方却つて宜しからんと同夜は同小屋に泊り候ところ夜に入りて雷雨と相成り少からず膽を冷し候。

廿五日日光に降り即日歸京仕り候。

八月に入りても例の好天氣續きに遂に多年の宿望なる白峯登山を決行すべく七日夜行にて出發八日朝日野春にて下車直ちて荷持ちを雇ひ柳澤に至り早速先頃御尋れ致したる水石春吉を迎ひにやり候ところ同人信州方面に行きて不在との事に宿の者をして代りの者を求めしめ漸く二人の人足（氏名失念間合せ中）を得候へ共二人共白峯附近は地理不案内なれど少しは心當りある故案内せんとの事にて不滿足ながら兩人を雇ふ事に致しし候。

八日柳澤を出で駒ヶ岳に向ひ正午屏風岩の小屋に至り同所に會員大槻禎郎氏が前夜同所に一泊當日朝小生の計畫通りの道を行くべく同小屋を出發せられしを知り一日違ひにて御同行出來しものをと殘念に存じ候。

同夜は七丈の小屋場にて野營翌十日駒ヶ岳頂上を極め直ちに甲信國境に沿ふて池の平に降り正午北澤に到り候、此日は出來得る限り仙丈岳に登る考に御座候ひしも仙丈岳にては水を得る事困難と存じ少し早過ぎ候ひしも同所に野營仕り候、十一日北澤を出で池の平に出でず直ちに山稜目掛けて森林を分け上り山背に出でこれより山稜の切開けを頼りに十一時仙丈岳頂上に到着仕り候、直ちに頂上を辭し降りたる所に晝飯を了り猶ほ甲信國境を南に向ひ候ひしも遂には切開けなく這松のために苦しめらるゝと且つ渴の甚しきため山稜傳ひを斷念し頂上より一里程を參りたりと思ふ邊りより野呂川に下り候、野呂川を溯り左俣右俣の分岐點より少し下の河原にて野營仕り候、十二日同野營地出發野呂川を溯り右俣に入り間ノ岳を目懸けて左方の尾根に非常の苦闘の後上り着けばこは案に相違の間ノ岳より北岳へのツル尾根にて全く小生の思ひ違ひより方向を誤りたるものに御座候、此の日朝より雲は高けれど曇り風激しく且つ餘りに晴れ過ぎたるやうにて曾て富士にて聞きたる話も之れ有り何となく天候不穩に感ぜられ候間間ノ岳は數丁の距離に御座候ひしも間ノ岳行きは之れを斷念致し直ちに北岳に向ひ候、途中ツル尾根の最低部にて晝飯を了り午後一時漸く北岳頂上に着仕り候、撮影等ソコ〳〵に濟し下山の途に就き大樺池への急斜の降路の如き殆ど滑り降るやうにし五時廣河原に降り萬一を思ひて河を渡りて岩小屋を見付け天幕を張り野營致し候。

然るに案の如く夜に入りて雨落ち始め夜半に至り益々激しく雨漏りのため睡眠もならず防水布外套を着辛じて燃し付けたる燃火に暖を採りつゝ天明を待ち候ひしも雨は少しも止まず野呂川は益々水量を增し十三日午前六時頃に數尺の增水にて小生等の宿りたる岩小屋も遂に浸水し始め候故一先づ荷を纏め川岸を漸くに傳ふて數丁下り候ところ遂に川岸の通行不可能と相成り止むを得ず左方の森林中に分け入り候ところ偶然一大岩石の下に僅かの空地あるを認め再び其石の下に潜り入り雨の止むを待つ事と致し天幕抔張

り火を燃し候へ共如何せん一坪に足らぬ空隙にて窮屈なる事到底堪へ難き者に無御座候ひしも小休なき豪雨に如何ともする能はず野呂川の石の流さるゝ遠雷の如き響を聞きつゝ遂にその石の下に心細く窮屈なる一晝夜を過し候。

十四日朝に至りてさしもの豪雨も漸く小降りと相成り遂には青空さへ見るに一同喜び勇みて結束六時半同所を出立ち野呂川に添ふて數丁を下りゴーロ澤に達しこゝよりゴーロ澤の急斜をゴーロ澤の頭目懸けて上り候。

ゴーロ澤の名ある程にて岩石の磊々たる登攀に少からぬ困難を覺え申し候、且つ前日來の大雨に增水致し急斜を下る水は一大瀑布をなし一層の苦痛を增し候、豫想外の惡路に意外に手間取り正午漸く鳳凰山に着仕り同所に地藏佛巨岩の撮影等をなし一時下山の途に就き候、鳳凰山下より柳澤方面の降路は比較的良好にて可成踏め居り唯倒木の多きに閉口仕り候。

他方よりの登山路は承知仕らず候へ共柳澤よりするもの稍平凡の嫌は御座候へ共樂のものと存じ候、斯くて危ぶみ參りたる釜無川の渡船も今始めたりと云ふ所に參り合はせ日野春驛前に着きたるは午後七時半頃に候ひき。

不潔なる宿屋に泊るよりもと同夜々行列車にて十五日朝歸京仕り候。

野呂川に於ける暴風雨の外連日頗る良好の天氣續き兎に角暑々目的を達し候ひしは小生愉快に感じ居るところに御座候。

大槻氏の足跡に付きては唯々野呂川右俣にて河原に新しき空鑵及び草鞋を見たるばかりに御座候。

◎會　報　會員登山報

仙丈岳と間ノ岳に至る山稜は少しは切開けの跡を見候へ共餘程以前のものらしく測量杭は所々に相見え候へ共通過は少しく面倒かと存じ候。

以上小生今夏の登山の景況申上げ候敬具。　（八月十九日蟾川睦之助）

△小生白峯山脈登攀の目的を以て去る八月六日夜十一時飯田町發翌朝五時三十分甲府着馬車にて青柳に到り即日西山峠を越え西山温泉へ着人夫打合せの爲一日滯在九日温泉發奈良田よりヒロカウチを溯りダイモン澤傍に露營十日午前十一時頃漸く白峯連嶺の尾根上に達し農鳥の連嶂を越え農鳥山間ノ岳の中間に露營十一日間ノ岳北岳を越えて大樺池より廣河原へ出でアカヌケ澤に露營十二日夜叉神峠を越え芦安へ出で候。

十三日は大暴風雨にて前日迄水量少き御勅使河は溷流逆卷き橋梁落ち僅か一ヶ所の難所の爲非常の困難と長時間を費し午後二時甲府へ着同日飯田町より歸京仕候。

幸に無類の好晴なりし爲山歩きには申分無之白峯山脈より始めて眼に映じたる雄渾なる鳳凰山嶺より仰ぎたる崇高なる主峯北岳の壯觀は此旅行中最も忘れ得ぬものに候。（九月九日冠松次郎）

△七月二十二日　會員百瀨濱太郎氏同八代準氏、及び同級の友人一名と共に對山館を出發して龍川を溯り、大澤の堂に宿る。

同二十三日　針木峠を登り黑部川に下りて、越中澤のヒラ附近に野宿。

同二十四日　刈安峠より佐良峠に出で、五色原に至る、この夜よ

◎會　報　會員登山報

り風雨激し。

七月二十五日　風雨のため天幕に滯在。

同二十六日　同

同二十七日　天氣漸く霽れたれば出發す、佐良峠より鬼岳に攀ぢしに、下に小野崎氏一行の通過するを認めて呼びかけたり。淨土より室堂に到り、綠池附近に野宿、加山氏、大木氏、矢田部氏、箕作氏其外一高の別働隊に會したり。

同二十八日　雄山より別山に到り、大木氏、矢田部氏の一行に會し、劍澤を下り長次郎谷の下に宿る。

同二十九日　劍に登山、山頂に達す、十一時也、更に下山して、大木氏、矢田部氏の一行に別れて、劍澤を下り、北股を登り、小さき澤を登りて池平に出で、更に小黑部鑛山に到りて宿泊。

同三十日　小黑部川を下り、祖母谷を溯りて、祖母谷溫泉に到り、河原に野宿す。

同三十一日　大黑鑛山に到る。

八月一日　大黑越にて平川より飯森に出で、徒步して大町に至る。

八月二日　信越線御代田驛に到り、三日より附中山岳會に加はりて八岳、白馬岳に登山し、八月十四日に歸京。（伴野清）

△七月二十日富山市出發、芦峠寺佐伯忠胤氏一宿。

同廿一日　佐伯平造を案內者として立山室堂に着き、佐伯數馬氏とも御面會いたし候。

同廿二日　朝數馬氏以下に導かれて淨土山、雄山などにまゐり室堂にかへり、數馬氏にわかれ地獄を經て立山溫泉につき候。

同廿三日　溫泉發九十九曲を經て岩峠寺着、佐伯等氏方一宿山富

同廿四日　には早く富山に入り候。この行小生には珍らしくも富山より同行者あり、その都合にて別山にも、五色ヶ原にもいたる事を得す、しかし雪溪の見事なる高山植物の多き小生にはよほどよき印象を與へられ候。また

七月三十日　福井出發、電車にて勝山にいたり、即時に人夫を賴み河合、小原峠を經て白山溫泉着。

同三十一日　白山御前嶽に登り、即日溫泉にかへり、

翌八月一日やはり小原峠を越えて福井に戻り候。最初は加賀鶴來方面より登り福井にいづるつもりなりしが都合あり、右の如くなり候、天候不穩との事にて福井滯在長引き、別山にものぼらざりしに候。なほ

八月四日　京都出發、雲母坂より比叡山にのぼり、大津にいでて京にかへり候。

八月十七日　には東京出發、甲斐上吉田着。

同　十八日富士八合目一宿。

翌十九日　登山、同日吉田にかへり候、この行は老人を伴ひゆき候ひし上、滊車不通のため、須走下山を果さずしまひ候。休暇も少くなり候へどもそのうちまたどこへか參りたく存じたり候。（別所梅之助）

△廿一日前橋を出でて二十二日利根川東小川東翠館まで乘馬廿三日朝二三寸の雪を蹈んで金精峠にかへり雪を裝ひし菅沼附近の森林の美觀を賞して晚湯本にまゐり候。（十一月廿四日日光湯にて大井冷光）

三高山岳會の近況

前畧三高山岳會なるもの昨年生れしまゝ未だ一回も登山を果したる事なかりしを遺憾に存じ本月二十二日を期して第一回登山を近江比良山に試み候會せるもの二十四名に達し想像以上の成功に候ひき、山は高しと云ふ程にあらず僅か一一七二米突位には候へども土地寒く、當日は降雪甚だしく足等は何處に附着するや我ながら覺えざる程の冷たさにて指等切れさうに感じ申候かゝる冷たさは、日本アルプスにても一度も經驗したる事なきものに候ひき、降雪中に候へば火を焚くこと能はざるに閉口仕り候。

時々の雪の晴間に琵琶湖方面の美しき眺望を二三度得たるも山脈の關係等一向わからず又時を得て再び探る心算りに候道は八屋戸より登り候（參、本、五萬、北小松）土地の者は最高を蓬萊山と申居り又一行の登りし峰を亦蓬萊山なりと申居候もこれにては地圖と少々矛盾するやう思はれ候、次回の登山を待つて此アンビギュイチーを確かめんものと存居候。（三高山岳會）

會員諸君に

△次號第十年一號には、會員名簿を附すべく住所を轉せられし諸君は、此際御通信を乞。

△本會々費は、便宜上集金郵便の方法にて集金に參りたる所あり、此等はわざ〳〵郵便局迄拂込に行かるゝ不便を減じ、且つ會務の整理を計れる結果にして、本會は爲めに費用と手數とを餘計にしつゝあり、幸にして此意を諒して、其都度必ず御拂込ありたし。

△毎々申述る如く、本誌は、局部の人士の專有に非ずして廣く山岳界の利用を待つものなり、本誌の功果は其利用さるゝ如何にあり。

△山岳寫眞の貸與と寄贈とを望む、登山家諸君の珍藏せらるゝ逸品を、廣く同好の人士に其享樂を與にせられん事を乞。

△あらゆる事微些なる事、にかゝはらず「山」に關する報道、通知を待つや切なり、一片のはがき

は、吾人の爲め偉大なる武器なり、敢て諸君に此小にして偉力ある、武器の使用を惜しむなからん事を。

本誌の發行の遲れたる言ひわけ

本誌は年三回發行と云ふ御約束で御座いますから、是非三號は大正三年中に御配布せねばならぬと云ふつもりで、やつて居りましたが、書狀で會員諸君に申上ました通り挿畫の内どうも氣に入らぬものが御座いました、それは本號に入れるつもりの三色コロタイプで御座います、三色コロタイプと云ふものが、中々の困難と手數を要する事は、其道の人はよく判つて居る事で御座いまして、一度ならず二度迄も、原板迄作り直して、印刷したので御座いますが、遂に豫定の結果を得ず、本號に挿入する事が出來ませんでした、其爲めにも亦、本文の方も大變に遲れまして、とても年内には御發送出來まいと云ふ事になり、御詫旁々書狀で其事を申上たわけで御座います、私共は不滿足なもの不充分なもの少くも、吾々としては最善であるべきものでなくては、滿足出來ないので御座います、本誌が最善最美なりとは、申されません、然し吾々としては、其絶頂に迄達するつもりでやつて居るので御座います、私達の努力と勞力に御同情下さいまして、雜誌の發行が遲れ勝ちである事は、幾重にも御免しを願ひたいので御座います、色々な方面に於て絶えず進歩したいと思つて居ります、幸にして今や九ヶ年の年齡を數へまして、會員諸君の同情に由つて益々發展せん事を期して居ります、一言雜誌の發行の遲れました事を御詫び致します。

（係り）

岳　　山

文明評論　別所梅之助氏
大橋圖書館年報　大橋圖書館
飛驒遺乘合府　住廣造
The Alppine Journal.
Oesterreichisher Alpenzeitung.
La Montagne.
Scrimber's Journal.　川上孝司
The Scottish Mountaineering Club Journal.
Mitteilungen des Du. O. Alpenvereins.
Club alpine Francais. Section du Nord.
Die erstenfünfzigjahre des Schweizer Alpen Club.
Sieera Club Bulletin.
The Annual of the Mountain Club of South Africa.
Bulleti del centre Excursionista de Catalunya.
The Canadian Alpine Journal.
Svenska Turist foreningens arskrift 1914.
Mededeelingen der Nederlandische Alpen-vereening-ing.
Kneipzeitung.　〃　片平重次氏寄贈
Bergsteiger-hygiene.　〃　同上

退會者

寄贈及交換書目

地質學雜誌　東京地質學會
歷史地理　日本歷史地理學會
地學雜誌　東京地學協會
鄉土研究　鄉土研究會
鐵道旅行案內　鐵道院
駿河町　松宮三郎氏

山岳

Relief-karteon Bayerishen Hochland. III　一　同　上

Ein Rundgang durch das Alpine Museum.　一　同　上

Zeischrift des D. O. Alpenvercius.　二　同　上

Bayern. 產高山植物標本　同　上

附錄

飛驒雙六谷

小島烏水

一　旅行日誌

飛驒雙六谷の旅行をおもひ立つて、大正三年七月二十八日の夜、宅を出てから、八月十日に歸宅したまでの、日誌を揭げると、左の通りである。

七月二十八日

夜瀛車にて横濱發。

七月二十九日

朝岐阜着、自働車に乘る、金山町早川旅館にて晝食、夕刻高山町長瀨旅館に着、住廣造氏に迎へらる、夜山田倫翁を訪ふ。

七月三十日

住氏と共に、平田鈴吉氏を訪ふ、谷文晁の子、文二の作せる飛驒籠渡圖を見る、清輝樓にて住氏

と晝食、舊高山新報社長上木捨三氏、及舊知の銀行員品治貞君も來らる、同行を約せる三枝驥逸氏、夕刻東京より來着。

夜山田倫翁、眞木半十郎氏來訪、眞木氏より杉製の香盒を贈らる、三枝氏と四人にて、賑やかなる市中をけんぶつす。

七月三十一日

朝、住氏、眞木氏、三枝氏と共に、城山公園に遊び、市中を見おろす、山王神社にて、四百年の齡といふ大杉の下に撮影す、昨日の香盒も、この神木の友木にて作れりといふ、神社の懸額には、寛文、安永、弘化、嘉永などの年號見えたり、三枝氏はひとり別れて、市中をスケッチす。

夜市内散歩、一刀彫など購ふ、住氏宅にて繪ハガキを見る、文學士奥田正造氏に遇ふ。乘鞍鑛山より、世古小次郎氏訪ね來らる、舊知の銀行員なり、飛驒に來て、土地の人以外の舊知に遇ふこと多きは意外なり、住氏世古氏と共に、清輝樓に行く。

八月一日

住氏、眞木氏、上木氏、三枝氏と共に澁草燒を、寵許まで見にゆく、硯友社の俳人にして、畫家なる小峰大羽氏と、始めて相識る、茶碗に惡筆をのたくり、記念の合作などして興ず。

午後一時、高山町役場にて、飛驒山脈に就いて、一時間ばかり講演。

平田鈴吉氏、二木長右衛門氏旅館に來訪せらる、夜は清輝樓に開かれたる有志の饗宴に臨む、歸りて後、詩人福田夕咲氏、住氏と共に來訪、諸君と共にそれからそれへと飲みあるき、夜半に到る、デカタン生活とは、こんなものかとおもふ。

八月二日

高山町より八日町まで人力車、早けれど同町梨打橋畔の、溝口にて晝食、荷擔ぎを雇ひて、大阪峠を踰え、本郷村に入る、在家（ザイケ）の村役場に澤田穗束氏を訪ふ、不在、宮原の同氏宅を音づれ、導かれて見座（ミザ）の水琴亭吉本旅館に投ず、高原川のそばにて、けしきよし、登山の準備を整ふ。

八月三日

朝人夫來る、下佐谷（シモサ）の獵師、高田勘太郎を案内の先達となす、澤田氏に送られて、共に雙六谷に入り、盤の石、材木岩などを見る、隊員上野定一郎氏、あとより追ひつかる、金木戸村の手前にて、澤田氏に別る、これより始終雨に惱まされ、夜に入りて廣河原の小舍に着く、前日、金木戸村より別路を取られたる中洞富次郎氏（長倉學校長）大霜德次郎氏（第二學校）中野善太郎氏（雙六學校長）結城友信氏、岩城春平氏、余の一行と食糧を待ち受けられたるときとて、歡聲湧く。

八月四日

雨にて滯在、青淵の美くしき水をけんぶつし、笠ヶ岳よりの支流、小川原の黑淵を探檢す、崖頭の樹皮を削り姓名を書して、一行來遊の記念をとゞむ、溪谷と森林の生活、おもむき殊に多し。

八月五日

廣河原の小舍を出發し、小川原谷の落合と別れて、本流に入り、牛首の嶮を越ゆ、「牛の髭剃」「高橋日影」「日陰の拔谷」「天鳥の岩」などいふ難所多く、水急にして湍深し、崖を攀ぢ、森に分け入

り、或は胸まで水に沒す、いくたびか墜落の憂き目に遇ふ、「日蔭の十根」「兵衛門十根」「鷹巢十根」などを過ぎて、打込の谷の合流點に出で、左の本谷に入る、溪谷は大雨小雨にて、時に靑空をあらはせど、晝食は雨中の木蔭にて、したゝめたり、下拔戸を經て、奥拔戸の穴小舍に一泊、さかんに焚火す、寒氣に手足ちゞまり、疲るゝこと甚だし。

八月六日

めづらしき快晴、奥拔戸を發し、黑右衛門澤や、蓮華瀧の合流點を過ぎて、石高路となる、午頃雙六平の草原に達し、雙六池に、一同揃ひて、探檢隊萬歲を叫ぶ。

それより雙六岳に登り、笠ヶ尾根にて、偃松の原に露臥す、氷輪空にかゝりて、槍ヶ岳、穗高岳、笠ヶ岳、燒岳、乘鞍岳、手に取るやうなり、身を包みたる油紙は、夜露にてビッショリとなる、滿天霜白し。

八月七日

小笠岳及び大笠岳に登る、途すがら、黑百合や蟲取菫を採集す、頂上に近き尾根にて、蟲取菫は珍らしとおもへり、上野氏、空に舞ひあがる大鷲を銃して當らず、歸路は穴毛谷を下る、殘雪の多きこと、槍ヶ岳山脈にては第一ならん、蒲田溫泉に下りて一泊、夜つぴてさわぐ、盆踊、地唄など藝づくしあり、曉の近きを知らず。

八月八日

燒岳に登り、噴火口を半周し、上高地溫泉に一泊、宿にて南日文學士と、山話にふける、歐洲大

戰を始めて聞く、この夜、十年振にて中房温泉の老獵師、横澤類藏の、わが室にたづね來りしも、うれしかりき、過ぎし一と昔前、この翁を連れての、常念登山を、憶ふことしきりなり。

八月九日

類藏に荷を擔はせて、上高地を發し、島々の清水屋にて晝食、類藏に別れ、松本市にて三枝氏に別れ、淺間温泉、西石川旅館に投宿。

八月十日

木曾線を經て、名古屋より歸宅に向ふ。

雙六谷旅行に引き連れたる案内者、及び人夫の氏名は、左記の如し。齡は大正三年に依る。

下佐谷　高田勘太郎（五十二歳）
同　大倉辨次郎（二十歳）
宮原　井口由五郎（三十四歳）
同　谷口定四郎（三十八歳）
同　和仁與之助（五十四歳）
八日町　中野德之助（四十六歳）

高田大倉の二人は、路案内に精し、大倉は少年にして精悍なり、高田は一徹なれども、さすがに落ちつきありて、人夫中の頭領なる貫目あり、豪膽にして物に怖れず、老いたる和仁は、初一日にて病人となり、廣河原より放還したり。

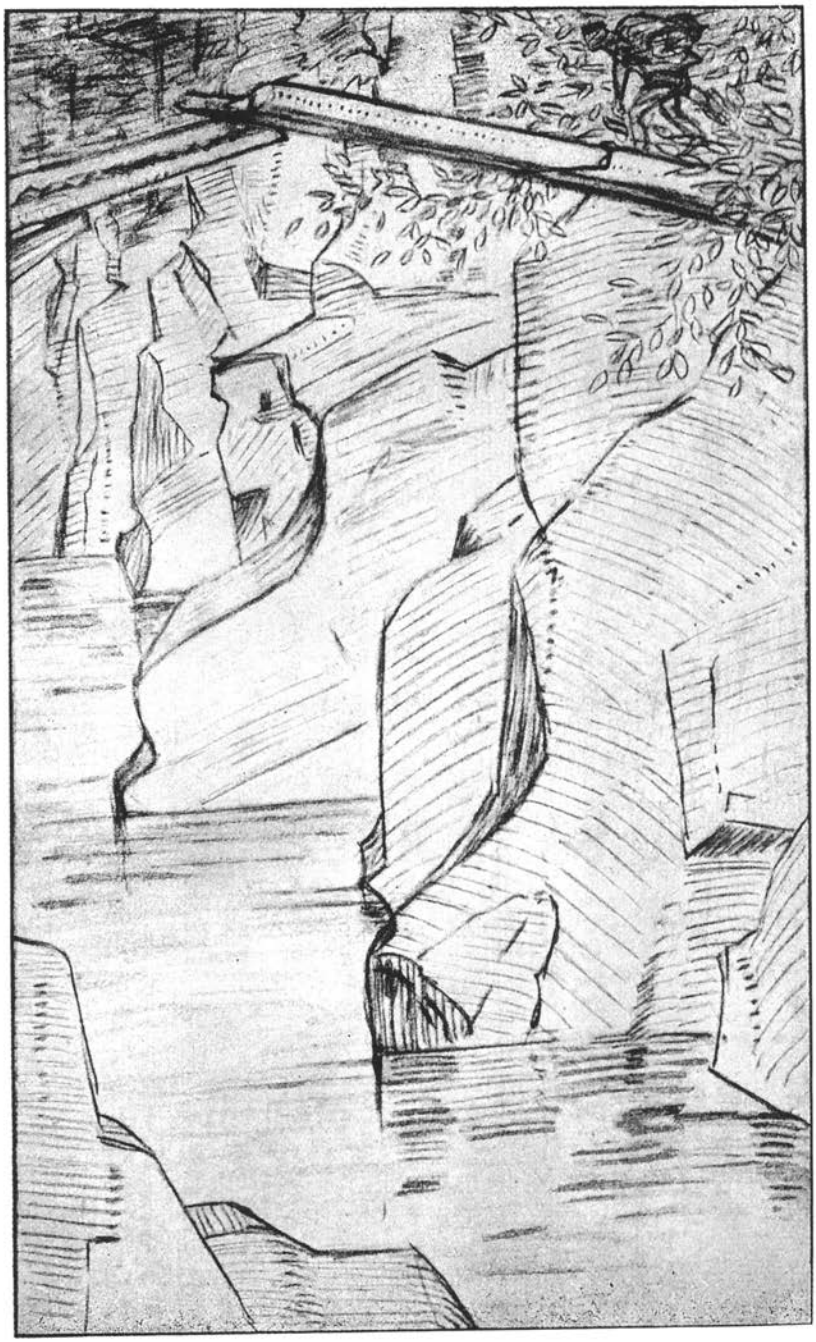
この旅行に於て、私は高山町滯在中は、住君始め飛驒山岳會諸君の好意で、ふだんにない樂しい日

を送り、雙六谷旅行に於ては、澤田穗東君の懇切なる斡旋と、殊に谷に入つてからは、同行の中洞富次郎、大霜德次郎、結城朝信、岩城春平、上野定一郎、中原善太郎諸氏の、一方ならぬ努力と、共同動作の下に、無事に目的を遂行し得たことを、心から感謝する、諸君なかりせば、おそらく私の旅行は失敗に終つたらうと思はれる、又上寶村の當局者は、私の旅行に、多大の便宜を與へられ、案內者や人夫を寄附されたことに對して、こゝに謝意を表する。

雙六谷の記は、之を二篇に分ち、第一篇は地理の記載、第二篇は紀行文とした、第一篇に於て私は說明し、第二篇に於て私は描寫を試みやうとおもふ、本號に載せたのは、第一篇の方である、第二篇は、他日公けにするつもりであるが、本號に載せた中野善太郎氏の「雙六谷探檢記を」併せて參照していたゞきたい。

一　最後まで取り殘された溪谷

歐洲アルプスに於て、最高點の白山（モンブラン）が、逸早く、今よりも百二十餘年前に、登山せられたやうに、日本に於て最も高い富士山は、萬葉時代――少なくとも平安朝時代には、もう登られてしまつた形跡がある、近代歐洲アルプスの登山史は、その中で、最も難攻不落と稱せられたマッタアホルン山の征服（慶應元年）と共に、大段落を告げたが、日本アルプスの登山史も、白峰が登られ、槍ヶ岳が登られ、はては人跡未踏と信ぜられてゐた劍岳も登られた、しかして是等の山々は、孰れも江戶時代に、敬虔なる僧侶や修驗者に依つて、登られた形跡もあり、事實も分明である、加之、南アルプスの長大なる赤石山系も、主要なる部分は、今日となつては、殆んど串柿刺しに、縱走されてしまつた、この頃では登山といふ語が、山脈縱走を裏付けるやうになつた、日本アルプスを、白紙の地圖であり、闇黑の凹點であると言つたのは、昔話になつた、されば日本に於けるアルピニストは、土地のあまりに狹い



双六谷高波橋　（きゝさ氏筆）

のを歎いて、金剛杖を持てあましてゐるであらうか。

勿論、年に一回や二回、月に十人や二十人登つたからと言つて、區域の汎大な日本アルプス系の山山が、充分に研究されたといふわけでもなく、依然として知り得られない餘地は、未だ多く殘つてゐるに違ひない、けれども單に登られたといふ點から言へば、目ぼしい高山は、殆んど凡べて登られてしまつた（十年前に比べて、何といふ進み方であらう！）

人類が山岳征服の徑路を尋ねると、形容や色彩の秀麗な山、鋭く峻しく、突き拔けた山などは、人目を惹き易いのと、好奇や冒險の心を刺戟するのとで、却つて早くから登られ、さうしてその話や記文が、傳播せられて、多くの追蹤者を生ずるため、存外に繁昌するやうである、歐洲アルプスに於ける前述のモン、ブランでも、マツタアホルンでも、日本の富士山でも、又は日本アルプスに於ける槍ケ岳でも、穗高岳でも、皆さうである、さうして最後迄、取り殘されてゐるものは、却つて高山と高山の間に挾まれた低山か、若しくはその中に窪んでゐる深谷であらう、秘密は深い溪谷や森林に住んでゐる、別して溪谷こそは、まことに最後の隱遁所(Retreat)である、さればこそ今日では、歐洲アルプスでも釘靴(ナイル、ヒーツ)を着けるや否、アルペンストックの鉾先に、案内記を結びつけて、いきほひよく飛び出すやからの向ふところは、存外にもモンブランやマツタアホルンの如き、著るしい大物(おほもの)であるのに反して、アルピニストと稱する、あゝでもない、かうでもないといふ、掌に綱(ロープ)ダコの出來た手合が、案外におとなしく引ッ込んで、收まつてゐるのは、アルプス山の六つの大主脈から離れた、マリタイム、サヴヲイ、コツチアンのやうな、傍系の小山脈であるといふやうに、日本でも、今更槍ケ岳や穗高岳でもあるまいといふやうな、旋毛(つむじ)曲りは、却つて日本アルプスの本系から離れた、秩父の山奥や、又は赤石山系に於ける伊那山脈や、飛驒山脈に於ける阿寺山脈などへ、目をつけてはゐないであらうか。

近頃關東山脈の最高主系が、縱走せられ、海拔二千米突程度の甲州鋸岳が、附近に甲斐駒、仙丈岳、

荒川岳のやうな、大山岳があるにも拘はらず、二三の登山家の注目するところになつた例などは、果してかゝる心理狀態の發作がなくして、行はれたであらうか、よしさうでないとしても、私が飛驒の雙六谷に入つたことは――入らうとする氣になれたことは、いつまでも取り殘された谷、每年アルピニストが目をつけてゐながら、種々の不便と不知案內のために、躊躇してゐた谷、恠奇にして闇黑な谷、不思議なローマンチックの傳說に富んでゐる谷であつたゝめである、さういふことに興味を有することは、子供らしいたわいもない好奇心に基づいてゐるかも知れない、が私はそれを甘んじなければなるまい、何となれば私は、氣まぐれに森を這ひづり、谷を涉り、河原に寢ね、洞穴に泊まる山岳の巡禮である、地圖を引いて、世人を裨益する考へもなく、石を敲いたり、ノート、ブックを黑くしたりして、何々省に報告文を提出する義務も負うてゐないのである、只だ石上に座したり、草原に寢轉んで見たり、溫泉宿で野人の放歌を聽き、同氣相求むる友達と、山登りの話をして、嬉々として樂しんでゐたいのである。

この氣隨氣儘なる山岳の巡禮は、かういふことを、獨りで考へてゐる、日本アルプスは、本邦本州の中央大山系ではあるが、孰れの大山脈にも、側待山脈（Lateral Range）がある如く、日本アルプスにも、それがある、例へば木曾山脈や、赤石山脈に於ける伊那山脈（鋸岳もその一部で、最も著るしい特色を有してゐる）赤石山系北部に於ける釜無山脈、飛驒山脈に於ける阿寺山脈、（この山脈は、美濃から飛驒の南方まで來てゐる）飛驒山脈の穗高附近と平行して、霞澤岳から東方の有明、鍋冠、鉢盛岳へとつゞく霞澤山脈、飛驒山脈を東西に橫斷して、御岳と乘鞍岳の間に割り込み、飛驒高原まで突ッ走る一山脈などは、孰れもその側待山脈である。

附　記

霞澤山脈の中に、鍋冠、鉢盛など、器物の名稱を附したのは、山形から來たものであらうが、大體の山脈の特色が、覗はれる、

就中鉢盛岳は二、四四八米突の標高を有し、山頂は遠望したところでは、京畿の山岳にでも、ありさうな、いかにも穏和な、さうして緩るやかな圓味を有してゐて、その岩質は、日本には珍らしい兩雲母花崗岩である、近頃梓川の島々驛に近い、字明ヶ平に發見せられた、所謂氷河の擦痕ありと稱せらるゝ、ヘツトナア石なるものは、熱心なる氷河存在論者、山崎理學博士の斷定に從へば、鉢盛山から漂流したもので、過古に於て鉢盛山の氷河作用があつたことは、この岩片から、推斷せられるといふことである、この推斷が、安心して受け取られるか否かは別問題として、かゝる意味から言つても、又かゝる意味から離れても、鉢盛山は登山家の注意を喚び起すだけの、性格を有する山であると信ずる。

是等の山脈は、高山性と、低山性の中間の性質を有してゐるだけに、小アルプス風の山貌を呈して、森はもやもや茂り合ひ、禽獸は處を得顔に走り廻り、石の露出は多からずして、水は嬉しげに、手を拍つて跳り上り、花はその高貴にして魅力ある香氣を、惜しげなく四周に放散してゐる、雪や氷に、冷たく、嚴めしく閉ぢこめられた高山を、向ふへ突き放すやうにして、南方的豪奢の生活をしてゐる、熱帶的の織物を纏つてゐる、いかにも暖國的で、さうして音樂的である、我が双六谷も、飛驒山脈の大主系に發源するといふものゝ、沿道はさういつた小山脈の秘奥にある。

も一つ、これ等の側待山脈は、本系の大山脈のやうに、威嚴を整へてはゐないかも知れないが、各自思ひ〳〵に自由な行動を取つてゐるかのやうに、必ずしも大山脈と平行をしないで、奔放、起伏、屈折してゐる、大主脈は赤石山脈と白峰山脈のやうに、又は槍ヶ岳山脈と、常念山塊のやうに、もしくは立山山脈と、後立山山脈のやうに、東西に並行してゐるが、側待山脈は、並行をしたのもあるが、又それと直角に、横行したり、斜行したりしてもゐる、時には山脈と稱することも、いかゞかと思はれるほど、支離滅裂した丘山支山となつてもゐる、御岳の南に起つて本山脈を横切し、東南に向いて走り、又本山脈と並行して、西南に走るもの、乘鞍岳から西方に走り、又轉じて北走するものなど、飛驒山脈南部附近にあるものは、殊に錯綜紛糾してゐる。

試みに本州中央部の大きな河を數へると、北の方日本海に注ぐものは、姫川、黑部川、常願寺川、

神通川、射水川、九頭龍川などで、南の方太平洋に注ぐものは、木曾川、飛驒川、長良川などあるが、是等の大川を、兩大海に振り分ける分水嶺なるものは、日本アルプスの主山脈でなくて、主山脈を中軸として横走する側待山脈である、例へば東は鳥居峠より、西北に向ひ、木曾山脈に移り、境峠を南に走り、又西に向ひて、御岳山脈に亘るものは、木曾川の支流と、梓川支流（信濃川）との分水線をなし、野麥峠を北に走つて、乘鞍岳に達するものは、木曾川や飛驒川と、梓川水源の分水嶺となり、乘鞍岳より西の方、宮峠に走り、西南川上（カヂレ）山脈に移り、又西の方赤谷山脈に亘るものは、飛驒川と神通川の分水嶺をなしてゐる、又これは日本アルプスから離れるが、西方白山火山脈の大日岳に達する一脈は、白川（射水川）と、長良川の分水嶺をなし、大日岳から南方、油坂峠を經、又西方冠峠の方に走る一脈は、九頭龍川と、長良川の分水嶺になつてゐる、このやうに水の銀絲白絲を捌いて、日本の國土を、最も美麗に繡ひ取りしてゐるものは、是等中山性の、概して平均一千五百乃至二千米突の間にある側待山脈であることを思へば、單調の高山に厭倦と疲勞をおぼえたアルピニストや、又いゝ加減に頭が禿げても、氣隨氣儘なる、山の巡禮で一生を畢らうといふ、私のやうな漂浪者が、隱遁するのに、適好な小アルプスではなからうか。

三　美濃飛驒高原の山岳

飛驒双六谷探檢の途すがら、同國高山町で催うされた山岳講演會に出席するため、私は岐阜から高山町まで、飛驒山岳會の好意で供給せられた、乘合自働車の便を借りた。

岐阜附近は平原で、市は長良川の沖積地を抱いてゐるに過ぎないが、金山町は、美濃から飛驒に移らうとするところにあつて、爪先上りに高原の地形をしてゐる、美濃飛驒に亘る高原が、次第に高くなつて、著るしく高原的相貌を呈して來るのは、一體に北東部で、金山町を出發してから、益田川（下

流は美濃に入つて飛驒川）に沿ひ、北するに隨つて、花崗質の斑岩から成る峽谷は、水も石も森も、皆美くしく、その岩石は堅硬であつて、抵抗力が強いために、懸崖もあれば、流水に逆らつて屹立する奇岩もあり、木曾の寢覺の床に見るやうな節理（ジョイント）の多い石があつて、その節理に沿つて侵蝕されてゐるのもあれば、甌穴（ポットホール）の凹みが、岩面の所々に、圓筒狀に殘つてゐるのもある。

之に加へて、飛驒山脈南部の側待山脈なる阿寺山脈が、陵夷に近づいたとはいひながら、未だ山勢を維持して、この高原の北東部に接續してゐるので、濃飛高原中でも、中山七里から高山町にかけたところは、最も標式的な高原を作つてゐる、高山町に近い宮峠などは、日本海と太平洋の分水嶺になつてゐるが、是等の分水嶺から水は南北に流れ、その河流と河流の間には、狹く細長くえぐり殘された土地が、脊椎骨のやうに突起してゐるところが、少なくはない、さうして道路は益田河畔の段丘や、さゝやかな平地につけられて、山と山の間に、落ち込んでゐるから、日本アルプスの主山系を、仰ぎ視られる機會は、極めて少なく、高原そのものが、山と漸移してゐるので、著るしい突起もなく、山そのものも、頂上は案外に平坦で、高原の上に一段と、水平の高い高原を横たへた感がある。

一體高原といひ、山岳といふと、讀んで字の如く、簡單明瞭であるが、實際の地形に就いて檢すれば、高原と山岳は、明確に區別の出來兼ねる場合がある、濃飛高原の或部分の如きは、其區別の不明確の方に屬すると言つて、差支はない、併し濃飛高原中で、比較的に著るしく山岳の姿をしてゐるものは、秩父古生層の一部で、この古生層は、主として粘板岩、硬砂岩、及び角岩の累層から成つてゐるが、中にも角岩は、石英の微粒から成つて、俗に燧石といふ種類の石質で、至つて緻密であるから、褶曲や斷層が激しく働いても、水蝕や外壓に對して、駭ろくべき抵抗力を有し、他の砂岩や粘板岩が、破毀流損して、見る影もない低い丘陵となつても、角岩ばかりは、並大抵のことでは、著るしく容積の縮少を見るやうなことはなく、濃飛高原南部に於ても、地層の走向に從つて、突起した山脊を構成し

てゐるし、又他の河流でも、例へば木曾川に於ける藪原、宮の越附近の如く、角岩の露出があるために、不斷に喰ひつく水も思ふ存分に切開することが覺束なくて、狹い峽流の姿をしてゐるやうな例もある。

飛驒高原の北部に於て見ると、是等の山岳は、大抵一千五百乃至一千七百米突の平均高度を呈し、山の輪廓や山脊の方向まで、殆んど似寄つてゐるから、成立の素質と原因と時期を同じうした「山兄弟」であることが解る、即ち是等濃飛高原の角岩より成れる山岳は、或均一の地平線を保つてゐた土地が、衰滅敗殘に歸した中で、取り殘されて、四周の沒落低下から儼存して、山相を呈したものである、換言すれば隆起の力に依らないで、反對の衰滅の力に因つて、山相を呈したものであるから、造山の原因としては、後成的(Subsequent)なものである。

顧みて日本アルプスの主山系——假に對峙の便宜から言つて飛驒山脈に例を取ると、是等の大山岳は、笠ヶ岳の如く、地の表面に於ける岩石の流出と、堆積に成つたのもあるし、御岳乘鞍岳のやうに、地皮の破綻から、大土塊を噴起したのもあるし、穗高岳や藥師岳のやうに、地殼の褶曲に伴つて、岩脈として隆起したのもあつて、要するに造山の原因は、始成的(Original)なものである。

たゞし始成的(Original)と言つても、是等の山岳は、隆起した當時の原形を、今でもそつくり保留してゐるといふ意味に解してはいけない、否、今日見るところの是等山岳は、原形とは大分に、むしろ激甚に相違してゐるものが多い、例へば難破船が、甲板を半分失なつて、折れた檣が、僅かに一本孤聳してゐる樣に、風化もしくは浸蝕のために、大なる變形を受けてゐるが、併しながら原因の「始成的」は、分解や浸蝕の程度の大小に依つて、決せられるものでないから、假令いかに低下してゐても、又毀損されても、その全體が準平原の位置にまで切り下げられない限り、もしくはその經過中にある限りは、始成的の山岳といふことを妨げないのである、そして飛驒山脈は、山岳としても、最も

強大な壯年期にあるもので、濃飛高原の山岳とは、標高に於て殆んど二倍の高さに達してゐるのである。

岐阜から高山町に至るまでは、平原から高原、高原から山岳への漸移を見るに、都合がいゝばかりか、古生層の濃飛高原の山脈と、日本アルプス大主系の、飛驒山脈との對比を考究する上に於ても、最も興味のあることを、私は次手を以て示して置きたいのである、さうして飛驒山脈の中堅をなしてゐる岩石は、後に說く如く、花崗岩や又は石英斑岩であるやうに、濃飛高原の脊椎骨をなしてゐる岩石は、前に述べたやうに、角岩であることを、著るしい對比の一としたいのである。

四　日本アルプスと飛驒山脈

飛驒山脈は、日本アルプス中で、最も雪氷の美觀に富み、且つ古來宗敎上の登山者を多く有する御岳、立山等を控え、善光寺街道を、陰鬱なる庇の下に通過させて、信越間——山國から日本海岸の間へと、一髮の街道を横たへ、そこから晃々たる雪の山の一角を振り仰がれるために、この大山脈の存在は、赤石山系などに比べて、多く認められてゐた、そこで日本アルプスと言へば、殆んど飛驒山脈ばかりを意味するやうにも取られてゐた。

私は雙六谷を記述するに先立つて、この地理上の新名稱なる、日本アルプスなる語と、又飛驒山脈なるものに就いて、少しく述べて見たい。

私の狹い知識の範圍で、飛驒山脈に就いて、稍や詳しい記載をしてゐる文書は、地震學者として、日本へ來朝せられてゐたJ. Milne氏で、同氏が明治十三年十二月十四日、亞細亞協會で「日本に於ける氷河時代の遺跡」として、講演せられた文である、同氏は飛驒山脈を、日本に於ける山彙中の、最も重要なるものとして、燒山、立山、爺岳、五六岳、槍ヶ岳、乘鞍岳、御岳等の標高や、緯度や初雪

の時日、殘雪の狀態等に就いて、簡單な記載をしてゐるが、同氏自らも、白狀してゐらるゝ如く、同氏は飛驒山脈の、東側を旅行せられたばかりで、一も是等の山岳へ登られたのではなく、實際是等の山岳へ登攀して、岩石や植物の標本を採集し、同氏に講演の材料を供給せられたのは、英國人 William Gowland 氏である。

William Gowland 氏こそは、恐らく內外人を通じて、最初の飛驒山脈の探檢者として、傳ふべき人であらう、同氏は大阪の造幣局の御雇外人で、何年頃日本へ來られたか、私は知らないが、造幣局は明治四年に建設せられたのであるから、恐らくそれより以後に、來朝せられたのであらう、さうしてミルン氏の講演せられた明治十三年以前に、飛驒山脈を跋涉せられたことは、確かである、ミルン氏に依ると、同氏は七月十八日（年代の記載なし）爺ヶ岳の四千七百呎ばかりのところで、初雪に遇つたこと、槍ヶ岳を飛驒山脈最高且つ最古の岩石で、六千三百尺のところで、初雪に遇ひ、七月二十八日に同山で、雪田の厚さ二十呎のものを實見したとある。

ゴウランド氏は、飛驒山脈（但しその時分、飛驒山脈といふ名稱は無かつた）を、古生代に成生して、その主要部分は、花崗岩と、結晶片岩より成り、乘鞍、御岳、立山は、それ以來の新らしい成生で、最古の岩石こそは、槍ヶ岳で、最も堅硬なる古代の斑岩質角蠻岩から成ると說いてゐる、ミルン氏やゴウランド氏の記載に、誤りはあるが、明治四年といへば、散髮廢刀令が出たり、非人が新平民になつたり、郵便局が初めて出來たりした年で、ミルン氏が氷河の遺跡を論ぜられた明治十三年は、東京に鐵道馬車が始めて出來た年であることを思へば、その時分に、飛驒山脈に眼をつけて、之を踏査し、探討し、もしくはその蒐集材料を實檢して、少なくとも學術的研究を企てた勞を、多としなければならぬ。

ゴウランド氏の登られた山岳の中、ミルン氏の講演に依つて、知り得たのは、東北地方で鳥海山、

月山、富士火山帶で妙高山、燒山、飛驒山脈で立山、爺岳、五六岳、槍ヶ岳、乘鞍岳、御岳、白山火山脈で白山等で、爺岳を圓頂の花崗岩山、五六岳を準長石の斑岩、及び花崗岩から成るやうに、槍ヶ岳を、場所に依つては多孔狀をなしてゐる火山岩としてある、さうして大體から言つて、この大山脈は花崗岩的(グラニチック)であると斷定したのは、さすがに動かないところである、ゴウランド氏は各山岳に就いて、自測の標高を記され、多くの高山植物をも採集せられ、且つ氷河研究の目的をも有してゐられたらしく、「私が見舞つた山岳地方で、氷河働作の確たる證蹟を、ついぞ見られなかつた」と總論されてゐる、ミルン氏の氷河遺蹟論文は他日紹介する。

ゴウランド氏は、一方美術上にも、眼識を有せられ、明治二十五年、倫敦の日本協會雜誌に「日本の自然藝術」と題し、浮世畫風景畫を、評論してゐるが、日本の紹介者としては、忘られない人である。

けれども飛驒山脈の早い跋涉者は、ゴウランド氏一人ではない、立山から針木峠へかけては、この峠が開けて間もないときの頃、Satow, Chamberlain, R. W. Atkinson, P. Lowell, Francis 等の英米人が通行せられた、フランシス氏は、明治十八年に通行せられ、アトキンソン氏は白山や立山の雪線に就いて所見を記され、Edward Kinch 氏は、明治十一年七月二十五日に針木峠に遊ばれ、西側は雪稀であつたが、東側では三四個の雪田や、雛形的氷河を横切つたと記されてゐる、Dr. Divers も亦、その頃仲夏に見たこの地方の雪田が、凡べて氷河の性質を具有し、表面に側堆石、尖端に底堆石があつたと記してゐる。

是等多數の飛驒山脈旅行者は、足跡がゴウランド氏ほど汎く亘つてゐないにしても、大抵明治十三年以前に、この山脈へ分け入つてゐたことを思ふと、飛驒山脈の先驅者は、一部の火山を除いて、是等の外國人であつたと言はねばなるまい。

以上の人々は、地質學者ではなかつたが、地質學者として日本地質を攻究せられた獨逸人D. J. Reinは、明治十二年に日本の花系(フロラ)を論ぜられ、日本高山植物のフロラは、舊大陸の北方森林帶、北極地方、及びアルプス山脈の物の混交であつて、それが潮流や風の關係で、東部サイベリアや、カムチャツカから、日本に到着したものだと言つてゐられる、同氏は飛驒山脈は、踏査せられなかつたらしいが、この山脈に、日本の雪嶺といふ名稱を與へられたことは、後の日本のアルプスなる名稱に對しての、姉妹名と言つてよからう。

日本アルプスの登山史と、密接な關係を有してゐる書籍に、チャムバレイン氏と、メーソン氏合作の「日本案内記」のあることを見落されない、この本は、飛驒山脈に關して、可なり詳しい記載をしてゐる、この書の初版は今手許にないが、再版は、明治十六年に出で、針木峠の道路が、殆んど通行出來なくなつたと、第三版は同二十四年に出て、經驗ある登山家以外では、針木峠はもう駄目だと、やうに記してある、この書に材料を供給したものは、恐らく前記諸外國人の中であつたらうと信ぜられる。

併し當時は、日本アルプスなる名稱があつたか、否かは、疑問である、ウエストン氏が、初めて「ジャツパニース、アルプス」なる書を出版したのは、明治二十九年で、同氏が飛驒山脈に入られたのは、明治二十四年以來である、同氏はつい近頃、私に向つて、是等の壯大美麗なる山脈をジャツパニース、アルプスと名づけて、同氏に私信で示敎したのは、前記のゴウランド氏であると語られた。

ウエストン氏の「ジャツパニース、アルプス」第一章では

いしくも日本アルプスと呼ばれた (so well called) 大山脈に、本文の記者（ウエストン氏）が始めて注意を向けたのは、數年前、チャムバレイン敎授がしてくれた、その山貌の狂愛的說話に依つてである。

と明記されてゐるところを以て見ると、ジャッパニース、アルプスなる英語すら、同氏の著書を讀んだことも無い人が、稱道する如く、決してウエストン氏が命名したのでないことは確かである、但し同氏の「ジャッパニース、アルプス」なる一書は、飛驒山脈、木曾山脈、赤石山系、及び富士火山帶に亘つての紀行文を、一冊に纒めて、昧爽時代の日本アルプス地理、及びその山岳文藝に、曙光を與へ、チャムバレイン氏の「日本案内記」も、後の版は、同氏の紀行文を轉載し、その「日本案内記」は、高頭氏の「日本山岳志」中に、志賀重昂氏に依りて譯載せられ、日本山岳會の設立にも、ウエストン氏の、この著書が大なる影響を與へたことは事實である、私はウエストン氏を「日本山岳の父」と呼ぶに躊躇しないのである、けれどもジャッパニース、アルプスの命名者と言ふのは宜しくない、又命名者と呼ばれなくとも、ウエストン氏の事業は、恒久なものである。

且つウエストン氏の所謂日本のアルプスなる名稱は、地學上に明確なる根據を有してゐたのではないらしい、卷末の地圖は、飛驒、木曾、兩山脈を含有してゐるが、それに「中央日本のアルプス」といふ名稱を與へてゐるのを以ても、その概念的であるのが知れる。

我々は日本山岳の中でも、飛驒山脈、木曾山脈、赤石山系等の中央大山系が、他の山脈と違つて、著るしい山貌を呈してゐることを思ふ。

その共通一貫した特色を、概括的に表明する名稱を選ぶに當つて、日本の雪嶺、日本のアルプス、本洲中央大山系などいふ、多くの名の中から「日本アルプス」なる名詞を、新らしく作つて、飛驒山脈を北アルプス、木曾山脈を中央アルプス、赤石山系を南アルプスと劃定したのである、それはウエストン氏に依つて、命名されたものでもなければ、又日本のアルプスといふ類の、汎稱を作つて、高い山でさへあれば、富士火山帶でも、その中に編入しやうとはしないのである、例へば安山岩なる名稱は Andesite なる英語を譯したものであるとしても、Andesite は、必ずしも安山岩と譯さなければな

らないものではない、現に富士岩といふ名稱を作つた人さへある、さらば安山岩は安山岩で、新らしい命名であると言へるやうに、日本アルプスも日本アルプスで、强い、新らしい、凛とした音聲と感覺と色彩とを、齎らして來るものと信じてゐる、それは決して日本のアルプスといふやうな、間の延びた、說明の言葉ではないのである。

次は飛驒山脈であるが、日本で眞先に、飛驒山脈を踏査せられた人は、おそらく坂市太郎氏で、明治二十年九月刊行の地質局發行「地質要報」第三號に、氏の「飛驒四近地質報文」(地質圖添え)が載せられてゐる、右に依れば、同氏は今日の所謂飛驒山脈の大部分を、御岳山系と命名せられ、御岳は勿論として、蓮華山、針木峠、槍ヶ岳(三、五三一米突と記せり)穗高岳、硫黃山、平湯峠、乘鞍岳より、野麥、長峰、加子母の諸峠をも、この山系中に包含せられてゐる、さうして、並行山脈として立山山脈(立山の標高三、五八一米突とあり)常念山脈、木曾山脈を擧げられてゐる、その時代のことだから、地理上の記載に、未だしいところはあるが、藥師ヶ岳、笠ヶ岳、大天井岳、常念岳、霞岳等の名も見え、立山に片麻岩の露出あること、鷲岳(鷲羽岳)の頂上に、噴火口らしい池のあること、頂上から、西方に、角閃安山岩の流出あること、石英斑岩が御岳山脈北部の山骨をなして、槍ヶ岳も、この岩石から成ること等、今日では知れてゐることであるが、その時代として、地質上の記載は、さすがにゴウランド氏等、諸外人の比でなく、信憑さるべきものが甚だ多い、氏は又濃飛高原に對して、赤谷山系統なる一脈を立てられた、併しながら當時は、未だ飛驒山脈といふ名稱は作られてゐなかつた。

飛驒山脈なる語は、故原田理學博士の、有名な「日本地質構造論」に、始めて出たもので「本篇中新に名稱を設けしもの」として、當時の地理學者に使用されてゐた Dr. Naumann の名稱以外、始めて飛驒山脈、木曾山脈、美濃飛驒高原等の語を作られた(明治二十二年)が、遠望の山貌に就いての觀察があるだけで、飛驒山脈中の各山岳に就いて、別に詳細な說明はない。

飛驒山脈に早くより踏み入られたのは、坂市太郎氏に次いで、理學博士大塚專一氏（もし「地學雜誌」第十九號及第二十號に「信飛越山間旅行談」を載せたO·S·氏を同氏と同一人であるとすれば）で、氏は公用を帶びて、二十二年九月、初旬から、前後一ヶ月間の野宿で、同山脈の信濃飛驒國境以北を跋涉せられた、O·S·氏の自記に依れば、九月九日信州北安曇の野口村から、籠川谷を溯り、針木峠を越え、越中立山に至り、同山から後立山に出で、黑部川を溯り、黑岳を登つて、再び野口村に歸らる、野宿十日間、次には野口から北の、鹿島入の谷を登り、信越國境の鑓ヶ岳、乘鞍岳、不歸岳、祖父岳、祖母岳、蓮華岳を乘越へ、越後西頸城郡大所村に出られた、野宿日數十四日間、大所村で數日間の食糧を整へ、雪鞍岳及び同岳東麓の、字板立場の鑛山を巡見せられて、大町に歸られ、次で黑部川に入り、鐘釣より山靡岳(?)を越え、下新川郡島尻谷の島尻村へ出た、この間　の日數は一週間といふことである。

それから以後、近代に至るまで、飛驒山脈は、諸學者に登山せられ、又研究もせられてゐるが、この短かい一章は、飛驒山脈登山史を作る目的でないから、人目に新たなことは省くことにする。

要するに本章に於て、私は日本アルプスなる新名稱の由來を說くと同時に、飛驒山脈に早くから登攀せられてゐながら、多く世に知られてゐない內外人の Pioneers を、次手を以て紹介したのである。殊に前記外人の中では、今ではもう亡き人となつたのもあるから、他所ながら紙上にさゝやかな供養塔を立てたわけである。

五　雙六谷の位置

これから雙六谷の記載にうつる。

飛驒山脈の水系を案ずると、大主脈はいづれも、南から北へと流れて、日本海へ朝宗する、最も東にあつて、高い山の影を宿すばかりに、平原の間を流れてゐるのは犀川である、中央にあるものは立

山山脈と、後立山山脈と、二雙の大屏風の間を流れる黑部川で、典型的の峽流をなしてゐる、西にあるものは高原川（下流神通川）で、この川は雪白き山と、高原の間を流れてゐるから、黑部川ほど急峻ではないが、犀川に比べると更に深谿らしい姿をしてゐる。

高原川の水源は、槍ヶ岳穗高岳等、日本北アルプス中でも、最高の山岳と、及び其一支脈の笠ヶ岳の麓を流れる蒲田川と、乘鞍大火山北部の諸山、例へば硫黃岳及白谷山の、兩火山塊と、附近の古生層地から發する平湯川との合水から成つてゐる、この二つの水源の內、水量や谷の濶さから言へば、蒲田川の方が本流の觀があるが、蒲田川は概して傾斜が急で、河道が短かく、瀑布が多く、浸蝕谷として、未だ少壯期にあるのに比べて、平湯川の方は、水量こそ少なけれ、谷こそ狹けれ、白谷火山合流點附近の、荒廢した慘ましい姿を除けば、河底の傾斜は、緩やかで、河道も長く、成熟期に入つたときの、穩やかな地形になつてゐるし、水流の走向も、本系の軌道、即ち南から北を指さしてゐるから、平湯川を以て、高原川の源流と見做したい。

けれども、高原川が日本アルプスの峽流らしくなるのは、第一の支流蒲田川が入つてからである、更に第二の支流雙六谷が入つてから、高原川の水色は、更に並ぶものなき麗はしさを加へたのである、第三の支流跡津川の水も、高原川の水嵩を增して、瀧津瀨とたぎり立たせる、この外の幾多の支流、例へば岩坪谷（平湯川と蒲田川の間に）笠谷、下佐谷（蒲田川と雙六川の間）等の荒谷はあるが、要するに南北の走向を有する高原川に向つて、是等の支流は、東から西へと走向して、落ち入るのである、さうして高原川は高原鄕の唯一の山都なる、船津へ來て、船津から漆山までは、直線に流れてゐるが、東漆山邊から、大斷層のため、直角に折れて、跡津川の合流せる土（ドは山岳地溪流の合流點をいふ語、ドーの約ならん）に至り、又直角に折れて、東茂住から橫山、中山、猪谷を經て、越中に入る、その地形は、越中街道を通行する人の、眼下に見るところである。

跡津大斷層が、如何なる距離まで、延長し居るかを、地圖（參謀本部五萬分一地形圖）の上にて、追跡するに、東方は跡津川に沿ひ、大多和を通過し、同峠を越えて、越中國有峰に出で、尙ほ進んで常願寺川の水源に達し、桑ヶ崎山の、東南端に達する如く、西は土及漆山より、漆山岳を越えて、宮川岸三川原に出で、同川を溯り、角川より小島川に沿ひ、その上流吉城郡と大野郡との境なる天生峠に達するが如し、此の間殆んど一直線にして、屈曲なく、斷層谷としては、頗る標型的のものなり。（理學士村田祈氏地質學雜誌第二四八號）

さうして、高原川は、怒濤のやうに、亂立する日本北アルプスの諸山脈の、鼻づらをこするやうに、その尖端を鋭利に切斷してゐる、即ち槍ヶ岳山脈を平湯川で切斷し、笠ヶ岳を蒲田川と雙六谷で切斷し、立山大山脈を高原川の本流で切斷し、次に桑ヶ崎山脈をも切斷して、日本アルプス有數の大山脈と直角に交叉し、立派に横谷の地形を作つてゐるところは、立山と後立山山脈の並行する間を流れゆく黑部川の、縱谷と壯大な對比をしてゐる。

さうして、かの北齋や廣重の浮世繪にまで、描かれた飛驒の名所、藤橋（船津町の藤波橋）や、籠渡し（飛驒越中の境で、今は國境橋を架す）も、曾てはこの高原川や、その下流神通川にあつて、「谷の建築」の美くしさを、大空にかけわたす虹のやうに、誇つてゐたものであつた。

雙六谷は、この高原川に對して、いかなる位置を占めてゐるかといふに、蓮華岳を中軸として、南は雙六岳の薄ッぺラな山脊で、高瀨川と背中合せになり、同じく北は黑部五郎岳を隔てゝ、黑部川と裏腹になつてゐる、さうして雙六谷の進路を求めた地盤と、流域は、槍ヶ岳山脈から分岐した笠ヶ岳の一脈と、立山山脈の最南端なる蓮華岳、黑部五郎岳（中俣岳）上の岳（北俣岳）の一脈との間にあつて、その諸山脈の岩石は、北は立山山脈の角閃花崗岩、上の岳の中世紀水成岩、南は笠ヶ岳の石英斑岩、及び乘鞍火山の餘炎なる、中山性の熔岩臺地等、諸種の岩石の間を貫流するので、要するに性急氣短の浸蝕谷には、違ひないが、このやうな諸種の岩石の相違のために、地皮を薄弱にさせ、破綻を生じさせて、峽谷中の傑作、日本アルプス中の純美な珠玉、我が雙六谷を彫刻したのであつた。

六雙六谷の名稱

日本アルプスに溪流は數多くあるが、雙六谷といふやうな、優美な名を有してゐる水流は、他に一つもない、雙六谷には、雙六の盤面に似た岩石があるところから、この名を獲たといふことになつてゐるが、雙六谷は一に四五六谷とも書く、信濃の古地圖に、五六岳といふ名が見える、おそらく今の野口の五郎岳、又は黑部の五郎岳などに擬した名かも知らぬが、五六岳と四五六谷とは、何か共通した語原を有してゐるかも知れない、或はスゴロクのスゴなる語は、飛驒にある地名の數河と關係を有してゐるかも知れぬ、現に雙六谷から西一里、高原川沿岸にも、數河（細江村）といふ字がある、其他にも數河（益田郡馬瀨村）無數河（大野郡久々野村）等の名もある、數河は水邊に緣のある地名須賀、又は菅生などゝ、同じ意義であらう。

それはともかく、雙六の盤面に似た盤の石から、この谷の名を得たといふ傳說も、可なり古くからのことである、寬政年間の古寫本「高原遺事」には「雙六盤石あり、此石、伏て有るとなり、起せば祟るといふ」とある、雙六谷が魔所として恐怖せられてゐるのは、一にその「盤の石」のためである、「盤の石」は雙六谷の主のやうな權威を有して、種々の怖ろしい話を傳へてゐる、この盤の石を小說の材料として、明治のローマンチシスト、泉鏡花氏は「神鑿」（明治四十二年刊單行本）を作られた、篇中には雙六谷は勿論として、槍ヶ岳まで背景になつてゐる「采」「雙六盤」「四五六谷」などいふ章が、設けられてゐる、この邊の荒寥深秘なる峽谷は、同氏獨得の、羈絆のない、空想を駈けめぐらせて、おもしろく描かれてゐるが、このくらゐ事實に頓着なく、書けたなら、愉快であらうと思はれるが、それと同時に、氏が空想で假設した怪奇なる自然景象の描寫の筆致は、本體や、實相や、眞をやかましくいふ今の文壇では、異數と言はねばならぬ、私をして言はせれば、ローマンチック派衰亡の今日で、その派の自

然觀は、最も多く氏の小說から、「盤の石」に關する、二三の文句を摘むとかうである。

いま氏の小說から、「盤の石」に關する、二三の文句を摘むとかうである。

谿流について溯ると、雙六谷といふのがある、――そこに一座の大盤石、天然に雙六の目の裁られたのがあるといふ。

いかにも、此邊で噂するには、春の曙のやうに、昔々と霞んだ、滑らかな盤石で、藤色がかつた紫の筋が、寸分違はず雙六の目になつてゐる。

雙六は確にあり、天工の奇觀の故に、四五六また雙六谷と、そこを稱へ、溫泉も世の聞えに、雙六の名を負はするが、谷を窮めて盤石を見たものは昔から誰も無い、――土地の名所とはいひながら、なか〳〵以て、案内者を遮れて、踏込むやうな遊山場ならず。

……

淵の前には一座滑らかな盤石の、その色濃き綠に碧を交へて、恰ど千尋の淵の底に沈んだ、平かな巖を、太陽の色も白いまで、霞の滿ちた一座の濁りもない、蒼空に、合せ鏡して見るやうな――大さはされば疊三疊ばかりと見ゆる――昔に聞く飛驒國、吉城郡、神寶の山奥にありと言ふ、雙六谷の名に負へる、雙六巖は是ならむ、巖の面に浮模樣の末を揃へて、上下に香の圖を、合はせたやうな柳條がある。

けれども事實は、雙六といふ溫泉もなく、又盤の石も、三疊敷などいふ、大きな石でもない、この事は後章に述べる。

吉田東伍博士の「大日本地名辭書」雙六の條にいふ。

今上寶村の大字とす、船津の東三里、其溪流は越中の國界、鷲羽岳より出づ、雙六は此に盤石一座あり、鬼斧神鑿、宛として博局のごとく、嶇路非然たるを以て、此名を得たり、又材木岩あり、同巧にして異形とす。

これも文を弄し過ぎてゐる、雙六谷の水源を、鷲羽岳より發するといふは、當つてゐないし、「盤の石」も、そんなもんぢやあない。

谷の名に負へる雙六といふ遊戲の品はもと、天竺から出たもので、日本紀に、持統天皇が雙六の禁令を出されたとあるから、その頃、盛んに行はれて、弊害があつたものらしい、今を距ること一千二

百餘年前である。

平安朝時代にも、この遊戯は、大内裏に、艶なる人々の纖手によつても、行はれたらしい、何がしの帝が、朕のまゝにならぬは、雙六の骰子と、鴨川の水だと言はれたことは、歴史上に名高いユーモアになつてゐる、モウバッサンは「水の上」といふ紀行文に、佛蘭西の王さまの機才を自慢してゐるが、沈默がちな日本の帝の吐いた警句として、雙六と水は、珍品である、その雙六が、川の名になつてゐるのだから、偶然くらゐ皮肉なものはない。

たゞし平安朝時代の雙六は、今日春の遊戯に兒童がやるやうな、繪雙六でなく、十二の格子のある局面に、敵味方、黑と白の馬十二を並べ、二つの骰子を筒に入れて、代る々々振り出し、出た數ほど格子を數へて、馬を早く敵地に送り込んだ方が、勝ちとなる、淨瑠璃の玉藻前三段目で、姫たちが最期の際に、首を賭ける雙六は、それである、江戸時代も、始めのほどは道中雙六などはなくて、宗教上の繪をかいた淨土雙六といふものを弄んでゐた、貞享元年の印本「西鶴二代男」に、吉原の遊女の遊ぶさまを「或は手ずまふ、火わたし、淨土雙六、心に罪なく浮かれ遊ぶ」とあり、道中雙六は、下つて寶永四年近松門左衛門の作、丹波與作の淨瑠璃道中雙六の段に「これこそ五十三次を、ゐながら歩む膝栗毛、馬、はいしい道中雙六、南無諸佛分身と出た六字を、六角にきざむさくら木、花の都を、まん中に云々」と、十返舍一九の名高い「東海道膝栗毛」といふ本の題は、この近松の文句から思ひついたのであらう。

雙六谷が始めて物の本の記錄に上つたのは、私の知つてる限りでは、橘南谿の東遊記である、南谿は醫者で、博物學者で、旅行家で、文章家である、醫學旅行のために、邦内を漫遊すること前後五年、京都を日本の中心として、そこから東西に分けて、西遊記及東遊記を撰した、この本の序文は、寛政七年（一、七九五年）の日附になつてゐる、南谿は東遊記後篇、卷之三で、雙六谷に就いて、左の如

く記してゐる。

四五六谷

四五六谷は、越中、飛騨、信濃三國の間へ入り込る谷なり、富山へ落る神通川を遡上り、又其支流を尋てのぼるに、甚深遠にして其奥を究る者なし、近き年飛州舟津の人兩人、此谷の奥を究んとて、三日の糧を用意して、段々川に沿ひて入りしに、其食も乏しくなりぬれば、魚を釣り食ふて尙ほ數日尋入りしに、ふと伴ひし者の魚を釣り居る顏を見やりたるに、異形の化物なり、大に驚きて聲をかけたるに、魚を釣り居たる者も、驚きてふりかへり見るに、その呼たる者の顏、異形に變りて、恐しさいはんかたなし、たがひにかくみゆるからは、此地に變こそ有るらめとて、いそぎ逃歸れり、遙迦出てたがひに顏を見るに、何の變りもなく、常々の如くなれば、此奥こそ山神の住所ならめ、人の入る事を忌嫌ひて、かゝる變をあらはせしならんと恐れて、其後は奥深く入る者なしとなり、此事を其頃語り合ひしに、飛騨の高山の人、其座に在りていふ樣、それは山神の變にはあらず、山と谷との日受によりて、人の顏異形に見ゆるものなり、飛州の中に人の往來する谷道に、人の顏長く見ゆる所あり、其谷をしばし行過れば、顏色常の如し、此道を通り馴れざる人は、大に驚く事なれども、所の人は常々にみなれてあやしむ事なしと云へり、外の國にてはいまだ聞及ばず、いと珍敷事なり。

彼はこの話材を、常識の上から分別らしく說明してゐるが、これを南谿に話した人は、雙六谷を怖るべき魔所として、目の色を變へてゐたかも知れない。

紀行文に、雙六谷の名が初めて見えたのは、飛騨の國學者、田中大秀が、文化二年八月に書いた「枕の月」の中に、本郷の名刹、本覺寺から高原川流域を瞰下して、

七曲道は、寺よりよく見ゆ、駒歸橋は、かの阪の下つ方にて、雙六川にわたせり、こたびは、そこにはものせず、さきつ年、行きて見しが、いとおもしろき景色になん。

とある、この名高い國學者も、雙六谷の入口までは、往つたと見える。

明治になつて雙六谷に就いての、記錄と言つたら、やはりウエストンの「ジャッパニース、アルプス」などでもあらうが、同氏は明治二十六年の夏、立山から富山に出で、神通川に沿つて、飛騨に入り、上流の高原川から、笠ヶ岳登山を企つるため、蒲田に行かれた、高原川の水色の美をたゝえ、そ

の斷崖を Matlock の岸、又は Derwent 河を憶ひ起させるが、それよりも遙かに規模が大きいと言はれてゐる、併し何故か、雙六川に就いては、記事はないが、翌二十七年、笠ヶ岳の頂上へ登られたとき、雙六谷を俯瞰せられ、雙六川は去年數河の荒村の下で、高原川への落合近いところで、横切つたが、恐らく笠ヶ岳登山は、この川から出來るであらうと記されてゐる、いかにも笠ヶ岳へは、雙六谷からも登れる、たとひ蒲田谷からするほどに、容易ではないにしても。

雙六谷の古い記錄としては、まあ以上のやうなものである。

雙六や幼な心の大井川　旨原

雙六の上へ、賽を投げて、興じた幼な心を憶ひ出すのは、かの東海道の大井川であるが、これは賽の淵も、盤の石も、備はつて、川までが、その名に負へる雙六谷である。

七　雙六谷の傳說

或飛驒人に、雙六谷の話を聞いたら、あそこは深い谷ですといふ、昔から魔所と言はれてゐるところですといふ、その次に、あのくらゐ傳說に富んでゐる谷はありますまいといふ。

傳說といふことに、さまでの興味を持たない私も、雙六谷の、美くしい水や、石の姿を見たときに、創造の力をまざまざと見せつけられた氣がした、この魅力のある水は、石は、森は、深遠な自然の感情を、或時は華やかに、或時は沈痛に、色づけてゐる、谷の水が磁器を見るやうな薄青色に波立つとき、源家の郎君の後を慕つて、籠の渡しから、水へ沈んだといふ姉妹の悲劇が憶ひ出られる、「吉田八重菊、八重牡丹、浮名流した薄浪に」調子は朴素で、曲がないが、これはむしろ美女に化身した水、そのものに對する土人の哀歌(エレジイ)ではあるまいか、懷つかしいやうな、怖ろしいやうな、嵩にかゝつて凄いやうに、たぎり落つる谷川の水は、岩石樹木のやうに、彫塑的に明確の輪廓を有さないで、夢のや

うな、幻のやうな、月夜のやうな、薄皮のかゝつた美くしさを與へて、その美くしさは、自然から享受する涙の源泉となる。

おもふにアルプス山は、佛蘭西の專有物ではないが、自然兒ルッソーが、一たび出てから、雪のアルプスが、佛蘭西文學の版圖に歸したといふではないか、高原鄕に行はるゝ民謠よ、傳說よ、日本アルプスをして、爾の版圖に歸せしめよ、たとひさうとならないまでも、せめては美麗なる魔魅の力あるその水を。

雙六谷が、高原川に注ぐところ、高原川が神通川へと姿を更へ、形を改めて、北の方日本海へと落ちゆく間に、水の精靈は美女に化し、妖怪に化し、靈獸に化して、多くの傳說を殘してゆく。

何よりも雙六谷、そのものが傳說の母胎から出た愛兒である、天の邪鬼が「磐の石」を局面として、雙六を弄んでゐた、そのうちに、夜が明けたので、盤を淵に投げ込まうとしたが、間に合はなかつた、骰子だけは水へ投げこまれて、今の賽が淵といふ名を、とゞめた、重いので岸に捨てられたまゝ盤の石は、未だに殘つてゐる。

天の邪鬼は、この雙六の盤の石を、刻むために、向ふ岸の材木岩を使つた、雙六盤の削り屑は、積んで今の木葉山になつたといふ。

いつの頃からか、雙六谷の尻高橋の、深い淵から、うら若い乙女があらはれた、髮も肌も、それこそ水の滴れるやうな美くしさである、村の人たちが、犒はつて、火に暖まらせ、衣物を着せ更へなどしてやつた、乙女は村人の親切を悅んで、機織る術を敎へた、別れるとき、まこと妾は人間ならず、龍宮の乙姫の身近う仕ひまつる侍女であるといつて、碧潭の中へ身を沈めて、二たびは見えなかつた、今でも沿岸數戸の村舍は、養蠶で生活してゐる。

雙六谷で最も怖ろしくおもはれてゐるのは、前に述べた盤の石である、この石の前を通行するとき

は、足音をも立てないといふ、うつかり石を見ては、祟りがあるといつて、眼をねぶつて通行するといふ、けれども盤の石は、村の通行路にあるから、たとひ柵で圍まれ、注連繩で張られて、薊や蓬で石が埋沒してゐても、未だ見られる、雙六谷切つて最も恐怖されてゐるのは、上流の黑淵である、黑淵は笠ヶ岳から、雙六谷へ入るといふ小川原谷の落ち口にある、物凄い瀧壺である。

黑淵の主は、大きな牛で、背に黑い緣がある、どうかすると瀧の潭の中から、ひよつくり浮いて出る、旱魃のときは、谷の人たちが、雨乞ひに黑淵まで行く、そのとき蠟燭を洞燈に入れて、潭に差し入れると、グルグルと渦まく水に捲き込まれて、水の心まで吸ひ入られるが、奥深くなるまで、燈影が水の表にさすといふ、黑淵の主は、煙をきらふ、私たちの一行を案内した下佐谷の住人、高田勘太郎といふ獵師の話に、黑淵の傍で野宿するつもりで、焚火をしたら、忽ち水が出て、石も、薪も、自分も、みんな押し流されて、生命辛々這ひ出したと、雙六谷の村舍で、子供が夜啼をすると、母親のすかす言葉は「啼くと、それ、黑淵の主が來るぞよ」と、物心のついたばかりの子供が、恐怖といふことをおぼえるのは、黑淵の主からである。

傳說の水の底には、靈獸が多い、信州犀川の水底には犀牛がゐて、惡るさをするのを、海野小太郎が懲らしたといふ武勇譚から、川の名を得たといふ、富士山の甲斐方面の山中湖にも、大きなあめ牛がゐるといふ、黑淵の牛もそのたぐひであらう。

雙六谷の入口から遠からぬ中洞の對岸、即ち川の左岸の高い絕壁に、六七十度の角度をしてゐる木場（この邊では兀山をコバといふ）は昔は男女とも六十一歲になると、山の上までしよひ上げて、捨てたものだといふ、寬政年間の古寫本「高原遺事」吉野村の條にいふ、「村の下に、人落しといふ所有、昔は六十二歲に限り、此所へ捨しと云」姥捨山の傳說は、信州ばかりではない、同じ山國の飛驒の中にも、方々にあるのもおもしろい。「高原遺事」は近頃刊行の活字本「飛驒遺乘令符」に收錄しあり。

雙六谷と、姉妹川ともいふべき高原川や、それに合する跡津川や、宮川にも、水の恐怖を假象したやうな傳說は、可なり古くから傳はつてゐる、一つ二つをお話する。

赤桶（上寶村）には、布越明神といふ神社があつた、昔異人が來て、龍を書いて、奉納して、何處ともなく去ると、それから二三日のうちに、大雨が降り出して、川は一面の大洪水となつた、この神社も見る〳〵押し流されて、今ではずつと下流の越中押上村へ遷された。

古川からの越中街道に近い伏方（袖川村）には、鉦子淵といふ怖ろしい處所がある、むかし回國の僧があつて、川添ひの孤つ屋に、宿を求めた、主人は良からぬ男とて、泊めて置いて、夜丑滿の刻限に、路銀を奪つて、僧を淵へ投げ込んだ、その僧の怨念で、今でも森閑たる丑滿時になると、淵の水の底で、かんかんかんと鉦をうち鳴らしてゐる。

下之本村（跡津川流域）には、もう一つ怖ろしい淵がある、それは木數淵といつて、むかし漁人が、この淵の岸で釣をしてゐると、頭がむづ痒ゆくなつて來た、ふと振り向くと、大きな蜘蛛が、いつの間にか、絲を頭へ懸けてゐる、おどろいてその絲を、當りの木の枝へ懸け替へ、自分は呼吸を殺して見てゐると、やがてひどい音がして、その木は、淵の底へ、めりめりと引き入れられてしまつた。

この高原川の淵の話は、「高原遺事」に依つたものである、寛政の昔の記錄に出てゐる話だから、現にいまも猶、さういふ傳說が殘つてゐるか、否かは確かでない。

八　雙六谷の水の美

高原川峽谷の崖が峻しく、水面までの谷が深くなるのは、むしろ船津町以北であるが、以北にはあまり段丘が發達してゐない、我が雙六谷の落ち合ふ邊、即ち本郷、在家、宮原から見座へかけては、段丘が二段三段と、標式的の發達をしてゐるが、その最下段の見座へ來ると、高原川は、枕許に通ふ

やうに近い、その見座の高原川には、柳橋が架せられてあるが、雙六谷は、柳橋から一二丁の隔たりなる、北へと落ち込んで來てゐる、高原川の淨明な、美くしい水へと突つかけて來る雙六谷の、その又水の麗はしいことゝ言つたら、只だもう青い火である、私はそれを液體と言ひたくない、たとひ氷のやうに冷めたくても、それは焰である、紫の山や、黑い森から、飛んで、めらめらと岩石を燃えつくす一圍の青い火である、この色が、この精力(エネルギイ)が、この音響が、この暗示が、深遠を閃めかす青い火でなくて、何であらう。

雙六谷それ自らも、懷を開いて、小さな流れを受け入れる、淺い溪水が、子供の駈けつこのやうに、よたよた、ちよろちよろと、走つて、ざんぶと身を躍らして飛び込んでも、雙六谷の本流では、水の競り合ひは、一向に烈しくなく、波が大きく蜿ねつて、ゆらついてゐる、高原川と雙六谷の合流點の入口から、金木戸近くまで、三々五々に散らばる村舍は、川岸の小森と斷續してゐる。

川にも兩側に、兀たる大岩が截つ立つて、凹字形に、雁木のやうに急に深くなるところがある、さういふところは、水嵩が多く、濃藍色に輝やいてゐるが、河底と下層の水が、いかに激しく摩擦し、動搖してゐるかを知らぬ顏に、水の表面は、神經の纖維一筋も動かずに、のんびりと落ちついてゐる、その悠々と、澄まし込んでゐる流れも、よく見れば迅速なること、奔馬のやうで、川波は、すいすいと岩の上を平ッたくなりながら、跳りこえる、とろりと青く澄んでゐる深潭を見つめてゐると、あまり透明に、青澄んでゐるので、ぐらぐらと眩暈がして、後髮を引き倒されさうになる。

おそらく純藍といひ、透明といつたら、雙六谷の水であらう、私は日本アルプス中で、信州上高地の水を、最も透明に、最も純粹に、最も美藍の色とおもつてゐたが、雙六谷へ來てからは、孰れとも言へなくなつてしまつた、あまりにその水が透明澄徹にして、底の底まで見え透くために、底の白砂と水の表面とは、骨と皮のやうに、ぴつたりくッついて、深いのか淺いのか、見當がつかない、二三

尺の深さと思つて、金剛杖を立てると、腕まで突つこんでも、杖がまだ底へ觸れずに、水中に垂れてゐる、殊に金木戸から人家と絶縁して、廣河原へ來てから後、「青淵」や「長瀞」の深潭は、迂濶に足を辷べらした同行の某君を、一たびは人魚のやうに、吸ひ込んだ、辛ひに游泳の達人であつたから、又吐き出されて、浮び上つたが、水は凄溟な魔力を湛へて、一たびこゝへ葬られたら、千古の墳墓になるであらう、雙六谷を通じて、最も戰慄されるのは、動の方面で黑淵、靜の方面で青淵である、しかしながら、水は大動亂をしてゐる時よりも、大沈默をしてゐる時に、最も凄い色と、痛い味を示してくれる。

入口から上流に溯つて、東北の方向を取つた雙六谷も、廣河原からは、概して東へと方向を變じ、北俣谷を後にして、水量はおのづと少なくなる筈であるが、河道傾斜の度は急に、流水經過の地形は、峻絶して、一行は殆んど魚に化したやうに、水から水を涉らなければならなかつた、河道も、膠もなく鋭角に屈曲して、水聲は巨礮のつるべうちに、谷の空氣を震動して、未だに耳に殘つてゐる。

雙六谷には最も岩魚が多い、さうしてむやみに大きなのがゐる、活潑に水中を突つ切つてゐる、あの激しい、棒でひつぱたくやうに痛い水に抵抗して、深潭激流を、彈かれるやうに泳ぎ廻つてゐる。今はそれでも、よほど少なくなつたので、昔はこの川は、岩魚七分水三分と言つたくらゐ、若宮橋の下などは、眞つ黑になつて、ウヨウヨゐたものだといふ、今日でも、あんなに多いのだから、さうかも知れない、同じ岩魚でも、宮川あたりで漁れるものよりか、この雙六谷のは、肉が肥えて美味であるといふ。

見たいのは雙六谷の、水痩せて石出づる秋の姿である。

九月下旬には、まつかに紅葉して、十月末には、もう落葉が火の粉のやうに、上を下へと、人のゐない谷を舞ひ狂つてゐるといふ、その頃はもう、山々峰々には、白いものが降りて、爛々たるブラチ

◎附　錄　飛驒雙六谷　小島　二一〇

ナの大鎖が、虛空に蜿ねり、人里へものゝ三四里も近く歩んで來るやうになる、仰ぎ見る谷々の村の人は、眉を燒かれるやうな冷たさに、身慄ひして、圍爐裏の側まで戻つて、かぢかむことであらう。

雙六谷の遊びを終へてから、私は同行した人々から、谷のたよりを、幾回となく受け取つた、それは秋から冬へと遷りかはる山岳曆（アルペンカレンダー）を、一枚々々と、めくるやうな氣がした、その中には、次のやうなことが書かれてある。

當地奥飛驒の秋景は、たけなはに御座候、槍、穗高、笠、其他の連峯は、先月下旬に、初雪これあり候以來、積もりては消え、消えては積もり、今や全く純白の姿を封じ居候、山の裾をめぐる連紅の盡くるところ、密叢せる針葉林のコバルト色にぼかされ、終りに應揚なる山體が、白衣を纏ふて、澄明なる盤空に向つて、ピークを連ぬる態は、雄大の極と存候。（十月二十六日、中野善太郎氏）

我愛するアルプスの村は、今や紅葉の世界より、雪の世界に逝かんとするところに御座候、雙六岳、及笠ヶ岳、其他の雄峰は、已に何回も白帽をいただき、その雄姿は、吾人に無限の快感を與へ申候……流水を血の如く染めた紅葉も、今は北風に襲はれて、冷やかな泥土と化し申候、併しながら水は清く、山は或は白く、或は黃に、色どられ、天は靑く、我等の周圍を、取まく自然は、いつまでも、美くしく御座候。（十一月十三日、大霜德次郎氏）

一度見たいと仰せられました雙六の紅葉は、漿に枯木と化しました、谷が出來て、始めて部人の足はおろか、全身を幾度となく、濕ほした雙六の水は、半ば氷のやうに冷却して、色褪せた落葉を、盛んに下流に送つてゐる、その中の一二葉は、かの上流の谷間にて、先生の足にも觸れ、吾等の帽にも、觸れたに違ひない。

廣河原の飯の味と、前笠の尾で、いただいたミルクの味は、又と一生味はふことが出來まいと信じます、附近の山岳は、一ヶ月も以前から、降雪して、この頃眞白に見ゆる、定めし、春めかしく咲いてゐた岩結梗も、黑百合も、今ははや、一生の事を終へて、雪の下に眠つてゐるのだ、いかに彼等の一生の短かきことよ。

「偃松」とれに、夜を明かした時の、大きな赤色の月は、依然として槍の附近に昇る、併し小さくて、白し、かの山火事（燒岳の噴煙のこと）は、今も尙ほ盛んに燒けてゐますよ。（十一月十日、上野定一郎氏）

ウエストン氏は、日本アルプスの特徵として、歐洲アルプスに見ることの出來ない特色として、先

づ谷を擧げられた、崖の急峻なこと、大なる岩石の多いこと、森林の欝葱として、奥が知れないほど、茂り合つてゐること、殊に谷水の透明純藍の美くしさは、かの氷河から融けて、色々の砂塵や、藻類や、混交物で、エメラルド、グリーンのやうな濁つた綠をしてゐる水に比べて、遙かに立ち勝つてゐることを、私に話された、私は歐洲アルプスを知らないが、もし日本アルプスが雪に於て、彼等に競はず、却つてそれから還元された水に於てすぐれてゐるとしたならば、わが深秘なる雙六谷は、日本アルプスの奥深くに秘められた、最も輝やいた珠玉であらねばならぬ。

九　雙六谷の段丘

飛驒の高山町を出立して、雙六谷へ入るのには、折敷地を越えるのと、八日町を取るのと、二道ある、前道は平湯街道に隨ひ、松之木から、坊方に出で、こゝで平湯街道に別れて、折敷地へ入り、三里二十町で駒ヶ鼻峠に達し、殆んど二里も下つて、本郷村に至る、後道は越中街道の廣瀨町から、本街道を離れて、八日町に到り、こゝから大阪峠を踰え、荒原、藏柱を經、藏柱川に沿つて、本郷村まで三里十八町、兩方とも樂な一日路である、前の方が近い代りに、峠がやゝ峻しく、後のは遠いけれど、安樂である、私たちは八日町の方を取つた、八日町は山の麓に建てられた寸方の詰まつた、寂びしい田舍町である、舊時は榮えた宿驛で、船津への本街道であつたさうだが、それも今は、古川町の方へ取られて、見る影もなく滅入つてゐる、私たちは峠を踰すのに、荷擔ぎの人夫を雇うにさへ、困つたのである。

兩道から落ち合ふ本郷村は、和名抄に載する遊部に當る、アソフはアサミにて、淺水の意か、高原川沿岸に、阿曾布村あり、字に麻布野、阿曾保、和佐保、和佐府があり、同じく船津町に朝浦がある、益田川沿岸小阪驛の南端にある名所、朝六橋も淺水であらう。又慶長石高帳に見ゆる吉野郷の本郷で

ある、およそ飛驒三郡の內、吉城郡は、國の東北部を占め、東は信濃に接し、北は越中に繫がつてゐる、古來から奧飛驒の稱があつて、飛驒山脈の巢窟であるところから、日本アルプスの登山者には、雪と、氷と、岩石と、溪流と、異卉珍卉の極樂園のやうに思はれてゐるが、この郡は神原峠で南北に仕切らて、南部は古川町、國府、細江、小鷹利、阪下、阪上、河井の一町六ヶ村になつてゐる、即ち宮川の流域で、山も低く、水も細く、穩やかに、こゝに落花雪の如き廢殘の舊都もあれば、萬葉和歌集にある、白眞弓斐太乃細江の名所もある、飛驒でも、暖國のやうで、山國らしく思はれない、北部は船津町、袖川、阿曾布、上寶の一町三ヶ村で、日本アルプスの都市村落は、こゝで見られるし、奧飛驒の威嚴であるところの高山も、こゝにむくむくと雲のやうに屯ろしてゐる、さうして北部を貫通してゐる溪谷は、我が痛奇なる高原川である、けれども、就中槍ヶ岳、穗高岳、燒岳、雙六岳、蓮華岳、黑部五郎岳（中俣岳）笠ヶ岳のやうな飛驒山脈の主系を、全部占有してゐるのは、上寶村である、もし濃飛高原を、日本最大の高原とすれば、上寶の五ヶ村は、濃飛高原の中でも、代表的の高原であり、模型的の高原であると言はねばならぬ。

まことや、上寶は上高原を約めた言葉で、高原川の流域は、この五ヶ村にあつて上流——むしろ源流の姿を呈してゐる、其五ヶ村の中でも、吉野、本郷、在家は、高臺の上に建てられ、飛驒全國を通じても、多からぬほどの廣濶な平原で、一段下には宮原があつて、更に最下段は見座である、宮原から見座にかけての、靑々した水田は、疊のやうに平らかで、美くしかつた、私たちが高山町の住廣造君から、紹介せられた澤田穗束君は、宮原の段丘の上に、瀟洒とした洋館を築かれて、そこに住まつてゐられる、赤い襷掛けをした、うら若い夫人が、洋燈を買つてゐられるところへ、アルペンストックを提げた私たちが訪ねて來た、四近を見廻はすと、私は瑞西の山中へでも來たやうで、烈しい氣稟でありながら、雪山と氷流の高原の上に、高踏的生活を送られてゐる同氏の生活こそは、むしろ理想

に近い、談やむべきものであると思つた。

兼て打合せのあつたこととて、同氏に導かれて、見座の柳橋の袂にある、水琴亭吉本に投宿して、そこの二階に通つた、高原川の明淨美藍なる水の上に浮んでゐるかとおもふほど、水の滸にある、雙六谷の水が高原川に落ち合ふのも、すぐそこである。

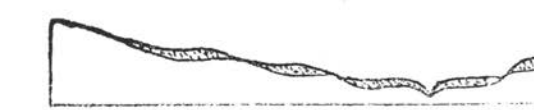
在家、宮原、見座と、その地形を一見すれば、高原川の段丘が著るしい發達をして、二段三段と、舊河床の紀念を、この日本無雙の高原の上に、築き上げ、澤田氏の宅も、その舊河床の一部に建てられてゐることが解る。

段丘は多くの塲合に、齋對的に、川の兩岸に等高線を描いてゐる、それが疊の上に俎板を置いたやうに見える、處に依つては、段丘は溪水が、自分で押し出した砂や砂利中に切り込んで出來た堆積成のものと、堅い岩石の峽谷に切り込んで出來た切截成のものとあるが、孰れにしても、段丘の出來てゐるところは、溪水が現在の河底まで、浸蝕しない以前の河底と見做して、然るべきものである、さうして一段二段三段とあつた塲合は、高いものほど古く、低いものほど――即ち現在の河底に近いものほど、新らしいので、水成岩の成層の塲合に、下にあるものほど古く、上にあるものほど新らしいのとは、正反對になる。

但し溪水の側面運動が、一方の片岸にのみ偏した時は、片岸の段丘になり、相互交替に働く時は、兩岸各自に違つた水平の段丘が出來るが、日本諸川の段丘は、溪谷が狹くて、水が兩側を運動するから、兩岸に相對に發達してゐるのが多い、その典型的のものは、信州諏訪湖から飯田に至るまでの、天龍川の兩岸で、此川の段丘は、理想的の發達を遂げてゐる、私の見た山國の河段丘は、これが第一である、それに比べるのではないが、高原川のもさうである、堅岩を開鑿して切截性の段丘を作り、その上に川水が冲積した土層を載せ、更に水平が低下するとき、上段丘の一部を切截して、又下段丘

山　岳

平原に多き堆積成の段丘



山地に多き切截成の岩段丘（冲積土に覆はる）

を作つてゐる、最高のものは本郷で、宮原がその第二級になり、見座には第三級のものが見られる。

少壯期の高原川も、人間の額の皺のやうに、樹木の切り口の木輪のやうに、蛇の脱いだ蜕のやうに、かうした舊い紀念を殘してゆく、さうしてその側を離れがたなに、夜晝となく見返りながら水は流れてゆく。

一〇　雙六谷の入口より水源まで

見座の柳橋の傍には、立札に里程を記して、東、蒲田温泉五里十一町、平湯温泉六里二十三町　西、船津町二里二十町、富山市十六里半、南、古川町六里三十町、高山町六里十四町、北、本村雙六材木岩一里六町、とある、見座から柳橋を渡つて、高原川を横切り、すぐ中山の孤村を經て、若宮橋を渡り、雙六谷を横切る、二川の合流する區域は、Y字形をしてゐるが、僅か二三町の間に、Yの兩枝を横絶するのである。

それから始終雙六谷の右岸（上流より下流に向つて、以上同じ）に沿うて行く、砂場、古瀧、中洞と過ぎゆく間、雙六谷は、兩崖の裾を蹴出して、純然たるV字形の深谷をなしてゐる、氷河學者のよく言ふことに、溪水の浸蝕した谷は、V字形で、氷河の浸蝕した谷は、U字形だとある、成るほど雙六谷は、確かに溪水の浸蝕谷である、V字形の谷である、がV字形の成因は、一つは多雨國の溪流であるためで、雨の無い地方では、川の兩岸の傾斜が、殆んど垂直で、谷は溪水の働作に依つての

み、直截に下へ下へと切り込まれてゆくため、深められ、弘められて、氷河の働作がなくともU字形の谷を作ること、かのカニヨンのやうなものがある、併し氣候温暖で、水蒸氣の多い國の溪谷は、横斷面がV字になり易い、それは谷底流水の、化學的作用のみでなく、雨に、風に、氣温に、結氷に、水分が岩を潜つて、傾斜面に出で、岩石に坑道を作つて、内部から破壞もすれば、新らしい側面も露出する、氣温の昇降や、結氷に依る水分容積の擴大や、それらから來る岩石の膨脹、及び緊縮から、破裂を促がすやうな作用も、兩岸を斜向させて、V字形の谷を作るに與かつて力あるものと見なければならぬ、冷温常ならぬ霧や、雨の多い日本アルプスは、V字谷を作つて、氷河の遺跡と稱するヘットナア、スタインのある梓川も、やはりV字谷であるのは、當然である、されば現形の或谷の見取圖に筆を入れ、點線を加へ、それを强ひてU字谷に改造して、氷河存在の論據の一とすることなどは、私から言へば、勞して功がないことだらうと思はれる。

間もなく尻高谷へ來た、尻高谷は、北から落ちて來る小谷で、この邊から雙六谷の落ち口へとかけて、花崗岩地によく連つてゐる石英閃綠岩を流下するので、川底の美事な大小の轉石には、閃綠岩が最も多く、この細粒にして、或は淡青、或は濃綠の石が、碧空のやうな透明な水を浴びてゐる氣持は、又なくいゝものである、さうしてこの岩石の美くしい露出は、雙六谷では、この一小部分である、飛驒山脈で最古の迸發岩は、おそらく角閃花崗岩であらうが、この地の石英閃綠岩は、それよりも、更に古いものと考へられる。（閃綠岩は、花崗岩に似てゐるが、只だ長石が、正長石でなくつて、斜長石であるのが、特色である。）

尻高谷の小溪流に溯れば、尻高鑛山に行かれるし、右の方尻高橋を渡つて、左岸に移ると、十五町で材木石に達せられるさうである、私たちは本道を行つて、五町許で盤の石を路傍に見た。盤の石には、嚴かめしい制札が立つて「此石神代よりの神石に付、無禮致す可らず、もし無禮する時は、其里、其人、神罰眼前たり」といふやうなことが書いてある、さうして石には「天之美迦星乃神石」といふ

◎附　錄　飛驒雙六谷　小島

御神號が奉られてある「美迦星になりてふ石を拾ひ來て、君がよはひを千代と祈らん」といふ歌が禿筆で、同じ木札にしるされてある、友人故大下藤次郎氏は、いつか「あまりに多く山岳地の迷信を破壞する勿れ」と言つて、物質論者が、山民の眼前で、彼等山民が尊崇する本體に、不敬なる振舞を加へ、彼等をして禱るところを失はせてはならぬと、警告されたことは、私も異存はない、私はこのやうな山地へ來て、土人が崇敬せる神石を侮辱し、偶像破壞主義者(ノクラスト)然たる、生意氣な顏をしたくはなかつたが、神代よりの神石、美迦星などいふ語からおもひついて、もしやこの盤の石は、隕星の斷片ではないかと、疑ひ出した、さうして隕星と神話的傳說の關係などが、ふと頭に浮んだので、立ち寄つて覗く氣になつた、稗畠の前に材木の柵を繞ぐらし、注連繩を張つてある、梅と小さな楓が二本、その傍に立つてゐる、柵の中は薊や蓬が、ぼう〳〵と茂つて、神石の本體は、この中に埋沒されてゐる、私はアルペン、ストックの尖先で、草を靡かせた、尖先の金屬が、カチンと音がして、二尺ばかりの長さの一片の花崗岩が、腹を出して寢てゐた、雙六の盤の行儀正しい目は解らなかつたが、隕石といふ想像は外れて、鏡花氏の「神鑿」に描かれた石の正體は、意外に平凡なものであつた。

「盤の石」の記憶

本邦に名石は多いが、盤の石の如く、恐怖されてゐる石は、那須野ヶ原の殺生石以外には、おそらくあるまい、兩方とも濃厚なる傳奇的色彩に富んでゐることも、同じでゐる。

中澤（ナカソレ）上の部落から、藤浪といふ家の、崖の下に、雜木隱れに一本の板橋がある、此板橋を渡つて、對岸（左岸）に到り、材木石を見る、傾斜の可なり急な阪を昇ると、石片の散在が、もう材木石に近いてゐることを暗示する、材木石は、この小阜丘の、恰度九合目ぐらゐに露出して、栃の枝が翳したり、熊笹が茂つたりしてゐる間の、空地に、灰色をした感覺の鈍い石の甲羅を、日に晒してゐる、區域は六十間ぐらゐながら、標式的に覆ふものもなく露出してゐるところは、二十間ほどであらう、石柱の長さは、一丈餘で、主として六角が多く、恰度海苔卷鮨の切り口を、下に向け、累々と積み累ねた樣で、其積み上げた切り口の方向は、一方に偏せず、殆んど三方へ開いてゐるのは、灼熱せる岩液が、輻射狀に噴出したからであらう、高原川は南から北へ向つて流れ、雙六谷は略ぼ、高原川に丁字形をして、注いでゐるが、この材木岩の方向は、川の方面に切り口を向けて、西々南から東々北へと、走向を轉じてゐる、今現に明確に露出してゐるところは、人に缺かれたり、又風化したりして、多少とも石の原形を毀損してゐるが、雜木や、熊笹の茂つてゐる區域に屬した方は、材木石の殆んど原形態を、保存してゐる。

「高原遺事」には「材木石あり、長六七間より、三回迄、八角、六角、四角、數百本あり、或は横に積たるも有」とある、石質は遠望したときは、玄武岩かと思つたが、仔細に觀れば、日本にあまり饒多ならぬ、石英を含んだ安山岩、即ち石英安山岩なることを示してゐる、安山岩と玄武岩とは、同じ火山岩であるが、その相違は、玄武岩には硅酸の量が乏しいことである。

岩石の柱狀節理は、玄武岩にせよ、安山岩にせよ、灼熱する岩液が、冷たい空氣に觸れ、熱を放散し、冷却する際に當つて、岩液面は略ぼ互に同距離を有する個々の中心點、即ち冷却原始點に向つて、垂直に收縮し、龜裂を生ずるのであるが、その八角になり、六角になり、五角四角三角になり、或は曲り、或は歪むのは、各冷却部が、不規則に凝固するからで、早く冷却したところは、柱の形が、完

全である、さてこの多角の柱面は、相互の間に割目を有し、その割目を弱所として、風化作用に崩壞し、又は風雨のために、重力を失つて、墜落破損したりして、この岩石の、調諧した音樂的建築は、ここに頽廢の流動を生ずる。

注意すべきことは、世に材木石として、名高いのは、地質學の教科書などによく畫の出てゐる筑前の芥屋浦（ケヤウラ）、但馬の玄武洞で、是等はいづれも玄武（ゲンブ）岩であるやうに、日本アルプスの大山系を中央として、それから西の材木石は、玄武岩が多いが、アルプスそれ自身を含めて、東へかけての材木石には、玄武岩のあることを、私はあまり聞かない、例へば立山の材木石は、この雙六谷と同じく安山岩種で、木曾御岳、飛驒方面の登山路、濁江（ニゴリエー）と小俣川の落合にある岩立（ガンダテ）の材木石は、角閃安山岩、又は輝石安山岩であり、下野鹽原の温泉附近の福渡戸の材木石は、石英粗面岩である。

最も富士山には、玄武岩ともいふべき露出はあるが、中國諸州に現出する正式の玄武岩とは、性質を異にしてゐる、この大まかな區別から言ふと、同じ地下の岩漿でありながら、日本アルプス以東には、粘質の多い酸性熔岩（石英安山岩、石英粗面岩、輝石又は角閃安山岩の如き）が多く、以西には粘質の少ない鹽基性の熔岩（玄武岩）が多い、即ち化學的成分を別にする異質の熔岩が、東西に分布されてゐる事實は、よしや割合にといふくらゐの程度にしても、以東式、以西式と言つて、言はれないことはなからうと思ふ。

材木石は、現在に於ては雙六谷の岸にあると言ふことは出來ない、谷の岸より奥へ引つ込んだ小山の中壁に、露出してゐるが、元來材木石の前身、即ち地下に潛伏する岩液の噴出は、地皮の弱所、又は異種の岩石の縫合線、又は破綻線に沿うて、噴出することが多いので、川の沿岸や海岸などには殊に多い（上記の玄武岩、又は安山岩の材木石は、悉く海岸又は河岸に於てゝある）から、この雙六谷の材木岩も、雙六谷がこの峽谷を、今日のやうに深く彫刻しない以前には、すぐ沿岸に露出して、ゐたのでは

あるまいかと考へられる。

材木石の寫生と觀測とを終へて、又もと來た橋を渡つて、右岸に移り、雙六谷最後の人類の部落なる、金木戸村で、晝休みをした、およそ雙六谷の兩岸に散在する部落と言つては、桃原、中山、砂場、古瀧、中澤上、熊燒、原等の名はあるが、僅か三四戸ぐらゐしかないところもあつて、疎らに寂びしい、殊に金木戸村は、雙六谷の峭壁に削立して、しかもこの川の大屈曲した突角に、昔の城廓のやうに、孤聳して、北は桑崎山脈で、遮られ、南は雙六谷を隔てゝ、材木石のある熔岩臺地を背後にしよひ、谷は北々東へと奥深く溯られ、飛驒山脈の主脈に入る、日本アルプス系の荒寥なる村落として、人里から遠く離隔してゐるのは、越中の有峰であらうが、山の中へ奥深く、喰ひ込んでゐるのは、おそらくこの金木戸ほどのところはあるまい、「高原遺事」にいふ、「此所へ古へ落人來り住す、村口に鐵の筋金入し門を立て、居住すゆへ、村名とす、出村あり、山吹村といふ、山吹花多し」有峰や金木戸村に、古くから落人說あるは、地形がおのづと生み出したローマンスであつて、歷史上の事實ではないかも知れないが、金木戸こそは、人類がいかばかり、自然の胸奥へ喰ひ込んで、岩石と水に執着して、生活してゆかれるかといふことを示してゐる。

金木戸から今宵の泊りなる廣河原の小舍へは、二道あつて、一は雙六谷を對岸(左岸)に渡り、熔岩臺地を越えて、又雙六谷の廣河原に下るもの、一は雙六谷の右岸に沿うて、森林の中を、崖壁の上を行き、廣河原に至つて、始めて對岸(左岸)へ移るもので、一行中、中洞、大霜、結城、岩城、中野の諸君は、前日に前の道を取り、三枝君、上野君、及私の三人は、後の道を取つて、廣河原の小舍で合したのである、金木戸から直ぐ雙六谷へ入つて、峽谷の中を直通するのは、近いには違ひないが、大瀧だの、深淀だのといふ難所があつて、激水急湍、涉るに惱み、加ふるに北俣谷の合流するところは、嶮惡であるといふので、私たちの取つた右岸の森林道が、最も安樂なやうである、この森林道は、雙

六谷の右岸に沿つて、北東行するのであるが、雙六谷が南東に折れるので、暫く谷を離れ、雙六谷と北俣谷の間に楔狀に突入する一山脈を見て、暫らくは北俣谷に沿ひ、雙六北俣兩谷の合流點より、少しく上流の北俣谷に架した、高波橋（板の假橋）を越えて、この楔狀の山地を迂回し、雙六谷の沿岸道となるので、高波橋下の激流は、竹を割つたやうな峻直な峽谷一杯に、噴き立て、怒鳴りちらし、身の毛の悚立つおもひがされる、それこそ怖ろしくも美くしい深谷（カニヨン）の姿である、廣河原へ下りてから、雙六谷を横絶し、左岸の森林中にある廣河原の小舍に泊つた、廣河原と呼ぶほど、廣くはないが、雙六谷としては、稀に見る平濶地で、流水も先づおだやかな方である。（北俣、中俣合流以後の下流は、奏、陸地形圖に、中俣川とあれど、余は北俣の稱呼に從ふ。）

廣河原の前面には、黑部五郎岳（中俣岳）から派出される池尾山と呼ぶ楔狀山岳地が、平均二千米突以上の標高をして聳えてゐる、山頂には池があるが、ふだんは水が涸れてゐるといふ、即ち北は北俣谷、及仲俣谷と、南は雙六谷の間へ、厚衾のやうに入り込んだ、森林と岩骨に富んだ絶壁の峻山で、鷹ノ巢十根だの、天鳥の岩などいふ、猛鳥の棲み家を名とした峻絶した岩が多い。

雙六谷はこの池尾山を北に、笠ヶ岳の大岳を南にして、雙六、蓮華、黑部五郎を東方の大障壁として、その間を細長い袋のやうに、次第に縫ひ縮められて、源流に溯るのであるが、殊に笠ヶ岳からは、小川原と、打込谷といふ二嶮流を放射して、雙六谷へ送る、兩方とも、萬年雪で浸蝕された、吊懸谷で、落ち込む口には飛瀑がある、小川原のは黑淵といひ、打込谷のは、打込の口の大瀧と呼んでゐる、中流以下に段丘を作り、三角洲を作るやうな創造は、この邊の上流では最早見られなくなつて、却つて豫前に存在する地形上の、舊狀態を暗示してゐる。

黑淵は雙六谷中で、最も恐怖せられてゐる魔所でもあり、崇拜せられてゐる靈場でもある、一行はこの黑淵に面した絶壁へ立つて、瀧壺を俯瞰したが、瀧壺は石英斑岩を浸蝕して、藥研のやうに磨り減らしてゐるが、瀑水落下の岩壁は、周圍のそれから見て、二三尺も後退（あとず）さりしてゐる、そこに瀑布の

退却が覗はれる、瀧壺の彎曲部は、激しい流水のために、主流から分離した逆流が停滯して、水の餘量を、再び流線の方へ押し戻さうとする、その面に落下する水團は、爆發して水球が流散彈のやうに炸裂する、逆流が再び主流に復歸するには、衝突が起る、そのため旋渦を生じて、流水それ自身が、方向に迷つてゐる、試みに同行の一人が、丈にあまる痩せた石楠花の一枝を拐り取つて、瀧壺に投じたところ、浮きつ沈みつして、堅岩の底深く浚ひ込まれたかとおもうと、瀧壺内の思はぬ方角に、ひよつくり浮び出で、首をかしげながら、擦り足をするやうに、又素と來た流線へ、ぐるぐると引き廻され、狹い瀧壺の内側を、五六回反覆して、大きい輪を描いてゐたが、あれでいつかは、瀧壺を出て、里まで流れて來られるだらうかと、話し合つた。

雙六の本谷川、中流の水の美くしさ、怖ろしさと、跋渉の惱みと、一行の雨中の凍寒と、饑に苦しんだことなどは、本旅行談の骨子として、別の文章に於て叙述し、描寫せんと欲するところであるから、こゝには凡べてを省略して、一足飛びに、水源まで進ませる。

上流に溯つて、下扳戸澤に來た頃は、漂石が谷の中央を埋めて、本谷川も二筋三筋と別れ、別れては合ひ、合ひては一水となる、その間には水楊が谷風に銀色の裏葉を翻へして、梓川の上高地盆地を憶ひ起させるやうなところもある、窮屈にして危險なる奥扳戸の穴小舍に一泊した。

奥扳戸の小舍を離れてから、谷水は小さく細くなつたが、嶮惡の度は減ぜず、一町の難所を避けるために、殆んど三百米突も、峭壁を登つたこともあつたが、蓮華岳の直下から雙六岳の南に當る源流まで來ると、谷と言はんより磧となり、小さな森林が、ちよんぼりと谷中に取殘され、谿間に萬年雪を見るやうになつた、足指も急に仰いで、石の自然階段が出來、水音も次第に耳に遠くなつて、黄紅紫白の美くしい花が、咲き亂れてゐる平濶な草原に出たのが、即ち雙六平で、今迄の堅岩とは反對に、植物や土壤で、地層が疎鬆になつてゐる、飛驒山脈の骨髓なる槍ヶ岳山脈が、立山大山脈と連鎖されて

ゐるところだ、原の窪んだところには、雙六池があつて、いつも水が涸れたことはない、雙六池は雙六谷の水源であるが、それは併しながら、諏訪湖が天龍川の水源であるやうな意味に於ての水源ではない、それとこれとは規模の比較が、大小の倫を失するばかりか、雙六池は、池も小さく、水も少量であり、且つ水の排出する溝も、一髪の間隙で、言はゞ細い雨溝の狀態をなしてゐるに過ぎないが、雙六平に集まる雨水や、雪解の水は、その一小部分を雙六池に殘して、他は沮洳の草原地を滲透し、浸染し、伏流や潛流となつて、雙六平の側面を流下し、雙六谷へ落ちるのである、雙六の池は、偶まこの原に、美はしく象嵌されて、草原を縱横に氾濫する水の集成と、雙六谷の成立のために、押印をしたまでである、一行は雙六池のほとりへズラリと行列して、携へ來つたサイダア水を乾盃して、雙六谷探檢隊の萬歳を叫び合つた。

その日は、雙六岳に登り、引き返へして雙六平に戻り、笠ヶ岳の尾根にかゝつて、偃松の間の草原に、良夜の月光を滿身に浴びて、露臥(クレッヴァス)した、小笠岳から大笠岳に登り、弓折れの鞍部から、穴毛谷に下り、大雪田や、その雪田の破罅の間を、身を狹めるやうにして通り拔け、蒲田の左俣溪谷を横切つて、右俣と左俣の合流點から、蒲田川の左岸の林道を通行したが、私が十四年前に、初めて槍ヶ岳を登攀して、蒲田谷に下りたときのことを考へると、同じ道ながら、その坦々と開拓されて、里道のやうに歩きよくなつたことに駭ろいた。

薄暮を過ぎて、蒲田温泉に到着して、雙六探檢遂行の祝ひ酒に、一行の人々、誰彼の差別もなく、踊るやら、歌ふやらのうちに、曉となつてしまつた、句あり。

踊はて丶山又山の夜明かな

一一　雙六谷及附近の山民語

ハキ　常盤木

ハラ　平らなる山地をいふ、草原と限らず。

ハゲ
ハゲト
ハゲタ　樹木なくして、土壌岩骨の露出せるところ。

ホキ　當字にて、歩危、又は保木など書す、斷崖絶壁を控えたる通路、おもに惡路をいふ、大野郡益田川の名所、保井戸（中原村）もおそらくホキトならん。飛驒の西部白山地方にも行はる、例へば平瀨歩危、保木脇など。

ホラ　水の出でざる谷にて、サコの大なるもの。

ヌケド　崩雪その他にて、山の崩壞したる痕跡、もしくは崩壞物、雙六の谷に中拔戸、奥拔戸あり、山に拔戸岳あり、拔戸岳の辯は、後文に見えたり。

ヲ　尾根

オホボ子
オホヅ子　「ヲ」と同じ、尾根。

カナ°キ　傾斜の急なる尾根。

ガケス
ガベス　落葉樹。

ダワ　斷崖絶壁。垂るみの意味、低き鞍部。

◎附　錄　飛驒雙六谷　小島　二二四

ダシ　「ヌケド」が集まつて、土や岩が、谷へ押し入り、堆積せしもの。例、笠ヶ岳南面のダシ谷。

ツジ　山の棟、最高點、頂上。

ナベラ　滑らかの轉語ならんか、緩傾の斜面を、水流れて辷り易き地。

コバ　薪を切り落す道路、山の禿げたるところ。

ゴース　角石など、カラ〳〵して、多くはその下に、潛流あり。

サコ　水の出でざる、もしくは乾きたる窪み谷。高原川の支流、跡津川の流域に、佐古といふ地名あり。

シツタカ　「ホキ」と同地形、雙六谷に尻高谷、尻高橋などあり、笠ヶ岳より蒲田川に注ぐ同名の谷あり。

ヒラ　谷又は尾根の兩斜面。

同地方雪氷に關する語

ニメル　柔らかき、もしくは柔らかくなりかけたる雪をいふ、堅き雪の上層に、落ちたる新雪が、早く融くるときなど、ニメル、ヲメルといふ。

ボバユキ　粉の如く、サラ〳〵する雪。

カツテ　雪の堅くなるといふ、例「雨が降つたから——るだ」。堅雪の上を歩行することをも——るといふ。

カヲコホリ　氷柱。

ヅクシ　融けかゝる雪が、水分を含んで、サク〳〵する狀態、但船津地方の語。

チメル　凡べて「ニメル」に同じ、ニメルの解を見よ。

ノマ　雪なだれにて、地ぐるみ押し出すをいふ、當字にて、野間と書す、國學者山崎弘泰の、飛驒白川より白山の紀行「山分衣」(天保十二年十一月)にいふ。

「九郎五郎、桂谷なんといふあたり、野間の押し出したるあとなりとて、大きなる木どもの、打折れたるも、根ながらなるも、いと多く、魚舟の保木(ホキを見よ)ひろ河原、きんちゃみ、なんどいふ所とも、いづこも、あやうく、かしこき地にて、こゝかしこ野間の押し出たるところもあり、云々」

コホリ　萬年雪、又はその他、谷間などにある殘雪をいふ、結氷と限らず。

アワ　雪のなだれ。

一二　笠ケ岳

飛驒山脈の岩石建築が、歐洲アルプスの、それと違ふのは、歐洲アルプスの大骨は、三種の結晶岩即ち片岩(スシスト)と片麻岩(ナイス)と花崗岩(グラニット)とより成つて、殊にかの針、劍、刺狀の、稜々として切截された嶮岩は、片岩や片麻岩から成るものが多く、花崗岩は、どつちかと言へば、その間に狹くか、又は廣くかに、凹みを作つて、圓滑な棟(むね)となつて、挾まれてゐるのに過ぎないが、日本アルプスの中、飛驒山脈から木曾山脈にかけては、立派な花崗岩の帶(ベルト)であつて、片岩や片麻岩は、部分々々に認められるにしても、それほど、規模は大きくなく、又著るしい山貌を呈してはゐない、併しながら、一たび飛驒山脈に入れば、花崗岩の土性骨の、いかにも嚴かつくて、雄大なのに駭ろかぬものはあるまい、實に日本國土の脊椎骨——煮ても燒いても、亡びさうもない、頼もしくも怖ろしい岩骨である。

この著るしい大隆起の花崗岩帶は、飛驒山脈では、之を二つに分類するを便利とする、一は角閃花

崗岩で、他の一は雲母花崗岩である、花崗岩の主たる成立は、石英と正長石であるが、それに雲母が多く交はるときは、雲母花崗岩と呼び、角閃石が交はるときは、角閃花崗岩と呼んでゐるが、それも多少の雲母は含有してゐるのもある。

角閃花崗岩が、主要部分を作つてゐるから、この岩石に、色塗りをしてもいゝかと思はれるところは、立山々脈である、雲母花崗岩のそれは、白馬岳を含める後立山々脈である、否、後立山々脈ばかりでなく、更に南走して、常念山脈を占有し、木曾山脈、木曾川沿岸、並に伊那山脈の南西部にまで及んでゐる、尤も常念岳から、古生層地の蝶ヶ岳への下り口は、壓力變質のために、片麻岩狀の構造を認められるが、常念山脈と木曾山脈とは、地質の構造上、一鏈の山系と認められる、只だ現在に於て兩山脈が分立してゐるのは、奈良井から木曾川にかけての斷層谷が、存在してゐるのと、兩山脈の連鎖をなせる鉢盛山附近に、花崗岩の噴出が顯著でなかつたゝめではあるが、しかし鉢盛山それ自身も兩雲母花崗岩として、認められてゐるのであるから、この雲母花崗岩帶は、本州中でも、無双の長大なる高帶であると言つてよからう。

この角閃及び雲母の花崗岩帶は、孰れが古くからの噴出であるかといふことは、疑問であるが、角閃花崗岩の方が、雲母花崗岩に貫ぬかれてゐる擬似の形跡から推して、角閃の方が前で、雲母の方が後といふ順序になるのでは、なからうかと想像せられてゐる、この兩岩帶の縫合線ともいふべき裂け目へ、大噴入をして來たのが、石英斑岩で、その大塊は飛驒山脈に於ては三點を認められる。

第一は槍ヶ岳、穗高山、霞澤岳の山塊、第二は笠ヶ岳山塊、第三は藥師岳及黑岳山塊で、縫合線を弱所として、塊狀となつて迸出したのであるから、その或ものは一見すると、火山のやうな態式をしてゐる、笠ヶ岳の如きは、つい近頃までは、火山として誤まり認められてゐた、明治三十三年の農商務省地質調査所發行「百萬分一大日本帝國地質說明書」には、本邦火山百九十二座の中、飛驒高原の部

に、笠ヶ岳を消火山として擧げてある。藥師岳も、カアルが噴火口と誤まられたにしても、火山と見られた時代もあつた、槍ヶ岳すら、さう信じられてゐた。

けれども、この三點の大山塊は、角閃雲母兩花崗岩の縫合線に添ひ、又はそれと並行して、噴入したもので、私から言はせると、規模の雄大なる岩脈（ダイク）である、或は穗高岳を初め、上記の諸山は、震災豫防調査會の人々には、角閃小紋岩と呼ばれてゐる、この新名は、一般の地質學者に、承認せられてゐるか否やは、私の知らないところであるが、統一的に作圖するときには、私は石英斑岩の中に包含したいと思ふ、尤も槍、穗高に通ずる岩脈には、部分に依つては、玢岩とおぼしきものを、所々に認むるけれども、殊更に小さく區別するまでもなからうと思ふから、最も有り觸れた石英斑岩の汎稱を用ゐて置く。

上記石英斑岩の大岩脈は、先づ山貌に於て附近の山岳からは、離れて、成立の異常を想はせる、即ち飛驒山脈の花崗岩が、長い棟のやうになつて、起伏してゐる間に、突兀として、肉塊隆々と尖起してゐる、何となく緊張した、彈力のある、充實した山である、鷲羽、黑部五郎、蓮華、雙六岳あたりから望見する三大岩脈は、古生層や花崗岩塊を敷石（ベーツメント）として、その上に乘つかつて、休息してゐるかの如くに見える、さうして附近の帶狀をなしてゐる諸山からは、別物として、揑ね出され、抓み上げられたやうになつて、爪立ちをしてゐる、どの山よりも、先に目につく山である、立山邊から見た藥師岳、藥師岳から見た笠ヶ岳、笠ヶ岳から見た槍、穗高山塊は、相互に三角同盟をした岩脈である、或はこの岩脈を遙かに壯大なものとして觀察された人もある、坂市太郎氏は「飛驒四近地質報文」（明治二十年九月）に於て、この石英斑岩を、梓川の大野川村に起り、槍ヶ岳、針ノ木岳、蓮華山を經て、南北二十里幅一里內外の石脈狀をなし、古生紀層及び花崗岩中に迸發し、それ等の岩石を此石脈中の各所に包含したものとして、記述されてゐる、私は針ノ木蓮華等、日本アルプスの北部に就いて知る

ところがないが、そんなに長大な岩脈を作してゐるとは、信ぜられない、只だ併しながら、この峻岩は、一度は高瀨川上流で斷絶されながらも、黑岳と藥師岳に挺ん出て、遙か北方の針ノ木峠にも、露はれ、白馬山脈中にも、方々に畫（ピクチュレスク）樣な岩景を作り出してゐることは事實らしい、されば飛驒山脈の風景を論ずるには、花崗岩は素よりのことゝして、石英斑岩が、著大なる點彩を色づけてゐることを、忘れてはなるまい。

けれども、同じ岩脈でも、岩質でも、槍、穗高の一連鎖と、笠ヶ岳とは、同一の容貌を呈してゐない、槍、穗高は、ギザ〳〵に尖つて、胸壁は黑光りに、熱を發するばかりな筋肉が、隆起してゐるが、笠ヶ岳の頂上などは、薄く剝げた屑石片岩が、累々として、瓦で築き上げた祭壇のやうに見える、さうして私が笠ヶ岳で拾集した岩片は、美事なる流狀の構造を有し、細かい縞が織れてゐるものが多かつた、則ち槍、穗高は、地下の深處で、岩汁が凝結してから後、隆起したのであるから、彼が如く塊狀を呈してゐるが、之に反して笠ヶ岳は、岩汁の一部が、地上に流出して、冷却したゝめに、流狀の構造を呈してゐるばかりか、その冷却の結果として、一見すると、水成岩のやうな、成層狀の節理を作つて、その成層の面（Bedding plane）から剝削し、分裂し、累々として瓦を盛り上げたやうに、積み重なつてゐるのである、ウエストン氏が笠ヶ岳の頂上を記述して「本山を組織する響岩的安山岩（Phonolitic Andesite）は、多くの塲所では、家屋の屋根の瓦のやうに、相互に、珍らかなる、平らかな堆積石板と成つて、横はつてゐる、氷斧で一打すると、自然の鐘のやうに、から鳴りする」と言はれたのも、尤もであると思ふ。

槍、穗高が、岩脈として隆起する前には、角閃花崗岩の山々が、その前に、あの邊の空間をふさげてゐたかも知れないが、槍、穗高のみ對手も無げに、特立してゐるのは、この岩脈の岩質が、他の岩石に比して、剝削作用に抵抗し、最後まで殘存し得られるからであらう。

笠ヶ岳は今日でこそ、槍ヶ岳や、蓮華岳や、雙六岳などとは、脈つゞきになつてゐるが、それは恐らく、鷲羽岳の東南腹なる鷲の池（火口湖）から、蓮華雙六の山足に添ひ、泥流を押し流して、蓮華、雙六岳と、槍ヶ岳と、笠ヶ岳の空間、即ち高瀨川水源地と、雙六谷水源地の或部分の深谷や、低地を塡充して、膠結鏈鎖をしたものであらうと考へられる、現に雙六平の、美くしい草花の咲く高原は、即ちそれで、この花園の高原は、槍ヶ岳――雙六岳――笠ヶ岳三峰の間の窪地であるため、低きに就く水が、悉くこの草原に集まつて、多くの池水を作つたらしい形跡がある、今日殘存する潴水池は、雙六谷の水源に擬せられるところの雙六池で、その傍には、水の涸れた、ぼんの窩ほどの、小さな池の遺跡をも、殘存してゐる。

むかしの高僧が、飛驒山脈にあつては、火山以外に、この石英斑岩の岩脈中の最高凸點に、眼をつけて、宗敎の聖壇としたのは、おもしろい、卽ち槍ヶ岳は人も知る如く、念佛行者蟠龍上人が、天保五年に登山し「三角の峰踏みそめて七とせの、世も過ぎぬれど、人は登らで」と嘯いた、笠ヶ岳は今までは、英人ウエストン氏が、明治二十七年に登つたのを、內外人の最初の登山者のやうに思はれてゐたが、「高原遺事」に依ると、下佐谷の條に

この村に、笠ヶ岳あり、絕頂に傘嶽大權現あり、此本地佛藥師如來（御丈け銅佛一尺三寸）不動明王（金佛御丈一寸八分林昌寺古林和尙持佛）大日如來（御丈五寸銅佛）阿彌陀如來（御丈五寸銅佛）此四尊は、天明三年卯六月十八日、宗献寺南喬和尙、高山野川氏、舟津牛丸氏、今見村今見氏、三人と登山して、勸請す。

とあるから、少くとも今を距ること百三十五年前の、天明三年には、登山されたので、蟠龍上人の槍ヶ岳登山に先立つこと、五十一年であつた、この下佐谷からは、足の健やかな獵師は、笠ヶ岳へ一日で往復が出來るさうで、笠ヶ岳附近の山案內に詳しい獵師も、この下佐谷に最も多い、今度私が雙

六谷に入るのに連れて往つた、高田勘太郎、大倉辨次郎の二人も、皆下佐谷の住人で、雙六谷の村々には、却つて山に詳しい獵師のゐないのが、不思議である、下佐谷は、昔聖德太子を匿まつたところで、下總國の浪人、高阪長治兵衛、佐藤兵衛二人が、供奉して、今でも太子の屋敷跡があるとは「高原遺事」の說くところである、太子云々は根無しごとであるが、下總の人が隱遁した谷であるから、下佐谷といふのであるとは、高田もさう言つてゐた、實際そんな口碑も、あつたものと見える。

笠ヶ岳の尾根は、東南に張つて、穴毛谷の障壁となり、南へ蜿ねつて、低下すること約七八百米突、俯めるやうになつて、蒲田谷に臨み、錫杖ヶ岳の、兀々した堅硬の大岩壁を削成してゐる、名だけは特立した一山岳のやうであるが、實際は笠ヶ岳の一部で、全山石英斑岩から成つてゐる、その岩塊は黑い御面をかぶつて、燒岳と睨みつこをしてゐる、黑の印象は、蒲田谷のうす暗い森よりも、錫杖ヶ岳の面つきの方に强い。

笠ヶ岳から出る谷は、北の方、雙六谷に向いては、屢ば前に述べた小川原谷と、打込谷がある、いつか京濱間の汽車の中で、高濱虛子氏に遇つて、話をしたとき、御能の皷の打ち方に、打込といふ手があるさうで、それは今はつきりと憶ひ出されないが、急迫した强い音を出すものゝやうに聽いたとき、私はすぐこの打込といふ名の谷の水に連想した、音樂的にも、色彩的にも。

それから、西の方直接に、高原川へ落ちる谷には前に話した下佐谷（同じく笠ヶ岳から出て、下佐谷に落ち合ふ谷に、ウジガ谷がある）と、笠谷とがある、兩方とも大きな谷である、南の方蒲田川へ落ちる谷には、尻高谷とダシ谷（シッタカ及びダシの語義は、山民語彙參照）と、穴毛谷がある、尻高谷は閃綠岩地を流れ、ダシ谷は流紋岩地を流れ、穴毛谷も、その發源地は、笠ヶ岳の尾根ながら、同じく流紋岩の大露出が頂上にある。

私は以上の谷の中では、穴毛谷から蒲田へ下りたのであるから、この谷だけは、頭から落ち口まで

通過したが、谷の通行路から仰いだ兩側の障壁は、垂直と言つていゝくらゐで、その通行路すらも、岩壁直立して、今でこそ涸渇してゐるが、水路變更前の舊の地形は、飛瀑（Cascade）であつたらうと想像せられるほど、手觸り辷々と滑らかに、足下に堆積する斷片石の段丘も、普通の風化や浸蝕で出來たと言ふよりも、飛水に撲たれた水蝕岩（Water Worn Rocks）であると思はれた。

その岩壁は、岩に階段がなくて、下りられないから、兩手にしかと附近に叢生する草を握んで、鼻を擦するまでに、前俯みになり、縱列を作つて、尻の方から降りた、と言ふよりも、尻で歩いたが、この懸崖地域を下り切ると、間もなく雙六谷から、笠ヶ岳を通じて、始めて見た大雪田で、雪の破罅が、方々に綻び、その鋭角をなした破斷面は、晶々として谷の夕日に輝やき、雪の表面は、大形な波紋を描いてゐる、その切斷面と切斷面とが、柘榴のやうに、バックリ口を開いた中へ、腹這ひになつたり、落した杖の頭へ、足を踏みかけたりして、ずり下りして、肩を窄め、平ッたくなつて、通行したが、雪量の多大なることは、槍ヶ岳山脈では、こゝが恐らく隨一であらう、獵師はこの雪の大塊を、尾根の頂上から落ちたものであると語つたが、私の見るところでは、頂上の狹い尾根が、かゝる大雪を保留するとも思はれないし、又頂上の高いところから墜落したものとしては、雪塊に、その痕跡が認められないし、旁々谷を埋めて、水をも見せない萬年雪の多量なところから考へ合せても、始めからこの谷で、形成されたものと思はれる、この穴毛谷は傾斜が頗る峻急で、狹隘に、兩崖削立して、日光の側射を遮るため、雪が中腹に屯ろして、融解せずにゐるのであらう、今度の旅行で、雙六谷の難關を通過しての後は、山も谷も、危險の度では、何ともおもはずにゐたが、穴毛谷の急なのと、雪の多いのとは、意外であつた、これを掉尾の傑作に推したい。

笠ヶ岳の尾根が、最高點から、蝙蝠の翼のやうに、南から東へと突つ張つて、心もち低くなつてゐるところに、最高點に次ぐ笠狀の小隆起がある、大笠岳と呼應して、中間の、可なり長い山稜を、遠

目には平らに走らして、兩端に屋根の兩耳を立てゝゐる、見どころに依つては、この笠は最高點と累なつてゐるために、私は小笠岳なる名を以て、地圖に記載して置いた、笠ヶ岳の最高點は、北から見ても、南から見ても、笠の形に見えるが、小笠は南から見た方が、笠らしい突起をしてゐる、小笠岳は、參謀本部五萬分一地形圖に、抜戸岳の名を與へられ、標高二、八一二米突を示してゐる、雙六谷を溯つて、源流地域に入ると、下抜戸、與抜戸といふ名があつて、恰度謂ふところの抜戸岳の、北麓に當つてゐるから、この峰の名を、抜戸岳といふことにも、相應の根據があるとおもふ、只だ併しながら、抜戸は別章の山民語彙の中にも、說明して置いたやうに、雪なだれや、山の崩壞したところを稱した名であるから、この谷には、抜戸が所々にある、現に同行の中洞君が、私に贈られた金木戸官林受持區域圖に依つて見ると、笠ヶ岳に、緣のない蓮華岳に、「抜渡岳といふ」と記してあつて、笠ヶ岳には、抜戸の名が無い、明治二十七年刊行の飛驒敎育會編輯「飛驒國小地誌」には、槍ヶ岳の北部、即ち樅澤岳附近の見當に、抜戸岳なる名が與へられてあるが、要するに抜戸岳なる名は、區々として、一定の山に與へられてゐないやうである、私は抜戸岳なる名を、小笠岳に限つた山とするほどの、斷定を得ないのである。

笠ヶ岳の名を、雙六谷から、下佐谷にかけての人々は、肩ヶ岳と呼んでゐる、それはこの山が、肩の格好に見えるからだといふ、併し笠ヶ岳から放射して、赤桶（アケコ）と樏根（カンジキヂ）の間で、高原川へ入る谷を、上記の谷の人々は、笠谷といつて、肩谷と呼ばないところを以て見ると、肩は笠を訛つたのかも知れない、何となれば、槍ヶ岳に於ける槍澤の如く、笠ヶ岳に於ける笠谷と言つた方が、無理の少ない解釋になるだらうと、思はれるから。

笠ヶ岳と共に雙六谷の水源に大關係のある黑部の五郎岳（中俣岳二、八三九米突）は、池が尾山を派出して、雙六谷と中俣谷（後に北俣谷に合す）の、分水嶺をなしてゐる、雙六谷の流域は、池が尾山

と、大笠小笠の笠ヶ岳に、鋏のやうにはさまれてゐるのであるが、下佐、雙六の谷々の人は、五郎岳を一般に、丸岳と呼んでゐて、中俣又は五郎岳の名は通用しない、雙六谷から見た黒部五郎は、立山山脈の北部から望むやうに、爆烈火口狀の、物凄い大カアルは見る由もなく、その背の圓い、穩やかな方面をのみ示してゐるからで、丸岳の名は、恰も火山の丸山 Dome に似た、その方面の山相を、適確に表はしてゐる。

飛驒山脈の成生が、角閃花崗岩、及び雲母花崗岩の噴出に成つて以來、その縫合線に石英斑岩が、未だ岩脈としての隆起を見ない前に、雙六蓮華の西北隣に、中生代に屬する侏羅層の隆起を見た、一體加賀南部から、美濃飛驒に接する地方は、基盤は古生層であるが、その古生層を被覆して、侏羅層が著るしく發達してゐる、加賀白山附近の高峰、大日岳、赤鬼山、經ヶ岳等は、皆侏羅層を貫いて、噴出した火山岩から成つてゐて、白山その物も、山體の大部分は、侏羅層から成り、火山岩は、山頂と山腹の小部分を、被覆してゐるに過ぎないとは、白山研究者の敎ふるところであるが、飛驒山地の北端及び之に接近した越中の一部にも、侏羅層は可なりに發達してゐる、藥師岳は、正に侏羅層の岩石を、貫ぬいて、隆起したもので、侏羅層のものは、北俣岳（上の岳）が、その隣に聳えてゐる、北俣岳を組織する最下層の岩石は、蠻岩で、その上に頁岩と、砂岩の、互層があつて、頂上は又蠻岩になつてゐる、さうして北俣岳つゞきの太郎兵衛平（二、三七二突）、南俣山（一、四六七米突）大鼠山（一、五八四米突）等は、皆中生代侏羅層に屬する山岳である。

今でこそ、この北俣岳は、千山萬岳の奥に座してゐるが、隆起の當時は、中生層の緣邊（マアジン）にあつて、日本海の海水は、おそらく入江として、深く山下まで彎入してゐたのであらうと考へられる、それはこの附近の化石が、半鹹半淡の水に產する動物の遺骸を含んでゐるに依つて、判斷せられることである、元來侏羅なる名は、アルプス山下の、褶曲山脈 Jura から來たものであるか、Jura 山の平均高

度の低いのに比べて、この北俣岳は、二、六六一米突の高點を示して、遙かに本家の Jura を凌駕してゐるのみならず、恐らく日本全國でも、侏羅紀の山岳としては、最高點ではあるまいかと考へられる。

一體中生代に屬する岩山は、急峻なる山貌は少なく、山頂などは、緩やかな斜面を有して、河流に沿ふて、平地の散在するを常とし、河流の屈曲も、甚だしくはないとしてあるが、北俣岳も、やはりさうで、山頂は傾斜が緩やかで、深成岩から成る常念岳の峻峰から、蝶ヶ岳鍋冠の古生層の山に移ると、平滑に辷り落ちるやうに、噴入岩の黑岳、藥師岳から、中生代の北俣岳に移ると、異つた國へ來たやうに、暢んびりと、悠つくりした氣分になれる、この中生層の山地は、太郎兵衛平以下、越中有峰村に至るまで、平地が多く、北俣谷は、水源地とは言ひながら、殆んど北から南へと垂直に急下して、屈曲の趣を見せない。

雙六谷の水系は、概言すれば、笠ヶ谷から發する打込谷、小川原谷と、雙六岳、雙六池附近、及び蓮華岳から發する諸溪流を綜合する雙六の本谷と、黑部五郎岳（中俣岳）から發する中俣谷、北俣岳（上の岳）から發する北俣谷とを集成した大流として、遙か下なる金木戸の部落に、送るので、その經過する地は、上記の諸岩石に加へて、新火山岩地をも通過するから、最後に飛驒山脈の、新火山岩を述べて、本章を終ることにしたい。

火山岩は、飛驒山脈到るところに噴出してゐると言つても、いゝくらゐで、その最大なるものは、立山、御岳、乘鞍岳、燒岳等であるが、彌陀ヶ原、五色ヶ原、雲の平のやうな熔岩の臺地を作つてゐるのもある、この中で、五色ヶ原や、彌陀ヶ原や、雙六平（ブイッシューア）のやうに、火山の噴火口から流溢したとおもはれるのもあるが、噴火口からでなく、他の岩石地の、裂罅から溢（ダゴロケ）れて、高原狀の熔岩臺地（タカトヤヤヤ）を作つたものは、高原川沿岸に、少なからず見受けるところである、即ち田頃家岩井戸間、高鳥屋山、下坪谷（シモツボダニ）、

鬼ヶ城などの邊で、雙六谷の材木岩の露出も、この高臺地に於ての出來事である、是等の熔岩臺地は、稜々として隆起する怖ろしい姿の峰々の間に、平坦なプラットフォームを作つて、平和な高原を作つてゐる。

學者に依つては、木曾御岳、乘鞍岳等の大火山を、飛驒山脈に加へることを、不當とする人もある、その理由は、御岳乘鞍の兩火山は、飛驒高原の內でも、千七百米突內外の山脈に、孤立する二大土塊に過ぎないから、この土塊を除けば、低卑な山脈となつて、アルプス的高峯の山相を呈さないといふにあるが、私はさうは思はない、例へば我々が、中央アルプスと呼ぶ木曾山脈は、駒ヶ岳を盟主としてゐるが、その駒ヶ岳連峯は、いかにも高山性の烈しい特色を表はしてゐると言ふものゝ、元來が古生層の臺地を破つて、隆起したものであるから、駒ヶ岳以北の古生層の山脈となつては、峨々たる山峰を形成しないで、北方の古生層山岳、坊主山の如きは、二千米突以下に墮して、茶臼山から分岐した支脈は、鳥居峠（一、二一一米突）の低きに辷つてゐる、かゝる山岳の低卑なるに比べて、駒ヶ岳及びその以南が、著るしく隆起してゐるのは、要するに花崗岩の中央山塊（Central Massif）の、噴出に依るもので、御岳及び乘鞍岳の場合は、花崗岩に代ふるに、安山岩を以てしたまでのことであるから、基盤山脈の標高を、標準として、山脈の大小高下を議するよりも、私は地盤を突破した大山岳そのものを標的として、山脈の大小高下を論じたいのである。

それと同時に、飛驒山脈に向つて、山脈の軸の方向が、地層の走向と、一致するといふところから、褶曲山脈の名を、與へる意見があつても、飛驒山脈の骨髓は、槍、穗高、笠、藥師の如く岩脈（ダイク）構造の隆起より成つて、それ自身が直接に、褶曲の作用に由つて出來たものと認められないから、少なくとも歐洲アルプス山などを、褶曲山脈と呼ぶ意味からは、飛驒山脈を、褶曲山脈と呼ぶのは、どうあらうかと思ふ。

附錄終

◎附　錄　飛驒雙六谷　小島　二三六

本篇を起稿するに當り、飛驒山脈を曾遊せられたる理學士野田勢次郎氏は、地質に就いて示教せられ、同行の三枝驥逸氏は、寫生畫を惠與せられ、高野鷹藏氏は、地圖及木版圖作製の勞を取られたり、記して謝意を表す。

(高野鷹藏追記)本誌に挿入したる「雙六谷概念圖」は、陸地測量部五萬分一圖によりて製作せり、記して其由る所を明らかにす。

大正四年三月六日印刷
大正四年三月十日發行

著作權所有

定價金六拾五錢

發行兼編輯者　新潟縣三島郡深才村深澤　高頭仁兵衛

印刷者　横濱市太田町五丁目八十七番地　村岡平吉

印刷所　横濱市山下町百〇四番地　福音印刷合資會社

發行所　横濱市本町四丁目六十七番地　高野鷹藏方　日本山岳會事務所
（振替貯金口座東京四八二九番　電話特長百七十二番）

發賣所　東京市神田區表神保町　東京堂

第八回日本山岳會大會豫告

拜啓來る五月廿三日（日曜日）午前十時より本會第八回大會開催致すべく、會場は、前回と同じく、東京市赤坂區溜池、三會堂に有之諸參考品の陳列等、例會の如くに御座候、尙ほ午後六時よりは講演幻燈等之れあるべく、其題目等は目下未定に有之候へ共、昨冬末歐洲より歸朝致し候本會幹事農學士辻村伊助氏の歐洲アルプスの幻燈講演は既定の事に有之候、右幻燈は何れも氏自身撮影の寫眞より製作すべきものにて、未だ何處に於ても公にしたる事無之、否未だ映畫に作りたる事さへ無之候。

辻村氏の持ち歸りたる、英國山岳會より本會に寄贈されたる幻燈映畫及び本會の特に購入したる百數十枚は單に參考品として當日陳列致すべく、今回辻村氏の用ふべき映畫は、秘して何人にも示さず、所謂「封切」の語を當つべきものに有之候、加ふるに本會は、特に近藤、辻村兩氏に囑して、ロンドンより良好なる幻燈器械を購入致し候間、映畫の美と相待ちて當夜の壯觀を期待され候。詳細なる事項は何れ會員諸君に御通知申上ぐべく候。

其他某々氏等の講演幻燈あるべく、目下交渉中に有之候同好諸君御誘引御來會を希上候。

尙ほ山岳に關する諸參考品の御出品を特に御希望申上候。